
天空記（番外編）～バレンタインデーの聖戦～

緒例

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

天空記（番外編） ～バレンタインデーの聖戦～

【Nコード】

N0935S

【作者名】

緒俐

【あらすじ】

バレンタインデー前日。龍にチョコレートをプレゼントしようと毎年のようにチョコレート作りに励む沙南だったが、彼女にはある悩みがあった。

そして、龍の弟達にもチョコレートを渡そうと思っていた篠塚家の姉妹だが、やはり天宮家と関わっていて騒動にならないはずもなくって……！？

プロフィール（前書き）

天空記の番外編になります。

どうぞ彼等の活躍をお楽しみ下さい☆

まずは、本編を読んでない方のために、プロフィールを添付しておきます。

プロフィール

<天宮家>

天宮 龍（24）

天宮家の家長、前世は天空王。

堅物、古風、礼節を重んじる活字中毒の医者だが、何故か悪の総大将として一行を取り纏めなければいけない気苦労人。

重力と天の力を操り、その威厳と風格は右に出るものはいない。ただし、恋愛に関しては史上最強クラスの初心者である。

天宮 秀（20）

天宮家の参謀、前世は南天空太子。

容姿端麗、頭脳明晰の極悪非道の参謀長官。犯した犯罪の数や種類は世界一。やってない一般的な犯罪は煙草と麻薬と飲酒運転ぐらい。火の力を操り、彼の逆鱗に触れたものは消し炭と化している……
聖蘭大学二年生で医学部に所属。将来は麻酔科医を志している。

天宮 翔（16）

天宮家の突撃隊長、前世は西天空太子。

天下無敵のケンカ好きで（油断するが）成長期のため大食漢。
龍や女性陣に頭が上がらず、三枚目を演じることが多いが直感は鋭い。

風の力を操る性か身軽さは兄弟一。

ただし、集中力に欠けるため力の扱い方は兄弟一下手くそである。
聖蘭高校一年生で勉強嫌いだが医者に興味があるらしい。

天宮 純（12）

天宮家の守備隊長、前世は北天空太子。

ほんわかしたした天使のような可愛らしい少年だが、やることは翔と一緒。

末っ子ということもあるのか、彼の周りの人物はつい甘くなってしまう。

聖蘭小学校六年生でクラスでは周りを泣かせてしまうほどの純粹さで人気者。

水の力を操ることができ、よくその力で夢華と遊んでいる。

折原 沙南（18）

天宮家の主、前世は太陽の姫君。

明朗闊達な美少女で天宮家の文明を維持する総司令官。

天宮四兄弟は沙南がいなければ死活問題なため、全員家来となっている。

長年の思いが叶ってようやく龍と恋人になれたが、同居しているにもかかわらず甘い生活にならないので少々不満らしい。

聖蘭女子大学医学部所属の一年生で、将来は啓吾のもと心臓外科医になりたいらしい。

<篠塚家>

篠塚 啓吾（24）

篠塚家の家長、前世は天空王の従者、啓星。龍とは親友、同僚、活字中毒愛好会の仲間。基本、面倒が嫌いでちゃんぽらんらしいが、その反面面倒見が良かったりしている。

かなりのシスコンで天宮家の弟達に取られていく妹達を巡ってバトルを繰り返している。（ほぼ秀とだが……）重力を操り「弾避け」の役目を負わされている……

篠塚 柳（19）

篠塚家長女、前世は南天空太子の従者、柳泉。

「沙南を太陽とするなら柳は月」と言われるほどの穏和で心優しい美少女。

もちろん沙南とは親友。

秀の恋人だが、彼の独占欲にいつも振り回される聖なる生贄。

火の力を操れるが、人を傷つけるのであまり使いたくない模様。

聖蘭女子大学医学部所属の一年生で、内科医志望。龍が指導医になるつもりらしい。

篠塚 紫月（16）

篠塚家次女、前世は西天空太子の従者、紫月。

クールビューティーで普段はあまり人と関わるのが好きではないが、面倒見が良く、しっかり者なため「お姉様」とクラスでは慕われている。さらに秀から裏社会に浸らせて貰っている才女。

風の力を操り、翔の背中を守るほどの実力者。

ただし、どちらかと言えば翔のお母さんになっている……

篠塚 夢華（12）

篠塚家三女、前世は北天空太子の従者、夢華。

天真爛漫で皆に愛され龍や啓吾を凹ますことが出来る最強少女。
純と仲が良く、将来は純のお嫁さんになると決めているほどで、
クスメイトにほのぼのと見守られている。
水の力を操ることが出来、その力を無邪気に使っている。

<そのほか>

菅原 紗枝（22）

啓吾の彼女で龍の妹分。職業は小児外科医。前世は自然界の女神様。
天宮兄弟は彼女に頭が上がらない……

菅原 森（26）

紗枝の兄で龍の先輩。職業は自衛隊員。前世は天空軍の騎馬隊長。
菅原財閥の御曹司だが、史上最強の馬鹿だといわれている。

土屋 淳行（26）

森と宮岡の親友で龍の先輩。職業は警察官、階級は警視正。前世は
天空軍の武官。

因みに婚約者が自分の部下。

宮岡 良二（26）

森と土屋の親友で龍の先輩。職業は新聞記者、またはフリージャーナリスト。前世は天空軍文官。

裏社会の情報を多く握る実はすごい人物。

桜姫 （年齢不詳）

龍のことを主と崇拜する冷静沈着で辛口な美女。前世は天空王の従者、桜姫。

花びらの力を操り、天空王の負の力を持っているため少しだが天の力も操れる。

シュバルツ・ケント（60）

篠塚家の義父で啓吾の師匠。前世は何か天空軍と関係があったようだが不明。

医学界の権威でその腕と指導は龍ですら頭が上がない……

彩帆（27）

裏社会の闇の女帝。前世は闇の女神様。

絶世の美女で普段は女帝としての威厳に満ちているが、末っ子組にときめくロリコン。

以上、天空記のメンバーです。
もしかしたら他にも出るかも知れませんが、とりあえずご参考に。

第一話…チョコレート

誰もがウキウキ、ワクワクするのがバレンタインデーというわけがなく、全く無縁という人物もいるわけだが、少なくとも天宮家にとっては確実にチョコレートをゲット出来る年間行事である。

そして、彼等に渡そうと篠塚家の年少組はこれでもかというほど、力作の数々を作り上げていた。

「出来たあゝ！！」

「ええ、これだけ作っておけばなんとかなるでしょう。兄さん、すみませんけど、明日は龍さんに渡してもらっていいですか？」

久し振りの休日でソファアの上でゴロゴロしながら論文に目を通している啓吾は、唯一、妹達が渡してもカンに障らない親友の名に快く承諾した。

「ああ、了解。にしても作り過ぎじゃねえのか？」

チョコレート、クッキー、ケーキ類と味もミルクやらビターやら、おまけに生チョコやらとよく作ったものだと言吾は感心した。

ただ、これを食べる少年達の満足そうな顔を張り倒してやりたくはなるが。

「これくらいはいるんじゃないですか？　じゃないと足りないと言騒ぎそうですし」

「そうか？　あの兄弟なら結構もらうんじゃないかねえの？　沙南お嬢さんも作るんだろうし、この前桜姫にもたかってたぞ？」

「それ以外に翔君の食を誰が作ってくれるんですか。まあ、純君はたくさん貰いそうですけど……」

「そりゃ末っ子はな……」

チラリと夢華を見るが、どうやら彼女に危機感とかはなさそうだ。まあ、純が真っ向から好きだとしても言われれば、少しは動揺するのかもしれないけれど……

すると、啓吾はホイップを手にとってハート型のまだ何も書いてないチョコレートの前にして尋ねた。

「紫月、天宮兄弟にやるのはこのチョコレートでいいな？」

「ええ、ですが兄さんが書くんですか？」

「ああ、俺から大切なもんばかり奪っていくんだからな。次男坊にはくたばれと」

「やめてください！！」

せっかく作ったものをケンカの道具にされては堪らないと、紫月は何があっても書いてやるという啓吾としばらく格闘することになるのだった。

一方、天宮家でチョコ作りに励んでいた沙南と柳は、ハート型のチョコレートを前にして悩んでいた。

「うーん、どうしようかなあ？」

「そうよね、龍さんには毎年愛のメッセージを書くのが恒例なんでしょう？」

「なんだけどね、龍さんに愛の言葉を書いてるんだけど、全く動揺してくれないのよね」

そんな悩める沙南に柳はくすくす笑った。初めて恋人に送るチョコレートなのだ。今までより驚かしてやりたい、と思う沙南の考えはとても可愛らしい。

どうせなら少し相手に迫るメッセージでも書いたらどうか、と提案するが、それが一番の悩みどころなのだ。

「だけどね、大好き、愛してる、結婚して、私を食べてまで書いたんだけどダメだったのよね」

「沙南ちゃん……」

そこまで書いてなんで今まで全く進展しなかったんだろう、と柳は混乱してきた。いや、寧ろそこまで書いたから進展しなかったのだろうか……

これは明日までの宿題にしよう、と沙南は先に彼の弟達のチョコレートを完成させることにした。

「あっ、だけど柳ちゃんは愛の言葉は書かない方がいいかも。秀さんのことだもん、ホワイトデーまで待たずにその場で三倍どころか十倍で返されるわよ!？」

「アハハハ……」

この場にもし啓吾がいれば、間違いなくくたばれとぐらい書いてやれ!と言っているに違いない。

ただ、沙南の言うことはきつと間違いないだろうと思う。約半年間付き合っ分けることは、段々自分に対して愛を降り注ぐことに遠慮がなくなってきたことだ。

嬉しいことではあるのだが、免疫がつくことがないのが困りものである。いや、ついたらついたでそれもどうかと思うが……

「まあ、本来ならチヨコレート渡すのも危険かもしれないんだけど、渡さずにもっと危険な目にも遭わせたくもないし……」
「えっ？」

どういふことだろう、と柳は首を傾げる。さすがにそこまで柳の頭は回転しないらしい。

おそらく秀のことだ、チヨコレートを渡せばその場で柳をさらい、渡さなければ監禁し、それが無理なら八つ当たりを世界規模でやるに違いない。

「本当、柳ちゃんって聖なる生贄よね……」

「生贄って……」

「きつと啓吾さんがまた荒れちゃうんだろうなあ」

それは否定出来ないな……、と柳は啓吾と秀の争いを想像して喝いた笑いを発するのだった……

そして、沙南を悩ませてる医者はい局でカルテをチェックし、そろそろ戻って来るかと時計を見上げるとオペでクタクタになった紗枝が帰ってきた。

「紗枝先生、お疲れ」

「お疲れ様。あゝもうダメ。龍先生、コーヒー頂戴」

机の上になだれ込んでコーヒーを催促する紗枝に、龍は快くそれを引き受けて、インスタントコーヒーを手際よく入れていく。

「だけど成功したんだろ？」

「ええ。あとはちゃんと大人しくしていってくれたら無事に退院出来るわ」

クスクス笑うのはその子がとても元気な子だったからで。本当に子供好きなんだな、と思いながら紗枝にコーヒーを手渡した。

「はい、どうぞ」

「ありがとう。あと、そのマロングラッセ頂戴」

「好きなだけ」

「そうね、今日は啓吾先生が休みだしね」

いつも沙南は必ず三人分のおやつを用意してくれている。なんせ、休みの日でも呼び出されることなどしょっちゅうで、その時におやつがないのも申し訳ないからだ。

ただし、さすがに今日は重大事故でも起こらない限り呼び出されることはないため、紗枝は啓吾の分も堪能させてもらうことにした。

「ところで、明日のバレンタイン、啓吾にやるのか？」

「まさか、あいつに作る暇も買う暇もなかったしね」

さも当然だと、沙南お手製のマロングラッセに舌鼓を打ちながら紗枝は答える。確かに紗枝の言うとおり、一週間は病院に缶詰状態だった訳で買いに行く暇すらなかったのは事実だ。

ただ、貰えない啓吾を想像して龍は眉を顰めた。

「勘ねるんじゃないか？」

「そうかしら？ 看護師の女の子達から沢山貰えるだろうから問題ないでしょ。それに今日が休みなら、私のためにチョコレートの一つや二つ持ってきて欲しいわよ」

「だいたい、女性から男性にチョコレートを送る週間なんて日本ぐらいなものでしょ、と紗枝は続けた。

しかし、自分のことより気になるのは隣の恋愛初心者のバレンタインデーだ。

「それより龍先生、明日は女の子達からのチョコレートどうするつもり？」

「沙南ちゃんは貰ってこいって言うけど？」

「あら、意外ね。妬くかと思ってたのに」

「多分、俺が貰っても翔の胃袋に入るからだろう？」

それにうちの財政にも関わってくるから、と続ければ納得せざるを得ない。そういう寛大というかしっかりしているところはさすが沙南というところか。

まあ、龍が浮気なんてものをまずすることがないというのは世界の常識ではあるけど。

「だけど、彼女からもらえるチョコレートは格別かもね。今年はどんなメッセージを思いつくのかしら」

「そうだね。楽しみだよなあ」

龍はいたずらっぽく笑う。彼は沙南から貰えるチョコレートを恋

人として楽しみにしている訳ではなく、そのチョコレートに書かれているメッセージを楽しみにしている。

ただ、毎年明らかに愛の告白ではないかという言葉だったはずなのだが、何故かちつとも進展しなかったのは、未だに紗枝は摩訶不思議だとは思えないが……

「でも龍先生、明日オペ二つ入ってるでしょう？ 沙南ちゃんに会えないんじゃない？」

「それは仕方ないさ。だけど、啓吾とやるんだからせめて電話は出来るように終わらせるよ。お礼は言いたいしね」

「そうね、今月だけでデート五回キャンセルしてるもんね」

そう突かれて微妙な表情を浮かべる龍に、紗枝は声を立てて笑うのだった。

第一話：チョコレート（後書き）

はい、ベルトさんからリクエストしていただいた天宮家のバレンタインデーとのことで、楽しく書かせていただきます。

やはりバレンタインデー前日、相変わらずの賑やかっぷりです。

ただし、今回は少し恋愛よりを書けたらいいなと思います。（本編もイチャイチャしてるけど……）

ただ、このお話、多分またおかしな方向に進むかと思っていますので、ご容赦を（笑）

第二話：悲しき前日

秀のバイト先である喫茶店は只今貸し切り中。貸し切っているのは迷惑な客、といつもなら言っているところだが、さすがに世の男性なら何となく理解してやれることを叫ぶ森に、秀は仕方ないかと黙認した。

「どうせ俺は今年も本命の一つもないんだ〜!!!!」

「本命がないのは俺も同じだ。それにお前にチョコレートを送る女性が現れたら、すぐに俺がその女性を病院に連れて行ってやる」

森の叫びを理解してやりつつ、きっちり突っ込んでやるのは宮岡。ただ、彼は本命はなくとも、その人脈の広さから義理はたくさんもらってそうな気もするが……

そして、明日は本命に間違いなくもらえるだろう土屋は、もらうチョコレートが親しいもの以外全て本命なんじゃないか、と思われる人物に尋ねた。

「だけど、秀君はもうお客さんにもらってるんだろ？」

「ええ、うちには欠食児童がいますから有り難くもらってますよ」

「秀、テメェ〜!!」

「うるさいですよ、森さん。だけど困るものもありまして……」

秀が苦笑いを浮かべる品がカウンターから出される。出てきたのは宿泊券で、三人は言葉を詰まらせた。

聞くところによると、ランチを食べに来たマダムが、電話番号と愛のメッセージが書かれたメモと一緒に、テーブルの上においてい

ったとのこと。

「なるほど、秀君に熱を上げるマダムもいるか」

「ええ、面と向かつてはお断り出来ですけど、こう書かれては……」

「明日の夜、待ってます……、うーん、確かに危ないな」

「危ないのか？」

「森さん、僕はついこの前まで未成年だったんですけどね」

その発言に三人は吹いた。確かに、よく考えればつい先日まで彼は未成年だったのである。その割には裏社会に染まっているが……

そして、吹き出した酒を片付けて呼吸を整えたあと、また話は再開される。

「だが、モテる奴はいいよなあ」

「だったらこれ、いますか？」

「秀君、こいつに渡したら世の中の女性が気の毒だ」

「すみません、そうでしたね」

何で邪魔するんだよ、と森は抗議するが、土屋が手錠をちらつかせれば森は大人しくなる。もちろん、そのまま捕まえとけばいいのに、と宮岡がつっこんでくれるが。

結局、そんなやりとりから出される唯一の慰めを森はカウンターに突っ伏しながら告げた。

「はあ、明日は龍がいないならお姫様に恵んでもらいに行くかな……」

「ああ、うちに来てくれるのは有り難いですね」

そんな秀の発言に土屋は目を丸くした。いつもなら嫌な顔の一つや二つは浮かべる青年の発言だとは思えない。

ただ、宮岡はすぐに心当たりがあったらしい。ウイスキーグラスの氷をカランと鳴らして秀に尋ねた。

「なんだ、沙南ちゃん落ち込んだのか？」

「はい。まあ、兄さんが忙しいのは仕方ないですけど」

「というより、おじさんが龍と過ごさせないために龍を缶詰状態にしているんだろう？」

「ええ。だけどここ数日、そのおかげでオペがやり放題になってるみたいですから、家に帰って来いとも言えなくて」

患者第一の龍だ。バレンタインデーより人の命を優先させるのは当然のことで、沙南のためにオペを放り出すわけもない。

もちろん、そんな兄だったら秀も間違いなく一発殴ってるだろうし、沙南も好きにはならなかっただろう。ただ、それでも寂しくないはずがないのだろうけど……

「だから馬鹿騒ぎしに来いと」

「ええ、暇なら良いでしょう？」

「そりゃ構わないさ。それに柳嬢からのチョコレートも」

「渡しませんよ。その辺のチョコでも買って寂しく食べてなさい」

柳の作ったチョコレートを誰が渡すかと秀は森の思惑を早くも潰した。自分の兄弟はともかく、百歩譲って啓吾に渡すことを許すぐらいの心の広さしかないのだから……

そんなやり取りを見つつ、宮岡は上着のポケットから携帯を取り

出してかける。それから数コール後、とても心地よく、凜とした声が聞こえてきた。

「もしもし、桜姫か？」

「良、テメエいつの間に桜姫の携番知って……！」

「うるさい。すまないな、馬鹿も一緒だから」

『御苦労お察しいたします』

心底そう思ってるのは声から充分分かる。きっと彼女のことで、頭も下げているに違いない。

「それで桜姫、明日の夜、時間空けられるか？」

『はい、構いませんが何かございましたか？』

「ああ、明日天宮家に顔を出して欲しくてさ……」

宮岡が理由を説明すると、さすが恋愛に関しては龍をないがしろにしてもでも沙南を大切にする桜姫は、沙南の気持ちたちが痛いほど分かるのか少し声のトーンが下がった。

『そういうことでしたか』

「ああ、人数は多い方がいいからさ」

『かしこまりました。でしたら彩帆殿にも伝えておきます。喜んでいらして下さるかと思えますし』

それは間違いなく賑やかになるな、と宮岡は微笑を浮かべるが、ふと、脳裏に過ぎった嫌な予感に彼は眉間にシワを寄せた。

そう、闇の女帝が天宮家に来るということは、彼女のロリコン振りが発揮されるわけで……

「……桜姫、何となく嫌な予感がするから言っておくが、あまり龍が困るような物まで持参しないように闇の女帝に言っといてくれよ？」

『はい……、伝えておきます』

彼女も思い当たるところがあつたらしく、大きな騒動になることだけは避けようと思い、失礼します、と告げて携帯を切った。

「桜姫さんも来れますか？」

「ああ、闇の女帝も連れて来るって」

「……とんでもないもの持って来たりしませんよね？」

「桜姫がうまいことやるさ」

そこは彼女の手腕に任せることにしよう。じゃないと、龍がまた気苦労を背負って現実逃避するに違いないのだから……

そして、秀は恐らく無理だろうとは思うが、一応、土屋にも尋ねてみる。

「土屋さんは明日は婚約者と過ごすんですか？」

「ああ、過ごすといっても仕事だけだね。俺は明日現場に行かなくちゃいけないから」

それに宮岡は食いついた。彼は新聞記者だ、ある程度の情報は当然掴んでいる。

「事件って、例の麻薬密輸団のか？」

「ああ、大きな取引があるらしくてな、それに加わることになった」「ん？ 淳が指揮を採るんじゃないのか？」

土屋の階級は警視正だ。こういった類の指揮をいつもは採ってるはずなのだが、どうやら今回は違うらしい。

しかし、どうやら訳ありらしく、彼は肩を竦めてみせた。

「残念なことだね。いつも俺の手柄になることを嫌う奴がいるもので、そいつが上にウインクして見せたらこの有様だ。まっ、こういった件では現場の方が好きだから、寧ろ好都合だけだね」

「発砲の可能性が高いからですか？」

「ああ、最近平和だったし」

こういうところは森の親友というだけはある。まあ、銃を撃つのが好きだという精神ぐらいなければ、天宮家と付き合いはしないのかもしれないが。

「だけど、沙南ちゃん達のチョコレートは楽しみにしてるよ。事件が片付いたら天宮家にお邪魔するから」

そうニツコリ笑って土屋は告げる。

ただ、まさかその事件に一行が絡むことになるなんて予想もしていなかったのだけれど……

第二話：悲しき前日（後書き）

バレンタインデー前日、秀のバイト先の喫茶店を貸し切る男三人組。森はやっぱり宛てがないらしいです。

一応、財閥の御曹司なんだけどな……

自衛隊に入っちゃったけど……

談ですが、土屋さんも宮岡さんも学生時代はここでバイトしてます。なんせ、ここのマスターは裏社会に強力なパイプを持っていますから。

そして、早速事件の予感が。

土屋さんが話してくれた事件、これがまた騒動への入口となります。一体どんな話になってしまうやら……

結局バトルとコントは切り離せないんだなあ、この話（笑）

第三話：麻葉

秀がバイトから帰れば沙南が夜食の準備をして待っていてくれた。弟二人はきつと二階でゲームでもして遊んでいるのだろう、何やら賑やかな声が聞こえる。

沙南特製、野菜とキノコの雑炊を堪能しながら、秀は明日、森達がおそらく大量の酒を持ち込んで馬鹿騒ぎをすることを伝えれば沙南は苦笑した。

「そっかあ、土屋さんは来られないのね」

「ええ。ですが、事件が片付いたら貰いに来るみたいですよ」

「じゃあ、翔君に見つからないように保管しとかなくちゃね」

「そうですね、金庫の中に入れておけば大丈夫なんじゃないですか？」

そこまでしなければ確かに盗られる可能性はあるので、沙南はその意見を採用することにした。

それからドタバタと階段を下りる音が聞こえてきて、翔は勢いよくリビングの扉を開ける。

「沙南ちゃん！ でっかい紙袋ある？」

「あっ、秀兄さんお帰りなさい」

「ただいま。それより翔君、もう少し静かに下りて来られないんですか？」

夜なんだから、と注意するが、未だにこの腕白坊主が秀の言うことを聞いた試しはない。ただ、脅迫されれば従うしか道はないらし

いが……

それから沙南は大きな紙袋を二つ、翔と純に差し出した。

「はい、どうぞ。明日のチョコはいくつももらえるのかしらね」

「そりゃ沢山に決まってるよ！ なっ、純！」

「うん！」

実に良い笑顔だ。この笑顔に負けて女の子達は彼等にチョコレートを渡してしまうのだろう。

ただし、翔に関しては一言つつこんでしまうのが秀である。ごちそうさま、と告げて鈍感な弟に忠告しておく。

「紫月ちゃんが沢山用意してくれるでしょうに、それでも足りないのですか？」

「紫月のはその日のうちに全部食う。あとは保存食！」

そうきっぱり言い切るのはさすがというか……、しかし、紫月に餌付けられてるのは確かで、彼女のことを無意識で口説いていそうな言葉だ。

それに呆れながらも、秀はバレンタインデー後のお約束を告げる。

「はあ、そんなにもらって紫月ちゃんに三倍返し出来るんですか？」

「えっ、三倍!？」

「ホワイトデーの鉄則ですよ。お返しは三倍」

あくまでも紫月ちゃんだけなんだ、と沙南は心の中でつつこむ。

しかし、そう言われると純も困ったかのように可愛らしく唸った。

「うーん、僕、夢華ちゃんに三倍も返せるかな？」

「純君は大丈夫ですよ。ですが、翔君は普段から人の十倍紫月ちゃんに迷惑かけてますからね。それぐらい返さないと僕や兄さんまで申し訳ないですよ」

そのことに関しては本気で反論できない。紫月には毎日のように迷惑をかけている自覚はある。

ただし、それを言うなら秀だって毎日ではないにしても同じことが言える。いや、寧ろ性質の悪さでは群を抜いているのではないかとすら思う。

「そういう兄貴こそちゃんと返せるのかよ！ 普段から柳姉ちゃん、困らせてばかりじゃねえか！」

「何言ってるんですか。三倍どころか百倍にして返しますよ。まあ、それまでに始末しなくちゃいけない人がいますけどね」

冗談に聞こえて冗談じゃないのが秀である。なんでこういう恋人のイベントごとに、毎回啓吾と争うんだろう、と誰しもが思うが、シスコンと腹黒だから、という理由で説明がつくのも二人ならではだ。

顔を合わせた途端にこれは荒れるな、と沙南は思いながらも、そろそろ年少組は寝る時間だと時計の針が告げている。

「それより二人とも、明日も学校でしょう？ 早く寝なさい」

「へいへい。そんなじゃお休み」

「お休みなさい」

それからまたドタバタと二階に駆け上がっていく年少組に、やれやれと思いながらも、コーヒーを入れようと沙南は立ち上がる。

「だけど秀さん、明日柳ちゃんと二人きりで過ごさなくて良かったの？」

コーヒーを準備しながら沙南はもったもたを尋ねる。こういったイベントに、秀の悪戯心が騒がないはずがないからだ。

「兄さんがいたら遠慮なく過ごしてましたけどね。でも、僕にとっても沙南ちゃんのチョコレートは楽しみでもありますし」

「小さい時からの習慣だから？」

「もちろん。年々腕を上げてますから、それを味わいたいのは当然のことです。あと僕に毎年、義理と書いてくれるのは沙南ちゃんだけですから」

「ふふっ、レア物でしょう？」

「ええ、重宝してますよ。兄さんにも渡したくないぐらいにね」

これは秀の本心である。そして、昔から秀のこんな気遣いが沙南も好きだ。少し元気がない時に、こうして励ましてくれるのだから。それから彼女は口角を吊り上げてとてもいい顔で笑った。

「秀さん」

「はい」

「ありがとう」

「どういたしまして」

その笑顔にホッとして、秀は差し出されたコーヒーに口をつける。何でこんな素敵な女の子を放っておくのか、と心の中で龍に抗議す

るが、結局いつも肝心なところははずさないのも龍だ。きっと、沙南を泣かせるようなことはしないだろう。

「それと秀さん、少し気になることがあるんだけど」
「何ですか？」

気になること、と言われて秀はピクリと眉を動かした。そして、沙南も一口コーヒーを飲んだ後話し出す。

「うん、今日ね、闇の女帝の側近の人が来たんだけど、うちに麻薬の密売人が来ていないかって聞いてきたのよ」

「麻薬の密売人？」

「ええ、どうも天宮家に興味を示してる組織みたいでね、接触を試みてるみたいなんだけど」

「麻薬で、ですか？」

「みたい。妙な話しよね、私達ってテロ行為はたくさんしてるけど、人の道に外れることはしてないのにな」

「まっ、うちは未成年からの喫煙と飲酒運転と麻薬だけは禁止されてますからね」

テロ行為も普通は人の道からはずれてるのでは、とここでつつこんでくれる者はいない。しかし、龍が医者だからか、健康の害になることと人の命を奪う最悪な行為に対しては、絶対やってはならないと思っているのだ。

だが、秀はその話を聞くなり腕を組んで考え始めた。何かが動いているのかと直感が告げる。

「それにしてもタイミングがいいですね。土屋さんも明日麻薬取引の現場に行くと言ってましたし……」

すると秀はすつと立ち上がり、車のキーをジープンのポケットに入れて上着を引っ掛けた。

「秀さん？」

「ちょっと闇の女帝のところへ行ってきます。彼女の側近の独断で知らせにきてくれたら話は別ですけど、それでも兄さんを介さず沙南ちゃんに伝えにきたのはちょっと気になりますから」

それだけ言い残して、秀は闇の女帝が縄張りとしている地下街へと向かうのだった。

一方、病院では夜間に救命センターに運ばれた患者の処置を終えて、龍はようやく医局へと戻って来たのだった。

「お疲れ様、龍先生」

「ああ、お疲れ。だが、あそこまで暴れられちゃすぐに治療出来ん」

「……一撃で黙らせるのに？」

「死ぬよりいいだろ？」

龍が救命へいったのは患者が暴れたからだ。麻薬患者だったらしく、手が付けられないと龍に助けを求め、彼は相変わらず一撃で仕留めて処置してきたらしい。

「だけど最近増えてきてるわよね、薬やって大怪我して運ばれて来る患者」

「ああ、宮岡先輩の話だと、日本にかなり巨大な密輸団が入ってきたからだって話だけど」

「迷惑な話ね。早くあっちゃんが捕まえてくれないかしら」

毎回こんなことが起こってくれたら堪らないわ、という紗枝の意見に龍も同意する。薬なんて、治療のためだけに使えばいいのに、と医者としては思わずにはいられなかった。

その時、慌てた様子で看護師が医局へ飛び込んできた！

「龍先生！　紗枝先生！　すぐ救命に手を貸してください！」

さっき戻って来たばかりだというのに、一体何事だと二人は一瞬顔を見合わせる。

「どうした？」

「玉突き事故が発生して重傷者多数です！」

「すぐに啓吾先生に連絡してくれ。紗枝先生、行くよ」

「分かった！」

二人は一気に顔付きが変わり、救命センターへと急ぐ。

そして、救命センターへ行けば既にそこは戦場だった。救命科長は龍を発見するなり声を上げる！

「龍先生来てくれたか！」

「救命科長、俺はどこから」

「第一オペ室の心破裂の患者から頼む。だが、また麻薬患者だ……！」

事件はこれでも序章に過ぎなかった……

第三話：麻葉（後書き）

さて、あっちでもこっちでも麻葉騒動。

なんだか話しは妙な方向に進んでいます。

ですが、バレンタインデーのお返しは三倍返しに悩む翔と純君。

本当、彼等は何をお返しするのでしょうか？

そして、やっぱり秀です。

三倍どころか百倍って……

うん、何だかんだで荒稼ぎしてる次男坊なので、それくらいは余裕なんだろうな……

というより、何する気なんだろう……

だけど病院ではバレンタインデーどころではなく大騒動！

龍、明日はオペ二つなのに体力は……大丈夫だよ、龍だもん……

さあ、またどうなってしまうのか……

第四話：鷹という名の組織

深夜、何となく寝付けなくなった紫月はホットミルクでも飲むかと上着を羽織って一階に下りれば、まだリビングの明かりが点いていた。

兄か姉のどちらかだろうと扉を開ければ、そこには上着を羽織ってパソコンに向かう柳がいた。

「姉さん、起きてたんですか？」

「うん、ちょっと春休みのレポートが気になっちゃってね。紫月もどうしたの？」

「いえ、なんだか胸騒ぎがしたんで起きたんです。兄さんはまた呼び出しですか？」

「ええ、事故で重傷者がたくさん出たみたいだから」

「そうですか、本当に休めない人ですね」

もともと睡眠なんて取るときに取ればなんともなる体質だが、たまにはきっちり休んでほしいと思う。

もちろん、医者という職業柄、仕方ないところはあるのだろうけど。

「姉さんもホットミルク飲みますか？」

「そうね、お願いしようかな」

紫月は冷蔵庫から牛乳を取り出し、鍋に火をかけて牛乳を温め出した。レンジでも構わないところだが、どうも美味しく飲みたいと手間かけてしまうところは紫月らしい。

しかし、もうすぐ出来上がるかというところで紫月は火を止めた。
柳もデータを上書き保存してパソコンを閉じる。

「やはりさつきから嫌な予感がしますね。少し見てきますから」

「大丈夫？」

「ご心配なく。姉さんは夢華と一緒にいてください」

そう告げて紫月は玄関から外に出れば、真冬の夜の冷気が肌に当たり急いで風を作り出して身に纏った。さすがは二月、暦上では春でも気温は半端なく低い。

そして、何とか寒さを凌ぎながら紫月は辺りの気配を探ると、キツと屋根の上を睨みつけて舞い上がる！

「そこっ！」

風を纏った蹴りを繰り出し、屋根の上にいた真っ黒なスパイのような服を着た不審者は多少風に煽られたものの、紫月の蹴り自体は完全に見切っていた。

そして、すぐにバランスを立て直して紫月と対峙する。左頬にナイフで切られたのだろうか、大きな傷が走っている男だった。

「ほう、見破っていたとはさすがというべきか……」

「こんな夜中に何のご用ですか」

「君達にご同行いただきたく訪れたまでのこと」

「断ります。こっちは学生なんですから明日も学校なんですよ」

言って紫月は何となく後悔した。翔と付き合ってる性か発言が低

レベルになって来ている気がする。ただ、翔以上に秀から受けている影響の方が問題ではあるのだろうか……

「そうか。だが、こちらは篠塚家を捕らえるように命令を受けている。大人しく従ってもらおう！」

男はカッと目を見開き、ポケットからナイフを取り出してこちらへ突っ込んできた！

「くっ……！」

それを何とかギリギリ交わして紫月は下段回し蹴りを繰り出す、男はそれを跳んでかわしクルリと宙で一回転する。

どうやらかなり訓練を積んでいるな、と紫月はさらに風の力を纏ってすばやく相手に切り込む。まずはあのナイフから破壊すべきだと、目線だけ相手の顔からはずさず手首より先は鋭い風の刃を忍ばせていた。

「風の刃か……、だが……！」

「えっ……！ きゃあああ……！」

突然自分の体が弾かれ、紫月はいくつかの家の屋根の上でバウンドするが、それでもすぐに体勢を整えて再度男と向き合うと、男は自分の懐に入り込んでおり、紫月の腹部にナイフを突き刺そうとした！

「くっ……！」

「紫月……！」

自分の名を呼ぶ柳の声が響くと同時に、男が手にしていたナイフが火球で弾き飛ばされ、さらにいくつかの火球が男に襲い掛かる！

「柳泉！！」

「えっ？」

二百代前の自分の名前を言われ柳は驚くが、その一瞬の間に紫月は力を解放して爆風を生み出した！

「吹き飛びなさい！！」

「くっ……！！」

男は体ごと吹き飛ばされたが、バランスを取り戻すなり一旦退却と闇の中に消えていった。

そして、紫月は力をおさめると柳はすぐに駆け寄ってきた。今いる場所は平坦な屋根とはいえども、ここに来るまでは足場の悪い三角屋根もあるというのに、柳のこういうところは少しおしとやかな性格から離れている。

「紫月、大丈夫なの！？」

「ええ、姉さんのおかげです。助かりました」

とりあえず、ご近様の屋根の上にいるわけにはいかないと、紫月は風を纏って自分の家の玄関前に着地した。

「ですが、一体何者何でしょう……」

「紫月！！」

突然襲い掛かってきた睡魔に紫月の体は崩れる。おそらく、あの

体が弾かれた時か……、と考える思考だけは残っていたけど。

「……睡眠薬みたいですわね、姉さん、すみません、秀さんに連絡……」

「紫月!!」

それだけ言い残して、紫月は意識を失った。

一方、地下街の闇の女帝の元を訪れていた秀は、彼にとっては少ない、心許せる女性と会っていた。

「桜姫さん、来てたんですか？」

「はい、お久しぶりです、秀様」

穏やかな笑みを浮かべて深々と頭を下げてくれる彼女の服装は珍しくスーツ姿だ。どちらかと言えば、青い装束や少し着崩して色っぽく見られる着物姿の方が見慣れている。

しかし、スーツ姿ということは何かしらビジネスで彼女もここを訪れたということだろう。

「闇の女帝は中に？」

「はい」

桜姫は綺麗な笑みを浮かべると秀の一步後ろに下がり、二人は闇の女帝が待ち構えている王の間へと足を踏み入れた。

そして、王の間に入れば彼女の側近達が両サイドに控えており、自分達は赤いじゅうたんの上を歩いて王座にすわる闇の女帝と謁見

する。

相変わらずの美貌の持ち主で、その長く細い足を組んで女帝の風格を漂わせながらも口元は笑みを象っていた。

「久しぶりじゃな、天宮秀、桜姫」

「ええ。お元気そうでなりよりですね」

「お久しぶりです、彩帆殿」

月並みな挨拶をかわしつつも、秀は見下ろされるのが嫌いなため、すぐに彼女と同じ目線の高さまでの階段を上がり、桜姫も秀より少し下がった位置まで上がった。

普通ならここで側近達が動くはずなのだが、彼等を怒らせてろくな目に遭うことはないと熟知しているため、誰も動きはしない。というより、動けば殺される……

「時間が勿体ないので、早速本題に入らせていただきます。闇の女帝。あなたはいつから麻薬に関わるようになったのですか？」

その問いに闇の女帝はピクリと眉を吊り上げるが、彼女は馬鹿馬鹿しいと頬杖をついて答えた。

「悪いが妾は麻薬に魅力は感じなくてな。あんなビジネスに関わるほど堕ちるつもりはない」

「ですが、あなたの部下がうちに来たらしいんですよ。天宮家に麻薬の密売人が来てないかとね」

それにも彼女は反応した。しかし、そんなことをするはずがないと分かっているだろう秀に、彼女は不機嫌さを隠すことなく答える。

「嘗められたものだな。妾が部下を使ってわざわざそんなことを伝えに行かせると思うか？」

「では、違うと？」

「当たり前じゃ。そんな者がいたら即刻処刑しておる」

「やはりそうでしたか。あなたなら伝えに来させる前に片付けるでしょうからね」

「時間が勿体ないのだろう、さっさと本題を言え」

不愉快の代償は皮肉で返すあたりはさすが闇の女帝というところか、それに桜姫はクスリと笑うと、秀も確かに無駄だったな、と思い本題に入った。

「それではお尋ねします。最近、日本に入り込んだ麻薬密輸団、特に大きな力を持った奴らの情報を譲ってください。どうも嫌な予感がするんでね」

「……天宮秀、お前は鷹、という名の組織を知っているか？」

その名に秀と桜姫は反応する。地下街にいれば一度は耳にする組織名だが、最近の活動から別の噂も流れ込んで来ていたのだ。

その時！ いきなり王の間の扉が激しく開けられ、側近が慌てた様子で飛び込んできた！

「闇の女帝！ 大変です！」

「どうしたんじゃ？」

「鷹の連中が地下街に！」

事態は急激に動き出していた……

第四話：鷹という名の組織（後書き）

今回でバレンタインデー前日を終わらせたかったのに、なんでこう激しくなるんだこの話！

まあ、天空記はどうもバトルから切り離せないんですけどね（笑）

はい、そんな感じで篠塚家はいきなり襲撃されており、紫月ちゃんもかろうじて無事という展開です。

だけど、無敵な彼女がおされるなんて結構珍しいこと。
敵はなかなかのやり手みたいですね。

そして、闇の女帝の元を訪れた秀と桜姫。

どうやら今回は鷹、という名の麻薬密輸組織が相手みたいで？

さあ、一体どんなバレンタインデーになってしまうのか……

第五話…シャンパン

突然王の間に入り込んできた鷹の部隊に、闇の女帝は不機嫌さをあらわにしても慌てることはなかった。こういったところは、いかに女帝という立場がお飾りではないと現れる場面だ。

ただし彼女の場合、元々の気質もあるが力もある。さらに世界を相手にしても勝てるんじゃないかというもので、此処には二人もいるのだから……

「天宮秀、奴らを蹴散らせ」

「どういことです？」

「例の麻薬密輸集団の特殊部隊だ。お前ならすぐに片付けられるだろう」

「僕に命じないで下さい」

「……高級ホテル、ペア宿泊券に裏ルートで取引されているフランス産の媚薬でどうだ？」

「承りました」

「秀様……」

命じられるのは嫌いでも買収されることに関しては何とも思わな
いらしい。ただ、その買収も彼の興味を引くものでなければ成立は
しないが……

そんなやりとりがされているとも知らず、武装した鷹の特殊部隊
のリーダー格であろう男は、闇の女帝達に銃口を向けながら要求を
告げる。

「闇の女帝だな？」

「鷹の無法者が妾に何の用じゃ」

「何、この地下街の権利を我々に譲っていただき、そして貴女には我が主の側室にでも」

「控えよ！ 誰に向かって口をきいている！」

全てを言い終わる前に闇の女帝は言い放った！ 彼女の性格上、誰かに飼われるぐらいならその飼い主を消すぐらいのことはやる。

特に鷹の下っ端に要求を述べさせる時点で彼等は彼女の敵に値した。

やれやれ、と思いながらも秀はとりあえず叩き潰すかと上着を脱ぐ。

「闇の女帝、くれぐれも力を発動しないようにお願いしますね。あなたの力は巻き込まれると面倒なので」

「妾も使うつもりはない。さっさと片付けよ。ただし、火は使うな」
「ええ、兄さんが頭を抱えるようなことはしませんよ！」

その瞬間！ 突如秀の姿が消えたかと思えば、目の前に拳が迫っていてリーダー格の男は簡単に殴り飛ばされた！

「うわあ~~~~！！！！」

「隊長…………！！」

声を発した時には顎に膝蹴りが決まる！ 秀はそのまま顎を蹴って浮かび上がった男の胸を踏み台にして、銃を構えていた男の頭部に回し蹴りを決める。

「撃て！！ 撃つんだ！！」

「おっと！」

秀に向けて銃弾が放たれるが、彼はそれを難無く避けて強烈な乱打を繰り出し、その体を立っていた男達にぶつけて巻き込んだ。

「くっそっ！！」

「ん？」

ナイフを持って突撃してきた男の顔面を長い足で蹴り飛ばせば、彼は鼻血を吹いてその場に沈む。ただ、落としたナイフを拾い上げれば、秀の柳眉は吊り上がった。どうやら毒付きナイフらしい。

「なるほど、僕に毒を使おうなんていい度胸してますね」

「なっ……！！」

男達はかつて味わったこともないような悪寒を感じると同時に、強烈な一撃をお見舞いされた。

そんな秀の鮮やかな戦闘が繰り広げられている中、闇の女帝は側近に命じてシャンパンを持ってこさせ、それを嗜みながら桜姫に尋ねる。

「桜姫、そういえばお主は何の用で来た？」

「はい、明日、天宮家にお越しいただけるように」

「行くに決まっておろう！ 純と夢華のために妾がチョコレートと新しい洋服と」

「そこまでにしておいてください。主がまた気苦労なさいますから」

「ふむ、そうか。それよりお主もどうだ？ 話はそれではないだろう？」

「はい、いただきます」

桜姫はニコツと笑みを浮かべるとグラスを受け取りそれに口づけ

た。しかし、どうやら闇の女帝は話が早いらしい。シャンパンの味で、すでに彼女が伝えに来た情報を持っていそうだということを理解した。

「モエ、ですか」

「ああ。土屋が明日、取引現場に行くらしいがそう伝えてやってくれ。じゃなければ妾もモエのシャンパンを楽しめぬよ」

「かしこまりました。では、彩帆殿も？」

「そういうことだ。本来なら純と夢華を連れていきたかったのだがな……」

「……主には御内密にしていたきたいところですね」

「仕方ないだろう、二人に着せたい新しい服が手にはいったんじゃ！」

その姿を妄想して悶えてしまう闇の女帝に、桜姫は何とつつこめばいいか分からなくなった。確かに、あの末っ子組にいろいろ着せなくなる気持ちは分からないでもないが……

そして、桜姫は人を殴る音が止まったことに気付いて秀の方を向けば、彼は悪魔のような顔をして唯一意識を持っていた男に詰め寄っていた。

「ひいひい！！ 化け物が……！！」

「化け物とは失礼ですね。だけど最後まであなたは意識を保っていられてたんですから良かったじゃないですか。さて、早速あなた達の組織の情報、たっぷり吐いていただきますようか」

男の襟首を掴んでニツコリ笑う美男子で、ここまで恐怖を与えるものは世界広しといえども彼ぐらいなものだろう。これから地獄という名の尋問を受ける男が敵ながら気の毒になってしまう。

だが、幸か不幸か、それは行われなくなった。闇の女帝に耳打ちした側近の言葉に、闇の女帝は秀に告げた。

「天宮秀、そこまでにしてお前は家に帰れ」

「どうしたんですか？」

「篠塚家に鷹の幹部が襲撃し、紫月が睡眠薬にやられたようだ。すでに妾の部下達が天宮家に姉妹を丁重に送り届けようだが早く帰れ」

秀は怒りで表情を歪めたが、しかし、彼はそれを抑えながらも闇の女帝に真意を問う。

「どういうことなんですか。何故、彼女達が襲撃されなければなら
ないんです！」

「秀様、今回の件には天空記が絡んでる可能性があります。まだ私も調べきれておりません。情報が入り次第すぐにお伝えいたしますからお待ち下さい」

桜姫は深々と頭を下げる。それだけ厄介な事態になっており、まだ篠塚家が襲撃された理由も定かではなかったのだ。ただ、天空記が絡んでいるからこそ彼女達が狙われたのではないかと……

桜姫にそう宥められては言い返せず、秀は一つ溜息をついて尋ねた。

「……鷹族なんて民族でもいたんですか、闇の女帝」

「確かにいたな。だが、まだこちらも情報が揃っていない。襲撃犯については柳から詳しく話を聞け」

「ええ、そうします。それとさっき言ってたホテルのチケット、あれは僕達全員分の手配しといてください。やられっぱなしは僕の

性に合いませんから」

秀は上着を拾い上げると、すぐにその場から駆け出していった。どうやら気付いていたらしい。

「全く、本当に頭の回転が速い奴だ」

「彩帆殿、私もこれでも抑えていますよ。主の病院にも鷹の手が伸びているみたいですし」

「お前も情報が早いな。だが、明日まで全て調べられるか？」

「もちろんです。ですが、その前に皆様が乗り込むことになりそうですけど……」

あの一行がやられっぱなしな訳がない。それをよく知る二人はクスリと笑うのだった……

第五話…シャンパン（後書き）

さて、たくさんの方の伏線が張られた今回。

何やら意味深な会話が闇の女帝と桜姫の間で繰り広げられていたが……

一体どんなことになってしまふのかはまた次回です（笑）

そして、天空記の解説を少々。

天空記とは天界最古の歴史書という設定があります。

このお話に出てくるキャラクター達はそのつながりを持っているという設定です。

詳しくは天空記の本編でご覧下さい。

ただ篠塚家の面々が天宮家にお泊り。

しかもバレンタインデーの日に……

柳ちゃんの身が別の意味で危ないんじゃないか!？

第六話：早速出てきた気苦労の芽

昨夜の騒動で眠れたのは朝方。沙南が寝坊してもいいと言ってくれたため、柳は有り難くそれに甘えることにした。ただ、年少組は学校があるためにそうもいかないのだろうけど。

「ん……」

冬場なので外の空気がひんやりとしている。ただ、自分を包んでくれるこの体温はいつも優しく、何よりも愛しく……

「えっ……？」

そう考えて柳はようやく頭が回転し始めた。部屋は客室に違いな、布団も一つ、ただ違うのは布団の中に入り込んでいる朝からいたずらモード全開の世界屈指の美青年がいることだ。

柳は慌ててその腕の中から抜け出そうとしたが、常人よりはるかに強い力の持ち主は簡単に解放してくれない。ただ、今日は気が張ってる性か、いつもより寝起きがいい。

「……ああ、おはようございます……、今日も寒いですね……」

「秀さん……！　なんで……！」

真っ赤になって慌てふためく柳に、秀はにっこり笑ってさも当然と答える。

「冬なんで人肌が恋しいんですよ……」

「ひゃっ……！」

秀は柳の額に口づけてまたギュツとその体を抱きしめた。しかし、寒ければ自分の力を使えば充分なのでは、と彼の力を知るものなら間違いなくそうつつこんでるはずだ。

ただ、柳もその力を持っているというのにパニックに陥ってるためそこまで頭が回転してくれない。

「さて、僕達は春休みですからもう少し眠りましょうか……」
「秀さ〜〜ん!!」

柳の抵抗など構わず、秀はしばらく柳を堪能することにした。

そんなことも露知らず、朝に秀を起こしに行くのは禁止と今や常識と化している天宮家は、いつものように朝食の準備が整っていた。

顔を洗って制服に着替えたにも関わらず、翔は大あくびをしながらリビングの扉を開けて朝の挨拶を告げる。

「おはようさん……」

「おはよう、翔君!」

「おはようございます」

「紫月!?　なんで!?!」

一気に眠気が吹き飛んだ。制服の上からエプロンをつけた紫月が目に見え込んで来たのだから。

ただし、昨夜睡眠薬を盛られたにも関わらず紫月はいつものようにすっきりしており、相変わらずな翔に溜息をついて髪を撫で付け

る。

「翔君、寝癖ぐらい直してください。ほら、早く御飯食べて学校に行きますよ」

「ああ、つて！ だからなんでいるんだよ！」

「それも食事をしながら話します。遅刻なんて御免ですから」

いや、最悪飛んでいけば問題ないのでは……、とは言いたいところだが、あくまでも平凡に暮らしたい紫月にそれは言わないでおくことにする。するとキラキラした笑顔で末っ子組もリビングに入ってきた。

「皆おはよう！！」

「おはよう！！」

寒くても末っ子組は元気いっぱいだ。夢華に至っては昨日の騒動も露知らず熟睡していたのだが、何の抵抗もなく天宮家にお泊りしているあたりはさすがである。

そんな末っ子組に癒されつつ、一行は朝食を摂ることになった。

それから紫月が昨日起こった出来事を簡潔に話せば、またトラブルがやって来るのかと一行の目は輝く。

「そうかあ、紫月でも手こずる相手が出てきたのかあ」

「翔君の油断癖が感染した性なんでしょうね。風邪より性質の悪い

……」

「えっ！？ 俺の性かよ！？」

「情けないことに……。ですが、今度は必ず仕留めますから」

「そういうとこ負けず嫌いだよな……」

「兄さんに似てるもので」

なるほど、と全員が納得する。啓吾もやられっぱなしは嫌う性格だ。やられたら倍返しが常識になってるところは確かに啓吾譲りなんでしょう。

「だけど、今回の敵の目的ってまだ分からないのでしょうか？」

沙南が翔に三杯目のご飯をよそいながら尋ねると、紫月はコクリと頷いた。

「はい、組織名は鷹という麻薬の密輸集団ですけど、まだその目的や背後関係も掴めていません。秀さんが闇の女帝からどれだけの情報をもたらされたかは分かりませんが、動いてないところをみるとまだ……」

「そっか……」

気になるところだが、動けない時はどう足掻いても仕方がないのも事実である。もちろん、鷹のアジトに直接乗り込んで潰す手もあるが、遠い異国の地に龍達の許可もなく行くわけにはいかない。

「だけどさ、その密輸集団がこっちに来てるんだろ？　だったらそいつら潰せば良いんじゃない？　ごちそうさま！」

核心をついて食後の挨拶をきちんとする翔に、紫月はまた深い溜息をついた。まさにそのとおりだが、それを実際の行動に移すのが問題なのである。

「……翔君にかかれば何でも単純なんですわね」

「じゃあ、また皆で敵をやつつけるの!？」

「夢華、そんなキラキラした目でいうものじゃないですよ。兄さんはともかく、龍さんが頭を抱えますから」

「うん!」

末っ子組の教育に頭を抱える龍の気苦労を知る紫月は、今日もきつと気苦労をするであろう、悪の総大将に同情するのだった……

そして本日、世界で最も気苦労することが確定している悪の総大将は……

「えっ!？ オペ出来ない!？」

「二つともですか!？」

「ああ」

朝方、救命から解放された龍と啓吾は本日二件のオペが入っていたのだが、それが急にキャンセルとなったと外科部長に告げられていた。

「一体どういうことなんです、患者の容態は安定していたはずでしょう?」

「ああ。しかし、二人ともインフルエンザにかかってしまったのは、とてもじゃないがオペするわけにはいかないだろう」

「はあ!？ インフルエンザって院内感染してるんですか!？」

「いや、かかっているのはその二人だけだ」

「また奇特的な……」

よりによって昨日の検査で何も問題なかった患者が、いきなり揃ってインフルエンザに掛かるなんてよっほどの偶然でない限りまず

ない。

しかし、さらに外科部長はとんでもないことを告げた。

「とりあえず、二人の患者のオペは延期となるが、医院長はそれを喜んでいてな……」

「……また何かあったんですか」

龍は苛立ちを抑えているのだろう、呆れ返った表情を浮かべると、それに同意するかのように外科部長も溜息を吐き出した。

「ああ。オペが延期になったなら、今日は二人とも夜は休ませてやりたかったんだが、あの医院長からの命令で二人にはパーティーに出席して欲しいそうだ」

「俺はそんなもんに出るぐらいなら夜勤しますよ」

啓吾は即答したが、外科部長は首を振って申し訳なさそうに頼む。

「気持ちは分からなくもないが、二人がお目付け役だと助かるんだがな」

「と、いいますと?」

「そのパーティーなんだが、多くの製薬会社に加えて麻薬組織も入ってるといふ噂なんだよ」

それだけ聞けば二人はガックリと肩を落とした。あの医院長なら確かに余計なものを引っ掛けて来そうだ。

「本当に申し訳ないが、私も明日は朝一でオペだからな」
「分かりました。何とかします」

龍の気苦労は早速始まるのだった……

第六話：早速出てきた気苦労の芽（後書き）

さあ、トラブルの舞台が少しずつ整って来るバレンタインデー当日。一体どんなことになってしまうのでしょうか。

そして、朝から柳ちゃんを独占している秀。

火の力を操る癖して寒いから一緒に寝るって……

うーん、人肌の温もりはやっぱり自分で力を使うのとは違うのか……
きつとまだ秀の暴走は止まらないのでしょうか……

高校生組と末っ子組は朝から賑やかです。

天宮家に泊まることに結構慣れてるんだろなあ、あまり違和感がない日常みたいな感じがしている作者です。

次回は高校生組と末っ子組のお話になるかな？

第七話：事件の予感

賑やかな朝食が終わり、紫月は茶碗を洗うと申し出たが、沙南がニツコリ笑ってそれを断った。

「紫月ちゃん、後片付けは私がやっておくからいってらっしゃい」
「すみません、お願いします」

紫月は頭を下げて歯磨きに洗面所へ向かう。いつの間にやら天宮家に自分達の歯ブラシまで備わっていて、本当に家族みたいと思うことだつてある。

まあ、柳にいたつては近々この家に住むようなことに成り兼ねないが……

それから歯磨きが終わって紫月は紺色のコートを羽織り、薄紫のマフラーを巻き、鞆と大きな箱の入った紙袋を持って外に出ると、自転車に乗った翔が外で待っていた。

「ほら、早く後ろに乗れ」

「はい」

初めのうちは抵抗があったことも今じゃ当たり前になって来ている。ただ、帰りは一緒でも行きが一緒になるのは久しぶりだ。普段、紫月はバス通学なのだから。

「じゃあ、沙南ちゃん！ 行ってくる！」
「行ってきます」

「沙南ちゃん、行ってくる！」

「沙南お姉ちゃん、行ってきたーす！」

元気良く挨拶してくれる年少組に、沙南はニッコリ笑って手を降って送り出してくれた。

「いってらっしゃい！！」

それを聞いて翔はペダルを思いっきり蹴って自転車を漕ぎ出し、末っ子組は仲良く手を繋いで駆け出していった。

そして、少し走って身体があたまってきた二人は、もう遅刻しないからということとでゆっくりと歩いて学校へ向かう。もちろん、手は繋いだままだ。

「純君、おっきな紙袋だね！」

「うん！ 翔兄さんが持って行けって」

「そっか。純君たくさんもらいそうだね。私は昨日お姉ちゃんと作ったから帰ったら渡すからね！」

「わぁ、楽しみだね」

とても楽しみだとキラキラした笑顔を向けてくれる純に夢華もつられてしまう。

いつだってそうだ。こんな笑顔を向けてくれるから純の傍にいたことがとても心地良い。それはきつと二百代前も一緒で……

「だけど夢華ちゃん、ホワイトデーのお返しは何がいい？」

「ほえ？」

「秀兄さんがね、バレンタインデーのお返しは三倍返しって言うってたから、夢華ちゃんに何かプレゼントしたいなって」

「えっ！？　そんないいよ、私が純君にあげただけだし、お姉ちゃんにも手伝って貰ったし」

「でも僕はちゃんと返したいから、しっかり考えておいてね」

ニツコリ微笑んでくれる顔に今度はドキッとさせられる。その正体がまだ分からず首を傾げてしまうのだが、しかし、純の気持ちがとても嬉しい。

「うん！　ありがとう、純君！」

夢華は幸せそうに、満面の笑顔で答えるのだった。

一方、相変わらずスピード違反なんじゃないかという運転をする翔だが、紫月が持つて出てきた大きな箱の正体は何なのか気になっており、極自然に尋ねてみる。

「紫月、何だそのでかい箱」

「生チョコです。翔君なら臭いで分かると思いますか？」

「誰にやるんだ？」

その問いに紫月は目を丸くしたあと、ポンと翔の肩を叩いた。

「……翔君、帰ったらたくさん食べさせてあげますから」

「じゃなくて！」

「クラスの皆さんです。どうしても食べたいと拝み倒されましたので」

なるほど、と翔は納得した。調理実習でプロ級の實力を発揮している紫月だ。そりゃ、拝み倒されるだろうな、と思う。

「ふーん、紫月って誰か本命チョコ渡すのか？」

翔にしては結構恋愛寄りな質問ではあるが、紫月はいつも勘違いさせるようなストレート発言だと思い、彼女らしく答えた。

「……翔君、心配しなくても腕によりをかけてちゃんと美味しく仕上げましたから」

「どうしてそうなるかな……」

「翔君の食に対する思いは龍さんの活字中毒と一緒にすからね。ですが、ちゃんと新作を作りましたから、帰ったら味わって食べてください」

本命とは名の付かないチョコレートでも、結局一番食べてもらいたいの翔には違いなくて、紫月は微妙な表情を浮かべているだろう翔に微笑を浮かべた。

それから学校に着いて、自転車置場に駐輪するのを待っている女子達に二人は面食らった。紫月はてっきり全て翔にチョコレートを渡す女の子かと思ったが、翔を押しつけて彼女達は突っ込んで来た。

「お姉様！ おはようございます！」

「これ、受け取ってください！」

「ありがとうございます……」

紫月は礼を述べて可愛らしくラッピングされたチョコレートの数々を受け取る。女子の勢いとは本当に恐ろしいものだ。

ただ、ちらっと翔の方を見れば、彼も沢山受け取っていて少し複雑な気分にもなる。まあ、本人は全て義理チョコだと思っているのだろうか……

しかし、明らかに翔よりモテている紫月は、先に教室へ行って下さい、と目で訴えて翔は教室へと歩き出した。おそらく、当分紫月は動けないだろうからと……

そして、翔が教室に入ると友人がこちらへと寄ってきた。

「うっす、天宮」

「オウ！」

軽く挨拶を交わして大量のチョコが入った袋をドンと机の上に置くと、友人は悔しそうに翔にヘッドロックをかけてきた。

「何するんだよ！」

「お前今何個貰ってるんだ！」

「何個って」

「チョコだ！ 決まってるだろうが！」

さらに絞める力を強めても翔は平然としている。これが兄達や啓吾だったら完全に息の根ぐらいは止められているのだろうか……

「うゝん、十ちよっとか？」

「贅沢ものがゝ！！」

「だけどさ、去年より少ないんだぞ？」

「まだ言うか！」

「だって、今日の欠席者多くないか？」

「そういやそうだな……」

もうすぐホームルームが始まる時間だというのに、翔のクラスメイトはまだ半分しか来ていなかった。

「まあ、インフルエンザが流行ってるのかもしれないけど」

「だったら今日、休みになんねえかなあ？」

「有り得るかもな。本当に少ねえし」

なってくれたら、帰って紫月の力作が食い放題かも、と淡い期待を抱いてるところに、大量のチョコレートを抱えた紫月が隣の席に腰を下ろした。

「紫月、モテるな……」

「翔君、袋余ってたら下さい。持って帰れません」

「ハハッ……」

既に五十近くはもらってそうだな……、と思いながらも、ホームルームの始まりを告げるチャイムが鳴り響く。ただ、やはり今日は人数が少なく空いている席が結構目立っていた。

それから担任が教室に入ってくるなり、彼はまさに翔の期待以上のことを告げてくれたのである！

「今日と明日は学年閉鎖になった。全員帰ってインフルエンザの予防をしとけよ」

教室がざわつく。よりによって二日も休みなのかと思うが、教師陣もインフルエンザでバタバタと倒れているらしくどうにもならないと説明された。

それに紫月は何かを感じて若干顔を歪めるが、既に休みに浮かれている翔は満面の笑顔で告げてくれた。

「紫月、帰るぞ！」

「はい。但至少し生チョコが余ってしまいましたね」

「俺が食うから心配すんなって！」

「えっ！？ これまで食べるんですか！？」

「なんだ？ そんなに作ったのか？」

「はい、三日はもつようと」

それにほぼ毎日、天宮家にお邪魔しているので紫月としてもそれくらいは返しておきたかったのである。

「そっかあ、じゃあ今回は三日かけてくわねえとな」

「ええ、そうして下さい。だけど翔君、何か嫌な予感がしませんか？」

「嫌な予感？」

「はい、何となくではありますけど……」

それが確信に変わるのはすぐだった……

第七話：事件の予感（後書き）

さて、バレンタインデーで今のところ一番もらってるのは紫月ちゃん。

さすがはお姉様、学年閉鎖になろうとも五十近くはもらってるというモチっぷり（笑）

でも、翔君も結構もらってるんですね。

そんな感じで、高校生組はインフルエンザの流行で学年閉鎖になっています。

多分、龍達もその対応に追われてるんだらうなあ。

末っ子組は本当に仲良し。

そして、さすがは純君、ちゃんとお返しは三倍で返すつもりみたいです。

秀の言ってたことを真に受けちゃう素直な少年です。

何てったって、ランドセルしよってる歳ですからね（笑）

次回はまたまたおかしなことになるような予感。

多分、秀が柳ちゃんを解放してる時間帯を書けるかな???

第八話：甘い買物

学校からすぐ帰ることになったが、放課後、翔達にチョコレートを渡そうという女子達に囲まれて翔達が学校を出発出来たのは一時間目も半ばのころだった。

当然、全て持って帰るのが不可能となってしまったため、いくつか学校のロッカーに入れて帰るハメになってしまったが。

そして、本日はかりは暴走自転車というわけにはいかず、チョコレートを落とさないようにとゆっくり漕ぐ翔に、紫月は気になっていたことを話し始めた。

「翔君、やっぱりおかしいと思いませんか？」

「何がだ？」

「学年閉鎖になったことです。昨日まで確かに数名は休んでいましたけど、ここまで一気に広がるなんて普通はないかと思いますが」「そりゃなあ、学年の半分がいきなり休んだんだもんな。スーパースプレッダーばかりの学年だった、なんてオチかもしれないけど」「今までも学年閉鎖が何回も起こってたんですか？」

「いや。一度や二度ってところだな」

「じゃあ、その可能性は低そうですね。エスカレーター式の学校なんですよ」

だとすれば一体何が原因なのか、そう紫月はますます考え込んでしまう。故意にウイルスを撒き散らす事など可能なのかと……

それから天宮家に到着した二人は、こんな時間から家に帰るなど

という少し妙な気分を味わいつつ、玄関の扉を開けた。

「ただいま〜！」

「ただいま帰りました」

ドサリと聞こえた音に反応して、沙南はリビングのドアを開いて高校生組を迎え入れる。ただ、表情はキョトンとしていたが。

「おかえり。翔君と紫月ちゃんも学年閉鎖？」

「もってことは……」

高校生組がリビングのに視線を向ければ、末っ子組がニコツと笑い、ぴよこんと姿を現し驚いた。

「純！ お前達もか！？」

「うん！ 皆インフルエンザだから明日もお休みなんだって」

「へえー、やっぱりインフルエンザが流行してんのかなあ？」

「純君、六年生だけですか？」

「そうみたい」

コクリと頷く純に紫月は考え込む。どうもおかしい、これほど偶然が重なるなんて有り得ない。

しかし、学校が休みになって何して遊ぶかという話しになるのが翔と末っ子組である。もちろん、それを止めるつもりはないが。

「でもよ、兄貴達も大変なんだろうなあ」

「兄さん達は今日一日オペだって言っていましたから、そこまでは影響ないんじゃないですか？」

「じゃあ、大変なのは紗枝ちゃんか」

あれだけ休んでいるのだ、きっと聖蘭病院はインフルエンザ患者でごった返しているのだろう。

それから沙南は玄関先に置かれたチョコレートの袋を抱え、その数に感嘆の声を上げた。

「だけど沢山もらったのねえ」

「半分以上紫月だよ。もう、モテるのなんのって……」

「翔君だって沢山もらってるじゃないですか」

「やきもちとか？ でえっ!!」

翔は思いつきり頭を叩かれる。ただでさえも恥ずかしいというのに、沙南達の前でいうのはやめてもらいたいものだ。

ただ、紫月が若干赤くなっていることに、沙南は小さな笑みを零す。

「くだらないこと言ってないで、さっさと着替えてください。買い出しにも行かなくちゃいけないので」

「へいへい。それより沙南ちゃん、秀兄貴達まだ寝てんの？」

「起きて二人で出かけたわよ。すぐに帰ってくるとはいつてたけど」

「いいよなあ、デートかあ。紫月、俺達も」

「買い出しデートが出来るんですからいいじゃないですか。沙南さん達もついて来て下さるんですし」

「それってデートか？」

「両手に花の男性以上に贅沢でしょう？」

紫月は絶対否定できない言葉を告げてくれた。確かに沙南と紫月がいる時点で両手に花以上だ。しかし、しっくりはこないのだけ

ど……

そんな言い返せない翔に沙南は苦笑して促した。

「ほらほら、早く着替えて買い出しに行きましょう。お昼の材料もちよつと足りないしね」

「うおっ!? そりゃ困る!」

昼ご飯が遅くなるのは勘弁だと、翔は急いで二階に駆け上がるのだった。

そのころ、とあるブティックにいた秀と柳は……

「あの、秀さん……」

頬を赤らめて試着を終えた柳は秀の前に姿を表した。

彼女が着ているのは薄桃色のワンピース。左右二つの肩紐、キュッとしぼったウエスト、そして少し短めの丈が彼女の繊細さを引き立たせている。

何を着ても似合う美少女ではあるが、こういった大人っぽさを演出するものは滅多に見られないので、秀はそれはご満悦な表情を浮かべた。

「ああ、とても似合いますね」

「ありがとうございます……」

柳はさらに俯いた。ミニスカートはともかく、彼女はこういった

肌を露出するスタイルというのはいまいち慣れない。それにこういった服を着こなしてしまう最強クラスの女性がいるため、自信がないのも事実だ。

ただし、秀はだからこそ着せたくなくなってしまおうという、ほぼ八割はからかいたいという理由で彼女に勧めているのだけれど……

「これは買うこと決定ですね。さて、アクセサリーも選びましょうか」

「秀さん、その……」

「ああ、金額は気にしないでください。僕からのプレゼントですから」

「そんな！　こんな高いもの！」

「菅原会長のツテですから大丈夫ですよ。何より、今夜は天宮家で騒ぐ予定が変更になりそうですから、先にそのお詫びです」

「えっ？　どういうことですか？」

柳が首を傾げると、秀はガラスケースに入ったアクセサリーを吟味しながら答えた。

「それは兄さん達と合流してからお話し出来るかと思います。でも、せっかくのパーティーなんで柳さんには着飾って頂きたいですし、チョコレートと一緒に君も頂きたいですし」

「なっ……！！」

一気に茹蛸が出来上がった。その反応に秀の悪戯心はさらにくすぐられ、独特なデザインのシルバーネックレスを選んで柳に近付けば、それは甘美な笑みを浮かべて彼女の耳元で囁く。

「チョコレートと君はどっちが甘いんでしょうねえ？」

「し、しゅ……！」

ついにフリーズした柳に秀はネックレスをつけてやり、頬に一口づけを落とした。

「さて、お会計してきますから少し待ってて下さいね？」

そう告げて会計に向かう秀の声は聞こえず、彼女は気の毒なぐらい、しばらくそこに立ち尽くしているのだった……

第八話：甘い買物（後書き）

さて、こんなにいちやくカップル、さぞ店員さんは迷惑だろうな
と思いますが、秀がやると何故かありかもと……

チョコレートと柳ちゃん、例え何があるうと頂くつもりだ……
というより、邪魔したら……

はい、そんなこんなで年少組は揃って学年閉鎖。

そんな事態に紫月ちゃんはやっぱりおかしいと考え込んでいる模様。
その勘は次回に当たってくれるかなと思います。

なんせ、二日間お休みなんですからね、トラブルの一つや二つ起こ
らないなんて天空記じゃありませんから（笑）

第九話…スーパー

「夢華ちゃん、トゲがたくさんついてる胡瓜選んでくれる？」

「はい！」

ビニール袋を手に取り、胡瓜を詰めていく光景はよくあるもの。ただし、注目を浴びてる理由は二人の愛らしさだけではない。

スーパーでこれでもかというほどの大量の食材を買い込んでる沙南達の荷物持ちにされている翔と純は、周りからジロジロと見られていても特に気にした様子はなかった。

ただし、そろそろ手に持てる量にも限界が近付いて来ている。買い物カゴの中身は溢れんばかりだ。

「沙南ちゃん、まだ買うのか？」

「もっちゃん！ 人数も多いし、翔君達が休日になっちゃったからすぐに食材も消えちゃうしね」

「はあ、うちの経済状況大丈夫なのかよ……」

「大丈夫よ！ 龍さんがよく働く医者で良かったわよね」

龍から貰う給料の三分の二が食費に消えるという家庭ではあるが、それでも赤字にならないあたり沙南はかなりのやりくり上手である。

「あーあ、やっぱり今月も小遣アップは期待出来ないかなあ？」

「春休みにバイトでもしたらどうですか？」

「バイトねえ。だけど紫月はかなりはぶり良さそうだけど、一体喫茶店以外でどうやって稼いでるんだ？」

「まあ、いろいろと」

「株とか？」

「そうですね」

そうあっさり答えるが、秀にいろいろなことを教えてもらっているため、彼女の懐はかなり潤っていることは内緒である。おそらく、実態を知れば啓吾がうるさいだろうから……

その時、紫月の携帯の着メロ鳴り響く。通常、彼女も女子高生なので自分が好きなアーティストの着メロを設定しているが、裏つなりの電話となると、何故か必殺仕事人のテーマになっている。理由は聞かないが……

「秀兄貴からか？」

「はい、少し失礼します。もしもし」

紫月は一行から少し離れて会話する。結構過激な内容も秀から伝えられることがあるからだ。

『紫月ちゃん、いま皆と一緒にですか？』

「はい、スーパーへ買い物に来ていますが」

『そうですか。でしたら沙南ちゃんに今日の夕飯は皆でホテルと伝えてください。もちろん、兄さん達も一緒ですから』

「えっ、どういことですか？」

『はい、実はですね……』

秀の少し弾んだ声で聞く説明はけっして穏やかな内容ではないが、それ以上に彼は自分の好きなように事を運ぶ気満々である。それこそ柳が知ったら卒倒しそうな事まで考えているに違いない。

それを頷きながら紫月は聞いているが、どうしても気掛かりなこ

とはある。

「なるほど、ですが麻葉が絡んで来るパーティー会場に末っ子組が一緒だというのは龍さんに悪い気が……」

『ええ、それは僕も申し訳ないんですけど、昨日篠塚家が襲撃されてることからも一緒にいてもらった方が守れる状況ですし』

「警察も動いてるならあまり派手なことは出来そうにもないですけど……」

『その点は土屋さんに任せましょう。今回は現場に入るみたいですから身軽でしようし』

間違いなく責任は指揮官に押し付けるな、と紫月は直感でそう感じた。発砲は現場判断、失敗すれば指揮官の責任と彼なら軽く言うてのけるに違いない。

事実、彼にはそれだけの実績と権力、おまけに現場の刑事達から厚い信頼を得ているのだから……

「分かりました。何時にどこへ行けば良いですか？」

『大丈夫ですよ。僕達も一旦家へ帰りますから』

「えっ、ですが折角姉さんと……」

『紫月ちゃん、すみませんが一度切ります。どうやらこちらはトラブル発生みたいなので』

「えっ！？ 秀さん！？」

それだけ告げて秀は携帯を切った。しかし、トラブルが起こっていたのは秀達だけではなかったのである。

「紫月、どうかしたのか？」

会計が済んだことを伝えに来た翔は、なにやら様子がおかしい紫月に尋ねると、彼女は少し心配そうな表情を浮かべて答えた。

「秀さんと姉さんが何かトラブルに巻き込まれたみたいです。無事だとは思いますが……」

昨日、自分と戦ったものが相手となれば、負けることはないだろうが少々厄介な相手になるかもしれないと思う。それに少し苛立った声は柳に何かあったのではないかと思うわけで……

「大丈夫だって！ 秀兄貴が負けるわけがないだろうし、柳姉ちゃんだって強いだろう？」

「そうですね……」

「それにさ、兄貴達にトラブルが起こって俺達に起こらない訳もないみたいだ！」

その瞬間！ 紫月の横を通り過ぎようとした客がスタンガンで彼女を気絶させようと襲い掛かってきたが、翔が瞬時に気付いてスタンガンを蹴り飛ばした！

「ちい……！」

「おらっ！！」

翔は思いつきりその客の顔を殴り飛ばして気絶させ、近くで女性の悲鳴が上がった方へ駆け出した！ どうやら、自分達もトラブルに巻き込まれたようだ。

「翔君、面倒ですから力を使わないで下さいよ！」
「使う必要なんてないね！」

あの程度なら全く問題ないといわんばかりに勝ち気な笑みを浮かべて、翔と紫月は沙南達と一刻も早く合流しようと走れば、自分達の目の前に数人の男達が勢いよく床を滑って来てその上を飛んだ。

「あのクソガキ！」

「よっ！」

「グハッ！」

純は軽々と男達の頬に回し蹴りを決めた。どうやら子供だと思っ
て純に襲い掛かった結果、見事に返り討ちにあっているらしい。

しかし、あくまでもここはスーパー。自分達の力がバレル事も騒
ぎを大きくし過ぎて買い物に來れなくなるのも困る。

「紫月！」

「はい！」

二人は乱闘騒ぎになっ
てる中心に突っ込み、出来るだけ相手の急所に攻撃を叩き込んで敵を殲滅させた。もちろん、純より強いという
ことを二人ともアピールしてだ。

「このガキどもが！！」

「やあっ！！」

紫月は空手のお手本のような上段回し蹴りを決める。もちろん、
若干風の力は纏っているが気付かれるものではない。

そして、見事にそれが決まって全ての敵が片付くと、客達からは
見事なパフォーマンスと取られたのか喝采が上がった。

「良いぞお嬢ちゃん！」

「兄ちゃんも強かったぞ！」

平日の昼前ということで、どちらかと言えば老人などが多かったため、彼等の強さについて言及してくるものはいなかったが、店員達はそうもいかない。

「君達、一体これは何の騒ぎだね！」

「知らないやい！ 俺達は買い物に来てたらいきなりスタンガンを持った客に襲われたから、正当防衛でこいつらを気絶させたんだ」

「その通りです。弟妹達にも危害を加えようとしてましたから、私達を守るのは当然のことです」

決して嘘ではない。しかし、この店の責任者は店がこれだけの騒動になった責任を二人に追及した。

「だったら君達はそれだけ怨まれることをしているのか？」

「何を……」

「おかしいだろう！ 一人ならまだしも、何でこんなに多くの不審者が！」

「警察だ！」

突然入って来た数十人の警察官に店内はまた騒々しくなる。そして、その中に穏やかな笑みを浮かべてこちらにやってくる人物を発見した。

「あっ！ 土屋の兄ちゃん！」

「やつ、翔君と紫月ちゃん、お手柄だったね。おかげでこちらも助かったよ」

そして、土屋は店の責任者と向かい合い、きちんと納得が行くように説明を始めた。

「こちらにご迷惑をおかけして申し訳ありません。詳しくは明かせませんが、とある犯罪組織が動いていましてね、おそらくこの店に立て籠もろうとしたのでしよう。ですが、返り討ちにあったみたいですね、皆さん無事で何よりです」

「は、はあ」

どこからどう見ても警察のお偉いさんとしか見えない土屋の説明に、店の責任者はただ納得するしかなかった。

それから土屋は沙南を発見するとそちらに向かって歩き出す。

「沙南ちゃん、怪我はなかった？」

「ええ、大丈夫ですよ」

「そうか。末っ子組がしっかり守ったんだね」

「えへへ！」

末っ子組はくしゃくしゃと頭を撫でられて破顔する。そんなほのぼのした光景に心穏やかになりながらも、紫月はこの騒動について土屋に尋ねた。

「土屋さん、さっきの奴らは……」

「ああ、例の麻薬組織の奴らだ。数十人は街に潜り込んだと聞いて今、俺達はその検挙に当たるように命じられている。そして、皆を狙うと思って来たらビンゴだね」

もちろん、部下達には刑事の勘と言っているのだろうか……

「とりあえず、君達を家まで送っていこう。その大量の荷物も一緒にね」

その有り難い申し出に、沙南はクスクスと笑うのだった。

第九話：スーパー（後書き）

さて、今回は土屋さんがちゃんと警察官として仕事をしていたんだなあ、という回でしたが、いかがだったでしょうか？

お話でも書かれていた通り、彼はかなりすごい人だったりしています。

まあ、そのおかげで翔君達が不審な目で見られなくて済んだわけでしたが。

それにしてもドタバタとトラブルが起きて来そうな話になってきました。

あくまでもバレンタインデーのお話なのに、何でこんな事になったのか……

次回は秀のお話と、医者達にもスポットを当てたいなあ。

第十話：圧倒

靴屋に来ていた最中、秀は少し席をはずすと店の外に出た数分後、突如店の中に武装した男達が入り込んできて店内を占拠してしまう。女性店員の首筋に鋭利なナイフを近付けて、その中の一人の男が問ってきた。

「篠塚柳だな？」

「そうです」

「この女を殺されなくなったら同行してもらおうか」

「ひいひい……！」

恐怖のあまり女性店員は悲鳴を上げる。ここで自分の力を使えば武装兵全員を倒せないこともないが、女性店員を危険に晒すことは出来ない。

「……分かりました、その人を離してください」

「ならばお前が先にこちらへ来い」

促されて柳はそれに従う。誰も人がいなくなれば一気に力を解放しようと思いつきながら近付けば、いきなりグツと後ろに手を捻られる。

「つつ……！！」

「暴れられたら面倒だ。薬を打っとけ」

「へい！」

男はズボンの後ろポケットから銀色のコンパクトケースを取り出し、そこから注射器と瓶に入った薬が出てきた。おそらく鎮静剤の類だろうと思ったが、男はニヤリと笑って柳に尋ねてきた。

「これが何だか分かるか？ 医学生さんよ」

「鎮静剤じゃないんですか」

「そんな可愛いもんじゃないさ。媚薬って知ってるか？」

「なっ!？」

「打たれたことがなさそうだな。だが、すぐに良くなるぜ。目が覚めたら楽しもうや!!」

「やっ!!」

その瞬間、注射器はいきなり破裂し、柳の腕を捻っていた男と注射器を持っていた男が声もなく泡を吹いて倒れた。やったのはもちろん彼である。

「秀さん!」

「すみません、柳さん。お怪我はありませんか？」

柳は解放されたと同時に秀の腕の中に飛び込んだ。それをギュッと受け止めて彼は柳を後ろにかばう。

一体どうして注射器がいきなり破裂したのか、何故攻撃もしないのに男達が泡を吹いて倒れたのかは、彼を知らないものからすれば疑問だけであるが、要は注射器を熱の力で蒸発させて威圧しただけの話である。

ただ、それ気付くものはいなかったのだけれど……

それから秀は自分の近くに落ちていた銀色のコンパクトケースを拾い、その中に入っていた薬に微笑を浮かべた。

「ああ、これが例のフランス産の媚薬ですか。ちょっと興味あった

んですよね、鷹の連中が麻薬と一緒に日本に持ち込んできたものらしいですし」

「秀さん？」

「ああ、心配しないで下さい。これは結構きついんで、まだ柳さんには使いませんから」

「えっ？」

まだ、というのが微妙に引っ掛かるところだが、つつこむことをやめておいたのは正解である。もちろん、尋ねたところで彼好みの答えしか返ってこないのだろうが……

「さて、とりあえずこいつらにはいろいろ聞きたいこともありますし、柳さん、すみませんけど十分に片付けますから待っていてくださいね」

柳にはあくまでも愛情たっぷり、優しく微笑みかけているのだが、彼の裏の顔を知るものから言えば間違いなく悪魔が降臨しているとしかとられない。

そして、秀は一步前に進み出た途端、武装兵達は顔を真っ青にした。

「さあ、まずは死にたくなる程度の恐怖ぐらい味わっていただきましょうか」

『鬼だ、悪魔だ、最悪だ……！』

そう意識させられたのが最後、彼等は言葉にするにも悍ましい恐怖を味わうことになるのである……

一方、午前中の回診を終えて、久し振りに定時に昼食にありついていた龍と啓吾は、紫月と夢華が作ってくれたチョコレートデザートをゆっくりと休憩を堪能していた。

もちろん、院内はインフルエンザ患者で溢れかえってはいるが、龍達は急患に備えるようにとの外科部長からの命令である。

「昨日は事故、今日はインフルエンザか？」

「仕方ないだろう。小児科なんて長蛇の列らしいぞ」

「はあ、本気でバレンタインデーはお預けかもな」

「アメリカではそんなに気になるもんでもなかっただろう？」

「毎年沙南お嬢さんに本命チョコを貰ってるお前に言われたくない」

そのつつこみに朱くなるあたり、本当にこの青年は純情である。いくらくつついたといっても、未だに手を繋ぐことさえ出来ていないんじゃないかと疑わしくなることさえある。

まあ、この職業柄、デートなんて月に一回出来れば奇跡なんじゃないかと思えるところもあるにはあるが……

その時、午前中の回診を終えた紗枝も医局に戻ってきた。

「お疲れさま」

「お疲れ。小児科はどうだい、紗枝先生」

「何とか回転してるわね。まあ、今入院している子達からはインフルエンザの症状は出てないみたいだから、急患が入らない限り今日は定時で帰れそう」

「いや、というよりお前はそろそろ休んどけよ。週末はオペ続きなんだろう」

「大丈夫よ、明日は休みだもん。あつ、それと忘れないうちに二人

に渡したいものがあつたのよ」

まさか、と啓吾は一瞬淡い期待を抱いたが、そんなに人生がうまくいくものではない。

「はい、今日のパーティーの招待券。二人とも服はうちのホテルで用意するようにしたから」

「ありがとう……」

龍はきちんと礼を述べるが、隣でむくれている医者が少しだけ哀れに思える。そして、龍を挟んで二人の応酬が始まった。

「紗枝先生、今日はバレンタインデーなんだけどな……」

「知ってるわよ？ だけどあんなに箱一杯にもらってるのに私からわざわざチョコレートが欲しいの？」

「お前な……」

「はいはい。じゃあ、私がもらったチョコレートから一つ好きなの取っていいから」

「義理なんて妹達のと沙南お嬢さんからので充分だってえの」

「桜姫からは？」

「あいつからは銘酒貰うからいい」

酒は貰うのか、と龍は心の中でつつこんだ。律儀な彼女のことだ、きつと家に戻れば自分達にはチョコレート以外の何かを用意してくれてるに違いない。そして、二人はさらに応酬を続ける。

「だったら紗枝、お前も今日のパーティーについて来い。さっさと用を済ませてホテルのバーで奢れ」

「ああ、それはいいかもしれないわね。いいものが入ったって言うてたし」

「マジか!？」

「うん、だけど一杯だけよ。値段は張るんだから」

「もう一声」

「分かった! そこのウイスキーボンボンを付けてあげる!」

ニツコリと笑顔で答えてくれる紗枝に啓吾は言い返せなくなった。元はといえば、紗枝からチョコレートが欲しいということだったわけ……

それにあまりに集れば、ホワイトデーの三倍返しが怖い。下手すれば破産する……

「あつ、だけど折角なら沙南ちゃん達も来てもらおうかしら」

「紗枝ちゃん、あくまでも今回は麻薬が絡んでるし、医院長のお守りだってあるんだから……」

「だけどころな医療関係者や財界人が集まるんだから、ある意味沙南ちゃんは自分のものだって触れ回っておくのも良いんじゃないの?」

「ああ、一理あるかもな」

その意見には啓吾も納得した。

現在、沙南の親である誠一郎医院長は、自分の妻が天宮家の人間だということ、そして、まだ龍が若いために医院長は無理だと提言したため、代理の医院長としての立場を確立している。

だからこそ、彼は聖蘭病院を乗っ取るため、そしてより自分の立場を確立するため、沙南を利用して権力者達と繋がりを持つようとしているのだ。

しかし、その権力者達も龍がいると分かればそう簡単に手は出してこれないだろう。なんせ、本人は気付いていないだろうが、実は世界の表も裏も龍に味方しているのだから……

「だけどやっぱり危険だと……」

「危険なことからは龍ちゃんが守れば良いじゃない！」

「いや、しかしだな」

「麻薬の一つぐらいで小さいこと言わないの！ 龍ちゃんは今日のパーティーで沙南ちゃんと結婚します、って言ったら良いんだから！」

「ちょ、紗枝ちゃん！？」

「良いじゃない！ 今日バレンタインデーでしょ！？」

紗枝には絶対敵わない龍は、ただ、彼女の迫力に圧されていくのだった……

第十話：圧倒（後書き）

さて、今回は秀の黒さと紗枝さんの迫力のお話という感じになりました。

うん、二人とも色んな意味で最強ですからね（笑）

だけど、そんな二人の恋人である篠塚兄妹。

やっぱりすごいんだなあと思います。

まあ、啓吾兄さんは普段は尻に敷かれてる感じではありますけど（笑）

あつ、だけど啓吾兄さんが龍と違うのは恋愛に関してはヘタレにはならないことですね。

彼の恋愛は龍と秀を足して二で割った感じに大人の色香を付けることを意識しています。

そんな感じで次回は天宮家に視点は戻ります。

一体何が起こるやら……

第十一話：妹

スーパーから土屋にパトカーで送られて自宅まで戻った一行は、きちんと彼に礼を述べた。

「どうもありがとうございました！！」

「いいえ、こちらこそ。犯人逮捕に協力してくれて助かりました」

土屋も敬礼して答えると翔と末っ子組もそれに倣う。そして、翔達がトランクから大量の買物袋を出している間に女性陣達は一且自宅に入り、彼女達が作ったチョコレートの数々を土屋に差し出した。

「はい！ 淳行お兄ちゃん！」

「ありがとう。夢華ちゃんの手作りかい？」

「うん！」

「そうかい、じゃあ、大事に食べなくちゃね」

「えへへ！」

土屋が頭を撫でてやると夢華は嬉しそうにはにかんだ。本当にこの少女はとても愛らしいな、と土屋は改めて思う。

「土屋さん、これは私からです。賞味期限が早いので出来るだけ早く食べて下さいね」

「ああ、一番最初に食べるよ」

会話はあくまでも普通だが、この裏に潜む言葉を土屋はきちんと読み取っていた。もちろん、箱の中身はちゃんとしたお菓子も入っている。

そして、最後に沙南が差し出すと土屋は少々微妙な表情を浮かべた。

「うーん、沙南ちゃんからもらっても大丈夫かい？」

「えっ？ 毎年恒例の達筆義理チョコビター味ですよ？」

「ああ、だけど龍が微妙な顔するかなって」

「大丈夫よ！ 秀さんじゃないんだから！」

「そりゃそうだろうけど……」

龍も妬くところがあるんじゃないか、と土屋は思う。少なくとも今年は恋人になって初めてのバレンタインデーだ。自分の大切な彼女が他の男に渡すのはどうかというところもあるはずだろう。

ただし、沙南はまず龍が妬かないと思ってるのか、彼女らしく切り返してくれた。

「土屋さん、大丈夫よ！ 龍さんは皆に渡すことはお正月のお年玉と同じようなものだと思うてるはずだし、妬いてくれるなら妬いてくれたで嬉しいもの」

寧ろ、毎年本命チョコレートを贈りつづけて本気でももらえず、去年は紗枝以外の女医や看護師、おまけに患者や医療関係の女性達からも受け取っていたぐらいだ。妬きたいのはこちらの方である。

もちろん、それはしばらくの間、翔達のおやつに変わっていたけれど。

「でも、土屋さんもたくさん貰い過ぎて優衣さんを悲しませちゃダメよ？」

「心配いらないよ。寧ろバレンタインデーに男からもらう奴だからな……」

「えっ？」

沙南はキョトンと目を丸くし、土屋は苦笑した。彼の婚約者殿はかなりモテる上に未だに求婚されているらしい。当人はしっかり者のなのでうまくかわしているが、土屋としてはたまに笑えないようである……

「それじゃ、チョコレートどうもありがとう。パーティーは無茶しないようにね」

「極力気をつけるわ」

実に沙南らしい言葉に苦笑して、土屋はまた現場へと戻って行くのだった。

それから沙南達は欠食児童達のために急いで昼食を作り上げ、それを囲みながら本日のチョコレート獲得状況を話し合った。

「なるほど、やっぱり本来の意味で沢山のチョコレートもらったのは純君ですか」

「何で分かるんだ？ おかわり！」

紫月に茶碗を差し出しながら翔は尋ねると、ご飯をよそいながら彼女はもつともな回答をしてくれた。

「ええ、貰ってるチョコレートがラッピングにまで力を入れてるなと思って」

「ラッピングにこれだけでも中身の方が重要だと思うけどな」

「おそらく愛情たっぷりだと思いますよ？ 翔君が悲しくなるぐらいには」

「紫月、お前なあ……」

「すみません、秀さんので慣れてましたか」

「オイ！」

そうつつこみながらも、きちんとご飯を受け取っているあたりはさすがである。

しかし、翔もちゃんと本命チョコを受け取っているのは確かなんだろう。カードや手紙がついていたものがいくつかあったのだし。

「だけど、秀お兄ちゃんっていっぱいもらってるんでしょ？」

「うん。通常なら一年分の保存食になるんだって」

「ひゃあゝ！」

夢華は一体どれだけの量なんだろうと声を上げる。ただし、それだけの量が一年もたないというのもさすがは天宮家なのだが……

ただし、これを柳が聞いたらどんな反応をするんだろうか、と沙南と高校生組は同時に思う。妬いたら妬いたで秀は喜びそうだけれど……

その時、リビングの扉が開いて噂の主達がチョコレートを抱えて入ってきた。

「ただいま帰りました」

「あっ！ おかえりなさい！」

「おかえりなさい！ 秀お兄ちゃん、柳お姉ちゃん！」

「ただいま。いい子にしてた？」

「うん！」

夢華は柳に無邪気な笑顔を向けると、柳もニッコリ微笑み返す。そして、秀はトザツとチョコレート山の山に新たなものを置いたあと、コートをソファアールの上においた。

そして、紫月は早目に昼食を切り上げると、食べ終えた皿をまとめて流し台で手を洗う秀の元へいく。

「お帰りなさい、秀さん」

「ただいま。紫月ちゃん、例の情報は送られて来てますか？」

「はい、目を通していただけますか？」

「分かりました。それと今のうちに紫月ちゃん達の力作をいただきますか？ 可愛い妹達のチョコレートは今日いただきたいですし」

「はい、用意します。飲み物はコーヒーで良いですか？」

「ええ、お願いしますね」

まるで本当に血が繋がってるんじゃないかというほどの二人は仲が良い。ただ、一見優雅なイメージは与えはしているものの、この二人がやろうとしていることはテロリストすら真っ青にしてしまうようなことである。

事実、今までこの一行に襲い掛かってきて本気で地獄を見せた敵の数は龍より多いことは言うまでもない。

「だけど、姉さんのチョコレートはもう食べられたんですか？」

「いえ、それは夜に柳さんと一緒にいただ」

「秀さんっ！！」

柳は真っ赤になって叫んだ！　そういうことかと紫月はあまり気

にした様子はないが、毎回こういったことに振り回される姉が不敏でならない。ただ、それと一緒に思うこともある。

「秀さんも兄さんと一緒に本当に欲しいものは最後に食べるタイプなんですね」

「啓吾さんですか？ 何だか嫌な感じですね」

「ですが、一番こういう時に性質が悪そうなのは龍さんかと」

「コラ、紗枝さんに影響されないで下さい？ 可愛い妹でいて欲しいんですから」

「はい、すみません」

紫月は注意を受けてクスリと笑う。一体何の話なんだ、とそれを聞いていた者達は首を傾げるが、啓吾と紗枝がいたらコクコクと頷いていたことだろう。簡単に言えば男性陣の恋愛タイプの話だ。

それから約二十分後、パソコンの画面とにらめっこしていた秀は、紫月お手製のチョコレートクッキーとコーヒーを堪能しながら一つの情報に注目した。

「……なるほど、また面白いのが出てきましたね」

「はい、どうされますか？」

「もちろん叩きますよ。でも、こんなルートで麻薬を密輸していたなんて普通は気付きそうなものですけどね」

「それは私も思いました。お酒を造ってる会社に迷惑なことこの上ないですね」

「あと、洋酒好きにもしょうか」

そこで玄関のチャイムが鳴り響いた。

第十一話：妹（後書き）

さて、今回もいろいろな会話がございましたが、やはりバレンタインデー、皆さん各々御事情がおりな様子です。

土屋さんの婚約者さんなんて、バレンタインデーに男性からチョコレートをもらってるという状況。

女刑事さんなんて、やっぱりモテ要素が多いんでしょうね。

そして、天宮兄弟はもう三人ともかなりもらってるみたいで……

だけど篠塚姉妹はあんまり妬いてないかも。

というより、それぞれのパートナーが妬かないほどの言動をやっているのけてますから必要ないのかな？

まあ、柳ちゃんなんて妬いたらどうなることやら……

だけど、紫月ちゃんがすっかり秀の妹化してる……

啓吾兄さんより信頼してるかも……

シスコンが間違いなく泣いちゃうぞ（笑）

第十二話…作戦会議

玄関のチャイムが鳴り響き沙南はリビングから出て扉を開けると、賑やかな来客者達がたくさんのお土産をもって天宮家を訪れた。とはいえども、八割方が酒ではあるのだけれど……

「邪魔するぞー！！」

「お邪魔します」

「お邪魔致します」

森、宮岡、桜姫の三人はそれぞれ個性的な挨拶を告げる。それに沙南は満面の笑顔で彼等を迎え入れた。

「皆さんいらっしやい！」

「オウ！ お姫様、哀れな将軍に愛の手を」

沙南に抱き着こうとした森にいち早く宮岡は反応し、頭を押さえ床に沈めた。花びらが数枚散っているのは、間違いなく桜姫が森を刻もうとしたからである。

「沙南ちゃん、馬鹿にやることはないぞ」

「全くだす。沙南様に触ようなどと無礼な。沙南様、つまらないものですが」

「あっ！ オレンジレアチーズケーキ!?」

「はい、お口に合えばよろしいのですけれど」

「ありがとうございます!!」

普段、とても穏やかな桜姫だが、龍や沙南に対する無礼を働くものには本当に容赦ない。おまけに辛口もいつもの二割増しにはなる。

ただ、潰れた森に構わず、会話を繰り広げる方がさらに堪えてしま
うのだけれど……

それに気付いたのか、ただ沈む森が不敏になったのか、沙南は救
済の言葉を告げた。

「大丈夫ですよ。ちゃんと皆の用意してるから」

「義理でも有り難い!!」

「何だ、もう復活したのか」

「良〜!!」

「沙南様、森將軍にそんな御慈悲を掛けられなくとも……」

「どれだけ鬼畜なんだよ、桜姫!」

「性分なものですから」

「肯定すんな!」

そんな賑やかなやり取りがなされている中、リビングからひよっ
こりと夢華が姿を現し来客者達の表情は穏やかになる。

「あっ! 森お兄ちゃん!」

「お嬢ちゃん、久しぶりだな!」

「うん! はい、チョコレート!」

満面の笑顔で差し出されたチョコレートに森は数秒止まった後、
それは滝のような涙をドバーツと流してこの幸せに感謝した。

「生きてて良かった……!」

そして、受け取ろうとした瞬間、今度は森の立つ場所から闇が発
生する。思わずそこから飛びのくと、玄関が開かれて桜姫は一礼し、
夢華はパアツと表情を輝かせた。

「彩帆お姉ちゃん！」

「ああ、夢華！ 久しぶりじゃ！」

森を押しのけて闇の女帝はぎゅうつと夢華を抱きしめた。本日は艶めかしいチャイナドレスの上に、ブランドのブラックコートを羽織っているのは外出のためであろう。もちろん、パーティーではドレスアップするのだろうけど。

そして、彼女はかなり上機嫌になり、沙南にきちんと挨拶した。もちろん、今夜は天宮家に泊まる気満々である。

「折原沙南、今日は世話になるぞ」

「いえ、こちらこそ……」

「夢華、今日はバレンタインデーじゃ、妾が腕によりをかけてチョコレートを作ってきたぞ」

「本当!？」

「ああ、おやつに純と食べよう」

「わーい!!」

夢華は無邪気に喜ぶが、森は闇の女帝の性格から考えてもっともな質問を投げ掛けた。

「女王様が料理なんてするのか？」

「闇に沈みたいのか、菅原森」

「いや、さっき沈めようとしたよな……」

周りのメンバーもコクリと頷く。宮岡と桜姫は沈めておけば平和だったのに……、と心の中で思っているが……

そして、闇の女帝は夢華を一度解放すると、腰に両手を当てて女帝の威厳をたっぷり醸し出しながら森に告げた。

「愚か者が。料理も出来ないわけがなかろう！ 夢華と純にまずいものなど与えられると思うか？」

「いや、だってよ、想像つかないもんな。エプロン付けた女王様……」

それは言ってるかもしれない。闇の女帝にフリル付きの白エプロンはあまりイメージにはない。もちろん、彼女もフリル付きの白エプロンは遠慮したいところだろうが……

しかし、そこで爆弾を落とすのが最強の末っ子である。

「でも、エプロン付けた彩帆お姉ちゃんってすごく可愛いよ？」

夢華が零した言葉に数秒間その場が停止したが、可愛いと言われた闇の女帝はみるみるうちに顔を真っ赤にして一行から顔を背けた。

「な、何を言う！ 夢華の方が愛らしいに決まっておろう！」

壁際でしゃがみ込み、そう発している闇の女帝は普段とのギャップがあまりにもあり過ぎて、こちらまでどうするべきか分からなくなるが、彼女の側近が大量の荷物を運び込んできて沙南は我に返った。

「えっと……、とりあえず中へどうぞ」

「お邪魔致します……」

そして、ようやく一行はリビングに通されたのである。

それからリビングに通された来客者達は、本日のパーティーのこ
とや鷹の組織についての情報をまとめ、さらに龍達がパーティー会
場に来れることになったことを桜姫から聞いて沙南達は驚いた。

「えっ!? 龍さん達も来れるの!?!」

「はい。ただ、主と啓吾様は医院長の付き添いという形ではござい
ますが」

「何だ、天宮龍は未だに医院長になってないのか」

「ええ、主がその気になればいつでもこちらはいろんな手立てがご
ざいますのに……」

桜姫は非常に残念そうな溜息をついた。それに闇の女帝が彼女の
権力を使うかと申し出れば、沙南は必死の形相でそれを止めた。さ
すがに裏社会の女帝の権力はまずい。

そして、パソコンで一仕事終えた秀は全員に促した。

「さて、こんなものですかね。皆、今宵の作戦会議を始めますよ」

待ってました、とばかりに一行の表情は輝く。ただし、本日はこ
の暴走しがちな一行を止めてくれる悪の総大将はこの場にいない。
つまり、言いたい放題とやりたい放題に拍車しか掛からないとい
うことだ。

「まず、今回の敵についてですが、奴らは鷹という名の組織であり、
主に麻薬で荒稼ぎしている所謂クズですね」

「秀兄貴、いきなり自分の主観いれるなよ……」

「ああ、すみません。今日のデートを邪魔されて少し苛立ってたの

で」

既に参謀がこの調子である。ただ、そこだけ翔がつっこんだのは珍しく正しい忠告だったのかもしれない。

それから秀はコーヒーを一口飲み、心を落ち着かせて話を続けた。

「そして昨晚、篠塚家を急襲したことで柳さんを柳泉と呼んだことから、相手は天空記に関わっていることはもちろん、沙南ちゃんとの関わりもあるのではないかと推測されました」

「私と？」

どうということ、と沙南は首を傾げると秀はパソコンの画面を見せながら丁寧に説明していく。

「はい。実際に鷹の幹部級の家系図を辿ってみました。するとかなりの歴史を持っていてね、彼等は鷹族の末裔だろうと判断されました。そして、そのバカ王子がやはり沙南姫様を狙っていたようで」

バカ、と言い切ってる辺りからまさか……、と大人達はなにか嫌な予感を覚えたが、沙南は二百代前の記憶を辿っても心当たりがないうらしく唸った。

「うーん、そんな記憶はないんだけどな」

「そうでしょうね、演義では兄さんと組み手を行ったときに一撃で倒された哀れなものと書かれてたぐらいです。当然、沙南姫様と面識など持てなかったでしょう」

そう秀は答えるが、森達や桜姫は何かを思い出した気がして眉を

顰めた。沙南姫と面識を持てなかったように仕組んだのは、間違
いなく目の前にいる参謀の仕業だったような……

ただ、紫月は別の意味で眉を顰めており、それに翔は気付いて尋
ねた。

「どうしたんだ、紫月？」

「いえ、龍さんから一撃で倒された相手に私は苦戦したんでしょう
か……」

しかも大したことのなさそうな相手とあつては、彼女が眉を顰め
てしまう顰めてしまう気持ちも分かる。

だが、そんな紫月を見て秀はニツコリ笑いそれを否定した。

「ところが紫月ちゃん、鷹族の中にもかなりの武道家がいたという
記載があるんですよ。そうでしょう、闇の女帝」

「ああ、その名を鳳凰。武帝の父が情けで鷹族の女を娶り、その名
を付けたといわれている。まあ、武帝自体は天空王の足元にも及ば
ない、大したことのない男だが、鳳凰はかなりの腕前だったようだ」

「では、私が対峙したのは……」

「頬に傷があったというなら鳳凰の可能性がある」

それに紫月は少しだけ納得がいった。それだけの武道家なら自分
の未熟さも受け入れられるもの。ただ、翔と末っ子組は別の視点に
気付くが……

「何か、龍兄貴ってどこで戦っても最強だよな」

「うん、龍兄さんってすごいよね」

「龍お兄ちゃんって負けたことないのかなあ？」

別の意味ではいろんなところで惨敗している気が……、と一行は普段の龍の気苦勞振りからそう心の中でつつこんだ。

「ですが、紫月ちゃんが苦戦した相手が鷹にいて、おそらくその特殊部隊は鳳凰が鍛え上げた精鋭。鳳凰は精神ともに鍛えた武道家みたいですからね、油断しないでください」

「了解!!」

一行が実に言い返事を返せば秀はもう充分だろうと話題を切り替えた。

「では、あとは麻薬に関わらなければ特に問題ないでしょうから、今回の本題に入りますよ」

「えっ？」

これが本題ではなかったのかと沙南は思うが、あくまでも彼等は世界最悪のテロリストであると同時に、龍と沙南のことを心から思う一行である。

「兄さんを何としてでも沙南ちゃんと最高の一夜を過ごせるように、皆さん、死ぬ気で働いてくださいね」

「オウッ!!!」

先程よりさらに良い返事を一行は返すのだった……

第十二話：作戦会議（後書き）

さあ、次回からお話が動いて来そうな感じです。

ただ、この一行の作戦会議、龍がいないとどうも変な方向に逸れて別のところに力を入れるという……

そして、今回は鳳凰という名の武術家がちょっと厄介みたいです。おそらく龍とドンパチやるのが彼ではないかと思われ。パーティー会場を壊さないといいんだけど……

でも、一体彼が、そして鷹族がどんなつながりがあるのかはまだ物語が進むごとに明らかにしていきますので、お待ちください。

さあ、次回は龍達と合流出来るかなあ？？

第十三話…病院襲撃

一日の、というより一週間以上缶詰状態だった紗枝はようやく仕事を終えて医局に戻ると、先に啓吾が戻って来ていた。とはいえども、何度か急患の処置に当たっていて、先に解放されただけの話ではあるが。

「おつかれさん。終わったか？」

「ええ、龍ちゃんは？」

「愛の告白を受けに行ってる」

「あちゃー、明日、私休みなのに」

「コラ、からかってやんな」

気持ちは分からないこともないが、と心の中では付け加える。しかし、啓吾もその楽しさは知っているため、一言ぐらいいは突っついてやるつもりだが。

しかし、紗枝はチラリと啓吾のチョコレート山を見て疑問を投げ掛けた。

「でも、なんで啓吾は告られないわけ？」

「お前な……、彼氏にいう言葉かよ……」

「あら、彼女がいても他の人に愛を囁かれるってことはそれだけ魅力的だってことでしょ？」

こういう女なんだよなあ、と啓吾は思うが、そうゆうところも含めて惚れているのでどうしようもない。だが、このまま自分だけが惚れっぱなしというのは性に合わないなど、啓吾は行動に移った。

「紗枝」

グッと腕を引かれたかと思えば、もう片方の手が顔を上に向かせて口づけられる。紗枝は一瞬、何が起こったのか分からなくなつたが、見る見るうちに頬は赤く染まっていき唇が離れれば動揺しながらも抗議した。

「なっ……！　ここ病院……！」

「もう仕事は終わった」

再度唇は塞がれる。誰か来たらどうするのかと思うが、間違ひなく啓吾はサラリと流すだろう。それどころか後頭部に手を差し入れられて、さらに深く口づけられる。

そして、ようやく解放されればクタリと紗枝は啓吾の胸の中に倒れ込んだ。

「俺はお前にだけ愛を囁かれてれば充分。というより、行動で示して欲しいけどな」

紗枝は視線だけ上を向けば、ニヤリと意地悪な笑みを浮かべた啓吾が視界に入つて来て非常に悔しくなるが、いきなり机の上に押し倒された。しかもその顔は明らかに悪巧みを実行する気満々で……！

「ばっ……！」

「まだ外来が残ってるだろうから、当分誰も戻って来ないだろ」

「龍ちゃんが……！！」

「愛の告白を断るのに龍なら二十分は掛かる」

「啓……！！」

「いいから大人しくしてろ」

「ちょ……!!」

「絶対、抵抗するなよ」

まるで射抜くかのような目に紗枝の鼓動はトクンと音を立て、彼女はスッと目を閉じて大人しくなった。抗う気を一気に無くしてしまったのだ。

それに満足して、啓吾は紗枝の首筋に顔を埋めたその瞬間、音もなく放たれた弾丸が啓吾の周りで止まる!

「なっ……!!」

「そこかっ!!」

「うわぁ……!!」

屋根が抜け落ち、さらに物影に潜んでいた者達が啓吾の重力で一斉に姿を現した! その数は十数人というところだが、啓吾は余裕たっぷりに言っただけ。

「おいおい、男女の情事を一体何人で覗き見するつもりだったんだ?」

しかし、紗枝にとっては、あのまま仕掛けてこなかったらどうするつもりだったのかと心の中でつつこむ方が先だった。

抵抗するな、と啓吾が言ったのも、半分自分の欲望を含んでいた気がするのはいくらも気の性ではないだろう。

「啓星……! 貴様……!!」

「おっ、久しぶりにその名で呼ばれたな。ってことは、お前達は鷹の一味ってわけだろうが、俺の力を知らなかったのか?」

「知るか！ 死ねえ！！」

再度発砲されるが、銃弾は啓吾の前で止まりふわふわと浮かぶ。それを見た鷹の一味は信じられないと驚愕の表情を浮かべた。

「どうやら本気で知らないらしいな、と啓吾は彼等がただの駒だということを知り、それと同時に面倒臭そうに溜息を吐いた。

「全く、お前らの組織は人を二百代前の名前で呼ぶように命じられてんのかよ」

「なっ……！！」

そう啓吾が告げたあと、鷹の一味は重力の糸に見放されて空中浮遊を始めた。しかし、それでも何とか啓吾に攻撃を仕掛けようとしてるのは訓練を積んできた意地というところなのだろう。もちろん、悪足掻きに他ならないが。

「さて、とりあえず龍が戻って来るまでに片付けさせてもらおうぞ。お前達がここに侵入したことがばれたら、龍がお前らを半殺しにして余計な急患が増えて、おまけに折角の紗枝との夜がなくなるからな」

「それってシャンパンだけの話よね？」

「まさか。全部貰う！」

「うわああああ！！！！」

それから約二分後、いくつかのチョコレートを持って戻ってきた龍はキョトンとした表情を浮かべた。

「な、なんだ！？」

「オウ、おかえり」

「お疲れ様、龍ちゃん」

啓吾は窓を閉めながら、紗枝は箒とちりとりを持って龍を迎えた。

「おい啓吾、これは……」

「もう片付いたから気にすんな」

「いや、しかし……」

「屋根はうちで直すように頼んだから気にしないでいいわよ」

二人とも何故かいつもより爽やかな笑顔を浮かべている。それも不自然なぐらいにだ。おそらく何者かが侵入したということは分かるのだが、何かを隠してるような気がする。

「啓吾、何か隠してないか？」

「いや、全く」

「でも侵入者がいたんだろ？」

屋根が壊れてるのだ、そればかりはごまかせないので啓吾は認めた。

「まあな。だが、光速で遠くまでぶっ飛ばしたからもう来ないだろ」
「ならいいが……」

それでも釈然としないところがある。しかし、啓吾を普段から信頼しているため、龍は帰り支度を始めるのだった。

そして、啓吾と紗枝は顔を見合わせるとホッと一つ溜息を吐き出す。二人の手に隠されていたのは銃弾、さらに柵やチョコレートの中で隠しているが、壁についた銃弾の跡……

「啓吾、隠し通せるかしら……」

「銃弾は粉碎出来るが壁はな……」

「でもね……」

「ああ、病院で発砲なんて知ったらさっきの奴らをもう一回しばきに行くからな……」

とりあえず紗枝は手に持っていた銃弾を啓吾に渡し、啓吾はそれを重力で粉碎して塵へと変えた。あとはさっさと龍を病院の外に出してしまえば何とかなる。

二人も掃除道具を片付けて白衣をロッカーにしまい、ようやく帰宅の準備が整った。チョコレートはさすがに置いて帰ることにした。

それから龍と紗枝は約一週間ぶりに病院の外に出て、久しぶりに夕暮れ時の風の冷たさに触れて開放感を覚える。しかし、話すことは先程の襲撃についてだが。

「だが、何でいきなり襲撃してきたんだ？」

龍のもっともな質問に啓吾は考えるが、心当たりが全くといっていいほどない。むしろ、自分の力すら知らなかった雑魚を鷹は送り込んで来るほど愚かなのだろうか……

「さあな。とりあえず、パーティー会場に行けば何か出てくるだろう。ああ、それと龍、シャンパンのモエには手を出すなよ」

「モエに？」

「ああ。まっ、詳しくは次男坊と桜姫が説明してくれそうだけどな」
「あら？」

三人の前に高級外車が三台並び、運転手達が下りてきてドアを開ける。そして、その中にいた人物達を見た瞬間、龍は折角感じた開放感が一気に疲労感へと変わった。

そう、彼は今からこのテロリスト達をまとめていかなければならないのである。

「龍兄貴達！ お疲れ様！」

「ご苦労様でした」

「お疲れ様、皆さん」

「兄さん、早く乗ってください。女性陣達の支度もありますし」

高校生組と柳、そして秀から告げられた言葉は極普通なのだが、龍は本気で逃げ出したくなった。しかし、もう逃げられないことは確定しているのだ。

そんな龍を見て啓吾と紗枝は苦笑したが、時間は止まってはくれない。

「龍、俺と紗枝はこっちに乗るからお前は後ろの車に乗れ」

「分かった……」

そして、ここからテロリスト達の作戦は開始する。啓吾は助手席に乗り込むと運転手に話し掛けた。

「今日は運転手の仕事もする気か、桜姫」

「ええ、主と沙南様を二人きりにするためでございますから」

深く被っていた帽子のつばを上げて桜姫は微笑む。それにしても、

こういった恰好まで似合ってしまうのはさすが美女というところか。

そして、今この車に乗っていない末っ子組は、おそらく前の高級外車で闇の女帝に愛情を注がれていることだろう。

当然、森と宮岡は運転席と助手席においやられているのだろうが……

「とりあえず次男坊、今まで入ってきてる情報を全て教えろ」
「はい」

秀は微笑を浮かべて答える。

日本一騒がしいバレンタインデーの夜は幕を開ける……

第十三話..病院襲撃（後書き）

さあ、いよいよ次回からパーティー会場へ。

テロリスト御一行様はかなり暴れてくれそうです。

すでに龍が疲労してるのは……

うん、君はかなり忙しくなるぞ（笑）

そして、いきなり襲撃された病院。

にしても啓吾兄さん、いくら仕事が終わったからって本当……

まあ、敵をあぶり出すためにやったことですけど……

だけど啓吾兄さんと紗枝さん、本当にいいコンビです。

襲撃の証拠隠滅が手早い（笑）

そりゃ、病院で発砲なんて龍にばれたらまずいなんてものではないのでね。

さて、車の中で二人きりにされた龍と沙南ちゃん。

二人のバレンタインデーがどんなことになるのかも楽しみにしててくださいね☆

第十四話：車内

車に乗り込んだ途端にやられた、と思った。てっきり末っ子組あたりでも乗り込んでいるのかと思ったが、乗っていたのは沙南だけだ。しかし、隣に腰掛ければいいのに対面に座るあたりは恋人になった今でも変わらない。

ただ、それでも勤務明けに沙南の顔を見てホッとしてしまうのだけれど。

「お疲れ様、龍さん」

「ああ」

「ゴメンね、今日はコーヒー煎れてあげられないけど」

「ああ、残念だけどまだ休んでる場合じゃなさそうだからな」

はあ、と深い溜息を吐き出すのはこれから起こるであろう騒動が容易に想像できるからで……

しかし、それだけではなくいつもより眉間のシワが二割増しになっていることに沙南は気付いた。

「龍さん、怒ってる？」

「別の意味でね。あいつらなりに気を遣ってくれてはいるんだろうけど……」

龍はチラリと窓際に視線を向ける。どうも二人きりにされたことに対して龍は不機嫌らしい。ただ、沙南と一緒にいたくないという訳ではないのだが。

「私は嬉しいんだけどな……」

ちよつと朱くなって告げてくれる表情に龍はドキツとした。決して視線は交わらないがその分だけ恥ずかしさは募っていく。

しかし、これだけ可愛らしいことを言われてしまえば、何か気の利いた言葉ぐらい返せばいいのだが、やはり龍は龍である。

「……そうだな。本来なら夜に電話出来るかどうかでところだつたし、感謝しようか」

至って当たり障りのない言葉だが、それでも沙南は笑顔になる。秀のようにストレート過ぎる言葉なんて百分の一の確率でしか告げてくれないが、龍の気持ちは充分過ぎるほど伝わって来るのだ。

逆にたまに囁かれる愛の言葉なんて心臓に悪すぎる。

「あつ、だけどチョコレートは家に置いてきたの。絶対暴れると思つたから！」

そう告げた瞬間に甘い空気は完全に払拭された。龍はガツクリとうなだれ、せっかく穏やかな気持ちになっていたものが倍になって気苦労へと変わった。

「龍さん？」

「沙南ちゃん……、何でうちの人間達はそう人が集まるようなところで暴れたがるんだ？」

そういえばそんな感じが……、と沙南は過去に自分達が暴れた場所を思い出してみる。

自衛隊演習場、ホテル、研究所に市街地、遊園地を破壊したこともあったな、とまで思い出せば、龍の沈み方はもはや言葉に出来ないものになった。

「龍さん、大丈夫よ！ 私達は強いから危険なことはないだろうし」

「あいつら自体が一番の悩みなんだが……」

「うーん、でもまさかパーティー会場そのものを大破させたり……、出来るわよね？」

「沙南ちゃん、頼むから否定してくれないか……」

したいところではあるのだが、どう考えてもそれは不可能だなと思いつながら、沙南は何とか龍を慰めるのだった。

そんな二人の会話を前を走る車の中で啓吾達は盗聴していたのだが、少し盛り上がったかと思えば、何故かおかしな方向に進む二人に微妙な表情を浮かべさせられた。

「おい、あの二人は何であの密室で愛の一言も出てこないんだよ……」

「運転手がいるからじゃないですか？」

「いえ、紫月ちゃん、あの車の運転席と後部座席は仕切りで完全にシャットアウトしてますから、普通にいちやつけるはずなんです……」

つまり龍だから……、という結論に達してしまう。決めるところは誰よりもかっこよく決めるというのに、何故か恋愛ごとになると誰よりもコケる率が高いのだ。

しかし、今回はそうではなかった。盗聴器から有りもしない問い

掛けをされたのである。

『秀、聞こえるか?』

ギクツ!と全員の表情が変わる。そう、彼等の悪巧みに龍は最初から気付いていたのである。どうしようか、と互いに顔を見合わせるが、悪の総大将の威圧感が全員に襲い掛かってきた。

『聞こえてるならちゃんと話せ。じゃなければ、今すぐそっちの車を大破させるぞ』

本気だと思った瞬間、秀は盗聴器を通信機のモードに変更した。これ以上無礼な行いを重ねれば、空そのものを落としかねないのだから……

ただ、それでも平静な声で龍と会話出来るのは秀ならではの。

「バレてました?」

『お前達がやりそうなことだからな。それより、鷹について詳しく話せ』

龍の声自体は落ち着いているが、後から間違はなく説教の一つや二つ、げんこつの一、二撃は覚悟だな、と思った。

そして、秀は今回のことを順に追っていくため、まずは龍に意見を求める。

「はい、まずは天空記に描かれてた鷹族についてですが、兄さんのご意見は?」

『鷹族といえば暗愚な主と有能な武道家達が印象的だな。特に鳳凰

は幾度か手合わせをしたことはあるが、かなりの使い手だった記憶がある』

それに啓吾はきよとした表情を浮かべさせられて龍に尋ねた。

「なんだ、そんな記憶残ってるのか？」

『というより啓吾、お前が残ってない方が不思議なんだけどな』

はて、と啓吾は首を傾げるが、啓星だった頃の彼の行いから考えればそれも仕方ない気もする。

なんせ彼は基本、面倒な人間とは関わらない、興味のない人間は眼中に入らない、敵は即行で片付けるといった従者だったのだから……

それと似たタイプであった秀もあまり記憶がなく龍に尋ねた。

「どういった記憶なんです？」

『秀、太陽宮でよく手合わせをしていた時、俺達以外に相手を一撃で倒していた奴がいただろう？』

自分達以外に相手をあっさり倒していたもの……、一行は腕を組むなり顎肘を付くなりと考えてると、全員一斉にある男の顔を思い出す！

「あっ！」

「えっ！？ まさか……！！！」

「おいおい……、そういうオチかよ……」

『ああ、光帝の懐刀と言われた親衛隊隊長、それが鳳凰だ』

桜姫はコクリと頷いた。どうやら彼女は覚えていたらしい。とい

うより、男性陣に至っては覚えてない方がおかしいぐらいだ。ただ、そんな名前だったのか……、と心の中で呟くが……

「でも、ちょっと待ってください、だったら何で僕達を狙うんですか？ 彼はこちら側の味方だったはずです」

『そのとおり、二百代前は光帝が主上に殺される前まで戦い続けた武道家だ。だが、現代で必ずしも味方として生まれたという証拠はない』

普通、誰もが前世の記憶があって、全く同じように生まれて来るということ自体証明出来るわけがないのだ。自分達がたまたまそうだけだったという結果で……

「じゃあ、現代ではそんな厄介な奴の相手をしなければならぬ」と『ああ、あくまでも推測の域ではあるけどな。ただ、敵が鷹族である以上、かなりの武道集団には違いない。それも紫月ちゃんと闘った相手が、鳳凰とは限らないほどの手練だった可能性も捨て切れない』

それは紫月にとっては衝撃としか言いようがなかった。あれだけ自分が押されたというのに、あの男が鳳凰ではないなどと考えたくもない。あのレベルが多数いるとなると、自分の身すら守れなくなりそうで……

『天宮龍、どういうことだ？』

聞こえてきた闇の女帝の声に龍は眉を顰めた。どうやら彼女が乗る車にもこちらの会話は筒抜けだった訳である。

しかし、彼等に説教するのは後にして、龍は彼の推測を伝えた。

『鳳凰の強さは紫月ちゃん以上。それに柳ちゃんが乱入したぐらいで退却する事にも疑問を感じる』

「……どういふことですか？」

若干、紫月が動揺していることを啓吾はその声で感じ取った。彼女が戦って押されることなど滅多にない性でもあるだろう。しかし、龍は出来るだけの確に答える。

『鳳凰の武道の腕は俺と互角。それに鷹族なんだ、風使いの紫月ちゃんとの相性を考えても鳳凰の方が明らかに強い』

「でしたら……」

『だからおかしいんだ。もし、現代で鳳凰が鷹族の暗愚な主の下にっているなら、狙いはおそらくこちらの女性陣。』

ただ、連れて来いというなら、沙南ちゃんは闇の女帝の側近の偽者が来た時点で何らかのアクションがあったはず』

『あっ！』

沙南はもつともだと思った。あの時、自分の周りには翔達すらいなくて掠おうと思えば掠えたはずだ。

しかし、相手は自分と会話だけを交わしてすぐに去っていった。

『しかし、相手は襲撃はしても必ず退却している。まるでこちらを誘ってるみたいにな』

「じゃあ一体、何故こちらを誘う必要があるのでしょうか……」

『それは分からないが、今回の敵が鷹族と分かっている以上、確実に翔と紫月ちゃんは苦戦しやすい相手ではある。相手は風を制した戦闘集団だ、油断しているとやられるぞ』

それは間違いなく翔に対しての警告。しかし、天下無敵の三男坊

は面白そうに勝気な笑みを浮かべた。

「おもしれえ、それぐらいのハンデぐらいないとケンカしても楽しくねえもんな！」

「こてんぱんにやられるのに、どうしてそんなに楽しそうなんですか？」

「んだと、秀兄貴！」

「三男坊、怪我したら治療してやるから派手にやられていいぞ？」

「ひでえよ、啓吾さん！」

車内は一気に騒がしくなる。どうしていつもこうなんだと、龍は聞こえて来る音声にはそれは深い溜息を吐くが目の前に座っている恋人に今のうちにと告げておくことにする。

窓際の盗聴器を壊して、念のために辺りもきちんと確認することはもちろん忘れない。

「沙南ちゃん」

「何？」

「……必ず守るから、今日の夜は一緒に過ごそう」

「え、えっと……！」

「そういうことだ」

反則だ、沙南は真っ赤になってそう思いながらもついにパーティー会場にたどり着く……

第十四話：車内（後書き）

やっぱり龍がいるとちゃんと作戦会議になるんだなあ。

ただ、溜息の数はかなりのものですが……

さて、まずは二百代前の沙南姫様のお父さんであり、太陽の管理者であつた光帝。

どうやらその親衛隊の隊長が鳳凰であり、彼の下にも鷹族の武道集団がいた模様。

龍と互角の武道家、これはバトルが大変そうです。

そして、風の力を使う翔君や紫月ちゃんには、少々相性の悪い相手みたいですが、やっぱり三男坊はケンカ好き！

でも中ボスと腹黒参謀も相変わらず（笑）

だけど龍が珍しく彼らしくない愛の言葉を……！

そうだね、バレンタインデーだもん、恋人と夜を過ごしたいよね！

でも、君の試練はまだこれからだぞ（笑）

ガンバレ、悪の総大将！！

第十五話：嵐の前もやはり嵐

ホテルに入った途端に囲まれたのは、一応、菅原財閥の御曹司である森ではなく、悪の総大将だった。

しかも囲まれながらシャツがはだける、いわばサービスショットに女性スタッフ達の黄色い声が響き渡る羽目になる。それを啓吾や秀達は腹筋を総動員させられるほど、笑いを堪えるのに苦しんでいた訳だが……

「良、今の写真に撮ったか？」

「ああ、マダム達に売り付けたら軽く万代はいくかもね」

「お二人ともお止め下さい。それに主なんですから十万代には乗ります」

つつこむところはそこなんだろうか、と末っ子組は首を傾げるが、闇の女帝もそのビジネスには加わると言い出したところに悪の総大将は彼等を威圧してその話は消えた。

それから何とか女性スタッフ達から抜け出して、龍はいきなりドツとした疲労感に襲われた。

「全く、あいつらは……！！」

「ほら、龍ちゃん、さっさと男前になってらっしゃい！ それに今日のパーティーの出席者、おじ様が大好きな政財界関係者はもちろん医療、製薬の重鎮に海外からもかなりの権威が出席してるみたいよ」

ニッコリ笑って告げてくれる紗枝に龍は本気で勘弁してくれと思

う。とはいっても、有能な医者には会ってみたいとは思いう訳だが。

しかし、現実を考えればとても呑気に会話をしている場合じゃないと龍は脱力した。

「おまけに犯罪組織に警察だもんな……」

「あら、素敵なセレブも多いわよ？ 表向きは製薬会社の五十周年記念だけど、バレンタインデーの合コン会場としても利用されてる訳だし」

「紗枝ちゃんに必要なのかい？」

「啓吾次第かな」

そんな軽口を叩き合っとうやく龍は笑った。彼女はこの状況を楽しんではいても、さりげなくフォローしてくれるつもりはあるらしい。

また後でね、と手をヒラヒラと振って一行は着替えの為に男女で分かれた。

それから約十数分後、そこまで力を入れる必要がないだろうと、スタイリスト達から失礼にならない程度に着飾られたというより自分達で着替えた森と宮岡は、女性達の熱視線を浴びている者達を呆然と見ていた……

「……良、いい男が三人もいるってどうなんだよ」

「将来性抜群な二人もいるけどな」

ホテルのスタイリスト達が頬を赤く染めながら作業を進めていることに森と宮岡はそれは深い溜息を吐いた。

もともと美形の部類に入る天宮四兄弟と啓吾は、下手をすればトップモデルすら足元にも及ばないんじゃないかと思わせる。

これは間違いなく、パーティー会場では黄色い声とチョコレートが飛び交うんだろうな、と二人は思った。

だが、面倒だからこれ以上はいいと抜け出した啓吾は、せっかく着飾られたというのに早くも上着を脱いで細いネクタイを緩めた。それすらも格好いいのは男から見ても羨ましいところだ。

そして、少し離れた場所に設置してあるソファア―に腰掛けて啓吾は一服を決め込んでいると、将来性抜群の少年達が目を丸くして啓吾を見つめる。

「どうした、年少組」

「うーん、啓吾さんらしくない？」

「うん、普段と違うからかな？」

病院にいるときは白衣かオペ着、家にいてもラフな格好しかしてないのだから、確かにタキシードは自分のイメージじゃないよな、と啓吾は苦笑する。

ただ、年少組二人も似合ってはいるが、少し窮屈な感じがあってらしくはないのかもしれない。

「そりゃな、俺もこんな固っ苦しいのは嫌いだよ。だが、さすがにこんな所で白衣って訳にもいかねえだろ」

「……白衣もあんまりイメージが」

「絞めるぞ、三男坊」

刺すような視線とタバコを灰皿に押し潰す動作が一緒になり、翔は一步後退した。さすがは龍の親友であり、秀と張り合える男である。

「それよかお前等、今夜は絶対紫月と夢華から離れんなよ？ それに怪我させたらどうなるか分かってんだろうな、三男坊」
「俺限定!？」

それは当然と言わんばかりに啓吾はニヤリと笑った。どれだけ大切な妹をさらっていく天宮家の弟とはいえども、さすがに純は殴れないらしい。

おそらく、末っ子というイメージが強い性で、どこか夢華と同じ感覚がある性だろうと啓吾は思っている。でも、シスコンはどうにもなりそうにはないけれど……

しかし、そんな優しさなんて一生持てないどころか、今すぐたばつてくれと思う腹黒はニツコリ笑って答えた。

「心配しないで下さい、啓吾さん。柳さんとは片時も離れたりなんてしませんから」

ブランドのスーツを霞ませる美青年は本当に存在する。純はキラキラした目で秀を見つめるが、翔は絶対会場に來ているカップルをケンカさせるな、といった感想を抱いた。

だが、シスコンにとってはそれどころではない。どんな格好をしようとする抹殺対象である。

「次男坊〜〜!!」

「もちろん、怪我もさせませんし。ああ、だけどここのホテルが破壊される可能性があるなら、やっぱり別の所で予約入れておいた方が……」

「今すぐくたばれ次男坊!!」

その瞬間に悪の総大将は二人を沈めた。今こんなところで本気で衝突されては、周りにいるスタイリスト達にまで危害が及ぶため、まさに瞬殺であった。

「お前等はいきなり暴れるな!!」

さすが悪の総大将……、とその場にいたものが羨望にも似た眼差しで見つめる。それはシスコンと腹黒を一撃で黙らせたからだけではない。

「どうした?」

何故か強く向けられる視線に龍は怪訝な表情になるが、その理由はすぐに弟達の口から語られる。

「龍兄さん、かっこいいー!!」

「ああ! だけどさ、やっぱり真っ白の方が良かったんじゃないかねえのか?」

「翔君、沙南ちゃんはウェディングドレスじゃないんですから今夜は我慢してください」

褒められてるんだか、これから起こるであろう面倒を予告されているのかは微妙なところだが、ブラックのイブニング姿は本当に龍の男前度をより上げているのは事実だ。

だが、ここで啓吾は彼らしくつつこんでくれる。

「龍、菅原会長が給料三ヶ月分の指輪を用意して」

「買うかぁ！！ だいたい、今日は医院長のお守りがメインだろうが！」

もっともな理由に啓吾は内心で、医院長なんて酒でも飲ませて適当に潰しておけばいいものを……、とかなり効率の良い方法を考えていたが、龍はそこまで思い至ってないらしい。

しかし、弟達はそれに目を丸くして次々と意見した。

「えっ？ 沙南ちゃんのエスコートしないの？」

「龍兄貴、それはまづいんじゃないの？」

「狼の群れの中の子羊同然ですね」

本当にグサグサと突き刺すよな、と啓吾は聞いていてそう思った。若干、龍の表情が引き攣ったことから、それなりの威力はあったらしい。

もちろん、龍も出来るならそうしたいところだが、今回お目付け役を頼んでくれた人物に対して、さすがにすっぱかすつもりにはなれなかった。

「仕方ないだろう？ 外科部長からお目付け役を頼まれてるんだ。うちの病院を麻薬に染まるような病院にしたいのか？」

「外科部長ですか……、でしたら兄さんの気持ちも分からないこともないですけど……」

目上の、しかも龍が信頼している人物に対しての頼みとなれば、

まず龍は断らないだろう。少しは理解してくれたかと思い、龍は翔と純の頭にポンと手を置いた。

「それに沙南ちゃんはお前達が守れるだろう？」

「うん！」

「ああ」

そう答えてくれた年少組に龍はホッとするが、残りのメンバーは何か考え出したらしい。

「……次男坊、敵のリスト寄越せ」

「はい、どうぞ」

「啓吾君、今日の出席者リストもいるかい？」

「ああ、それも頼む」

「良、美女リストは？」

「そっちのデータを勝手に見てろ」

やけに真剣になったかどうかは怪しいが、少なくとも啓吾と秀のオーラがかなり危険な色になっていることは確かだ。

それにいつも以上に嫌な予感を覚えて龍は尋ねた。

「何する気だ？」

「関わる前に消せばいい」

「全くですね」

「いいからまだ騒ぐな！」

きつと止められないんだろうな、と純は思うのだった。

第十五話：嵐の前もやはり嵐（後書き）

さて、今回も騒がしい御一行様。

男性陣のやり取りを書きたくなって書いたという。

話が進まないけど、ギャグは捨てられないんです……！！

だけど、龍はいきなり着いた途端になかなか悲惨な目に（笑）

女性に囲まれてシャツがはだけて、おまけにその写真がビジネスになりかけるといふ……

そりゃかっこいいですからね、悪の総大将。

でも、他の男性陣も普通にかっこいいんですよ？

ちよつと悪の総大将とか腹黒参謀とか、シスコンの中ボスが人の三ランクぐらい高いレベルのかっこよさを持つてるように書いてるだけですからね。

そんな感じで事件前にも騒いでいますが、女性陣もどうなっていることやら。

次回もお楽しみに☆

第十六話…ドレスアップ

スタイリスト達が思わずほえっつとしてしまい、全く手出し出来ないほど桜姫はプロ級のメイクを沙南に施していく。

いつも凜とした印象を持たせてくれる桜姫だが、家事に礼儀作法にメイクにと、日本一女子力が高いんじゃないかと思わせてくれるというより、彼女に出来ない事ってあるのかと首を傾げなくなるが……

しかし、どれだけ女子力が高くとも、彼女はあくまでもあの秀達と意気投合する、龍と沙南の仲をより一層発展させるためには周りがどうなろうと二人さえよければ構わないという、なかなか過激な女性には違いない。

「あの、桜姫さん？」

「はい、何でございましょう」

「まさか、そのブーケとベールまで使わないよね？」

自分が今着せられているのが真っ白なイブニングドレスなので、下手をすれば本気で花嫁の恰好をさせられかねないなと沙南は思う。

それに対して、桜姫は沙南にローズピンクの口紅を落しながら優美な笑みを浮かべる。

「ご心配には及びません。こちらは鑑賞用として手配させていただきました。もちろん、沙南様が望まれるならすぐにも御付け致しますが？」

「結構です！」

沙南は即座に断った。ただし、桜姫はちゃっかり花嫁になれるようなメイクを施しているわけなのだけれど……

その切り返しの早さに桜姫はクスクスと笑い、スタイリスト達に目で合図を送ると彼女達はたくさんの香水や装飾品を運んできた。

「沙南様、香水なのですが、少し面白いものを御付けしてもよろしいですか？」

「面白いもの？」

「はい、このようなパーティーで沙南様をエスコート出来ない主に、私からのささやかな仕返しでございますが」

桜姫のささやかかがどのレベルなのかは非常に怪しいところだが、香が少し大人っぽかったため沙南は承諾した。相手が年上な性か、こういうところぐらい背伸びしたくなるのだ。

「では、失礼致します」

「えっ？」

香水を吹き掛けられた場所に沙南は赤くなった。桜姫の言うささやかな仕返しは先を見越してるだけ性質が悪いのである。彼女は胸の谷間に付けたのだから……

「お、桜姫さん！？」

「主にはこれくらいで丁度よろしいでしょう」

「何がですか！？」

「それは」

「あっ、やっぱり言わないで！」

絶対律儀に答えてくれるので沙南は桜姫の言葉を遮った。その時、部屋の扉がノックされ、準備を終えた男性陣達が入ってくる。

「入るぞ」

「お邪魔します！」

スタイリスト達から黄色い悲鳴が飛び出した。その悲鳴の九割は秀と純の可愛らしさに当てられたものである。ただ、龍と啓吾は早くも医院長の元に行ったらしくここには来ていないが。

そして、沙南の姿を目にするなり、男性陣は歓声を上げた。

「おー！ お姫様、花嫁みたいじゃねえか！」

「沙南ちゃん可愛い！」

「本当、龍兄貴のやつおじさんなんてほっとけばいいのに」

「やっぱり今のうちに片付けておきましようかね」

それに沙南はありがとう、と礼を述べるが、このあとの会話に目を点にさせられる。やはり彼等は彼等なのだ。

「桜姫、ベールは却下されたのか？」

「はい、ですがメイクはウェディング用に仕上げておりますので、いつでも準備万端でございます」

「そうですか。まあ、まだいろいろ策は残してますし、既成事実さえ作ってしまえば問題ありません」

どうやら全員グルらしい。ここまでの団結力はまさに脱帽ものだ。しかし、森と宮岡は桜姫の格好に少々首を傾げた。ベージュのパンツスーツ姿は確かに凛々しいのだが、折角のパーティーなのだ、ドレス姿も見てみたいところだ。

「桜姫、お前もドレス着ろ」

「確かに勿体ないね」

それに桜姫はクスリと笑って答える。彼女も着れる状況なら着ただろうが、着れない理由もあった。

「私は仕事がございますから、こちらの方が楽なんです」

「だったらせめて青の装束姿にしたらどうなんだ？ あ泡脚線美さ
らけ出し……」

前髪がパサリと落ちる。そして、床に落ちる数枚の花びら。森は背中に冷汗が流れていくのを感じた。

「森將軍、お召し物を真っ赤に染めたくなければ、余計な口は慎む
ようにお勧めいたします」

「すみません……」

刺すような視線に森は素直に謝った。それに付き合ってられない
と言うように、天宮兄弟は隣室で着飾られているそれぞれのパート
ナーの元へ向かうことにする。やけに秀が弾んでいるのはいつもの
ことだ。

しかし、そんな森と桜姫のやりとりを見ながらも、ふと宮岡は装
飾品の数々と桜姫を見て動き出した。

「うーん、だけど少し花が欲しいな」

宮岡は傍にあったコサージュの数々の中から、エメラルドグリー
ンと深緑で作られたカサブランカの花を選び、それを桜姫のスーツ

に取り付けた。

「よし、これでいい」

「ありがとうございます、良將軍」

恭しく桜姫は頭を下げる。ただ、少しいい感じの雰囲気には森は悔しそうな表情を浮かべて宮岡に詰め寄った。

「良〜〜!! テメエは何ちゃっかり桜姫と親しくしてんだ!!」

「何だ、お前もコサージュ付けたいのか? 頭にでも」

「んなもん付けるか!!」

「……案外お似合いかと」

「桜姫……!!」

沙南の頭の中でも花を纏った森を連想すると、間違はなくギャグという意味ではかなり似合うかもしれないなどの感想を抱く。

まあ、実際に花をバックに背負えばどこかの異国の王子様になる次男坊殿はいるわけだけど。

その時、支度がすんだのだろう、薔薇の花を背負っても薔薇が平伏してしまう女帝がサイドスリッドの深い、銀糸とダイヤモンドで装飾されたスリムなブラッグのドレスを着こなして部屋の中に入ってきた。

「綺麗……」

「さすが……」

大人の女性、というより女帝の魅力とはこういう事なんだろうと思う。髪を上げて後れ毛が艶かしく落ちていて、うなじがとても綺麗

麗で……

だが、その中で馬鹿が取る行動は一つである。

「闇の女帝！ 今夜は俺がエスコートを！」
「煩わしい！！」

綺麗過ぎる踵落しを決めて飛びついてきた森を沈め、さらにはヒールで頭を踏み付けた。彼女がスリッドの深いドレスにした理由はこういうことかと思う。

「控えよ！ 大馬鹿者が！！」

「闇の女帝、そのまま奈落の底まで落としてやってください」
「全くですね」

「いや、妾の力を力を使うのも面倒じゃ。そのもの、銃を持ってこい」

さすがにそう命じられたスタイリストは困惑した。あくまでも森は菅原財閥の御曹司である。

だが、闇の女帝は森を踏むのをそこまでにして、桜姫を見るなり宮岡達と同意見を述べた。

「何だ、桜姫はやはりドレスではないのか」

「はい、少し調べることがございますから」

「そうか、無理はするな」

「恐れ入ります。では、そろそろ時間となりますのでまた後ほど」

そう告げて桜姫は部屋を後にした。仕事だと言っていたが、一体何があるのかと気になるところではある。沙南は椅子から立ち上

がり、宮岡に尋ねた。

「桜姫さん何かあるの？」

「うん、だけどすぐに合流出来るよ」

「そっか」

おそらく、すぐというならすぐなのだと思う。ただ、彼女が何を
するのかは気になるところだけれど……

そして、闇の女帝は沙南に近付き、ふむと頷きながら凝視した。
桜姫がメイクしてくれたというのにどこかおかしいところでもある
のかと思うが、どうやらそうではないらしい。

「折原沙南」

「はい？」

「その程度でいいと思ってるのか？」

「えっ？」

一体何のことかと思うが、闇の女帝は沙南を座らせるなりとんでもない発言をしてくれた！

「男を誘うなら徹底的にだ！ 妾の前で中途半端は許さぬ！ 宮岡、
例の媚薬を天宮秀が持つてるはずだ、取って来い！」

「かしこまりました」

「いやあ~~~~！！」

沙南の悲鳴がホテル中に響き渡るのだった……

第十六話：ドレスアップ（後書き）

沙南ちゃんはかなり大変な目に……

本当、この一行は龍と沙南のためなら何でもありかと……

でも、女の子を着飾るのはとても楽しいです。

桜姫も本当はドレスアップしたかったんですけど、お話の都合上、スーツ姿にしちゃいました。

おそらく彼女は暴れますからね（笑）

そして、闇の女帝。

「男を誘うなら徹底的に」とかっこいい発言をしてくれています。おそらく、桜姫が沙南につけた香水に氣付いたからでしょう。

だけど媚薬！？

そして秀が持っている！？

この一行本気で何やらかすつもりなんだ！？

第十七話：褒め言葉は選べし

「紫月！ お前どうしたんだよその格好！」

紫月の恰好を見たときに翔は面食らった。てっきり今回もチャイナ服だと思っていたのだが、きちんとしたオレンジのパーティードレスだったのである。とはいっても、いつでも相手を蹴れるように丈は短め、靴も踵のない銀色のパンプスだが。

だが、レースのショールまで肩に掛けて、メイクもうっすらしていると、どうも違和感を感じてならない。しかし、それは本人も同じ心境らしい。

「分かってますよ。似合わないのでしょうか？」

「いや、無茶苦茶女の子らしい！」

「えっ？」

「うん！ チャイナドレスもいいけど、たまには柳姉ちゃんみたいな格好しろよ！ 可愛いんだからさ！」

「つつ……！！！」

紫月は顔を真っ赤にした。そう満面の笑顔で言うのは、本気で心臓が保たなくなるからやめて欲しいと思う。それからくると翔に背を向けた。

「やつ、やっぱり着替えます！ これじゃ、敵を蹴るのに困りそうですし！」

「いや、充分動きやすそうだけどな……」

無自覚で人を混乱させる翔の冷静なツツコミが入るが、そのまま

でいいだろ、と告げられて渋面になりながらも紫月は承諾するのだった。

そんな高校生組のやり取りをよそに、末っ子組は癒しと可愛らしさを振り撒きながら互いを称賛していた。

「夢華ちゃん可愛い！」

「えへへ、フラワーガールだよ！」

天使降臨、そんな言葉が似合う少女は絶対秀達が指示したのだらう、フラワーガールへと変身していた。あくまでも龍と沙南に結婚の二文字を連想させる気満々である。

「純君も凄くかっこいいよ！」

「ありがとう。はい」

「えっ？」

差し出された腕に夢華はキョトンとした表情を浮かべるが、純はふんわり笑って答えた。

「エスコート。兄さん達みたいに出来るといいんだけど」

思わずキュンとした。そして、それはパアツと弾けんばかりの笑顔に変わって、夢華はギュッと純の腕に飛びついた。

「ありがとう！ 純君大好き！」

「僕も夢華ちゃんが大好きだよ」

大人達がいたら、これほど微笑ましい告白合戦があるのかと涙すら浮かべていたかもしれないが、当然のことながら、この二人の間

にあるのは恋愛というより愛情、もしくは大好きだから一緒にいるという感情から成り立つ表現である。

ただ、この場にいたスタイリスト達は、あまりの微笑ましさに悶え苦しんでいたことは言うまでもない……

一方、別室では柳専用の化粧室を予約していた秀が、最後の仕上げにと今日プレゼントしたシルバーネックレスを付けていた。

「これでよし」

「ありがとうございます、秀さん」

昼間にプレゼントされた薄桃色のワンピース型のドレスと靴を身につけて、プロの手でメイクを施された柳は本当に可憐で、繊細な美しさを放ってくれる。

それを言葉に出すのは秀でも難しいが、彼は本能のままに感想を述べることは忘れない。香水を手にとって、それをそっと耳たぶに付けながら彼は述べた。

「ですが、やっぱり少し不満もありますね」

「えっ？」

「着飾った君を堪能出来るのは嬉しいんですけど、狼共の目に晒したくはない気持ちもあるんですよ」

とんでもない独占欲だな、と珍しく自覚するがそれだけ愛おしくて堪らないのだ。篠塚柳という女性はそれだけ秀の心を捕らえて離さない。

しかし、それ以上に柳も思うことだってある。

「それでしたら……、私だって妬いてしまいますよ？」

「えっ？」

「秀さんはとても優しく格好良くて……、綺麗な人の注目も一手に引き受けちゃうから……」

天宮家で見ただけの大量のチョコレート。翔達の胃袋に収まるものだから貰ってるだけというものの、それだけ秀に思いを寄せてる女性はいるのだ。

ただ、沙南達が平然としているのに、自分一人がヤキモチ妬いてしまうのが恥ずかしくて言えなかったのだけだ……

それに秀はクスリと笑って、柳を後ろから抱きしめた。思わずピクンと反応してしまうが、どうやら立ち上がることも許してはくれないようだ。

「柳さんより素敵な女性なんているんですかねえ？」

「それは沙南ちゃんとか紗枝さんとか……」

「そうですね。ですが、あの二人は素敵というより最強でしょう？」

あつ、桜姫さんや闇の女帝は幻想的とか妖艶ですかね」

何となく首を傾げなくなるが、言ってる意味としては理解出来る。確かにしっくりくる言葉ではあるのかもしれない。

すると、秀は柳の細い肩に口付けを一つ落として、柳はきゃつ！と可愛らしい悲鳴を上げた。

「僕にとっては柳さんほど素敵な女性はいません。だから今宵はず

つと傍にいてくださいね？」

「……はい」

頬を赤らめながら柳は答える。本当に溶けてしまいそうなほど幸福だと感じるが、あくまでも彼女を愛しているのは超が付くほどのドSだということを忘れてはならない。

「柳さん……」

甘ったるい声で囁かれたあと、今度は首筋に口付けを落とされる。そして、それが離ればそこは赤い花びらが咲くわけで……

「あの……、秀さん？」

「これで大丈夫ですね」

「えっ？」

「僕の所有印を付けたので、恐らく皆諦めてくれますよ」

「なっ……!!」

一気に茹蟄が出来上がった。それに秀は非常にご満悦らしく、気味が悪いほどニコニコ笑っている。してやられたのだ、首筋と肩に付けられた所有印はとても隠せそうにない。いや、隠させてくれな
い！

「さっ、それではそろそろ行きましようか」

「秀さんっ!!」

しかし、それでも腕を差し出せばおずおずとしながらもとつてくれる柳に秀は柔らかい笑みを浮かべて、今度は唇を重ねるのだった。

そして、秀達と今宵は別行動になる医者三人は……

「龍ちゃん！ 啓吾！」

ロビーで医院長と待ち合わせだった龍達の元に、紗枝が薄紫のシンプルなイブニングドレスの裾を持ち上げてこちらへ駆けてきた。その様子に二人は笑みがこぼれてしまう。

「紗枝、お前走るなよな」

「大丈夫よ。転んだところで足を捻るような靴は履いてないもの」

「だが、エロさはかなり出るかもな」

「色気と言えないのかしら、この口は！」

紗枝は思いっきり啓吾の頬を抓った！ しかし、紗枝を見る男共の視線はまさに野獣にも似ている気配がある。背中を広く開けた作りのドレスなので仕方ないのかもしれないが。

「龍ちゃん、どう思う？」

「とても似合ってるよ」

「もう一声！」

「すごく大人っぽい」

「それは微妙ね……」

妹分なので、それ以上の言葉を龍に求めてもこの堅物から飛び出すとは思えないが、せめて恋人からはもう少し褒め言葉くらい聞きたいものだ。

紗枝は啓吾を抓るのをやめてニツと笑みを浮かべて感想を求めた。

「啓吾、ちゃんと褒めてちょうだい。龍ちゃんが沙南ちゃんに使え

るような言葉で！」

「ああ、それならあるぞ」

龍と沙南に使える言葉となると思いつくのは早いらしい。啓吾はそれは悪戯な笑みを浮かべて答えた。

「今晚やらせろ」

「言えるかぁ！！」

「くたばれっ！！」

悪の総大将と最強の女神は瞬時に啓吾を沈めた。だが、沈んでいる場合ではなくなったのである。

その原因は医院長と共にこのパーティーの主催者が現れたことから始まるのだ……

第十七話：褒め言葉は選ぶべし（後書き）

二日連続アップは久しぶりです。

理由は昨日書いた話の余ってた分だからですが（笑）

とりあえず、今回はほのぼのと書けたかと思えば、やっぱり秀と啓吾兄さんがねえ……

だけど、まだまだ甘くしたいなと思いますので頑張ります！

男性でも照れてしまうような言葉を思いつければいいんですけど……

そして、いよいよ龍の気苦労が始まりそうな予感が……

龍と沙南ちゃんの恋愛が一番低い話になりそう……

皆が動いてるのに何故か甘くならない二人は一体どうなるんだ？？

第十八話…婚約者候補

誠一郎医院長と一緒に入ってきた中年のフランス人に龍達はピクリと反応した。今宵のパーティーの主催者である製薬会社の社長であり、確か聖蘭病院とも最近取引を始めていたはずだ。

医院長にしてはまともな相手とつるんでいるな、と啓吾と紗枝は同意見である。事実、麻酔科医達は助かっているらしいし。

そして、そのフランス人は取引のある病院の次期医院長候補である龍と、医学の権威であるシュバルツ博士の養子である啓吾に愛想の良い笑みを浮かべて手を差し出した。

「はじめまして。御高名は存じております。ドクター龍、そしてドクター啓吾。私はデュパン社の代表を勤めております、アーノルド・フランと申します」

二人は手を握り返しながら驚いた表情を浮かべた。彼が流暢な日本語で話し掛けてきたからだ。かといって、自分達だって英語がペラペラだろ、と翔あたりは言ってくれそうだが。

「はじめまして。随分、日本語が堪能でいらっしゃいますね」

「ええ、妻が日本人なので。そして息子に日本支社を任せてますからね」

なるほどな、と二人は思った。そういった環境なら日本語が身についてもおかしくはない。

それからフラン社長は紗枝の手を取ると軽く口付ける。龍は啓吾

がどんな反応をするのかとちらりと横目で見るが、どうやら全く動揺してないらしい。若い男だったら眉くらい動かすのだろうけれど。

「それからお久しぶりです、紗枝お嬢様」

「はい、財閥のパーティー以来ですね」

いかにも紳士というフラン社長に紗枝の目元も柔らかくなる。こういう相手なら邪険にしないんだな、と龍と啓吾が同時に思ったことは言うまでもない。

そんな一通りの挨拶が済むと、誠一郎はホクホク顔でフラン社長に尋ねた。

「フラン社長、今夜御子息は」

「ええ、もちろん来ます。少し仕事で遅れますが」

「そうですか、出来れば龍に会わせただったんですがな」

それに龍はピクリと反応する。随分露骨な牽制だな、と啓吾は思うが、紗枝は何やら首を傾げている。

しかし、誠一郎は龍より優勢に立とうとフラン社長の息子のことについて話し始めた。

「龍、フラン社長の御子息はアメリカとフランスに留学して経営学と薬学を学び、今はデュパン社の後継者となるべく副社長として活躍している。うちの取引もあることだし、うちの娘の婿に……！」

その瞬間、誠一郎は言葉を飲んだ。龍は表情を全く変えてないが、明らかに誠一郎のみを威圧している。

しかし、フラン社長にまだ沙南を婚約者にするという話をしては
いないのだろう。彼はその話には食いつかず、遠くから声をかけて
来る知人の声に気付き手を挙げた。

「折原君、すまないが一度失礼させて貰うよ。では、皆さんもまた
後ほど」

「はい」

三人は一礼するとフラン社長は笑みを浮かべてその場を去って
いった。

それから龍は誠一郎を威圧したことなど全く気にもとめず、もっ
ともなセリフを吐いた。

「医院長、こちらもご挨拶に伺いましょう。ただし、新しい開拓先
を得ようとはしないで下さい」

最後のあたりは龍の機嫌の悪さが出ているが、先程威圧されてる
のだ、誠一郎はすぐには言い返さなかった。しかし、それが良かっ
たのか、彼はいつもより頭が冷えていたためニヤリと笑う。

「新しくなければ良いんだな？」

おやつ、と啓吾と紗枝は思う。今日は何かくだらない策でも用意
しているのかと感心とは言えない感心をした。

「だったらついて来なさい。龍、お前には今日こそ沙南を諦めても
らうぞ。私はお前より沙南に相応しい御子息を見つけてあるんだ」
「フラン社長の御子息ではないんですか？」

「彼は保険だ！」

失礼なことこの上ない発言に龍はムツとしたが、少々面倒な話になりそうだったので、啓吾と紗枝はもつともな事を述べる。

「医院長、龍の何が不満なんですか。聖蘭病院だって龍が後継ぎになるのが普通でしょう？」

「そうね。菅原財閥もお祖父さんへの恩義と龍ちゃん可愛さにスポンサーになってるわけだし」

それは明らかに誠一郎に対する批難と厭味を含んだ言葉だったが、今の誠一郎は沙南を絶対龍には渡さないという感情に流されていた。

「二人は黙ってなさい！ これは私と龍の問題だ！」

「なっ……！」

「紗枝ちゃん」

言い返そうとした紗枝を龍は目で制する。啓吾も彼女の腕を掴んで、これ以上の横槍は無用と大人しくしておくことにした。

そして、龍は誠一郎を見据えると彼は一步後退した。本当にこの青年はいつもこの目で自分を見てくると思う。容姿は父親に似てるが、全てを見抜いているようなこの目は祖父と同じだ。

「おじさん、その話はまた後日にしましょう。ですが、俺は沙南と結婚を前提に付き合ってますから」

紗枝はバアツと明るい表情になり、啓吾も微笑を浮かべる。普段からこれだけはつきり言えればいいのだろうが、絶対引かないところは引かないと言い切ってくれるからこそ、龍はいい男なのだと思

う。

「龍！ 私は認めん！ 絶対お前を！！」

「折原君！」

二人の会話を遮って、小太りの中年社長と彼より少しだけ背の高
いだけの息子がこちらへやって来た。

さっきのフラン社長とはえらい違いだな、と啓吾は非常に素直な
感想を抱く。ただ、紗枝が非常に引き攣った表情を浮かべているあ
たり、これは面倒なことになるなと思う。

「これは高条社長！」

さっきまでの態度が豹変した誠一郎は、声をかけてきた高条社長
のもとに歩みよりペコペコと頭を下げた。どうやらそういうことか
と龍と啓吾は目を合わせる。

「何だね、折原君。お嬢さんは一緒じゃないのかい」

「いえ、既にパーティー会場にあります。今宵は友人と一緒に行動
しております」

「そうか、君に写真を送って貰ったときから息子は凄く気に入って
いてな」

その会話に龍の眉間にシワが寄る。久しぶりに本気でキレルんじ
やないかと啓吾は危険を感じたが、誠一郎は寧ろ火に油を注ぐほど
の上機嫌で紹介し始めた。

「龍、こちらが大日本製薬の高条社長と沙南の婚約者の正憲」

「紗枝さん！ お久しぶりです！ 今宵もまた男を誘惑する宝石の

ような美しさだ」

誠一郎の紹介を遮って正憲と言われた青年は齒の浮くような言葉を紗枝にかけてきた。顔は笑ってるが、紗枝の血の気が引いたのは気の性ではないだろう。

ただ、こちらにピタリと寄り添ってくれることに淡い満足感は覚えるが。

「そんな趣味は毛頭ございません。あなたでも相手にする、安っぽい女性にでもその言葉を使ってあげたらどうですか？」

「ハハッ、ヤキモチですか？」

「いいえ、単なる軽蔑です」

「じゃあ、嫉妬だ。そんな不細工な男なんか連れて僕の気を引きたいのかい？」

不細工と言われたことに腹を立てるより、かなりおめでたい頭の持ち主なんだなと啓吾は思う。紗枝がここまできっぱり言い切ってるのにめげない男も珍しいものだ。

だが、息子の醜態を晒してると感じたのか、高条社長はそれを非常に失礼な発言だとも思わず軽く注意した。

「正憲よさないか。折原君、すまないね。君の娘が来ている会場でこんな色気だけのお嬢さんに声を掛けるなんて」

その瞬間、紗枝に特大の青筋が立つ。八つ当たりだけは勘弁だな、と龍と啓吾は同時にそう思ったが、おそらく影でいろいろ動いてくれる人物達がいるのだから、彼女はそううち綺麗さっぱりこのことは忘れるはずだ。

だが、キレることになるのは紗枝ではなかった。

「すまない、父さん。だけど僕の愛人にはしたいんだ。ほら、沙南さんを抱くときの練習台は多ければ多いほど!!」

「正憲!?!」

それは一瞬の出来事だった。正憲が胸を押さえて膝を折ったかと思えば、泡を吹いてバタリとその場に倒れ込んだのである!

しかし、啓吾はしれっとした態度で簡単な診断だけを述べた。

「おっと、軽い心臓発作だ。医院長、俺達みたいな素人じゃ対処できませんから任せましたよ」

「なっ!?!」

「そうね、色気だけの女に処置は出来ませんし」

「紗枝先生!?!」

見た目と年齢はまさに一般的な研修医である二人は全て誠一郎に押し付けてその場をあとにした。だが、誠一郎はパニックに陥りもう一人の医者の名を呼ぶ。

「龍!?!」

しかし、龍は携帯で救急車を呼んでいるため誠一郎を完全にスルーである。

「折原君! 何とかしたまえ!?!」

「はっ、はい!?!」

とりあえず心臓マッサージかと、誠一郎は久し振りに医療の現場に立つハメになるのだった。

そして、龍は携帯を切り自分を待っていてくれるこの騒ぎの元凶もとにいくと、彼はニヤリと意地悪な笑みを浮かべた。

「龍、心臓に負担かけただろ」

「……直接にはかけてない。ただ、威圧しただけだ。そういう啓吾こそ全身に重力掛けただろ」

「脳挫傷を起こさないように膝を折って倒したけどな」

「実際にやってくれても良かったのに」

「コラ、医者として不謹慎」

つまり、龍と啓吾が同時に威圧と重力を使った結果、正憲は軽い心臓発作を起こしたということだ。

しかし、二時間も寝ていれば元に戻る程度、命に関わらない程度と加減しているあたりは二人とも医者としての優しさである。

「まっ、これで医院長は病院に戻るだろうし、お前は沙南お嬢さんのエスコートでもすれば良いんじゃないか？」

「そうだな」

きっと素敵になっている恋人のことを思い浮かべながら、三人は会場の中へと足を踏み入れた。

第十八話..婚約者候補（後書き）

さて、医者三人の初の職務放棄でした（笑）

まあ、あそこまで言われた三人ですから、さすがに助けてやる必要はないかなと。

医院長も一応医者ですからね（笑）

でも、御氣付きかと思いますが、デュパン社と大日本製薬と名乗る会社が今回、いろいろな面で関わって来るかと思っています。

それに鷹という名の組織の前身である、二百代前の鷹族、そして鳳凰という名の武道家……

これだけ沢山のキーワード詰め込んで、本当に甘い恋愛話になるのかとツツコミは入れられそうですが……

はい、でもちゃんとラブラブさせます（笑）

龍が将来沙南ちゃんと結婚すると言い切ってるあたり、既に本編ではなかなかないことですからね。

それでは、また次回☆

第十九話…苛立ち

デュパン社五十周年記念ということで会場内は大勢の招待客が訪れていたが、どんな著名人やパーティーで目を引く男女でも世界最強のテロリスト達には遠く及ばなかった。

沙南もいつも彼女をエスコートしてくれる相手はかなり目を引く美青年であるので免疫はある方なのだが、今宵はその倍の視線を受ける状況に陥っているのである……

「秀さん……」

「どうしたんです、沙南ちゃん」

「視線が痛い……」

「目立ちますからね、闇の女帝のおかげで」

いや、秀さんの性でもあるんじゃないかと沙南と柳が同時に思ったのは言うまでもないが、目を引く一行であることには変わらない。

ただ、やはり分かるものには分かるもので、闇の女帝がパーティー会場に現れたことで、彼女にビジネスを持ち掛けようとするものや何かあるのではないかとマークするものもある。

しかし、その当人の傍には森と宮岡がいる性か、それとも末っ子組と幸せな一時を過ごしている性か彼女に近寄るものはいない。

「それにしてもかなりの著名人が来てるのね。今宵は麻薬取引現場になってるっていうのに」

「それだけ取引がしやすい現場だということですよ。でも、このパーティーの主催者がそれを目的にパーティーを開いたというなら、

将来の麻酔科医としてはここで潰しておきたいですけどね」

「やっぱり怪しいの？」

「ええ、少なくとも麻薬取引のルートの一つにデュパン社の名前が出てきましたからね。聖蘭病院との繋がりもありますから、気に掛けておかないわけにもいきませんよ」

今のところは問題なく病院は機能しているのだが、もし、デュパン社が麻薬組織と会社ぐるみで繋がっているのなら叩いておかないわけにもいかない。病院が麻薬と関わるような事だけには絶対阻止したいのだ。

「でも、秀さん。あのフラン社長って人、とても優しそうな人に見えますけど……」

柳の視線の先にいたこのパーティーの主催者は、一人一人にきちんと挨拶をして回っている。柳の言うとおり確かに人の良さそうな感じはするが、それでも秀は警戒を解けない理由があった。

「ええ、本当に紳士に見えますけどね。でも、明らかに麻薬に関わってるメンバーとも会話をしていますから……」

まだ桜姫もこの会場に戻って来てないことも含め、秀は手にしていたグラスのシャンパンを飲み干した。

一方、秀達がいた傍のテーブルの食事を完食した翔は、まだ足りない新たな食を紫月と求めに行く。いや、正確に言えば紫月がお目付け役で同行しているというところか。

立食パーティー形式とはいえ、少しはマナーなり礼節なり守って

欲しいところだが、食を与えず騒がれる方がもっと恥ずかしいかと紫月は深い溜息を吐いた。

「紫月、こっちにうまそうなケーキがあるぞ！」

「大声で叫ばないでください。それと皆の分もとって戻りますから、この場で全て食べ尽くさないでくださいね」

「こんなに」

「私が作ったチョコレートは食べないんですか？」

「いや！絶対食う！」

それだけは御免だと必死になる少年に紫月はクスクスと笑う。こうして自分が作るものを大切に思ってくれてることが本当に嬉しいのだ。言葉ではうまく伝えることが出来ないのが、申し訳なくなることもあるのだけれど。

それから二人は数種類のケーキを皿にとっていた時、フランス人と日本人ハーフといった感じの豊満な胸を持つ女性が翔に声を掛けてきた。

スイカみたいな胸だ、と感想を抱いたのはいかにも翔らしいと言える。

「可愛い坊やね。美味しい飲み物でもいかが？」

「喜ん」

「翔君！！」

グラスに手を伸ばそうとしていた翔に紫月はピシヤリとそれを制した。ただし、それは嫉妬といった類の感情からではない。

「飲酒なんてしたら龍さんに潰されますよ！」

「へっ？　これって酒？」

どうみてもジュースにしか見えないといった表情だが、女が悪戯がばれたかのようにクスクス笑って種明かしをした。それに紫月は不快感を覚えるが。

「ふふっ、ごめんなさい。坊やぐらいの招待客って珍しかったから」「日本じゃ未成年の飲酒は禁止されてます。フランスと一緒にしないで下さい。ほら翔君、行きますよ」

「あら、折角だからお姉さんとお話しない？」

翔のあごにそれは綺麗な指先が触れてスツとそのラインと辿ると、紫月は特大の青筋を立てた。何なんだ、この有り得ないほどの苛立ち！

例えば沙南や紗枝が同じことをやったとして、翔が照れた反応を見せたとしてもだらしないつつこんでやる余裕ぐらいあるというのに！

しかし、女はさらに苛立たせるような行動に出た！

「何だか弟みたいですごく親近感が湧くのよ。年上の女は嫌いかしら？」

「うっ！」

豊満な胸に翔は顔面ごと押し付けられ、女は紫月に勝ち誇ったような笑みを向けた。それにも腹が立つが、翔が動かないことにはもつと腹が立つ！

「……翔君、もう知りませんから勝手にしてください！！」

ついにキレた紫月は、ケーキの皿を持って秀達がいる場所へと戻って行くのだった。

そして、紫月がいなくなった後、女はクスリと笑って菓を付けた胸に押し付けている翔を解放してやる。案の定、翔は見事に眠りに落ちていた。そこへウェイターが近付いて来て翔をヒョイと抱える。

「……さあ、行きましようか、西天空太子様」

その瞬間！ 会場内のブレーカーが落ち真っ暗となるが、わずかに燈された蝋燭の明かりを頼りにウェイターと女は走り出す！

「きゃあああ！！」

「何だ！ 何も見えないぞ！」

「お客様！ 落ち着いてください！」

しかし、追い撃ちを掛けるかのように今度は銃声が鳴り響き、さらには警察官の怒声が響いて会場内は更なるパニックに陥った！

「皆！ 傍にいますか！」

「うん！」

「ここにいるよ！」

「平気だ！」

「触るな！ 馬鹿者が！」

「グハッ！！」

その声で末っ子組や森達が無事だと確認する。当然のことながら、柳は停電したと同時に秀が引き寄せているために無事だ。

ただ、沙南の声が返ってこないことに気付いて秀がすぐに携帯のランプを点せば、口を押さえられて連れ去られようとしている沙南が目飛び込んできた！

「沙南ちゃん！」

「んんんっ！！！」

秀はすぐに沙南を連れ去ろうとしている男に飛び掛かろうとしたが、ピタリと体は重力に縛り付けられる。ただ、それを行ったのは啓吾だ。

「えっ？」

「ぐぼはっ！！！」

秀の真横を沙南を連れ去ろうとした男の巨体が掠める。燈した明かりで僅かながらに見えたその表情がかなり悲惨だったような気がしたが、とりあえず沙南が無事かと秀は明かりを沙南達の方に向ければ、悪の総大将に抱き着いてる沙南を発見した。

「龍さん！」

「沙南ちゃん、無事で良かった！」

しかし、明かりの少ない場所でよく見つけられたなと秀が首を傾げていると、ライターの火を付けた啓吾が紗枝の手を引いてやってきた。

「よう、全員無事か？」

「啓吾さん、よくここが分かりましたね」

「まあ、俺は柳達のいる場所を感じ取れたし、夜目は効くから来たんだがな……」

そう、啓吾も秀と全く同じことを思っていたのだ。そして、結論は一つしか思い浮かばない……

「愛か？」

「なんでしょうかね……」

さすがに太陽の光なんて使うはずがないとすれば、それしか答えは出てこない。しかし、高校生組がまだこの場に戻って来ていないのだ、そう暢気にはいられない。

「啓吾さん、翔君と紫月ちゃんは？」

「三男坊は知らんが紫月は会場内にいる。ちよつと行ってくるから紗枝を頼む」

そう告げて、啓吾は混乱の続く会場内にまた飛び込んで行くのだった。

第十九話：苛立ち（後書き）

さて、今回は騒動が起こっちゃいましたよ！？

しかも翔が誘拐されてませんか！？

綺麗なお姉さんに葉でノックアウトされちゃうなんていかにも翔らしいような……

胸がスイカに見えたからかな（笑）

でも、普段は冷静な紫月ちゃんも今回ばかりはご立腹な模様。

彼女の苛立ちはそれはかなりのものかなと思います。

まあ、スタイル面はまだ成長期の高校生なんで大人には敵わないよねえ。

そして、今回の一番の凄さは真っ暗闇の中で沙南ちゃんのピンチを救った龍！

これはやっぱり愛の力ですか！？

第二十話：機密院

いきなり停電したかと思えば人がぶつかってきてケーキの皿を取り落とす。折角借りたパーティードレスも汚れたような感覚を覚えて、紫月は渋面になった。それだけの余裕があるのはいかにも冷静な彼女らしい。

ただ、このままというわけにはいかず、紫月は腕時計型のライトを点けて秀達と一度合流しようかと思ったところで銃声が鳴り響く！

「警察だ！ 麻薬取引の現行犯で逮捕する！」

「くっ……！！！」

「うわっ！」

「きゃあああ！！！」

どうやら近くで誰かが撃たれたらしく、紫月は自分の身を守ろうとしたその時、彼女の腕を掴んだものがいた！

「なっ！」

「紫月君、俺だ！ 動くな！」

「土屋さん！？」

驚いた直後にまた銃声が鳴り響く。紫月は風の結界を張って自分と土屋の身を守ることに専念した。

「どうしてここに？」

「こんなパーティー会場でライト付きの腕時計なんて、あの喫茶店でバイトしてるメンバーじゃないとまずしなないと思ってね」

なるほど、と思う。パーティー用ということで紫月もジュエリーウォッチを付けているが、それは喫茶店のマスターが作ってくれたものであり、さらに秀が改良を加えて発信機まで付けてくれたものである。

確かに普通は持っていない代物だな、と納得したが、土屋はさらにとんでもない情報を提供してくれた。

「それに翔君が掠われた」

「はっ！？ 誰にですか!？」

「紫月君がヤキモチ妬いた女」

「あっ……」

どうやらあの場面を見られていたらしい。それは近くに土屋がいてもおかしくはない。ただ、暗闇で少し顔が赤くなっているところを隠せることだけは有り難いけれど。

しかし、そんな女だったのなら鷹のメンバーやら麻薬組織関係の人物はチェックしていたので気付くはずだ。それもあそこまで特徴があるのだし。

「土屋さん、だったらあの女は何者なんですか？」

「スパイだ」

「えっ？」

「機密院というのが裏には存在していてね、そこが今回の麻薬パーティーに絡んできたんだ。つまり、あの女はその機密院のスパイってわけ」

本当に次から次へいろいろな組織やら何やらと出てくるなと思うが、ふと、紫月は疑問に思った。

「そのことを秀さんは知っているんですか？」

「機密院の存在は知ってるだろうけど、今回の件に関わってることは知らないだろうね。でも、俺もさっき知ったばかりなんだ」

「桜姫さんですか？」

「そういうこと」

桜姫が別行動というのはそれを調べるためだったのかと思う。秀がすぐに掴めなかった相手となれば、それなりに情報操作には長けていると考えてもいいのだろう。

そして、そんな話をしている中で近くのテーブルの上にあったグラスが銃で弾かれ、破片が紫月の元に飛んできた。

風の力で身を守っているため怪我はないものの、先程より近くで銃撃戦が行われているようだ。しかし、土屋は全く気にせずに会話を続ける。

「まあ、刑事の勘であの女をマークしていたんだけど、張ってる最中に上がポカをやらかしたみたいでこの停電騒ぎだ。でも、桜姫君の情報から考えて、敵はおそらく紫月君も狙って来るはず」

「何のために……」

「機密院の狙いは君達への復讐と人体実験。及び女性陣にいたっては、鷹族の暗愚な主がハーレムでも作りたいみたいだからね」

「最悪ですね」

「ハハッ、全くだな」

いろんな意味でね、と苦笑する土屋に紫月も若干引き攣った笑みを浮かべる。

姉達を手に出ればそれは素晴らしいハーレムだろうが、彼女達が鷹族の暗愚な主に膝を折る前に相手を叩く女性揃いだということを忘れてはいけない。

しかも、それを達成させようと思えば、シスコンの中ボスと極悪非道の腹黒参謀、おまけに世界を滅ぼせる悪の総大将に打ち勝たなければならぬことが大前提である。

シスコンと腹黒が出てきたあたりで紫月は頭を抱えたが、ふと、今の発言で気付いたことがある。

「えっ、待ってください。土屋さんの今の言い方って」

「そういうこと。今回の黒幕はその機密院、さらに鷹はその機密院に含まれる麻薬組織であり、戦闘集団。そして、その機密院のトップが二百代前の鷹族の暗愚な主ってわけだ」

もちろんまだいろいろな企業が絡んでいる可能性もあると付け加えれば、面倒な……、と紫月は肩を落とした。

ただ、今から気苦労しそうな悪の総大将の方がもっと気が重いのだろうが……

「だけど、鷹は思ってた以上の武装集団みたいでね、警察の特殊部隊が数小隊やられてる」

「……やはりそれだけの力が？」

「ああ、部下達の話では人の言葉を話す巨大な鷹が襲って来たらしいんだ」

「また妙な……」

「慣れてはいるけど、一般人としては相手にしたくないね」

一般人という単語が自分達に当てはまるかどうかは別として、少なくとも相手は化け物ということは分かる。天空記の内容から考えても、鷹族の力なんだろう。

それだけの情報を話しているうちに、銃声も聞こえなくなり、辺りはただのパニックの音のみが聞こえて来るようになった。そろそろ頃合いかと、紫月は辺りを探る。

「土屋さん、敵も弾切れみたいです」

「ああ。反撃するかい？」

「ええ、兄さんも来たことですし」

そして、紫月は腕時計のライトを啓吾に向ければ、このパニックの中を全く動じもせず、しかもどこかで入手したキャンドルを手にもって啓吾はやってきた。

しかし、紫月に対しては柳や夢華より少しだけシスコン度が落ちるため、啓吾はいつもと調子で告げた。

というより、こんな時にシスコンを発動したら、さぞ、冷たい目で見られるだろうが……

「よお、無事だったか」

「はい。それより兄さん、まず翔君がさらわれました」

「はっ？」

いきなり告げられた内容に啓吾は気の抜けた返事をするが、紫月は構わずこれから行う内容の協力を仰ぐ。

「だから追い掛けようと思うんですけど、そのためにはこの中を抜

けなくてはならないんですよね」

未だ混乱する会場内、出入口は麻薬取引があったとなれば警察が封鎖して出れないはず。しかし、この混乱をおさめて、さらに会場から抜け出せる力を持つてゐるものが啓吾である。

そんな紫月のいたずらな笑みを見て、啓吾は深い溜息を吐いた。

「会場内の人間全て気絶させろと……」

「はい、龍さんは皆さんといるのでしょう？ だったら、皆さんは気絶しないように龍さんが何とかしてくれますよ」

「そりゃ、龍なら気付くだろうが……」

啓吾と同じ力を持つ龍だ。重力の相殺ぐらいは朝飯前だろう。

そして、啓吾はとりあえずやることには決めるが、傍にいた土屋に尋ねた。

「淳行、お前はどっするんだ？」

「そうだね、今日は現場に出てるし、この失態は上の責任ということにして俺も皆と合流するよ」

何となく、今日彼が現場を選んだ理由が分かった気がする。現場好きなものもあるだろうが、犯人を検挙するなら世界最悪のテロリストの力を借りた方が確実だ。

もちろん、上に失態を押し付けて自分がおいしい思いをする事も楽しむつもりだろうけど。

「仕方ねえな……」

その瞬間、会場内に重力が掛かって中にいる者達は次々と倒れていく。その状況を察知して紫月の通信機に連絡が入った。

『紫月ちゃん！？』

「秀さん、翔君がさらわれたそうなので一度外に出て下さい。追い掛けます！」

「行くぞ」

啓吾に促されて三人は走り出す。それから入口にライトを当てると、秀が扉を蹴り飛ばしているのが見えた。どうやら外にいた刑事達まで見事に伸びきっているようだ。

それから一行と合流して、廊下を走りながら龍は事の流れを紫月に尋ねた。

「紫月ちゃん、翔が掠われたってどういうことだい？」

「すみません、私が目を離れたのが失態でした。女スパイの誘惑に……」

「間違いなく翔が百パーセント悪いから気にしないでくれ。それにこの騒ぎで俺達の元に現れないってことは、桜姫が追いついてるってことだ」

少し先の方にいる桜姫の気配を感じながら、龍は紫月にこんな顔をさせる翔にたっぷり忠告することに決める。啓吾にいたっては圧死させる気満々だ。

しかし、やはりそう簡単には追い付かせてくれないらしい。

「秀、全て片付けろ」

「かしこまりました」

こうしてまた一行はトラブルに巻き込まれていくのだった……

第二十話：機密院（後書き）

さあ、いよいよバトル開始！

翔に至っては長男組の説教が待ってるので本気でピンチだぞ！

さて、機密院という鷹の大元があるらしく、どうやらかなり面倒な事に巻き込まれそうな予感。

二百代前の関係と現代の狙い、とにかく複雑な糸が絡まるだけ絡まってるみたいですね。

それにしても土屋さん。

相変わらずいい性格しています。

きつと責任転嫁は特技なんだろうなあ。

でも、おいしいところは持って行くという（笑）

次回は桜姫さんの視点かと。

どうぞ、お楽しみに☆

第二十一話：殴り込み決定

翔を誘惑した女と翔を担いで走るウェイターはホテルの裏口から人気の少ない駐車場に出て、そこで待機しているブラックワゴンの仲間の元へ急いだ。

「急ぎなさい、天空王に追いつかれたら厄介だわ」

「はっ！」

女の命令にウェイターも足を早める。だが、車のドアを開ければ、その中では既に泡を吹いて倒れている仲間がいた。一体、何が起ったのかと思った瞬間、突然ウェイターの足に鋭い痛みが走り彼は翔を地面に落とす。

「なっ……！」

女は狙撃してきた方を向けば、数枚の花びらが彼女の肌を切り裂く。その痛み顔に顔を歪めながらも、女は街灯の上に立つ花びらを纏ったスーツ姿の女を発見してその名を叫んだ！

「桜姫……！」

「機密院のスパイが翔様をどこにお連れするつもりですか？」

「くっ……！」

再度、鋭い花びらが女を切り付ける。それに女は怒りで目を赤くして怒鳴り声を上げた！

「たかが従者の分際が……！」

「ですが、あなたより私の方が強い」

あっさり桜姫は切り返す。女とウェイターの二人程度、桜姫にとっては何となくいいほど相手になりはしない。

だが、桜姫はあくまでも辛口である。こちらに危害を加えようとしているものに対しては容赦なくそれを発揮した。

「さらに申し上げれば、どれだけの色香を纏おうとも、主達はあなた程度では相手にもなさいませんよ」

「何を!!」

「少なくとも、翔様のあなたに対する第一印象はスイカです」

数秒間、その場に沈黙が訪れたが、それは自分の容姿に多少なりとも自信を持ってる女にとって、侮辱以外の何物でもなかった。特に自分より美女である桜姫に見下されてるあたり、効果はより顕面である。

「桜姫!!」

女は顔を真っ赤にして怒声を上げると同時に、東の空から鷹の化け物の群れが来襲した。

それに桜姫は若干柳眉を吊り上げたものの、特に慌てた様子もなく再度女を見下ろした。

「鷹の群れ、でございますか」

「いくらお前でもこれだけ相手には出来やしない!」

「確かに少々厄介ですが、あなた達の組織が用意していた麻薬を使えば問題ありません」

桜姫はスーツの胸ポケットから麻薬を取り出した。それは今日の取引で渡す手筈となっていた一つだ。

つまり、彼女がそれを手にしているということは、取引相手は既に片付けられているということ。

「モエのシャンパンに麻薬を入れて富豪達に売ればさぞ、荒稼ぎが出来たことでしょうが、主の御手を煩わせた報いは受けていただきます」

「嘗めるなあ!!」

女は街灯の上に立つ桜姫の元まで飛び上がり、鋭い爪を立てて切り裂こうとしたが、桜姫はそれを後ろに跳んで避け、別の街灯の上にふわりと降り立つ。

「さすがは鷹族、下っ端でもその程度の動きは可能なのですね」
「ほざくな!!」

さらに女は爪を立てて桜姫に突っ込んできたが、桜姫はそれもふわりと避ける。しかし、空中でウェイターが後ろから桜姫の取り押さえた!

「鷹絵! やれ!!」

「死ね!! 桜姫!!」

鷹絵と言われた女は桜姫を真つ二つに切り裂いたが、桜姫から流れ出てきたのは血ではなく花びら。そして、それが二人に襲い掛かる!

「なっ……!!」

「幻術!!」

一体どこに消えたかと二人は辺りを見渡すが、そこには鷹の化物の大群が自分達と同じように花びらで身動きが取れなくされているだけ。

すると、どこからともなく甘い香が花びらに混ざり始めた。それは間違いなく桜姫が持っていたあの麻薬だ!

「酔いしれなさい……」

「うっ……!」

「桜姫……」

鷹絵とウエイターは倒れ、免疫が人間よりある性か鷹の群れはその場から去っていった。

それから桜姫はその場に姿を現し、すっかり寝こけている翔の前に立ったところへ龍達が駆け付ける。

「桜姫!」

「主」

桜姫は膝を折って頭を下げる。正装した龍とは今宵、初めて会ったのだ。いつも以上の風格につい膝を折ってしまうのは致し方ないことである。

しかし、龍も最近は慣れてきたのか、そこをつっこむことはなくなった。ただ、相手が膝を折れば折るのが龍らしいのだけだ。

「すまない、手を煩わせた」

「いいえ、当然のことです」

桜姫は綺麗な笑みを浮かべて答え、龍もそれに微笑み返すが、すぐにその表情は変化した。そう、彼は悪の総大将であり天宮家の家長なのだから。

それから倒れていた翔を起こすために、秀は一度ぐらい痛い目を見せようかと思ったが、珍しく彼はその気をおさめて翔を揺さぶる。

「翔君、起きなさい」

「んにゃ〜？ 秀兄貴……」

「翔君、今回は可哀相なことになりそうなので、僕は勘弁してあげますよ」

「へっ？」

間の抜けた声を出した途端、翔の背後から龍が痛恨の一撃を繰り出した。それに末っ子組は痛そう〜、と非常に素直な感想を抱く。

「でえ〜〜!!」

「このバカモンがあ!! あれほど油断するなんて言っておいただろうが!!」

「だからって殴るだあ!!」

抗議してる最中に重力で沈められる。やったのはもちろん、シスコンの中ボスである。明王顔負けの殺気を纏う理由はいろいろあるが、九割方紫月を一人にした責任が原因である。

「三男坊、紫月から離れるなんて言っておいたよな？ もし、紫月に何かあったらどう死ぬ気だったんだ？」

「いっ……!!」

俯せにされた状態で目の前でタバコをすり潰されるあたり、今からどれだけひどい目に合わされるのかと恐怖を覚えるが、今回一番キレているのは紫月である。

「兄さん、どいて下さい」

特にバックに何かを背負っているわけではないが、少なくとも冷たい視線で翔を見下しているのは事実だ。

「し、紫月……！」

「翔君、チョコレートよりスイカの方がよろしかったんですか？」

「まさか！！ 紫月のチョコレートの方が何億倍も良いに決まっているやい！」

「そうですか。ですが……！」

翔を切り裂かんとするまでのかまいたちが拳と同時に振り下ろされ、アスファルトはズタズタな穴をあけた。一行は絶対そのうち殺されるな、との同情に近い感情を抱く。

「次にあんな罠にかかったりなんかしたら、翔君を料理しますから」

「は、はい……！ もう二度と離れません……！」

「んだと三男坊！ 今度は俺に殺されたいのか！？」

「啓吾さんが離れるなって言ったじゃないか……！」

そんな騒がしい一行を尻目に、土屋は倒れていた鷹絵とウエイターに手錠をかけ、部下達に連行するように連絡を入れた。もちろん、自分はさらに追跡すると伝えて。

「とりあえず、こいつらは署で洗いざらい吐かせるとしてだ、それ

より桜姫君」

「はい」

「麻薬の取引先にやっぱり大日本製薬は絡んでたかい？」

「はい。淳將軍のおっしゃってたとおり、会社丸ごと絡んでいた状況でした。しかも、それを告発しようとした者達も薬漬けにされてる状態です。」

聖蘭病院にしばらく薬物患者が搬送される件数が増加傾向にあったのも、大日本製薬に関わりのある人物が大半でした」

「そうか、悪かったね、スパイ行動なんてしてもらって」

「いいえ、報酬はたっぷり頂きましたから」

ニッコリ笑う桜姫が一体何をもらったのかは少々気になるところだが、龍はそれには触れないでおくことにした。

それに今の話を聞く限り、自分がやらなければならないことがはつきりしたのだ。それは医者としての性が告げること。

「桜姫」

「はい」

「うちにこれ以上麻薬を関わらせるわけにはいかない。桜姫、黒幕はどこにいる」

「機密院の本部になります。乗り込まれますか？」

「ああ、案内してくれ」

「かしこまりました」

一行はついに殴り込みを開始することになる。

第二十一話：殴り込み決定（後書き）

遅くなってすみませんでした！！

はい、今回は桜姫の活躍ということでしたが、いかがだったでしょうか？

まず、今回桜姫は土屋に頼まれて大日本製菓のスパイとして乗り込んでいた模様。

スーツの方が動きやすいといったのも、本当にあちこち移動するためだったみたいです。

因みに宮岡さんが桜姫に付けたコサージュ、本編では書いてませんが、あれが通信機となっていたという設定があります。

翔にすぐ追いつけたのもそのおかげです。

そして、ついに殴り込み決定。

次回からバトルとギャグのお話に走っていきそうなの……

でも、恋愛要素は入りたい……

第二十二話：武の道

話は二百代前に遡る……

その日、太陽宮で開かれる武術の手合わせに訪れていた天空王と龍は、渡り廊下から武道場へと向かう光帝の近衛隊長である鳳凰を見つけた。

「鳳凰殿」

声をかけられた方に振り返る武道家は、龍の姿を見るなり深く頭を下げた。

「これは天空王様。お久しぶりです」

「こちらこそ、久し振りの手合わせを楽しみにしていました」

名門の王が一介の近衛兵である自分に何故頭を下げるのかと、鳳凰は毎度不思議でなかった。武人としての礼儀といえど、本来彼は頭を下げるべきではない。

なんせ、彼は光帝が是非自分の娘をと薦めているほどの人物なのだから……

「それより鳳凰殿、最近鷹族が妙な動きを見せていると聞くが」

「はい、鷹族の主が悪事を働いていることは事実。多くの女達が慰みものとなっていると聞きます。心苦しい限りですが」

話を反らさなくともよいと、鳳凰はその目で訴えて来る。それを感じ取り、龍も前置きは止めて直接告げることにした。

「鳳凰殿、天空軍に鷹族討伐の命が下った。だが、鷹族は鳳凰殿の同胞だ。鷹族の城には鳳凰殿の家族や友人もいるだろう、私はその者達を手に掛けることをしたくない。今のうちにこちらへ呼ぶことは出来ないだろうか」

やはりそういうことかと、鳳凰は察していたと同時に目の前にいる男の甘さを改めて知った。

これほどの力と器をもっているというのに、武で全てを制することを潔しとせず、さらに巻き込みたくないものを何とか助けられないかと模索する甘い王なのだ。自分を信頼してくれてはいるのだろうが、これがスパイだった場合、どうする気だというのだろうか。

しかし、こんな王だからこそ、光帝も沙南姫も、何より自分が主以外に膝を折ってもいいとまで思ってしまうのだけけれど。

「天空王様、鷹族は仕えるべき主のために武の道を進む民族。例えば家族だろうと、それを破ることは出来ません」

「しかし……」

「情けは無用。親兄弟であろうと主が悪事を働いているのは事実。それに加担しているのであれば斬り捨てて下さい」

「鳳凰殿……」

「あなたも沙南姫が狙われているというのに迷ってどうするのです。天を従えるべき王が鷹族の主などに沙南姫を渡してはならない」

迷いなき目は龍を真つすぐに射抜いていた……

機密院の本拠地に向かうため、一行は一度着替えてクルーザーに

乗り込む。秀が少しでも暖を取れるようにと熱球をいくつか出してくれているが、冬の海風は凍てつくような冷たさで、末っ子組はピツタリと寄り添うように座っていた。

「寒いよー！」

「大丈夫？ 夢華ちゃん」

「うん、頑張る！」

そんな光景にクルーザーを運転しながら森は自分の境遇を非常に哀れみたくなったが、さらに追い打ちを掛ける次男坊がここにはいる。

火と熱の力を操れるだけでもこの寒さをまず感じることはないというのに、それ以上に暑苦しいと感じてしまうほどイチャイチャして、幸せを満喫している光景がいやでも目に飛び込んで来るのだから……

「あの、秀さん……」

「はい、何でしょう？」

「温かいのは嬉しいんですけど、恥ずかしいんですが……」

後ろから包み込まれて、これでもかというほど密着して、おまけにこの甘い空気を漂わせる青年に柳は心臓がもたないと心の中で悲鳴を上げる。

しかし、この青年はそれが楽しくて仕方がないという性質の悪さしか持っていないため、柳が俯けば俯くほどその悪戯は過熱していくばかりだ。

「すみません、でも寒いときは人肌が一番ですからね。柳さんそこ

うしていると心まで熱くなるんですよ」

「ひやっ！」

今日は一体、何度口づけを落とされているのだろう。もちろん、とても嬉しいのだが、いつも以上に近いことが体中の熱を上昇させられて、いてもたってもいられなくなる。

しかし、抗議したところで受け入れてくれることはないのだろうか……

そんな二人をいつもなら邪魔しに行くはずのシスコンは、寒さと紗枝に止められたため、今現在は龍達と会話中である。

「さすがに重力じゃ、寒さまでは防げないか」

「無茶いうな。というよりお前だって自然界の女神ならこの寒さ何とかならないのかよ」

「こんなところに風よけの木を召喚するわけにはいかないでしょ？」

重力を使えようが、自然界の女神様であろうが寒さはどうにもならないらしい。しかし、元はといえば空に問題があるのならと啓吾と紗枝の視線は龍に向く。

「龍、お前の天の力で」

「世界を滅ぼすつもりか」

龍は間髪入れずに答えた。天の力は気温を変化させるものではなく空を落とす攻撃性のもの。そんなものを使うわけにはいかない。ならばと沙南にも視線が向くが、彼女ももつともなことを告げた。

「太陽光は夜にはね」

さすがに夜に太陽を昇らせるわけにもいかない。それに太陽のような小さな光弾も作り出せるが熱量が半端ないため、やらない方が無難である。

そして、結局啓吾の寒さ対策も残されてるのは一つだけだ。

「紗枝」

「きゃっ！」

啓吾は紗枝の腕を引っ張ると、そのまま自分の腕の中に閉じ込める。しかも絶対逃げ出さないように重力まで使って。

「やっぱり人肌が一番だよな」

「離しなさい啓吾！」

「俺は寒いのが嫌いなんだよ。しばらく湯たんぽになってろ」

「だからって重力で縛るな！」

ご満悦な顔を殴りたくても殴ることが出来ない。いっそのこと木でも召喚して縛り付けてやろうかと思ったが、耳元で大人しくしてろと囁かれて抵抗を止める。卑怯な奴だと心の中で悪態をついて。

しかし、一番顔を赤く染めているのは紗枝ではなく、純粹な悪の総大将だったりする。そんな龍を見て、桜姫はサラリと促した。

「主、どうぞ沙南様を抱きしめて」

「人前でやるかぁ！ それより、機密院の本部の情報を教えてくれ」

人前ではやらないんだ、と沙南以外が心の中でつつこむが、とりあえず作戦会議をやらないわけにもいかず、桜姫は機密院の情報を

提供することにした。

「まず、機密院の組織については先程紫月様がおっしゃっていたとおり、トップに鷹族の暗愚な主が、麻薬組織として淳將軍が追っているのが鷹と言う名の戦闘部隊となります」

そこまでは全員理解しているらしく、コクコクと頷く。

「彼等の現代での目的はハーレムの形成と暗愚な主は言うでしょうが、鷹に関してはおそらく天空族への復讐かと思われます」

「でもさ、それと麻薬って何の関係があるわけ？」

肉まんをかじりながら翔はもつともなことを尋ねる。資金稼ぎも一つの理由にあげられることは分かるが、鷹の二百代前は光帝に仕えていた親衛隊だ。どう考えても麻薬とは無関係な気がする。

「翔様のおっしゃることはごもっともですが、世の中には肉体を改造する薬というものが存在するのも事実です。当然その逆の肉体を衰えさせる薬もございますが」

「じゃあ、鷹はその麻薬を手にするために動いてるってこと？」

「はい、多くの製薬会社が絡んでいることも考えてですが」

これはまた面倒なことになりそうだな、と紗枝を湯たんぽがわりにしながらも啓吾は思うのだった。

第二十二話：武の道（後書き）

はい、お待たせしました☆

しばらくの間は番外編に集中しますので、ちよつとは更新も早くなるかなと思います。

でも、本編の影響を受けてか、こちらのアクセスも増えてとてもホクホクさせていただけてます。

うん、本当緒俐は幸せものですね☆

さて、今回は龍と鳳凰の二百代前を書かせていただきました。何やら、鷹族討伐前にやり取りがあつたみたいで……この続きもまた後日になりますね。

そして、相変わらずイチャイチャしてる秀と啓吾兄さん。

でも、それに顔を赤くするのが龍という（笑）

彼にはまだ純情なままでいてもらいます。

でも、こういうタイプがぐっと押しが強くなったりするのも緒俐的にはツボですけどね（笑）

第二十三話：迷う理由

機密院から少しはなれた場所にクルーザーを一度停船させて、一行は殴り込み前の作戦会議を開くことになるのだが……

無人島に建つ、何とも豪勢な建造物に呆氣にとられたのは、決してあまりの豪華さに言葉が出なくなったからではない。理由はその建造物の名称にあるからだ。

「機密院ってどこが機密なんだよ……」

啓吾のツツコミに一行がコクコクと頷いたのは仕方のないことだ。

無人島ということで本州から離れており、近くを通る漁船もないために人目に触れることはそうないのだろうが、こんな夜にそこまでするかというほど、様々な色の光りを放つ建物が機密という言葉を使うのはどうかと思う。

一体、何故そこまできらびやかなのかと宮岡はパソコンで検索すれば、なるほど、ととりあえず納得した。

「政府黙認のリゾートホテルみたいだな。税金無駄遣いの娯楽施設でもあるが……、おっ、だけどこの宿泊名簿をマスコミ業界に売り付けたら、間違いなくぼろ儲けできるな」

「宮岡、その情報は妾が買う。送信しておけ」

「かしこまりました」

闇の女帝に命じられ、宮岡は彼女の情報施設へと送信しておいた。

だが、間違えた方向に走り出さないためにも、龍は適度なところで話を本題へと切り替えておくことにした。下手をすれば、情報ビジネスに走り出すのだから……

「宮岡先輩、内部の情報はありますか？」

「ああ、このメンバーからいくと、ここが本当の麻薬取引会場といった方が正解だな。むしろ、さっきのホテルは捨て駒を配置していたみたいだ」

「なるほど、警察の情報網も機密院には敵わないというわけか」

土屋はひょいと肩を竦める。ただし、今から警察を出し抜いた者達を一斉検挙する気は満々だ。

それは龍もまだ理解出来るのだが、翔は目をキラキラさせながら勝ち気な笑みを龍に向けて尋ねる。

「つまり、ホテルといっても悪の巣窟なんだろう？ 破壊しても問題ないってことだよな？」

「何でもかんでもすぐ破壊に走るな！」

「そういう龍兄貴だっていつも人の倍は破壊してるじゃんか！」

「敵が攻撃して来るからだろう。それに俺は最初から破壊したくてしてるわけじゃない！」

結果は一緒じゃないのかな、と末っ子組は首を傾げる。ただ、物理的な破壊だけではなく、目に見えないものまで破壊するメンバーはと言えば……

「へえ、日本防衛事務所特別監察官。政府にこんなわけの分からな役職があって国民の税金を無駄遣いし、挙げ句の果てには麻薬でぼろ儲けですか」

「天宮秀、そっちはお前にやるからこっちは妾に寄越せ」

「そちらは日本薬品協会名誉会長ですか。またたんまり溜め込んで
そんな顔ですね」

「それだけじゃないぞ、秀君。海外の美女がお好きみたいで毎晩淫
らな宴を開いてるみたいだ。おっ、闇の女帝も目の付け所がよろし
いですね。総資産推定六百億です」

秀と宮岡、そして闇の女帝は宿泊名簿の個人情報を読み出し、間
違いなく彼等を脅迫するための材料を集めていた。

いつもなら紫月もその会話に加わるところだが、さすがに数百億
単位には手を出さないことにしているため、今日は大人しくしてい
る。

「だけど、ここが麻薬会場なら、やっぱり末っ子組には危険かな」

「大丈夫だよ、龍兄さん。僕がちゃんと夢華ちゃんを守るから！」

「私も大丈夫です！ 悪い人なんてやつつけちゃうもん！」

そう真っすぐ見上げてくる目に龍は弱い。二人の頭を撫でてなり
ながら戦闘許可を出す。

だが、そんな真っすぐ育っているはずの末っ子組に悪影響を及ぼ
している森は、ホテルの脇に見える怪しげなピンク色の街に興味津
々だった。

「だけど、あのピンクのネオン街はそそるもんがあるよなあ」

「構わん、お前一人で行ってこい」

「何でだ？ 良だって男なら飛び込みたいだろう？」

彼女がいないもの同士という、森と同類にされることがまさに不

名誉なくくりに入れられている宮岡は、パソコン画面とにらめっこしながらもきっぱり答えた。

「悪いが俺はノーマルだからな。同性愛者を差別はしないが、身ぐるみ剥がされるオカマバーで愛を求めるつもりはない」

「だが良二、世の中の女性に嫌われても、オカマには愛されるかもしれないから、森にはいいハーレムになるんじゃないか？」

「それもそうだな」

「淳っ！ 良っ！」

そんなの俺だって御免だ！と森が吠えれば爆笑が起こる。土屋は末っ子組にそういうことだから絶対近寄らないように、と強く忠告すれば、末っ子組は元気良く返事した。

ただ、オカマバーと聞いて顔を引き攣らせている啓吾に紗枝は気付く。

「ある意味、一番近付かない方がいいのは啓吾かもね」

「……、次男坊よりそっちの人種には好かれる自信があるけどな」

「いいじゃないですか、羨ましいな」

「シバくぞ次男坊！」

そして、また一行は賑やかになる。こうなってしまうばもう止めることは出来ず、龍はいつものように諦めて深い溜息を吐く。そんな主に気付くのは桜姫だけだ。

「桜姫、悪いが重要事項だけまとめてくれるか……」

「はい……」

いつものことながら気苦労を背負い込みそうな主に、桜姫は重要

なことだけを話しておくことにした。

「簡単にまとめますと、機密院には鳳凰率いる鷹の集団を始め、各国の麻薬組織やマフィアなどの武装集団が集まっていることは事実です。

鷹族の暗愚な主がどの位置にいるかまでは掴めませんが、これほどの施設、一度沙南様と離れてしまったら再び見える時間が掛かることは御忘れなきよう」

破壊すれば別かもしれないが、と桜姫は続けなかった。からかいたい気持ちは秀達と同等だが、龍をこんな時まで困らせるつもりはない。

それに、彼女も二百代前の天空王と鳳凰の仲もやりとりも知っているのだから……

「桜姫」

「はい」

「鳳凰は記憶を失っていると思うか？」

「……催眠にかけているならば分かりませんが」

やっぱり鳳凰のことを気にしているのかと桜姫は思う。

鳳凰がかなりの武人であったこと、光帝に忠誠を誓い、その娘であった沙南姫を鷹族の主のために差し出そうと考えているなどと思いたくはないのだろう。

「ですが主、例えどんなことがあろうと沙南様をお守りするのが主の役目。それを迷う理由などございません」

二百代前に鳳凰に言われた言葉をまた桜姫に告げられる。確かにその通りだな、と龍は思い直した。自分は守りたいものを守ればいいのだと……

「じゃあ、そろそろあいつらを止めて叩きに行くか。桜姫のオレンジレアチーズケーキも食べたいしな」

「沙南様を食べる方が先では……」

「桜姫！」

そして、一行は機密院へと殴り込むことになった。

第二十三話：迷う理由（後書き）

さあ、ついに機密院に突入！

一体どれだけのバトルとギャグ、そしてラブが繰り広げられるのでしょうか？

まずは機密院。

うん、豪華過ぎるリゾートホテルが機密院なんて確かにツツコミが入りそうですが、鷹族の暗愚な主と言われる理由が分かるかと。

でも、そんな施設にオカマバーまであるという……

啓吾兄さんの顔が引き攣る理由は紗枝さんのおっしゃるとおり……
うん、啓吾兄さんって女性だけじゃなく、オカマも引っ掛けそうな
空気ですからね（笑）

そして、鳳凰のことを気にしている龍。

桜姫に沙南を守るようにと言われ、すべきことは決まったのですが
……

やっぱり桜姫、彼女も秀達と同質なんですねぇ（笑）

第二十四話：闇の女帝の作戦

機密院とは名ばかりのホテルのロイヤルスウィートの一室に、鷹族の暗愚な主といわれた青年は薄衣を羽織らせた女達を抱きながら、彼の親衛隊隊長の男の名を呼んだ。

「鳳凰はいるか」

「はっ！」

呼ばれて瞬時に、紅い胴着に腰に剣を帯びた青年は主の前で膝立ちになる。その頬には刀剣の傷があるが、彼の武人としての誇り高さをより引き立てていた。もちろん、もともと美丈夫ではあるが。

それから彼の主は欲望に満ちた笑みを浮かべながら彼に尋ねる。

「沙南姫がここに来たみたいだな」

「はい」

「そうか、ついに私のものになるか。だが、練習台も数人欲しいしな……」

鳳凰の眉が一瞬びくりと動くが、彼は全く感情を表に出さず主の話聞いてる。

「鳳凰、お前は誰がいい？」

「主が欲するものに従者は手を出したりしません」

「そうか。だが、私は沙南姫を一人でいたぶるつもりはない。お前にも手伝ってもらう。元主の娘との狂宴も悪くないだろう？」

「からかうのはお止め下さい」

「ハッハッハッ……！！　すまない。だが、お前はいい体してる

からな。そうだな」

悪戯を思い付いたように、主は両腕に抱き寄せていた女達に目で訴えると、彼女達はうつとりとした表情ですっと立ち上がり鳳凰に擦り寄ってきた。

「命令だ。私の前でこの女達を抱け。私に抱かれるだけじゃなくたまには違う刺激も必要だろ」

「ありがとうございます、主……」

「鳳凰様、こちらへいらっしゃって……」

彼女達はスツと手を取るが、彼はその手を取らなかった。それよりもやるべきことがあると分かっていたからだ。

鳳凰は立ち上がると一度頭を下げて主に詫び、それから上申した。

「申し訳ございませんが、その時間はないかと」

「何故だ？」

「天空王は私でなければ止められませんので失礼いたします」

そして、彼はフツと瞬時にその場から姿を消したのだった。

宿泊棟とパーティー会場のある棟を結ぶ渡り廊下に鳳凰は差し掛かり外へ視線を向ければ、すでに厳戒令が敷かれており、ホテルや灯台の光りが島中に走らされていた。

それを眺めながら考え事していると、ふと空間が歪んだことに気付く。

「隊長」

「蜻蛉か」

「はい」

歪んだ空間から一人の男が姿を表す。彼もまた頬に傷を持っている。そして、この蜻蛉という男こそ、先日紫月と対峙した武道家である。

やけに静かな渡り廊下で、彼はこれから自分達がするであろう行動について尋ねる。

「沙南姫様を捕らえるおつもりで？」

「それだけじゃない。予定通り、啓星の妹達と女神達も捕らえろ。」

桜姫は……」

「私が捕らえます」

新たな空間の歪みが発生して、そこに美しいくのいちのような女が現れた。彼女の持つ空気はどこか桜姫に似ているところがある。

「烏帽子……」

「あれほどの幻術使いを倒せるものは鷹族でも限られております。その役目は私に……」

彼女が頭を下げるのは自分を慕ってくれているからこそ。そして、彼女の言う通り、桜姫を止められるものはそういるわけではないのは事実だ。

「分かった。それと蜻蛉、天空王は今どこに？」

「はっ、それが見失っていると……」

「そうか」

それに特に焦った様子はなく、鳳凰は返す。侵入しているというなら、必ず自分と見えることになるだろうからと……

無人島に停船した一行はすぐに不審者として取り囲まれたが、面倒だからと龍が重力であっさり片付け、秀が彼等の持っていた通信機で見失ったと報告を入れたあと、彼等が着ていた服を拝借して侵入することにした。

そして、軍服とライフル銃を剥奪した森といえば……

「森お兄ちゃん、違和感ないよねえ？」

「まっ、自衛隊だからな」

「でも、龍お兄ちゃんはもっとかっこいいよね！」

「お嬢ちゃん、凹むからはっきり言わないでくれ……」

「ほえ?？」

実に無邪気に凹ましてくれる夢華はさすがである。因みに彼女は特に着替えず、モフツとした耳あてに真っ白なコートという出で立ちのままで。

そして、夢華が絶賛する龍の恰好はSP。サングラスまで着用しているのは、すぐにばれないよう素顔を隠すため。その隣で秀も同じブラックスーツを着用して立てば、どこまで敗北感を味合わなければならいんだろうかと森は肩を落とした。

「さて、この恰好なら怪しまれずに潜入出来るかな」

「ええ。ただ、どれだけバレずに済むかですけどね」

「出来るならそのままバレずに済ませたいけどな」

それは絶対無理だろうな、と一行は同時に思う。あくまでも悪の総大将は穏便に事を進めたい主義だ。

すると、桜姫は服装を青の装束に変えて龍の前に立った。その表情は戦前のものだ。

「主、私は一旦別行動を取らせていただきます。麻葉パーティーの会場内に侵入致しますので」

「大丈夫か？」

「ご心配なく。通信はいつでも取れるようにしておきますので」

「分かった。何かあればすぐに駆け付けるから」

「勿体なきお言葉。主も沙南様から離れることの無きよう」

それだけ告げて桜姫は花びらとなってその場から姿を消した。きつと彼女なら大丈夫だろうと信じて……

「さっ、こっちも行こうか」

「待て、天宮龍」

行動を開始しようとした龍を闇の女帝は引き止めた。一体何事かと、一行は彼女に視線を向ける。

「おそらくあの愚鈍な主は宿泊棟の最上階にいるはずだ。やけに興味の悪そうな明かりがついてるからな」

「それでどうするつもりだと？」

「天宮龍、お前が本気を出せば鳳凰を何分で倒せる？」

勝てぬ事はないだろう、という目に龍は目を閉じて考える。あの強さを相手にするとなれば、瞬時というわけには到底いかないのだ。

「鳳凰があの当時と同じ強さのままだと言うなら、三十分程度です。天の力を解放すればさらに短くは出来ますが……」

「そうか、ならば三十分以内にあの部屋まで辿り着け。ああ、菅原森。お前は妾に付き合え」

「へっ？」

いきなり指名された森は素っ頓狂な声を上げるが、闇の女帝は微笑を浮かべてその理由を答えた。

「お前は爆弾についての知識だけはあるだろうか？」

「そりゃ自衛隊の端くれだし……」

「ならばあの最上階を吹き飛ばせ。命令だ」

「なんでだ!？」

その理由になるほど、と秀はすぐに納得した。どう転んでも彼女の作戦は有効的である。

「天宮龍達は鷹族の相手に集中、桜姫は内部の密偵、あと必要なのは陽動だろう？」

「ああ、まあ……」

「だからお前にその役目をやらせてやる。数ヶ所で騒動が起こればいやでも鷹族は分散せざるを得ない。鳳凰はお前と違って頭の切れる男だからな、ある程度こちらの作戦に気づいておるはずじゃ」

なんでそこで馬鹿呼ばわりされるのかと思うが、闇の女帝の意見はおそらくその通りだろうからと森は抗議することを我慢した。

「そこでだ、今回ターゲットの中に妾も入っておる。妾が敵本陣に乗り込み、天宮龍達が別の場所で暴れてるとなれば、鳳凰はどちら

かに赴かなければなくなる」

「つまり、龍達の方に行けばそのまま暗愚な主を女帝がしばき、俺達のところに鳳凰が来たとして最悪負けても連れていかれるのは最上階だから……」

「その場で妾があゝの馬鹿を殺せばいい」

「おい、だったら俺って……」

そう、たどり着く答えは一つ……

「ああ、最悪死んでしまうだろうが世の中に悪いことは何一つとしてない。それに妾も出来るなら余計な力は使いたくはないからな」

さすが女帝だ……！と思いつつも、その作戦はさらに秀の策も付け加えられて採用されることになった……

第二十四話：闇の女帝の作戦（後書き）

さて、今回は闇の女帝の作戦が採用決定！

因みに彼女が本陣に乗り込むと決めた理由は、鷹族の暗愚な主に側室として来いといわれてシバきたいからという理由からです（笑）

森を連れていくのも死んでも構わない、ある程度は何とかするからという理由から。

化け物級は天宮兄弟に放たれるに決まってますからね。

そして、現代で鳳凰が初登場。

蜻蛉と烏帽子というくのいちが彼のしたにいるらしく、何やらバトルの予感。

さあ、次回は一体鳳凰がどう仕掛けて来るのかお楽しみに☆

第二十五話…天上天下、唯我独尊主義

龍達と別行動をとっていた森と闇の女帝は、早くもテロ行動を開始したのだろう、パーティー会場付近でいくつもの破裂音や悲鳴が上がるのを聞きながら、彼等も鷹族の暗愚な主の元を目指していたのだが……

「手際が悪いな、菅原森」

早速入った闇の女帝からの鋭いツツコミに、森は無茶を言うなど彼女に抗議した。

「龍達と一緒にしないで貰いたいけどな」

「ならば、せめて五人くらい三十秒で片付けろ」

「今のは六人いただろうが！」

「妾なら十秒で終わるがな」

森の傍で伸びているSP達は、世間一般的には三分で倒されたのだから充分不名誉なことではあるはずなのだが、世界最悪のテロリスト達の間で言えば時間が掛かっているということになる。

闇の女帝は十秒、翔達ならば通常一人一秒、腹黒やシスコンなら瞬殺で、悪の総大将は戦う前に相手が気絶する。

「だったら女帝が……」

「口答えをするな。妾のために死ぬことを命じてやったのだ。有り難く思え」

「んなこと考えるかあ!!」

「贅沢な……、他の安っぽい女より良いに決まってるだろうが」

どこまで天上天下、唯我独尊主義何だよ！と森は心の中で突っ込むが、彼女に逆らってろくな目に遭わない人間しか知らないのも、それは彼がどんなに馬鹿でも言わないことにした。

「はあ、んで、女王様。いくら何でもあのSP達を殴り飛ばすとなると、かなりの軍勢が寄って来るんじゃないかねえのか？」

「だろうな。かといって力を使いたくもないしな……」

宿泊棟の正門前には二人のSPが立っている。すぐに倒すことはもちろん出来るが、騒ぎを聞き付け囲まれる事態を避けることはまず出来ないだろう。出来ることならすんなり入りたいところだ。

それにしてもやけに力を使いたがらないよな、と森はようやくその疑問にたどり着いた。

「女帝、やっぱり闇の力を使うのって疲れるのか？」

「いや、夜の闇を利用すればそうでもないが、溜めておきたい理由はある」

「化け物は龍の方向に流れてるのにか？」

森の指差す上空には、化け物が龍達の方に多数、夜空を飛行して向かっている。森にしてはまともな疑問だったため、彼女はきちんと理由を述べることにした。

「ああ、鷹の化け物はおそらく全て向こうに流れてる。だが、流れ過ぎだということは中にはそれ相応の奴がいるということに繋がる。最悪の場合は鳳凰がな」

「何だ？ あくまでも武道家だったら闇の力で引きずり込めば」

「だからお前は馬鹿だという」

鮮やか過ぎるほど早い切り返しに、森はやっぱりこの女帝はかなりの鬼畜だと改めて思った。

しかし、彼女の答えはあまりにももつとも過ぎることだった。

「菅原森、奴は天宮龍が天の力を解放しなければならぬということとを忘れたのか？」

「あっ……」

「つまり、妾の闇すら届かない腕前だという可能性は充分ある。何より鳳凰は光帝の懐刀とまで言われた男だ。そう簡単にいくものか」

だからどう転ぶにせよ、力を温存しておかないわけにはいかないのだ。

「だったら俺なんかより、天宮兄弟か啓を引き連れて来た方が正解だったんじゃないのか？」

「いや、妾の人選は間違っではおらぬ。もしここで鳳凰に破れれば、妾の連れはどうなる？」

「そりゃ……」

死ぬか死ぬような目に遭わされるかだ。それに森はもうぐうの音すら出なくなるほどなだれた。どう転んでも彼女は自分を捨てゴマにするつもりだ。

「だが、理由の九割はまだ別のところにある。特に篠塚兄妹と折原沙南、夢華とあやつらに深く関わってる可能性があつてな」

夢華を溺愛してる性か、彼女は少々不安そうな表情を浮かべた。ただ、あの五人に何があるのかと思うが……

「それより菅原森、何か策を考えよ。妾の力を使わずに最上階の馬鹿の元までいく方法を」

「だからなんでもな無茶苦茶……、いや、あるな。だが、協力しろよ」

森は非常に楽しそうな笑みを浮かべて、その作戦を闇の女帝に告げた。

それから数分後、宿泊棟の正門前にぐったりした女を横抱きにして一人の軍人が歩み寄って来ると、二人のSPは彼の行く手を阻んだ。

「なんだ、女なんか連れて」

「わりいな。今からこの女と休憩するんだよ。中に入れてくれねえか？」

二人の視線は女の身体を走る。顔は見えないが、溢れんばかりの豊かな胸と百万ドルの脚線美が男を誘っているようだ。

効果覲面だな、とサングラスの下に隠された顔を拝んでやりたいと思うが、彼等はハッとして自分達の職務を思い出した。

「一兵卒が何を！」

「一兵卒じゃねえよ、俺の親父に呼ばれてんだよ。ここの御偉いさんに日本防衛事務所特別監察官殿の息子が来たって言え。息子が愛妾を……じゃなくて女王様を連れて来たんです……、はい……」

小さくなっていくのは闇の女帝の威圧感に圧されているため。一

歩言葉を間違えば殺される……

「だが、軍人の息子などここには」

「そういうプレイだ。何ならお前達も一緒にやるか？ 麻葉を打つてあるから楽しめるぜ？」

演技なのか本音なのか分からないあたり、森がいかにこういう類のことに關して知識を持っているのかと思うが、SP達が同意したことは空気だけで分かった。

「分かった。だったら警備室に來い。そこでやろう」

「ラジャー」

「一時間後に交代してやるから、待っていてくれ」

「仕方ないな、早くしろよ」

男という奴は……、と闇の女帝は非常に呆れ返っていたが、それでもこの馬鹿のおかげで潜入には成功したのだ。それだけは良しとするかと思っではいたが、どうも自分を抱えてる手つきが何となく厭らしい気がする。おまけに若干鼓動が早い気がするのも気の性ではないようだ。

そして、意外にも早くドアのガチャリという音が響いた。闇の女帝はすぐにでも仕掛けるべきかと思っただ、まだだとグツと腕を捕まれる。

「何だ、交代の時間か？」

どうやら複数いるようだ。確かにこれですぐに騒ぎを起こすというわけにはいかないと思っただが、条件反射とは恐ろしいものである。

「いや、お前達もこの女!!」

闇の女帝に触れようとした瞬間、彼女はヒールでSPの顔に強烈な蹴りを入れると、ストンと森の腕から下りた。

おいおい……、といったげな顔を森は浮かべるが、やってしまったものは仕方ない。彼女はいつものように威厳たぷりに告げた。

「趣味の悪い奴らだ。おまけに天宮龍並の男もいないか」

「貴様……!!」

SP達が発砲する前に森はサイレンサー付きの銃を発砲し、SP達は銃を取り落とす。そして、その取り落とした直後に、森は肩に担いでいたライフル銃で腹部を殴って彼等を悶絶させたのだった。

「さて、片付い……」

言い終わる前に史上最低温度が襲来した。もちろん、呼び寄せているのは女王様である。森は油の切れた機械のような音を立てながら闇の女帝の方を向く。

「菅原森」

「はい……」

「随分好き勝手に妾に触れてくれたな」

「その……」

いつもなら触らなかったら男じゃない!と即座に答えるが、答えた瞬間に自分は消される。

しかし、彼女は意外にもすぐに消そうとはしなかった。

「まあ、よい。貴様はどの道死ぬのだからな」

「えっ？」

「そこにいるなら姿を見せたらどうだ、鳳凰！」

彼女がそう叫んだ直後、鳳凰は姿を現したのだった……

第二十五話：天上天下、唯我独尊主義（後書き）

さあ、今回は森と闇の女帝のギャグでしたがお楽しみいただけただけでしょう？

この二人、実は菅原財閥と裏社会ということで交流があったりしています。

というより、かなり使いやすい捨てゴマとして使われてるような……

因みに宮岡さんと桜姫は非常に優秀なので、彼女がわざわざ自分の元に招いているという。

桜姫にはシャンパンを振る舞うぐらいですからね。

でも、まさか二人の前にいきなり鳳凰が登場！

当然闇の女帝とのバトルは避けられません！

龍達は間に合うのか！？

第二十六話：別行動

突如現れた鳳凰に森と闇の女帝は恐怖を感じることは無くとも、動揺するには十分な威圧感はいき付けられていた。背中に冷汗が伝うのを感じながら、森は臨戦状態を保ったまま言葉を搾り出す。

「おいおい、いきなり大将の登場かよ……」

「大将ではない。こいつは番人だ。それも腕の立ち過ぎるな……！」

二百代前の記憶を思い出しながら闇の女帝も力を集中し始める。龍ほどではないが、静か過ぎる強き力で相手を捉えて来るこの覇気は全く変わっていない。

だが、どこか不安定で危ない、しかし、それを掴ませることのない雰囲気闇の女帝は見逃さなかった。

「鳳凰、貴様は現代で何のために戦う？」

「全ては我が主のため、それ以外に我等鷹族が戦う理由などない」

「その誇りだけは相変わらずだな。では、お前の主とは誰だ」

「この機密院の総主である」

「あんな馬鹿の名など聞きたくもない」

そこまで馬鹿だと言われ、名前まで聞きたくないほど毛嫌いするなんてすげえな……、と森はある意味関心した。

自分に対してもいつも馬鹿とか死ねなどのありとあらゆる暴言どころか、実際に行動に移すまで彼女は容赦ないが、それでも自分の名前をフルネームで呼んでくれているあたり、まだマシな存在なのかもしれない。

ただ、闇の女帝にそれを言ってしまったえば、間違いなく死にたいのか？と、あのおっかなさ過ぎる銀の鎌が出てくるので言わないが……

「闇の女神、いや、彩帆殿。主は貴女を御所望です。どうか」

「断る！　だが、戦う前に答えよ。光帝の懐刀であったお前が何故あんな馬鹿に仕えている？」

「……ここは現代。光帝亡き今、我等一族は鷹族の主に仕えるのが義務」

「融通の効かぬ男だ。通常なら沙南姫に仕えれば良いものを」

「天界を滅ぼす要因となった姫君にですか？」

その答えに闇の女帝の顔は引き攣った。

今から二百代前、天界が滅びる最後の戦で、天空王をかばい沙南姫は彼の目の前で刃に貫かれて命を落とした。それに龍の持つ天の力は暴走し、天界そのものを消し去ってしまったのである。

ただ、光帝は最後の戦前に殺され、確かその時鳳凰は……

「菅原森」

「ああ」

「お前は最上階の馬鹿を張り倒して来い」

「はっ？」

「鳳凰は妾が天宮龍がここに辿り着くまで食い止める！」

「食い止めるって……！」

その瞬間、闇の女帝の髪はふわりと揺れ、地面に出来た人が二、三人飲み込まれそうな闇の穴から銀色の大鎌が彼女の目の前に現れた。そして、それを掴んだ瞬間、彼女の体は闇に包まれ、闇の女神

として覚醒する！

「おい！」

「良いから行け！ 邪魔だ！！」

厳しい口調になるのはそれだけ激しい力を解放するから。森はそれを理解して警備室の外に出るが、鳳凰はそれを追い掛けようとはしなかった。おそらく、その必要性を感じていないからだろう。

闇の女神はそれには触れず、キッと鳳凰を睨んで対峙した。

「鳳凰、言っておくが加減はせぬぞ」

「……出来れば貴女とは戦いたくない。そのまま主の元へ」

言葉を遮るかのように闇の女神は衝撃波を放ち、それは鳳凰の頬にうつすらと傷を付けた。完全に避けきれないことはなかったのだろうが、やがては主のものとなる女神に対しての彼なりに礼儀を払ったということなのだろう。

「その言葉二度とほざいてみよ、八つ裂きにするぞ！」

闇の女神自体は避けられなければ、本気で八つ裂きにする気満々だった。とにかく鷹族の主なんかに触れられたくもないといった感じで。

すると、鳳凰は腰に帯びた何とも上品な宝剣を抜く。一見は鑑賞用として楽しむといったようなものだが、刃に刻まれた古代文字はそれがお飾りのものではないと語っている。

「そちらがその気なら、こちらも加減はしない」

二人の刃は交わり高らかな音を響かせるのだった……

その頃、バーティ―会場となっている棟の前で盛大に暴れていた
一行の一部はと言えば……

「オラッ!!」

「やあっ!!」

上空で鷹の化け物と戦っていた翔と紫月は、通常より鋭い風の刃
を相手に叩き付けながら現在は捕まることもなく交戦中である。

通常の風の鋭さでは、鷹の化け物を自由に泳がせてしまうため、
二人は出来るだけ翼を狙って攻撃を繰り返していた。

「墜ちろ!!」

「ぐああゝゝっ!!」

あくまでも翼を狙って攻撃を繰り返しているはずなのだが、コン
トロールと集中力に欠ける翔の攻撃は翼には全く当たらず、鷹の化
け物の胴体の一部ばかりに当たっていた。結果オーライではあるの
だが……

「西天空太子ゝゝ!!」

「うわっと!!」

胴体に当たったため、墜落せずにそのまま突っ込んできた化け物
の爪を横に飛んで避け、翔はさらに風を操って化け物の上を取ると、
後頭部に強烈な蹴りをお見舞いして地上に叩き落とした。

ただ、そんな一連の動きをバッチリ見ていた龍はきちんと翔に忠告しておく。

「翔！ やられて落ちて来るんじゃないぞ！」

「分かってらいつ！！！」

といいながらも、翔の油断癖で紫月に迷惑をかけなければいいが、と思う。

しかし、そんな余裕しゃくしゃくな龍に、翔達から地上に叩き落とされて気絶しなかった化け物達が龍を取り囲んでいた。

「天空王……！」

「引け」

「ふざけるなあ！！」

「引けといってるんだ！！」

「……！！」

まさに一喝、たったそれだけで化け物だけではなく近くにいた軍隊までが泡を噴いて気絶する。

本気を出せばまだこんなものではないが、今は出来るだけ力をセーブしておきたいという気持ちはあった。被害者が聞けば真っ青になるところだろうが……

「龍ちゃん、本当に容赦ないわよね……」

「いや、あれでもまだ良い方だと思うよ。だって、純君が戦ってるぐらいだし」

「龍といえども力は溜めておきたいんだろうな」

いつもなら龍が重力の結界を張ってくれるところだが、今回は柳が高熱の結界で全員を銃弾から守っていた。

もちろん、森の中ということもあり、自然界の女神をだった紗枝を守ろうと木々や蔓も活発に動いてはいるのだけれど。

「だけど、啓吾と秀ちゃんは大丈夫かしら……」

「それはあの二人がケンカするという意味か、それとも島半分ぐらいは消し飛ばす可能性が高いという意味でかい？」

土屋は笑いながら聞き返した。当然、その二つは紗枝の質問の意味に含まれているが、彼女の心配事はもっと別だ。

現在、シスコンと腹黒も別行動をとっている。敵の分散という理由もあるが、わざわざ反りが合うか合わないか微妙な二人が共に行動しなくてはならなくなった理由もあるのだ。

「あっちゃんも人が悪いわよね。あの二人が例のオカマ街を通ってパーティー会場に乗り込むというのに……」

「じゃんけんで決めた結果だから仕方ないさ。だけど、いろんな意味で適役だからね。この情報が正しければ尚更いいんだけど……」

宮岡のパソコンに届いていた一つの情報、それがまた今回の鍵の一つとなる……

第二十六話：別行動（後書き）

遅くなってすみません！

データが一回飛んで打ち直しになってしまいました……

そんな感じで、今回はついに闇の女帝VS鳳凰が始まりました！

その結末がどうなってしまうのか、少し引っ張ります（笑）

そして、龍達も戦闘中、というか威圧で片付けてる悪の総大将です……

化け物に泡を噴かせる風格って、龍自体は一番常識人でいたいらしいですが、どうもそれとは程遠いという……

次回は秀と啓吾兄さんのお話。

オカマ街にいった二人がどんな悲惨な目に遭うのかお楽しみに☆

第二十七話：オカマ街

じゃんけんで負けてオカマ街へと来ていた秀と啓吾は来た早々に囲まれてしまい、一旦は抜け出したもののまた囲まれを繰り返して珍しくダメージを受けていた。

ただし、ダメージというのは肉体的ではなく精神的にである……

「……啓吾さん、パーティー会場には僕一人で乗り込みますから、ここは啓吾さんにお任せします」

「お前ならこいつらぐらい一瞬で燃やせるだろう？　日頃のストレス発散にでも使え」

「だったら啓吾さんの方が適役ですよ。さあ、遠慮せずにやってください」

「だからいいって言ってんだろ？　俺はオカマ嫌いなんだよ！！」

そう、全てはその一言に尽きる。

啓吾も性同一性障害とか、女形とか、ただ単にお笑いとしての女装というぐらいなら認めている。おまけに綺麗なニューハーフなら感心すら覚えるぐらいだ。

しかし、いかにも厳つい男がド下手な化粧をして、危険過ぎる色香を漂わせてそちらの道に引き込もうと襲い掛かって来られては、オカマが嫌いだと叫びたくなっても無理はない。

「うぶなお兄さんね。今日はバレンタインデーだし、チョコレート漬けにでもしちゃおうかしら？」

「啓吾さんは汚れてますよ」

「お前なんか真っ黒だろうが」

こういう時でも互いをけなし合うことは忘れない。というより、自分達がそんな目に遭わされるなんて想像もしたくないのでけなしあつてた方が楽だ。

しかし、秀は思考を切り替えて柳のことを思えば微笑を浮かべた。

「チョコレート漬けですか。柳さんにやってみるのはいいかもしれませぬ」

「おい、次男坊……!! 何をやるって?」

「決まってるでしょう? チョコレートと一緒に柳さんを頂こうかと」

「デメエ……!!」

「啓吾さんだって紗枝さんにやるでしょう?」

「やんねえよ! チョコレートなんかなくてもあいつは十分甘い」

本人達が聞いたら間違いなく茹蛸になるか怒るかだが、一番聞かなくて良かったのは史上最強の恋愛初心者殿だ。

真っ赤になるだけではなく、沙南にどうするのかというツツコミが一行から入り、さらに突っ込んだ話にまで間違いなくなっていただろうから……

そう言い合いながら何とかいつもの調子に二人は戻ってきたのだが、そう現実には甘くなかった。

「お兄さん達、可愛いから教えてあげるけど、機密院に逆らわないほうが身のためよ? じゃないと御人形さんにされてしまうからね」

ウインク付きの発言に二人はかなりのダメージを受けた。精神攻撃とはいっても以上にきつい……。だが、それでも二人はギリギリの精神で耐えた。

しかし、精神攻撃に関する痛恨の一撃がやって来る。

「だけど、ここで諦めるなら私達が調教して可愛がってあげる。すぐに快感に目覚めるわよん」

「啓吾さん！ もう僕はダメです！ 柳さんは幸せにしますからここで骨を埋めてください！」

「いろんな意味でふざけんな！ それに俺は調教したいタイプなんだよ！ 死んでもこんな奴らに好きにされてたまるか！！」

嫌悪感と欲望と本能がまぜこぜになって、二人は初めて敵前逃亡まで考えた。こんな時に龍がいてくれたら相手を威圧して終わったのかもしれないと、二人は心の底から助けすら求めたい気持ちになった。

だが、それはオカマ達にとっては宣戦布告と取られたようである。少し低い声色で、オカマの頭領とでも言うべき厳つい男が二人の意志を確かめる。

「つまり、あなた達は私達の御人形にはならないのね？」

「なるか！！」

「拒否します！！」

即答で答えたときに空気が変わった。冬の夜風に殺気が混ざり始め、それに二人もようやく落ち着きを取り戻す。むしろ、その空気こそが心地好いと感じてしまうほどに。

「そう、だったら……」

オカマ達は顔付きを変え、手に様々な武器を取る。その中に鞭やらチェーンやら、蠟燭の類があることには目を伏せておこう。

「力付くでなっってもらわよ」

「次男坊、今回だけフォローしてやるから一気に消し飛ばせ！」

「今回だけ礼を述べさせていただきますよ。触れられたくもないですからね」

二人は臨戦体勢をとり、突っ込んで来るであろうオカマ達と対峙した。いくらオカマといえども生身の人間。肉体の強度も力も秀の方が完全に上だ。

だが、オカマ達はただの人間ではなかった。

「南天空太子、啓星、自分達のみが現代で力を覚醒させていると思わないことよ」

また、二百代前の名前だ……、啓吾は心の中でそう呟けば、オカマ達はみるみるうちに巨大化していき、ついには鷹の化け物へと姿を変えた。どうやら、人間の言葉を話す化け物とは彼等のことらしい。

しかし、秀の感想は別視点だった。しかも最も過ぎる意見だ。

「……鷹族って、オカマが多かったんですか？」

「いや、これはたまたま現代で目覚めたんじゃないかねえのか？ 鳳凰がオカマだったら引くだろう？」

「兄さんと戦ってほしいとも思いませんよ」

それは啓吾も同感だが、そろそろ無駄口を叩いてる暇はなさそう
だ。彼等も鷹族というのはならそこそこの力を持っており、啓吾も全
て重力で縛り付けることは不可能なのだから。

「次男坊、面倒だから覚醒だけはするな」
「分かってますよ！」

次の瞬間、秀か指を鳴らせば爆炎が上がり、それを合図に化け物
達が襲い掛かってきた！

「身ぐるみ剥ぎ取ってやるわ！！」
「死んでも御免です！！」

振り下ろしてきた剣を秀は軽やかに避けて宙で一回転すると、炎
を纏った足で火炎放射を放って化け物の身を焦がす。

そして、空中での身動きが鷹族より劣るため、その隙について秀
に後から別の化け物が襲い掛かってきた！

「南天空太子！！」
「おっと」

秀の重力を操り、啓吾はその攻撃を避けさせる。そして、それか
ら解放されると、秀は屋根を一蹴りして襲い掛かってきた化け物の
鳩尾に強烈な一撃をお見舞いして悶絶させた。

「先に啓星を始末しろ！！」
「だからって何で俺の方にはそっち系ばかりが集まって来るんだよ
……」

「細い腰がタイプだからよ!!」

「答えんなあ!!」

「グオオッ!!」

化け物の姿をしてそんな危険過ぎる言葉を吐かれた啓吾は、目を青く光らせるまで力を解放して化け物達を沈めた。

どうしていつも自分はそんな人種に好かれるのかと、それは苦い過去を思い出しながら……

「そこまでになさい! 柳泉と自然界の女神を消し飛ばすわよ!」

「兄さんが傍にいてそんなことが可能だと思いますか?」

「ぐはあっ!!」

寧ろ手を出したら、死ぬだけで済むと思うなという殺気に当てられ、化け物達はさらに強烈な一撃をお見舞いされる。

「だったら細菌兵器を使うわ! あなた達がここに来たのもそのためでしょう!」

それにはピタリと二人は止まった。ただ、残す敵はオカマの頭領一人になってはいたが。

「やっぱりあるみたいですね」

「まっ、じゃなければこんなとこに来る必要はなかったからな」

二人がここに来た理由は細菌兵器の有無を確かめるため。そして、出来ればその破壊をという命令を受けたためだ。土屋が秀と啓吾が最も適役だと言ったのもそのためである。

「どうするの? 一体どこで起動するか分からないわよ?」

下手をすれば龍達の元に細菌兵器があるかもしれないと頭領は脅すが、それが通じる相手だったら冷徹非道の参謀なんて代名詞が秀に付くはずがない。

それを証拠に、秀は全く動じることもなくあっさり切り替えした。

「やったらどうですか？」

「なっ!？」

「僕達がここに来たのは、あくまでも細菌兵器があるかどうかを確認しに来たまでのこと。あなたが使ったとしてもおそらく僕達は覚醒するか、最悪の場合は兄さんが天を落として世界を破滅させるかのどちらかですし」

確かにそうだな、と啓吾もまったく脅しには動じなかった。寧ろ、やった瞬間に全てを消してやるつもりだと睨み返す。

「また、天空王は世界を破滅に導くというの……」

「その選択はあなたに掛かってるだけのこと。だいたい、天を統べる王に刃向かうあなた達の方が問題でしょう？」

空を自由に飛べるというのにケンカを売る馬鹿には、罰の一つぐらいお見舞いされることぐらい当然です」

こちら手を出されなければ干渉しないというのに、と言わんばかりに秀は答えるが、鷹族にとっては全て不条理な理由にしか聞こえていないわけで……

「でも二百代前、私達鷹族には罰を受ける理由など存在しなかった……!」

「えっ？」

「お前達天空族のおかげで、そして沙南姫の性で！！ 我が一族が……！ 何より隊長がどれだけ苦渋の決断をさせられたと思うのだあ……！！」

一体、ということなのかと思ったが、秀は向かってきた頭領に火球を放って飛び上がり、後頭部を蹴って地面に沈めた。

そして、何やら思い当たることのありそうな啓吾に秀は尋ねる。

「……啓吾さん」

「ああ、もしかしたら鳳凰は……」

真実は、二百代前に……

第二十七話：オカマ街（後書き）

はい、いつもに増してある意味苦戦していた秀と啓吾兄さんでした（笑）

二人とも美形でかなりオカマ受けしそうな容姿の持ち主らしいですね。

特に啓吾兄さんはそれで辛い過去が……

さて、二人がオカマ街に来たのは細菌兵器があるかどうか確かめるため。

やれるものならやってみろと秀は言ってますが、実際はまずいですからね。

きつと彼がまたとんでもない知識をフル活用して潰してくれると思います……

そして、オカマの頭領が言ってた鳳凰の苦渋の決断。

どうやらお話は二百代前に遡るのであります。

因みに天空記本編でも明かされていない、光帝殺害の日に戻りますので、お楽しみに☆

第二十八話…記されなかった歴史

それは二百代前に起こった全てが滅びる前の事件……

その日、太陽宮に沙南姫の姿がなかったのは、たまたま天宮に彼女が遊びに行っていたからだった。しかし、もしここで彼女がいたのなら、また歴史は変わっていたのだろう。

「鳳凰殿」

「これは鳥の女神殿……」

夜に訪れた鳥の女神に鳳凰は頭を下げる。凜とした雰囲気印象的な少し冷たいイメージを与えるような女神だが、人を慈しむ女神であり、鳳凰も彼女には主と同等の礼を払っていた。

もちろん、鳥族の頂点に位置する女神でもあるため、自然と鳳凰も頭を下げてしまうのだが。

「御務めご苦労様です。鳳凰殿」

「いえ、鳥の女神殿こそ」

月並みな挨拶を交わして鳳凰は頭を上げると、どこかやつれたようなイメージを彼女から受けた。連日の戦が彼女を弱らせているのかもしれないが……

「少し御瘦せになりましたか？」

「……そうかもしれません。多くの鳥の民族が戦に向かって傷付いていきますから……」

悲しそうに笑うからこそ余計に見ていて痛々しくなる。彼女はいつだって戦となれば先陣をも任せられる女神だ。そのために自分の配下となる者達の死を間近で見なければならぬことも少なくはない。

「主上は貴女に何度も討伐令を出されてると聞きます。ですが、少しお休みになられた方が……」

「ええ、ですから……」

ふわりと鳥の女神は鳳凰の胸に飛び込んでそっと背に腕を回す。それに鳳凰も少々驚いたが、すぐに抱きしめ返すようなことはしなかった。それは彼にとっては無礼な行いだと位置づけられていたから……

「今宵は……あなたのもとで休ませて下さい。すぐに戦となります、その前にあなたと……」

「……鳥の女神殿、それは許されることではございません。鳥族の長である貴女と光帝の近衛兵である私、いや、武帝の情けで生まれた私とでは釣り合いません。どうかお察し下さい」

「鳳凰殿は、私が御嫌いですか？」

胸をついて来るような言葉に鳳凰は何も返せなかった。嫌いなわけがない、光帝の近衛兵として拔擢されていなければ、彼女に仕えたいとすら思ったことさえある。

だが、武人としての自分が彼女の望みに答えることは出来ない……

「鳥の女神殿、私の主は光帝であり貴女ではない。どうか……」

「私は……、鳳凰殿を愛しています……。それは迷惑でしかごさ

ませんか？」

「……それは身にあまる誉れです。でも、私では貴女を幸せには出来ません……」

武の道にしか生きることの出来ない鳳凰にとって、鳥の女神を幸せにすることなど不可能でしかないと分かっていた。

障害があるからだけではない、光帝と鳥の女神を秤に掛けられたとき、自分は真っ先に主の元へ駆け付けるに違いないと分かるからだ。

「……でしたら一つだけ我が儘を聞いてください。次の戦で私は命を落とすでしょうから……」

「女神殿……そんなはずは……」

「相手は天空軍。そして、あなた方の敵となります」

「馬鹿な……！ だったら何故ここに……！」

戦前の敵陣に鳥の長が乗り込むなど自殺行為もいいところだ！

それに一人出来たのなら尚更、裏切り者として殺される事だって考えられるというのに……！！

「それでも鳳凰殿に思いを伝えたかったのです。ですから、一度だけでいい、口づけを与えてください……」

自分達と戦って鳥の女神が生き残れる可能性は極めて低い。自分の民族が天空族に討伐された時でさえ非情に徹し切れたというのに、彼女にはとてもそんな感情を抱けなかった。だが、鳳凰はやりきれない表情を隠すことなく最後に尋ねる。

「私達の元へ貴女だけでも投降出来ないのですか……！」

「……貴方が光帝を守るように、私にも長としての務めがあります。」

だから……！」

鳳凰は力強く彼女を抱きしめた。冷静な彼が戦以外で初めて見せるような必死さを彼女にぶつける！ それはここで彼女を失いたくないと思うからこそだ。

「でしたら、いま貴女を拘束します！　そして、貴女を戦場へは行かせない！！」

死ぬことを覚悟して彼女が戦地に赴くというのなら、今この場で拘束してしまえばいい。そして、この戦に勝てば彼女は何者にも囚われる事もなく自由になれるのだから……

「鳳凰殿……」

それはほんの数秒だけの幸せな時間だった。鳥の女神の望みは叶えられたその直後、惨劇は起こる！！

「きゃああああ！！」

「敵襲！！　神兵だあ！！」

「光帝をお守りしろ！！」

怒声と悲鳴が太陽宮に響き渡る！　鳳凰はすぐに鳥の女神の手を引いて、まずは彼女を安全な場所へと匿わなければならぬと駆け出そうとしたが、彼女は一步も動こうとはしなかった。

「鳥の女神殿、ここは危険です。貴女なら天空王が匿ってくださいます。どうか、ここからお逃げ下さい」

「それは出来ません……」

「何故……！」

喉元に突き付けられた細剣が答えだった。彼女が次に戦わなければならぬのが天空軍。そして、それに加勢する光帝の勢力も当然敵であるということ。何より、いま彼女は殺気を自分に叩き付けている。

「何故このような事を……!!」

「主上の命令だからです……!!」

それが答えだった。主上はついに自分達を滅ぼすために動き始めたということ、そして、一番の狙いは天空王だという噂も本当だったのかと彼は悟る。

先程の言葉も、自分を光帝の元へと行かせない時間稼ぎだとすれば随分落ちたものだと言いたくなかったが、彼は主の強さも心得ていたため焦りも見せず静かに彼女を見据えた。

「剣を引いてください、鳥の女神」

「引きません。そして、刃向かうというのなら……!!」

剣閃が交わる、力が衝突する、だが……それは彼女が覚悟していた未来を彼女自身が引き寄せた結果だった……

そう、最初から決めていたのだ。だからこそ、彼女はほんの一瞬だけでも愛しきものの愛に触れたかったのだ……

「……やはり、あなたは武人ですね」

穏やかな笑みを浮かべたあと、彼女の衣は赤くドンドン染まっていた。ただでさえも達人の域に達する鳳凰の斬撃に彼女は迷うこ

となく飛び込んだのだから……!!」

「でも、どうせ命を落とすなら、せめて……愛するあなたに殺されたかった……」

「女神殿……!!」

崩れた鳥の女神の体を受け止めるが、自ら致命傷を負いに飛び込んできた彼女を救う方法など鳳凰は持っていなかった。それはどんな名医ですら諦めてしまうほどの斬り傷で……

しかし、彼女は呼吸を乱しながらも悔いてなどいなかった。愛するものの腕の中で息を引き取れるのだからと。死が近付いて来る意識は朦朧とするが、それでも涙と一緒に思いは溢れ出す……

「私は……ずっと……、貴方、のそばに……寄り添……ていた、かった……」

「女神殿……？　女神殿……!!」

その後、太陽宮は壊滅に陥り、鳳凰は主も鳥の女神も守れなかったことにより自害した……

しかし、この悲しき事件の全貌は天空記に記されてはいなかったのである……

第二十八話：記されなかった歴史（後書き）

おっと、今回は龍達が全く出て来てないぞ！？

というより、二百代前の鳳凰と鳥の女神の悲しき恋物語となつてしまひまして……

鳳凰が下した苦渋の決断とは鳥の女神を殺してしまったことみたいですね。

思いが通じてても太陽宮の襲撃に荷担した鳥の女神をバツサリ斬るといふ……

普通は出来ません、そんなに早い切り替えなんて出来るわけがございません。

だけど、ためらいなく斬ることを選んだ鳳凰だからこそ、鳥の女神は彼を武人だと言ったのでしょうが……

さて、そして気になって来るのが現代の鳳凰の事情。

彼が鷹族の主に付き従つてゐる理由と現代に鳥の女神は転生しているのかどうかということですが……

また謎が増えたんじゃないか？？

第二十九話…プライド

オカマ街である意味いろんなダメージを受けつつも勝利した秀と啓吾は、出来るだけまともそうなオカマの一人を尋問して、ようやく巨大な細菌兵器が置かれていた地下室に辿り着いた。

全長二メートルぐらいの機械にガラスケースに入った細菌が一体何なのか、その細菌名まではわからないが、とりあえず破壊しておかないわけにはいかないのだが……

「啓吾さん、折角だからこれで死んでみます？」

「ふざけんな！」

いくら重力を操れようとも、そんなものを使われて無事でいられるわけがない。当然、天宮兄弟もこの類を受けて無事というわけにもいかないだろう。

「てか次男坊、破壊出来んのか」

「そうですね。僕が灼熱で塵にするのも一つの手ですが、折角ですから実験しましょうか」

秀はコートのうちポケットから銀色のコンパクトケースを取り出し、その中から青色に発光している試験管タイプの注射器を選んだ。

その他にも怪しそうな液体や啓吾でも知ってる毒薬があったが、そこにはつつこまないことしておく。

「何だそれ……」

「細菌です。名前は啓吾君といいます。僕が開発した細菌なんです

けど」

「おい……」

「まあ、これでイケると思いますけどね」

一応、啓吾君と名前を付けたぐらいですし、と絶対面白がって作ったに違いない細菌を秀は細菌兵器に注入すると、ガラスケースの中がみるみるうちに青く発光していく。

どうやら、啓吾君は人体に有害な細菌を無害な細菌に変える働きを持つ代物らしいが、突然ガラスケースの中が何やら赤い霧状のものに変わり始める。

「おい、次男」

尋ねる前に秀はパチンと指を鳴らし機械そのものを一気に消し炭へと変えた。おそらくこの高温だ、細菌自体も消えたのだろうが……

「はあ……、やっぱり啓吾君ですよ。爪が甘かったみたいです」

役立たずだったな、と言いたげな顔で啓吾を見て来るその顔に啓吾は上等だと言わんばかりにブチ切れた!!

「デメエ……! 本気で死ね!!」

「いいでしょう、燃やしてあげますよ!!」

そして、オカマ街が完全に崩壊したことは言うまでもない……

一方、闇の女神が地の理を生かすため、宿泊棟の外で鳳凰と戦闘を繰り広げていたが、それをもってしても息が上がっていたのは

闇の女神の方だった。

「はぁ、はぁ……！！」

白銀の大鎌を構えて鳳凰と対峙していたが、通常肉弾戦は鳳凰の方が確実に上であり、ならば闇の力を解放して闇が鳳凰を飲み込もうとしたが、それすらも届きはしなかったのだ。

さすがにこのままでは、龍と合流する前にこちらがやられてしまいかと闇の女神は思うが、少しでも時間を稼がないわけにはいかなかった。

少なくとも、今ここでやられてしまえば森にまで危害が及び、あの鷹族の馬鹿主を叩くチャンスが一つ潰されるには違いないのだから。

「闇の女神殿、それ以上の力の消耗はお体にも負担が掛かるはず」「ふざけるな！ 妾を愚弄するならその喉元を切り裂くぞ！」

再び闇の女神は鳳凰に闇の力を放つが、彼は手にしていた宝刀であっさりとそれを切り裂いた。

そう、彼に闇が届かない理由はその宝刀が力を切り裂くものだから。しかも、宝刀を奪おうにも彼の身のこなしがそれをさせてはくれない。

つまり、どうあがいても闇の女神に勝ち目はないに等しいのだ。

「闇の女神殿、私は主にあなを送り届けた後にもまだ任務があります。そろそろ御覚悟を」

「まだ言うか！！」

「……我等鷹族は主のために存在するもの。そして、主はあなたを手に入れ裏社会の権力も欲しています」

鳳凰はその目を鷹のように赤く輝かせた。しかし、姿は鷹の化け物には変えず、ただ龍にも劣らない覇気だけを闇の女神に叩き付ける。

「闇の女神殿、大切な腹部を刺されたくなければ現代の姿に戻り投降してください」

「……！！ 鳳凰……！！ 貴様は本気で地に堕ちたか！！」

「あの時、鳥の女神殿を殺したときには堕ちました。今更、どのような汚名を受けようと構いません」

本気だ、そう悟るには十分過ぎる目だった。そして、おそらくこの男は現代での自分の秘密を握っている……！！

「……鳳凰」

「はい」

「お前は……、本当は誰のために戦っている……」

そう告げて闇の女神は現代の闇の女帝の姿に戻り、崩れ落ちそうになったところを鳳凰が支えた。それから一糸纏わぬ彼女にふわりと自分の衣を羽織らせる。

「……あなたは本当に慧眼でいらっしゃる。でも、守りたいものの為にプライドを捨てられるのは我々鷹族と変わりない」

鳳凰は闇の女帝を横抱きにすると、宿泊棟の主の元へ彼女を献上するため、空間を裂いてその場から消えたのだった。

一方、闇の女帝が鳳凰に敗れていた中、銃弾の嵐の中で生きていた森はと言えば……

「くそっ!! あいつら容赦なく撃って来やがって!!」

「うわああああ!!」

逆ギレとともに投げつけた手榴弾は敵を次々と吹き飛ばしていた。自衛隊といえども、問題行動ばかり起こして戦場によく突っ込んでいた森は実戦慣れし過ぎているため、銃弾の嵐の一つや二つは平然として切り抜けていたのである。

しかし、なかなか上階に進めないことと、そろそろ出てくるであろう、化け物級をどう相手するかということも頭に過ぎっていたが……

「はぁ、こういう時に桜姫あたりでも出て来てくれれば楽に進めるんだけどなぁ」

「では、参りましょうか」

「へっ？」

「うぎゃああああ!!」

突如聞こえてきた凜とした声と共に花びらが舞い散り、それは敵を一気に切り裂いた! そんな芸当をする人物はまさに彼女である。

「桜姫!」

「森將軍、しくじりましたね」

「はっ？」

そして、桜姫は発信機の反応画面を森に見せた。そこにはこの宿

泊棟の最上階に闇の女帝の反応が画面に映し出されていたのである。つまり、彼女は鳳凰に負けたと言うこと……

「鳳凰も彩帆殿のピアスが発信機だとは気付かなかったようで、潰してはいないみたいです」

「そりゃ、本物のダイヤを発信機と見る方がおかしいだろうよ」

森の言うことはごもつともで、闇の女帝はダイヤのピアスに発信機を埋め込むという荒業をやっていたのである。

しかし、時は一刻を争うことは確かだ。鳳凰と戦って負けたと言うことは、おそらく力を使い切ってるということ。彼女も捕まったところで抵抗しないはずはないだろうが、男女の力の差はどうにもならないだろう。

「とにかく、森將軍はすぐに最上階に向かってください。分かっていると思いますが……」

「……おい、まさかマジなのか？」

「ええ、そういうことです。私はここで戦わなければなりませんから」

桜姫は花びらを纏い始めると、空間裂いていかにも森いわく化物級の強さを誇るであろう、烏帽子が姿を表したのであった……

第二十九話：プライド（後書き）

闇の女帝敗北！

さあ、事は一刻を争う展開に！

果たして闇の女帝を救い出すのは一体誰になるのか！

そして、彼女が今抱えてる秘密とは！？

まあ、もう一個の番外編を読まれてる方はあらかじめ予想はついてると思いますが……

でも、書いてるのが十八禁ですからね、読まれてない方はラストをお楽しみに言うことで。

だけど、こんなピンチな状態の時にオカマ街でケンカしてる秀と啓吾兄さん……

せめて早く龍達と合流することを思い出してほしいな。

じゃないと、君達の彼女にだって危険は迫るんだぞ！？

でも、次回は桜姫のバトルをお楽しみ下さいませ☆

第三十話：桜姫VS烏帽子

上階へと続く踊り場で森と桜姫の目の前に現れた烏帽子は、霧の力を身に纏い冷たい視線を二人に向ける。桜姫も二百代前に彼女の力がどのようなものか実際に間近で見たことはあるが、その頃よりも現代の方が強くなってる気がした。

おそらく、彼女の力が強くなっている理由は、それなりの肉体改造をされているからなのだろうが……

「また美人くの一が出て来たな……」

「鷹族一の美人と名高いですから。ですが鼻の下を伸ばしてる場合はございません。森將軍は早く彩帆殿の元へ」

「ああ、殺される前に助けに行く」

という前に、彼女を誰かに触れさせると、いくらその人物が敵でも涙が出てくるほど悲惨な目に遭わせられるので、そうさせないためにも急ぎたいところだ。

それに桜姫が先程言っていた意味が事実ならば、無茶をさせるわけにはいかないのだから……

「それと森將軍、お願いがございますが」

「ああ」

「鷹族の馬鹿は沙南様を本妻にと考えていますが、私も二百代前も現代も非常に迷惑を被っておりますので、息の根だけは止めないようになしておいて下さい。私が殺りますから」

桜姫の表情がいつもの百倍は冷たくなった。例で挙げれば、森に

対する辛口を告げるあの表情を遥かに凌ぐ冷たさというところだろうか。

森はただコクコクと頷くと、烏帽子の横を駆け抜けて上階へと向かって行くのだった。

「……攻撃されないのですか？」

「必要はないので、桜姫殿」

辿り付く前にやられると分かっているのに追いつく必要はない。何より、いま目の前にいる桜姫をフリーにしようことの方がよっぽど厄介なのだから。

そして、烏帽子は発する霧をさらに濃くして桜姫と対峙すれば、機密院に潜入して様々な情報を得ていた彼女は戦いを避けられるものならと彼女に提案した。

「烏帽子、主に全てを賭けてみてはいかがですか？　少なくとも、あなた達の目的は達成出来るはずです」

「……桜姫殿、天空王様がお強いことは百も承知。ですが、私達は主のために生きるもの。敵である天空王様に我等の呪縛を解くことなど不可能」

「だからあの馬鹿主の言いなりになっているのですか？　かつては光帝に仕えていたあなた達が、いえ、鳥の女神殿をこの現代でも犠牲にしてまで！！」

いきなり投げられたクナイを桜姫は後ろに跳んで避ける。どうやら鳥の女神については触れてはいけない内容らしい。烏帽子は先程よりもさらに冷たい視線で桜姫を射ぬいてきた。

「桜姫殿、それが隊長が下した決断です。それに鳥の女神殿は二百

代前、光帝を滅ぼす手引をした者。犠牲にすることに迷いなどありません」

「鳳凰殿が彼女を愛していたことを知っているのに、そう言い切れますか？」

「それが鷹族の業。だからこそ、隊長は隊長でいられるのです」

全ては主のために命を掛けるのが鷹族の業、さらにその隊長となればよりその比重は重くなり、主のために周りを犠牲にすることを躊躇うわけにはいかないのだ。

例え、それが自分が愛すべき者だったとしてもだ……

「同じような立場といえども、主が無能だところも違うのですか……」

「天空王様のご立派なことは認めましょう。でも、あの方と沙南姫の性で天界は無に帰した！ 直接手を下さなくとも、あの方達が全ての元凶です！！」

再び放たれたくないを今度は花びらで塞ぐと同時に、辺りは一気に霧で真っ白になった。

どうやらこちらの目をくらませて攻撃をしかけてくるのだろうと桜姫は花びらを纏って感覚を研ぎ澄ます。

「桜姫殿、覚悟！！」

「くっ……！！」

いきなり上からクナイを突き刺そうと襲い掛かってきた烏帽子の攻撃を花びらの盾で防ぐ。しかし、それを受けたのもつかの間、彼女は桜姫の背後から現れその背中を蹴り飛ばした！

「……!! 幻術!!」

蹴った体がすぐに花びらと変わって烏帽子に襲い掛かってきたが、彼女もさすがは元は光帝の親衛隊にあった身分か、それを全て弾き落としてさらに霧を発生させて隠れる。

その一連の動きを見ていた桜姫は、やはり簡単には倒されてくれないかと瞳の色を青く輝かせて力を解放する。

この濃い霧の中では、いくら桜姫といえども戦にくいのは事実だ。それに相手のスピードはまだまだ上がることを彼女は知っているのだから。

「烏帽子、もう一度だけ言います。主に全てを掛けることは出来ないのですか？ 主なら烏の女神殿もあなた達の恩人に当たるフラン社長も救ってくださいます」

「……!! やはり知ったのですか、桜姫殿……!!」

核心を突かれ烏帽子はさすがに表情を歪めた。おそらく彼女のことで、自分達の過去まで掘んだのだろう。思い出したくもない、フラン社長に救われるまで自分達が受けてきたあの忌ま忌ましい過去を……!!

「ええ、機密院のデータバンクの中に鷹族に投与された薬物の数々と過去の人体実験の結果を見つけました。

さらにこの麻薬パーティーもただの取引だけではなく、薬漬けにした者達の売買まで行うために開かれていたものだとも知りましたよ。でも……!!」

桜姫は花びらを烏帽子に叩き付けながら、心の底から同じ立場の

ものとして問い質す！

「何故、鳥の女神殿までがその売買の商品にされてまであなた達はあの馬鹿に従うのですか！ 特に烏帽子！ いくら鳳凰殿が隊長だといえども、あなたは逆らってでも鳥の女神殿を救える力は持っているはずですよ！」

機密院の力は世界的に見ればかなり大きな組織だとは言える。鳳凰もどれだけ強いといっても体は一つ、まずはフラン社長を二百代前のしがらみに巻き込まない為に鳥の女神を売するという決断をしたのだろう。

それに鳥の女神はこの島の中にいるのだ、どこかで必ず救い出せるというチャンスも彼は考えていたに違いない。

しかし、現実は違っている。龍達がここまで暴れて機密院の兵力は落ちているにもかかわらず、誰も彼女を助けに行くどころか龍達を妨害することに専念しているのだから！！

「……鷹族の主だけなら、私達はこのなとこに捕われることも鳥の女神殿を機密院に渡すこととしてはおりません。それに隊長の命令に背いてでも女神殿を助けたいと今だって思っています……！！」

本来なら、この現代で仕えるべき主はフラン社長と鳥の女神だと鷹族の誰もが過去に解放されたあの日に思っていたのだ。

「だったら何故……！！」

力と力が衝突し、それは互いに一步も引かないと閃光が部屋を走り、互いの肌に傷を作っていく。

「……！！ 私達は解放されない運命に遭ったからです……！！」

そう、あの忌まわしき過去と現在は繋がっていたのだから……

第三十話：桜姫VS烏帽子（後書き）

はい、お待たせいたしました！

今回も今回でまたお話の核心に迫ってきたような感じでしたが……
うん、すっかりバレンタインデーから遠退いてきた話になってるよ
うな……

さて、どうやら鳳凰達が鷹族の主に従っている理由の一つにあげられてるのが鳥の女神とフラン社長らしいです。

あつ、忘れられてるかもしれないので、龍達がパーティー会場で会ったデュパン社の社長です。

このフラン社長という人物が鷹族の恩人らしいんですけど、一体過去に何が……というのが次回のお話です。

なんせ、鳳凰が仕えるべき主と認めた人ですからね。

では、次回もお楽しみに☆

第三十一話：武帝

霧の中で桜姫は再び感覚を研ぎ澄ませた。烏帽子がいつ仕掛けて来るかは分からないが、纏った花びらが空気の流れを教えてくれる。

解放されない運命にあるといった烏帽子の言葉が引っ掛かるが、それでも鳳凰が逆らえないほどの力の持ち主を考えれば数名しか浮かんで来ず、龍が彼の味方につくことも考えればやはり機密院に従う理由が浮かばない。

それとも鳥の女神が手元にない以上、まだ裏切れないだけなのだろうか。

「良將軍、聞こえますか？」

『ああ、聞こえてる』

耳につけていたイヤリング型の通信機から宮岡の声が聞こえて来る。それと同時に、向こうは向こうでかなり荒れているらしく、何やら一騒動起こっているらしい。

「どうも鷹族はフラン社長と鳥の女神殿を人質にされて身動きが出来ない模様です」

『その鳥の女神というのは……』

「はい、おそらく現代の鳳凰の婚約者に当たる人物です。彼女が島のどこに幽閉されているのかが分かれば、主と鳳凰の戦いは避けられるかもしれません……」

『島にか？』

「はい、可能性は高いかと思われます。なんせ鳥の女神殿もかなりの美女です。あのクズのハーレム形成には事欠きませんから」

ついに馬鹿からクズにまでおちたのかと宮岡は苦笑する。ただ、彼女の辛口は非常に聞いていて楽しいのだけれど。

『まあ、いる場所で予想が立つといえば宿泊棟の最上階、またはどこかの隠し部屋というところだろうか……』

「隠し部屋の位置は掴めそうですか？」

『やってみるよ』

「お願いします。こちらでも敵を倒し次第合流致しますから」

そして、桜姫は通信を切った。

そんな桜姫の会話を聞きながら、烏帽子は霧の中で警戒を強める桜姫に狙いを付けつつ、あの忌ま忌ましい過去を思い出していた……

それは約十年前、まだ鳳凰も烏帽子も幼かった頃の話だ……

「ぐああっ!!」

「やめてくれえ!! 死にたくない……!!」

「もうこれ以上は……」

来る日も来る日も人体実験。無理矢理こじ開けられた二百代前の記憶と力。ここににいる者達全ての力があればこの監獄を破ることが出来るかもしれないが、それを起こす気力と体力が無いものが多過ぎる。

無論、逆らったところでまた新たな支配者は現れて自分達は人体実験のサンプルとして扱われるだけだが……

しかしその日、大手の製薬会社の社長が実験場を訪れ彼等の運命を大きく変えるのだった。

「また新しい飼い主が来たのか……」

「ああ……、どうもこの実験場を破格の金額で買収したらしいな……」

いかにも上等な服を着て、多くのSPや白衣を着た科学者らしき者達を引き連れてやってきた男は辺りを一望するなり眉を引き皺らせたが、すぐに実験を中止するように促すと全ての者達が彼に注目した。

「聞いてくれ、私はデュパン社のフランというものだ。私は今日から君達の……」

新しい主だとその男は言わなかった。人体実験に携わっていた科学者達はSP達に悶絶させられて外に連れ出される。そして、その言葉を聞いた者達は耳を疑った。

「何って、言ったんだ……」

「確かに言いましたよね……」

呆然としていた被験者達に彼は穏やかな笑みを浮かべてこう告げたのだ。

「今日から君達の家族だ。すぐに君達の身体の治療に当たる。重傷を負ってる者、気分の悪い者はすぐに申告してくれ」

科学者だと思っていた者達は製薬会社に勤める薬剤師や医者だった。さらに実験場にはフランが呼んだ救命部隊も入り込んできて彼

等の処置に当たる。

そんな中、フランはたった一人の少年のもとに歩み寄る。

「大丈夫かい？ えっと……」

「ナンバー306」

「違うよ、君の本当の名前を知りたいんだ」

「……知らない、名前なんて」

「では、自分の過去の名前は？」

どうやら、自分達が二百代前の記憶や力を引き出されて人体実験を受けて来たことも把握しているらしい。それにその少年は自分の名を告げる。

「鳳凰……」

「じゃあ、君は今日から私の息子の鳳凰だ」

「……俺は日本人らしいが」

「ああ、私の妻も日本人だ。ただ、子供が出来なくてね、君が私の実の息子になってくれると嬉しいんだがな」

突然の申し出に鳳凰は啞然としたが、この時期には既に冷静だった性だろう、もっともなことを尋ねる。

「……他にも沢山子供はいるだろう？」

「ああ、彼等も私の家族だ。ただ、君はそこでもかなりの才能があると思ってね、家族を養うには働くことが重要だ。だから学を身につけて欲しいんだ。当然、好きなことをやりながらね」

一見、自分を利用しているような言葉だが、彼から与えられるものはまさに贅沢過ぎるまでの環境だ。何より、自分を見てくる目は

澄んでいて他意がない。

「……そんなおいしい話が」

「ここにあるんだ、鳳凰。私は君の父親なんだから思う存分甘えなさい」

フランは優しく自分に微笑みかけてくれた。

それから数年は本当に幸せだった。鳳凰は留学して学を身につけ、好きだった武道に打ち込み、鷹族の者達はフランの恩に報いるために懸命に働いた。

そして、ついに運命の出会いが日本で待っていた……

「あっ、すみません」

「いえ……」

空港で軽くぶつかった女性に鳳凰は日常茶飯事の事とすぐにまた歩き出したが、ふと、足を止めて振り返ると、そこには転生した鳥の女神の姿があった。

「鳳凰殿？」

「……鳥の女神殿」

現代では別の名前もあるだろう、二百代前は自分が彼女を手を掛けた、それに偶然巡り会った自分を今も思ってくれているはずなど……

そう頭の中で渦は起こるが、そんなものは彼女の涙が全て払拭し

て気付けば彼女を抱きしめていた。

「もう、二度とあなたを離しません……」

しかし、また事件は起こる。鳥の女神と婚約することとなった鳳凰はフランに彼女を紹介すれば、彼はそれは嬉しそうに破顔した。

「そうか、新しい娘が出来るのか」

「父上、ありがとうございます」

「何を言っている。お前が幸せになってくれることが親孝行というものだ」

あの助けられた日からずっと、実の息子として接してくれたフランに鳳凰は再度頭を下げる。

やっと手に入れたのだ、二百代前とは違った幸せを……。これからは、それを守るために生きてらいいのだと……

その時！ 突如、銃声と破裂音が響き渡り、さらに悲鳴や怒声も聞こえ出す！

「社長！」

「鳳凰殿！」

「隊長！！」

何事かと鳳凰は部屋に飛び込んできた自分の部下達に尋ねようとしたが、その前に彼等はその場にバタリと倒れ込む。

「お前達！！」

「父上！ 動いてはなりません！！」

鳳凰の静止にフランは立ち止まり、彼はフランと鳥の女神を背に庇うようにして一歩進み出ると、部下達を一撃で倒した男がスウツと姿を現した。

その顔を忘れたくても忘れられるはずもない。彼の目の前に現れたのは縁を切りたくとも切れない人物だったからだ！

「……ようやく見付けた、鳳凰」

「くっ……！！」

「武帝……！！」

そう、鳳凰の目の前に現れた人物こそ、二百代前、彼の実の父親に当たる武帝だったのである……

第三十一話：武帝（後書き）

はい、大変お待たせしました！

ちよっと遅いんじゃないの！と文句の一つや二つは受け付けますが

……

つい、E r o t i cの方に時間を取られてしまいました……

うん、もう一個の番外編のアクセス数がこっちの倍になってるとい
う恐ろしいことになってまして……

さて、こっちは鳳凰の過去話街道まっしぐら。

龍がここしばらく出て来てないという恐ろしい事態に……

天空記の主人公っておそらく龍なんでしょうけど、周りの暴走ぶり
が半端ないのでねえ……

あつ、でもあと数話で悪の総大将が活躍するはずなので、待ってい
てくださいいね☆

第三十二話：三人の人質

目の前に現れた武帝と鳳凰の勝敗は一瞬で決まった。いや、決まっていたと言った方が正確だった。

「うあっ……！！」

「鳳凰！！」

「鳳凰殿！！」

突如、首筋を抑えて鳳凰はバランスを崩したと同時に衝撃波を腹部に叩き込まれて壁に減り込むほどぶっ飛ばされる！

鳳凰ほどの達人がこんな一撃でやられるはずがないと、フラン社長と鳥の女神はすぐに鳳凰の元に駆け寄れば、彼の首筋に赤く光る呪いの紋様が浮かび上がっていた！

「これは……！」

「私が生まれた鳳凰に掛けた呪いだ。それが有る限り鳳凰は私の支配下からは逃れられん」

「ぐうっ……！！」

さらに強められた呪いの力に激痛が走り鳳凰は立ち上がることに出来なくなった。それから微笑を浮かべながら武帝は近付いてきて、フラン社長と鳥の女神は鳳凰を守るかのように彼を背に庇う。

「ほう、達人の域である鳳凰がこれほど苦戦しているというのに庇うとは……」

「親が息子を庇うのは当然のことだ」

「血の繋がりが無いのか？」

「息子だという事実に変わりはない」

それから武帝は鳥の女神を見下すと、彼女はそれに怯えることなくキッと睨み返した。窓の外を見れば、鳥の群れが彼女に手を出そうとすれば襲い掛かると言わんばかりに羽ばたいている。

「なるほど……、鳥の女神の力は健在ということか……。鳳凰、私はあくまでもお前達鷹族を従えるためにここにきたのだ」

「誰が……!!」

「父親と鳥の女神、どちらが大切だ？」

脅迫に近い問い掛けに鳳凰は言葉すら出なかった。武帝は間違いなく自分が従わなければどちらかを殺すつもりだ。

「お前達鷹族は主である父親を守るべきなら、当然殺すべきなのは鳥の女神」

「させん！ 彼女は鳳凰の妻となるんだ！ こんなところで死なせは」

「いいでしょう」

鳥の女神はすっと立ち上がると、武帝の前に進み出た。しかし、それは殺されることを選んだのではなく、ほんの僅かな望みに自分の命運を委ねる決意をした表情だった。

「武帝、私が人質となります」

「なっ……!!」

「女神殿……!!」

「時は現代、武帝も当時の強さは持たないはず。でも、私は二百代前の償いを終えてはおりません」

「しかし……!!」

「貴方の父親を光帝のように失いたいのですか！」

あの時、鳳凰は光帝が殺される前に駆け付けけることも叶わなかった。それをまた繰り返させることを彼女はさせたくなかったのである。

それこそ、鳳凰が望む幸福を潰してしまうことになるのだから……

「武帝、私が人質になるかわりにフラン社長には一切の手出しはしないと誓えますね」

「もちろんだ。私の目的はあくまでも天空王と沙南姫だからな」

こうして、鷹族は機密院に組み込まれ現在に至るのである……

狙いは完全に定まった。霧の中で桜姫が構えていることを悟り烏帽子はクナイを構える。おそらく勝負は一瞬、桜姫の花びらが先に烏帽子を切り裂くかその前にクナイで桜姫を一突き出来るかだ。

ただし、あくまでも命令は鷹族の主の元に桜姫を差し出すこと。彼女を気絶させる程度に抑えなければならぬ。

「隊長、毒をもって相手を制さなければならぬことをお許し下さい……」

それは鷹族の戦い方としてはあまり好ましくされていないものだった。

武の道をゆく鷹族は基本、相手が毒性の場合と回復にのみ薬は使っても、正当な戦いには滅多に用いず己の力のみで勝負を決める民

族だった。

しかし、それをしなければ桜姫を倒すことなどまず不可能。彼女には花びらの力だけではなく、天空王が二百代前に彼女に封じ込めた天の力の負の部分を持っているのだ。それを使わせては勝ち目などない。

「烏帽子、毒まで使うつもりですか？」

どうやら手の内は読まれているらしい。ただ、桜姫の瞳は青で天の力を解放しようとはしていない。舐められているわけではなく、おそらく使わずに自分を止めようとしているのだろう。

「……お察しのとおりです。桜姫殿、これが最後です。どうか、我等の主にひざまずいてください」

「お断りいたします。私が膝を折るべき主は主以外に必要ございません。それに自分が仕えると決めた主を履き違えて戦う者に私を倒すことなど不可能！」

「……では!!！」

濃霧の中に烏帽子も飛び込むと、桜姫目掛けてクナイを放ち、さらに彼女に一掠りでもと突き立てようとすればそれは花びらの盾に塞がれる！

しかし、烏帽子はそこからさらに霧で自分の身を隠し、背後から彼女に切り掛かった！

「桜姫!!！」

「……!!！」 舞い上がれ!!！」

「……!!！」 きゃああああ!!！」

桜姫にクナイの刃先が届く直前、地上から舞い上がった花びらが烏帽子を切り裂き、彼女は意識だけを残したまま、戦闘不能に陥ったのだった。

それから少しずつ霧が消えていき、花びらの絨毯の上に倒れていた烏帽子に桜姫は近寄って尋ねた。

「烏帽子、勝敗が全てを決めるのが鷹族の流儀に従い問わせていただきます。貴女は何故、鳥の女神殿を救い出せないのですか？」

再度問われた内容にも、もう隠す必要もないと彼女は全てを打ち明けることにした。

「武帝をご存知ですね、桜姫殿」

「ええ、確か鳳凰殿の父と伺っていますが」

「そうです。そして、天空記にはそこまでの達人ではないとされ、隊長も情けで生まれ落ちた子供だと記されていますが事实は違います」「えっ？」

一体どういうことだと桜姫は眉をピクリと動かす。

少なくとも彼女の記憶の中の武帝はそここの達人で、龍や鳳凰に勝てるレベルではなかったと覚えている。それに彼が従っていた弟子達をよく秀や啓星とあしらって遊んでもいたが……

「桜姫殿、武帝は隊長以上の達人、さらに隊長は情けで生まれたのではなく武帝の血を継ぐ道具として生まれたのです。しかも武帝の呪いまでかけられて」

「なっ……!!」

それで全てが繋がった。烏帽子が鳥の女神を救うわけにはいかない理由は彼女だけを助けるわけにはいかないということ!

「私達はフラン社長も鳥の女神殿も当然救いたい。でも……! 隊長も失うわけにはいかないのです!!」

そう、鷹族にとっては鳳凰すらも人質にとられているのと変わらない状況だったのである……

第三十二話：三人の人質（後書き）

はい、すみません、すっかりお待たせいたしました！

久しぶりの更新になりました……

ちょっと忙しかったのでお許しを。

さて、今回は鳳凰が武帝に従い、さらに鷹族が反旗を翻せない理由が明らかに！

そうです、鳳凰は武帝に呪いを掛けられていて戦えないとのこと。烏帽子達鷹族もそりゃ、隊長である鳳凰には絶大な信頼と尊敬がございますので従うしかないよね。

だけど、桜姫が見事に勝利いたしましたして、次回はいよいよ久しぶりに悪の総大将達が登場予定。

まだ蜻蛉という紫月ちゃんを苦戦させた相手も残ってますから、三男坊の活躍もご期待あれ！

第三十三話：麻葉会場

それは桜姫が烏帽子を倒した直後だった。突然空間が歪んだと思っ
った瞬間、烏帽子に衝撃波を放つ者が現れたのである！

「武帝……！」

その名を告げると同時に桜姫は烏帽子の前に入り込んだ！

「くっ……！！！」

「桜姫殿……！！！」

花びらの盾で武帝の攻撃から烏帽子を守り、桜姫はさらに力を解放して武帝に攻撃を仕掛ければ、彼は一旦距離をとった。それと同時に桜姫は烏帽子を抱えて後方に飛ぶ。

「何故……！！！」

「事情を知った以上、あなたを死なせることで主がやりきれない思いをなさいます。それに武帝という権力を振りかざして、二百代前に天空族としても毎回迷惑を被ったものです。当然、その報いは受けていただきます」

ふわりと再び花びらを纏って桜姫は臨戦態勢を整える。烏帽子がやられて増援が来ないということは、鳳凰が龍達の下へ向かっている可能性が高い。さすがの龍も鳳凰と戦って力を消費しないはずがないなら、武帝をここで食い止めておかないわけにはいかない！

しかし、武帝は既に桜姫の力が天の力の解放も含めてどの程度が理解しているのか、口角を吊り上げて彼女に尋ねた。

「花の女神に劣らぬ桜の姫君よ、一度だけ問う。天空王を裏切り我が元へ下らぬか？」

「戯言を……」

「それでもお前の力は買っておるのだ。天空王が認めた従者であり、啓星よりも高い資質を持っておりさらに女だ。私との子供を……！」

花びらが鋭く武帝の頬を切り付けた！ それにスツと武帝の頬から血が流れるが、彼はそれを全く気にも留めなかった。ただ、桜姫の表情は有り得ないぐらい冷たくなっているが……

「その歪んだ顔と年齢を考えてから述べなさい。森將軍以上に性質の悪い殿方など生きている価値すら認められません」

ここに一行がいたなら、間違いなく森はギリギリのラインで生かされているのか……、とツツコミが入っただろう。

「そうか……、ならばたっぷり痛ぶったあと薬漬けの人形にしてやる……」

巨大な覇気が桜姫に叩き付けられ、彼女も完全に力を解放するのだった……

一方、麻葉パーティーの行われている棟の警備員を翔と紫月はあっさり悶絶させ、さすがに末っ子組に見せられない光景もあるだろうと屋根裏に上がってパーティー会場を見渡せば、それはひどい光景だった。

「うわぁ……、悪趣味だな」

「ああ、森がいたら大喜びで踊り出すような光景だが……」

麻薬の取引だけではなく、実際に麻薬漬けにした奴隷やら、さらには今から試そうというような輩までいる。

そのあまりのひどさに医者である龍や紗枝は怒りを覚えるが、怒りのままに暴れることは危険だ。それが分かっているからこそ、紗枝はニツコリ笑って末っ子組に告げる。

「残念だけど、末っ子ちゃん達はちよつと会場内に入るのオススメ出来ないから外で待っててくれる？」

「ダメなの？」

「ええ、小学生には刺激が強すぎるわね。それに万が一葉を打たれたら子供には堪えられないから……」

紗枝の目には、すでに奴隷と化している純達とあまり変わらない年代の子供を見つけて内心煮えたぎるような怒りを覚えていた。まづはあの飼い主と化している男からシバき倒してやろうと心に決めて……

そして、紗枝と同じようにキレかけていた龍もあくまでも冷静でいようと心掛けていたため沙南に促した。

「沙南ちゃん」

「何？」

「君も純達と待っててくれ」

太陽の力を解放すれば問題ないが、リスクが高い以上は彼女も会場内で戦闘に参加させるわけにはいかない。

それが分かるのか、沙南は今回は大人しくする事にした。

「分かったわ」

「純、夢華ちゃん、沙南ちゃんを頼んだよ」

「うん！」

「任せて！」

心強い返事に龍は二人の頭を撫でてやる。この二人がいればあらかたの襲撃は問題なく片付くだろう。

「翔、紫月ちゃん、俺が会場内に重力である程度気絶させるから残りを一気に頼むよ。それと柳ちゃんは結界を頼む」

「オウ！」

「はい」

「わかりました」

会場内の手練はおそらく翔と紫月の二人で十分片付く。それに柳の高熱の結界さえあれば龍も力を温存できる。

「あと、紗枝ちゃんと先輩達は俺の援護をお願いします。そろそろ鳳凰が出てこないとおかしいですから」

「了解！」

そう、出てこないとおかしいのだ。闇の女帝が敵の手中に落ちたことが分かり、おそらく鳳凰が彼女を倒したのだと予測出来る。

しかし、こちらの女性陣が狙いだというなら桜姫か自分達のもとに出てこない方がおかしい。だが、桜姫は烏帽子と戦っているとなればこちらに出てくるはずだが……

「龍兄貴、また悩んでんのか？」

「ああ、気苦労が堪えないしな」

「全く、心配しなくても鳳凰は絶対出てくるさ。だからさっさとケンを済まして帰ってチョコレート食おうぜ！」

「そうよ、龍さん。今年こそはあつと言わせるメッセージを考えたんだから！」

そう告げてくれる翔と沙南の気遣いは有り難い。鳳凰が出て来ないことが何かある気がして深く考え込む傾向にあったから……

「そうだな。まっ、秀と啓吾がもうそろそろ合流してくれるだろうから何とかなるか」

「オカマに捕まってなければ、だけどね」

「紗枝ちゃん……」

非常に楽しそうに告げてくれるが、捕まったら洒落にならないのでは……、と龍は本気で思う。特に啓吾はオカマに対してトラウマまで持つてるようだし……

そんな親友の無事を願いつつ、そろそろ仕掛けるかと龍は翔と紫月に視線を向ければ二人とも準備万端と応えてくれる。

「よし、じゃあ……！！！」

「ぐっ……！！！」

「くっ……！！！」

「体が……！！！」

龍が重力をパーティー会場内にいる者達に掛ければ、一般人は次々と倒れていく。しかし、やはり来ると予測していた者達は臨戦体制を整えれば、天井から二人の高校生が風を纏って飛び降りてきた。

そして、テーブルの上に降りた翔は相変わらずなポーズを決めながら高らかに叫ぶ！

「西天空太子の華麗な武技！　しかと見よ！」

「ふざけるなあ！！」

「よっと！！」

いきなり突っ込んできた男の頭上を踏み台にし、翔は軽く跳躍するところらに発砲してくる男達に流れるような動作で拳打と蹴りを繰り出していく。

「おらあ！！」

「ぐはっ！！」

「うがっ！！」

男の右頬を殴りつけてぶっ飛ばしたあと、椅子の背もたれの部分をボールのように蹴って発砲して来るものにぶつけ、さらに風を纏ってふわりと舞い上がり別の小隊を一人一撃叩き込んで悶絶させた。

「吹き飛びなさい！！」

「うわあああ~~~~！！」

一方、紫月の放った蹴りでS P達は吹き飛ばされて壁に叩き付けられたが、それをものともせず上空へ舞い上がった男がいた。

「紫月ちゃん！　そいつは出来るぞ！　気をつけろ！」

「はい！」

龍の忠告に応じて紫月も上空へと舞い上がる。だが、その男の頬に走っている傷を見るなり彼女はハッとした！

「まさか……!!」

「ターゲット確認……」

男が静かに呟いたと同時に、まずいと龍はその場から一足飛びで紫月の下へ向かう。彼が叩き付けるのは殺気だ!

「今回は致命傷を狙う」

「くっ……!!」

一撃目の蹴りで紫月は地上ギリギリまで弾かれたが、風の力で床に叩き付けられることだけは避けた。それから紫月は強い風を身に纏って二撃目に備えたが、男が上空から急降下してきたスピードにすぐ危険を覚えて後ろに飛ぶ!

しかし、男は床に穴を開けながらもバランスの一つも崩さずに後ろに飛んだ紫月にナイフを突き立てようと突っ込んできた!

「覚悟」

「蜻蛉っ!!」

龍が叫んだ名こそ鷹族でも屈指の武術家、蜻蛉だったのである……

第三十三話：麻葉会場（後書き）

今回も何日待たせてるんだ！との指摘がありそうですが……
はい、とりあえず更新です。

烏帽子との決着がついたと思ってもすぐに武帝と対峙するはめになった桜姫。

本当、彼女はよく働きます。

龍達より今回は動いてるんじゃないか！？

そして、麻葉会場内でも攻防が始まりまして、ついに篠塚家を襲ってきた蜻蛉が出て来ました！

紫月ちゃんでも苦戦した相手、さあ、三男坊が次回どれだけ頑張ってくれるのか！？

だけど啓吾兄さんと秀……、早く合流しないのかしら……
まだケンカ中なのかなあ？？

第三十四話：礼と対価

蜻蛉が紫月を突き刺そうとした瞬間、翔が彼女の前に出て来てナイフを弾き飛ばし、さらに回し蹴りを繰り返すのを蜻蛉は後ろに飛んで避けた。

「翔君！」

「危なかったなあ、紫月」

「危なくはないですよ。龍さん、ありがとうございます」

「いや、無事で良かった」

そう、龍は蜻蛉が紫月を突き刺そうとする前に重力を操って彼の動きを鈍らせたのだ。おまけに紫月も重力で蜻蛉から引き離れたのだから。

そのやり取りに折角かつこよく紫月を守れたであろう翔は、やはり兄の力には敵わず微妙な表情を浮かべさせられるが、紫月はきちんと翔にも礼を述べる。

「翔君もありがとうございます。気持ちには確かに受け取りました」

「兄貴には負けたけど……」

「いつものことですからお気にせず」

それはきついんじゃないか……、と大人達は心の中でつつこむ。ただ、翔はガツクリ肩を落しながらも一応、感謝はされているのだと思うことにした。紫月が素直に感情を表現することなどそうあるわけでもないのだし……

しかし、おしゃべりはそこまでだった。蜻蛉の闘気と龍の覇気が

ぶつかれば、辺りは緊張の糸が張り巡らされるのだから。

「お久し振りでございます、天空王様」

変わっていないと龍は思う。寧ろ、二百代前の蜻蛉となんら変わりもなく、桜姫と同じような感覚すら覚えるほどだ。

ただ、違うのは彼の行動。守るべきもののためということは同じではあるのだけれど。

「やはりお前が篠塚家を奇襲したのか」

「左様でございます」

龍を天空王として接する態度は変える気はないようだ。おそらくそれは沙南に対しても同じ。しかし、沙南がどこにいるのか勘繰るそぶりすら見せない。

桜姫からの連絡で、鳥の女神がこの島のどこかに幽閉されている可能性が高いと聞いてはいるため、おそらく篠塚家を奇襲したのもその性だとは思うが……

「……お前ほどの武人に何故とは問わない。だが、天空王として問う」

心理的には効果があるかは微妙だった。しかし、自分を天宮龍としてより天空王として見ていることだけは定かで、出来ることなら聞き入れてもらいたいと思っただのだ。

「……蜻蛉、引く気はないのか？」

「鷹族の業にて敵前逃亡は出来ません。隊長と戦われるつもりでし

ようが、それもこの蜻蛉を倒さない限り不可能と御思い下さい」

やはりダメかと思う。抱えているものが大きく、まだ人質を取り戻せていない以上反旗を翻すことなど出来ないのだろう。

ならば仕方ないと、龍は蜻蛉と対峙するしかないと力を解放しようとしたが、スッと翔と紫月が龍の前に進み出た。

「龍兄貴、ここは俺がやるから兄貴は先に進んでくれ」

「翔……」

「こいつ以上に鳳凰が強いつていうならちょっと厄介だし、それに俺だってたまには幹部級の奴と戦いたいしな」

「しかしだな……」

自称、天下無敵の三男坊殿は好戦的な笑みを浮かべて申し出てくれた。要するに一度仕掛けた相手と最後までケンカしたいという、いかにも翔らしい理由なんだろう。

ただ、翔だけでは下手を打てば負けると分かっているからこそ、紫月も龍を安心させるために申し出てくれた。

「龍さん、私もここに残ります。必ず追いつきますから先に行つて下さい」

「すまない紫月ちゃん、翔がまた迷惑かけるが」

「いえ、二百代前から慣れてますので」

「おい、何でそんなにスムーズな会話になるんだよ」

それは紫月がしっかり者だからの一言で片付く。翔一人を残していくより、いろんな意味で安心できるからだ。迷惑をかけることだけは申し訳ないが……

しかし、きつと秀達がそのうち来てくれるだろうと思い、龍は先に進むことを決めた。もちろん、忠告だけはして。

「翔、風の力だけに頼るな。それと覚醒は出来るだけするな」

「分かってるって。意識ぶっ飛ばして島ごと吹き飛ばすわけにはいかないもんな」

龍と違い、覚醒時に意識を保てない翔が西天空太子の姿に戻れば、最悪力の暴走でどれだけの被害が出るかわからないのだ。笑っては答えてるが、冗談にならないことは翔も充分過ぎるほど分かっている。

「まっ、心配すんな！ 蜻蛉をぶっ飛ばしてすぐに追い付くからよ！」

翔の顔付きが完全にケンカモードへと変わる。翔なりにいつもよりは気を引き締めなければまずい相手だと、さっきの動きで理解したのだろう。なんせ、相手は紫月より速いことは確実なのだから。

「……分かった。純！ 下りて来い！」

「うん！ 夢華ちゃん、捕まって」

「うん！」

「沙南ちゃん！ そのまま飛び降りろ！」

「分かったわ！」

屋根裏で身を潜めていた末っ子組と沙南は龍の許可も出たと、純は夢華を抱えて飛び降り、沙南は地上にいた龍に受け止めてもらおうとそのまま彼はテーブルを一蹴りして蜻蛉の上を舞い、紗枝達も龍を追い掛けてパーティー会場を後にした。

ただし、蜻蛉は龍達を追い掛けることなく翔と対峙したままだった。

「わざと行かせただろう」

「……隊長と天空王様は互角だからな」

翔に対して敬語は使わないらしい。一応、二百代前は太子だったのだが、どうも翔はあまり太子らしい扱いをされることがないように思う。

まあ、二百代前の翔は戦ばかりで、太子と認められていても怨みを買いまくってた天空族の突撃隊長でもあったのだから、兄達のように敬われる立場とは少し遠くても仕方がないのかもしれない。

「ふくん、でもさ、戦う前に一つ聞きたいんだけどよ、なんで天空王様って敬称を付けてるわけ？」

意外と核心は突いているな、と紫月は思った。鷹族とは何度か好戦したが、蜻蛉は龍に対してきちんと礼を尽くして接していたのは確かだ。

それに対して蜻蛉は一旦沈黙を保ったが、いかにも彼の人柄らしい理由を述べてくれた。

「……どれだけ時が経とうと、光帝への敬意が変わらないからだ」

だから光帝が信頼していた龍に対しても、その態度を崩すつもりはないということなのだろう。

「だったらなんで沙南ちゃんを捕らえようとするんだよ！　沙南ちゃんも光帝の娘だったんだろ？」

「そうだ。だが、沙南姫に礼を尽くすことと我等の現主の望みを叶えることとは話が違う」

「態度は変えずとも、鷹族の馬鹿主に沙南ちゃんは差し出せるってことかよ！」

「そのとおりだ」

「ふざけんな！」

翔は怒声を上げた！　とても筋が通っている話ではないと紫月も思うが、蜻蛉達の立場を冷静に考えればたどり着く答えの一つになってもおかしくはないのだ。ただ、翔はだからこそ怒っているのだ。

「鷹族は光帝を、沙南姫を守ることに命を掛けてたんだろ？　それなのにどうしてそんな馬鹿げたことをしようとする！」

「それが我等の現代での答えだ。我等の守りたいものは過去を犠牲にしても」

「それがふざけてんだ！　おまけに龍兄貴を侮辱してる行為で何が礼だ！」

翔は地を蹴って蜻蛉に殴り掛かると、彼は避けもせず大人しく一発殴られた。分かっているのだと紫月はそれだけで感じ取れた。

ただ、蜻蛉はその一撃だけしか許すつもりはなかった。

「西天空太子、今の一撃で天空王様への侮辱の対価としろ。こちらにも引けぬ理由はある！」

「なっ……！！！」

気付いた時には蜻蛉は後ろに回り込んでいた……

第三十四話：礼と対価（後書き）

どんだけ待たせてるんだー！！

はい、すみません！！

ちょっと最近忙しすぎて……

しかも睡魔に勝てず……

さて、ようやく翔の活躍がやって来ました！

いつも以上にスピードが速い相手に翔君はどう戦ってくれるのでしょうか。

秀と啓吾兄さんがいたら楽に倒せたかもしれませんが、彼等はまだ来ない……

だけど、久しぶりの激しいバトルになればいいなと思います。

最近そこまで長いバトル書いてませんからねえ。

では、次回もお楽しみに☆

第三十五話：翔VS蜻蛉

パーティー会場でこれでもかというほど暴れてるおかげか、テーブルや椅子を破壊するどころか、壁までに輝どころか穴まであけて翔と蜻蛉は肉弾戦を繰り広げる。

ケンカはタイマンにこだわる翔なので、今のところ紫月は参戦せずに風で自分の身を守りながら見物しているが、武術家として鍛練を積んできた蜻蛉に若干遅れ気味である。

ただ、西天空太子として覚醒すれば互角以上の勝負にはなるのだろうか。

「いっ！」

翔は飛んで来るナイフを辛うじてかすりもせず避けていた。秀が本気でナイフを投げて来るより破壊力は劣るものの、テーブルを軽く貫通して地面に深く突き刺さっているあたり、喰らえばただで済みそうにない。

しかし、ナイフを投げた後、すぐに蜻蛉は翔に迫ってきて強烈な回し蹴りを叩き込んで来た！

「うわあっ！！」

側頭部に叩き込まれるのを両腕でガードして止めたが、その重さに耐え切れず翔は壁まで弾き飛ばされる。

そして、それを追い掛けるように蜻蛉も地を蹴って翔に突っ込ん

でいくが、翔が起こした風圧にスピードを緩められ、その一瞬に翔はストレートを繰り出した！

「オラアアッ！」

「翔君！ 後ろ！！！」

紫月が叫んだ途端、後ろを向く隙などなく、翔はナイフの串刺しは上に飛んで避けたが、その直後目の前に現れた蜻蛉に蹴り飛ばされ地に叩き付けられた！

「うわぁっ！！！」

「終わりだ」

「……！！！」

まずいと思ったとき、翔の目は一瞬黄金に輝き、爆発的な風を蜻蛉に叩き付けて彼を弾き飛ばした！

紫月は一瞬、翔が覚醒するのではないかと意識を引きずられそうになったが、何とか翔が踏み止まってくれたお陰で彼女にも影響が及ぶことはなかった。

二百代前の主従関係はこういった場面で特に影響されてしまうのだから……

「……速え」

丈夫過ぎる体と風を身に纏っておいたお陰で痛みと怪我はないが、人の百倍はタフな少年も少し息が上がっているようだ。力を常に使っている性でもあるが……

「風の使い手だというわりには遅いな、それに未熟」

ピクリと翔に一つ青筋が浮かぶ。未熟というのは本人にもまだ自覚があるわけだが、天宮家一の身軽さを持つ翔にとって遅い、と言われることはなかなかショックだったりする。

「兄貴達に比べて未熟なのは認めてるけどさ……！」

というより、あのレベルの戦い方は反則に近いものがあると思う。威圧しただけで敵は倒れるのだし……

ただ、翔は翔なりの戦う理由とプライドはある。

「それでも引けない時もあるんだよな、紫月も取られちまうかもしれないのに」

かもしれない、ということは確かに翔の言うとおりだと思い、紫月は蜻蛉に尋ねた。

「……私もあの馬鹿主のハーレムに含まれてるんでしょうか」

「未来のために連れて来いとは言われております」

「あくまでも未来ですか」

紫月にも一つ青筋が浮かぶ。鷹族の主が巨乳好みだからと蜻蛉が言わなかったのだけは正解だっただろう。

ただ、翔は紫月から感じる殺気に多少なりとも冷や汗を感じるが……

「ですが紫月殿、西天空太子に仕えられるよりはるかに高価な生

活を約束されますが」

「料理も作れない環境なんてこちらから願ひ下げです」

即答する理由が料理と答えてしまう自分が何となく情けない気がした。どうも、翔と付き合っていると受け答えのレベルまで彼と同等になつてゐる気がする……

ただ、蜻蛉は翔の元を離れるつもりはないと理解したのだろう、彼が紫月の元へ突っ込もうとした直後、目の前に翔が飛び出してきた！

「オラッ!!」

先程より速くなったスピードに蜻蛉は驚きながらも、直撃を喰らうことはなく翔の拳は空を切る。その隙を狙って蜻蛉は彼の腕を掴もうとしたが、それは瞬時に残像へと変わった。

「なっ……!!」

「上だぁ!!」

消えたと思った翔は風を使って瞬時に蜻蛉の上を取り、彼の肩に踵落しを決めた！

「ぐっ……!!」

肩に入った重たい一撃に蜻蛉は眉間にシワを寄せたが、地上に着地するなりさらに突っ込んできた翔の攻撃は再度空を切ることとなった。

「……西天空太子」

「鷹族の馬鹿主に言っとけ！ 紫月は俺の大切な奴なんだ！ そう簡単に渡せるかよ！」

「翔君……」

少しだけ紫月はときめく。大切な奴だと叫んでくれたことはとても嬉しい。それに渡したくないと言われるのも告白みたいな感じがする。

しかし、あくまでも天然ストレート少年の発言だということを忘れてはならない。

「それに紫月がいなかったら俺の飯は誰が作るんだ！！」

「やっぱりそこですか！！」

「おわあっ！！」

紫月から蹴り放たれたかまいたちを翔は辛うじて避けた。ある意味、蜻蛉の攻撃よりよっぽど性質が悪いと思うながら……

しかし、秀や純のように素直に好きだからというのも翔らしくはない。愛情表現に違いはあるが、あくまでも自分は龍に似ているところがあるのだから。

「危ないだろ！ 紫月！！」

「翔君がまた人の料理ばかりあてにするからです！！」

「当たり前だろ！！ 今日バレンタインデーなんだから紫月のチョコレートを食いたいに決まってるんだろ！」

「生チョコ食べたじゃないですか！」

「俺専用のが食いたいんだ！ それだけは一生誰にもやらねえ！」
「だから……！！」

その告白としか聞こえない天然ストレートは何とかならないのか、もう少しこちらを動揺させない言い方があるのではないかと思うが、やはり翔には無理な話だろう。

「とにかく！ 未来のためだろうが何だろうが、紫月をどっかの馬鹿なんかに渡してたまるか！ てゆうか、紫月を守んのは二百代前から俺の役目なんだよ！」

「つつ……！！！」

もう降参だと白旗を上げたい気分になった。これほどはつきり宣言されて真っ赤にならない方がおかしい。それに今日はバレンタインデーなんだから本来はこういった行事ではあるのだけんど……

「そういうわけだから蜻蛉、俺はぜってえ負けねえからな！」

いつになく、翔の目は爛々と輝いているのだった……

第三十五話：翔VS蜻蛉（後書き）

はい、またお待たせしましたm（ ）m
お盆休みということで、沢山書けたらいいなとは思いますが……

最近、天空記の番外編が終了したらと次のネタも考えてるという……
まあ、途中で投げ出してる未熟過ぎる頃の小説も最初からきちんと書きたいなとも思っていました……

かといって、新ネタも考えてるという……
まあ、若い？内にいろいろやろっかなっと（笑）

でも、しばらくはノクターンもありますので、天空記に集中ですね。
まずはこちらから終わらせなくちゃ。
では、次回もお楽しみに☆

第三十六話：覇氣

一撃が生み出す衝撃波はぶつかる度に大きくなっていく。会場で人が気絶しているだけ余計な騒ぎにならなくて良かったと紫月は思うが、出来るだけ早目に決着をつけなければいろいろな意味で厄介なことになる。

なんせ、少しずつではあるが、翔の力が膨れ上がってきているのと同時に、自分の意識も引っぱられていく感じもしているのだから……

「おらああっ!!」

「ぐっ……!!」

一撃が確実に重たくなってきている。目の色が時々、金色を覗かせているということは西天空太子としての力が若干加わっている性なのだろう。

ただ、それを本人は気付かずに自分に攻撃を仕掛けていることは分かる。それだけ紫月が大切だということは二百代前から変わっていないのは確かで……

「大切な者のために力は上がるか……」

「それが出来ずに守れるものなんてあるもんか!」

翔は蜻蛉の側頭部を狙って強烈な蹴りを繰り出すが、蜻蛉はその足首を掴んで翔を壁まで投げ飛ばす。

「くっ……!! おわっ!!」

壁まで投げ飛ばされた直後に蜻蛉はすぐ傍に来ていて壁に穴が開くほど強烈な一撃を叩き込むが、翔はそれを体勢を低くしてかわし、さらに下段回し蹴りを繰り返せば蜻蛉は上空に高く飛び上がった。

「鷹に変身しなくても飛べるのかよ！」

「風に乗ればいいだけのことだ」

「じゃあ、無風なら飛べないんだな」

ピタリと会場内の風が止めば蜻蛉は落ちては来たが、翔はすぐに攻撃には移らなかった。落ちて来る直後に攻撃をかわす方法も逆にこちらを突いて来ることも蜻蛉なら可能だ。

翔にしては油断してないな……、と紫月は思う。やはり、西天空太子だった頃の戦いの直感が影響してるのだろうか。二百代前も油断癖はあったのだし……

「無風の状態で勝ち目はあるのか？」

「あるさ。もともと頑丈で化け物ぐらい一撃で倒せる力はあるんだからよ。それにお前だって急所に入れば崩れるだろう？」

翔の言うことはもつとも。今までの攻撃は全て塞がれてきたからこそ蜻蛉は倒れることはなかった。つまり、急所に一撃叩き込めば翔に勝機はあるということ。

ただし、無風の状態といえども蜻蛉のスピードが速いことも翔のスピードが落ちることにも変わりない。それを補う方法は……

「紫月」

「はい」

「腰抜かさずに立ってられるか？」

その一言で翔が何をしようとしているのか紫月は理解した。しかし、それが本当に出来て相手に通用するのはかなりの賭けにはなるのだろうか……

「少し離れてますから思う存分やってください。ただ、やるからには負けないで下さい」

「オウッ！」

翔に負けるなんて言葉を掛けたのはきっと始めてだ。いつも余裕で背中合わせに戦えないことの方が珍しく、それに一对一の闘いでも信じていられた。

だが、今回の敵はそれだけ厄介で信じることだけでは翔が負けてしまいそうな気がして……

それでも、翔のプライドを傷つけないと思う自分が手出し無用だと告げて来るのだ。二百代前の自分だけじゃなく、篠塚紫月として。

「……気は抜けないようだな」

蜻蛉はスツと構えた。翔が何をやるのか検討がついたからだろう、今まで以上に隙がない。それから紫月もふわりと風を身に纏って翔から離れた。そして、また風の流れはピタリと止まる。

「この戦い方は嫌いなんだけど、紫月を取られんのは絶対嫌だから覚悟しろ」

翔は傍にあったテーブルをひよつと片手で持ち上げる。風が使えない以上、隙を作る方法は一手でも多い方がこちらの勝機に繋がるのだ。翔は一息つくつと、その目を黄金に輝かせた！

「……！！ 西天空太子！！」

「おらぁあぁ！！」

剛速球でテーブルを投げ飛ばした後、さらにもう一つ傍にあったテーブルを蹴り飛ばして蜻蛉への直撃を狙うが、蜻蛉はそれを瞬時に避けて彼も傍のテーブルを蹴り飛ばした！

「喰らうかよ！！」

翔は飛んできたテーブルを簡単に粉碎した後、同じように突っ込んできた蜻蛉にストレートを繰り出す！

「喰らえ！！」

「甘い！！」

翔のストレートを横に避けてかわし、前のめりになったにも関わらずそのまま後ろ回し蹴りを放ってきた翔の攻撃も蜻蛉は止める。

そして、翔の足首を掴んだ蜻蛉はそのまま骨の一本ぐらい折って戦闘不能にさせようとしたが、突然、空気は変わる！ いや、翔が変えたのだ！

「くっ……！！」

変わった空気の正体は覇気。まるで龍を思わせるようなあの圧倒的な威圧感が蜻蛉に叩き付けられ、その瞬時に翔は緩んだ手から足

を引き離して蜻蛉の頬を殴り付けた！

「ぐっ……！！」

「おらああああ！！」

さらにもう一撃翔は腹部に叩き込むが、その手応えに目を見開く。
入った拳は浅い！！

「翔君！！」

「くっ……！！」

まずいと思って紫月は飛び出そうとしたが、後ろから手首を掴まれてそれを阻止される。そして、目をきつく閉じた翔の身体は蜻蛉の攻撃を受ける直前に後方へと引き寄せられた。

「全く……、情けねえな三男坊」

「でも、もった方じゃないですか？」

上から降ってきた声は間違いなくいつも聞いているもの。翔は目を開けて顔を上げるとやはりあの二人だ。

「あっ……」

ニヤリと笑った啓吾とだらし無いとも言いたげな秀がギリギリのところまで間に合ったらしい。通常ならもっと早く来れたはずなのでは……、と冷静なものがいれば治うつつこんでくれただろうが……

「南天空太子殿、啓星殿……」

どうやら秀と啓吾に対しても敬意を払うらしい。武道の腕の差な

のかそれとも二人の風格がそうさせているのかは分からないが、翔よりは明らかに区別されているのだろう。

すると、秀はニツコリ笑いながら翔の前に進み出た。ここから先は兄に譲れということなのだろう。

「うちの出来の悪い弟が相手をしたみたいですが、やはりあなたの方が上でしたか」

そうはつきり言うなよ……、と翔は言いたげだが、実際に助けてもらっているので口出し出来ない。

「で、どっちと戦いたいんだ？ 蜻蛉さんよ」

啓吾まで出て来ると翔はさらに沈み込んだ。風のタイプの翔と相性が悪い相手ではあるが、それを抜きにしてもこの二人が蜻蛉に負けるようなことは考えられない。

なんせ、火と重力。とても蜻蛉が敵う相手ではないことぐらい本人も理解しているだろう。

「どちらとも倒すしかありません」

「いや、あなたが反旗を翻せば戦わなくて済むんですけどね」

「それは拒否します」

やれやれ、と思いつながらとりあえず気絶させておくかと啓吾は力を解放しようとしたが、突然、脳裏に嫌な予感が走る！　そして、この感覚の持ち主は……！

「……！！ 次男坊、お前がこいつをやれ」

「どうしたんですか？」

「桜姫になんかあった」

「えっ……!?!」

「桜姫姉ちゃんに!?!」

そう、事態はまた動き出していたのである……

第三十六話：覇気（後書き）

翔が負けたあ！！！！

そしてやって来た宇宙一最悪な兄達！

うん、やっぱりこの二人はおいしいところはもっていきます。

オカマにモテるほどかっこいいんですから（笑）

でも、翔君にしてはよく頑張ったなと思います。

覚醒ギリギリで戦ってるんですからね。

それに少しずつ龍に近付こうと彼なりに成長しているのであります。

さて、啓吾兄さんが同じ従者同士なのか桜姫のピンチを感じ取ってる模様。

さあ、次回は一体どうなるの！？

第三十七話：龍VS鳳凰

鳳凰と戦い、鷹族の創主から闇の女帝を助けるために龍は沙南、柳、宮岡と、鳥の女神を探すために末っ子組と紗枝、土屋は別行動をとっていた。

戦力的には龍達の方が安心だろうが、危険から少しでも遠ざけるという点では末っ子組達の方が安全だ。それにそのあたりのSPぐらいなら純一人で片付く。

全く心配がないわけでもないが、そのうち頼りになるメンバーが合流してくれるからと紗枝に笑い飛ばされ現在に至るのである。

「やっぱり心配？」

少し浮かない顔をしている龍に尋ねると、まさにその通りだと龍は微妙な表情を浮かべた。

「ああ、宮岡先輩が挙げてくれた部屋の候補の中に特に危険な場所はなかったし、鳳凰級の武道家もないと思うが、一応、機密院っていう組織ではあるしなあ……」

「大丈夫よ、紗枝さんと土屋さんが付いていて危ないことはないでしょうし、いざとなったら桜姫さんが現れてくれそうじゃない」

それを柳と宮岡は笑う。桜姫はすっかり神出鬼没で現れるようになっていたため、末っ子組達がピンチでもなんとかなる気がするのだ。

それにおそらく彼女のこと、全員の発信機の反応も踏まえて行動

しているのだろうか、自分自身が大きな戦闘に巻き込まれていない限り、おそらく末っ子組達の方を心配して……

「……桜姫」

突然、足を止めた龍に三人は注目する。主従が持つ繋がりとも言おうか、それがまるで揺らいだような感じを覚え、桜姫の身に何かが起こったのだと悟る。

「どうした、龍」

「……宮岡先輩、桜姫の位置は？」

尋ねられた問いに宮岡はパソコンを開いて桜姫の位置を確認すれば、どうやら彼女は先程通信を超越してきた場所から一気に移動しているようだ。

ただ、彼女だから出来ることではあるのだが。

「宿泊棟の最上階、闇の女帝と一緒にだ。助けに行っただんじやないのか？」

「いや、違います……。この感覚は……」

「……捕まったのか？」

「はい、おそらく」

龍は桜姫が意識を失っていることも悟っていた。鳳凰にでも会ったのかと思うが、彼女は天の力も使えるほどの強者だ。そう簡単にやられるはずもない。

その時、空気が一気に張り詰める。四人は身構え、その空気を発する者に対して備えた。そして、空間を切り裂いて二百代ぶりに対峙することになる。

「鳳凰……」

「……天空王殿」

二人の間にはそれだけの言葉で充分だった。王としての風格と武道家としてのプライド、それを柳と宮岡は息を飲んで感じ取っていたが、ふと、虚ろな目をした沙南が龍の前に進み出る。

何事かと思うが、すぐに彼女を取り巻く空気からその原因は明らかになった。

「……鳳凰、引きなさい」

「沙南姫様……」

「沙南ちゃん……」

どうやら鳳凰との対峙で二百代前に意識を取られたらしい。龍とは違った、太陽の姫君としての風格にさすがの鳳凰もポーカーフェイスを保つことは出来なくなった。彼女を通して、光帝を思うからであろうか。

「龍様と闘って何を得ると言うのです。鳥の女神殿を救いたければすぐに引きなさい！」

強い、絶対的な命令に鳳凰は二百代前の自分に引きずられそうになる。今、自分の目の前にいるのは折原沙南ではなく太陽の姫君だ。それは光帝と同じように自分が守らなくてはならない存在だと自分の脳裏に響き渡る。

しかし、現代の鳳凰はそれを拒絶した。まだ、彼女に膝を折るべきではないと……

「光帝の娘として命じているのです！　引きなさい！」

より強く言い放つ沙南に鳳凰は目を閉じた。どれだけ天空王や沙南姫を敵と見なし、そして鷹族の業にとらわれていると口では言うが心までを殺すことは出来ないのだろう。それはその場にいた者には手にとるように理解出来た。

しかし、心を殺して戦い、今は沙南姫よりも守りたいものが鳳凰にもある。フラン社長と鳥の女神の顔が脳裏に過ぎると、鳳凰は宝刀に手を掛けた。

「沙南姫様、いくらあなたの命だろうと従えぬ理由はございます。そして……私の主は鷹族の創主。もはやあなたではございません」

冷静な口調の中でもそれが搾り出した答えだと分かれば、龍は沙南姫を後ろに下げた。もう、充分過ぎるほど彼女の声も思いも届いている。

ならば、龍が鳳凰に対して出来ることはただ一つだけだ。

「それが答えなんだな、鳳凰」

「はい」

龍の髪がふわりと揺れる。それを見た沙南姫は不安そうな顔をして龍の腕を掴んだ。

「龍様……」

「大丈夫だ、心配しなくてもすぐに追いつくから。柳ちゃん、宮岡先輩、沙南姫を連れてすぐに最上階へ向かってくれ。啓吾もすぐに追いつくと思うから」

「はい」

「分かった」

龍は沙南の手をそつと離すとその目を一気に黄金へと変える！
最初から飛ばさなくてはこちらの隙を突かれて致命傷にもなりかねない。それに桜姫がやられたのも気掛かりだ。

「鳳凰、一度だけ言う。すぐに道を開けろ」

「ここから先は誰も通しは……！！」

言葉を遮るかのように鳳凰に重力が叩き付けられた間に三人は走って最上階に向かう。それを鳳凰は阻止しようともがくが、更なる重力の枷と龍の覇気に叩き付けられて追い掛けることが出来なくなつた。

そして、三人の姿が見えなくなれば、今度は龍が三人の後を追いつけられないように鳳凰の前に立ち塞がる。

「鳳凰、お前の抱えているものが何かは聞いている。ただ、どんな理由があろうと俺は俺の守るべきものを守る」

そのことに対して全く迷いのない目が向けられる。二百代前、沙南姫を守るためとはいえ戦うことに迷いがあつた王とは全く違う、まさに現代で得た天宮龍としての強さを持った目だ。

「二百代前の天空王殿とは違うと……」

「いや、本質は変わっていない。だが、守りたいものを二度と失いたくない気持ちは強くなった」

何度も守りたいと思って、何度も現代に至るまで沙南を失ってき

た。そして、やっと今、彼女を守る強さを得たのだ。

だからこそ、例え何があろうとも沙南を守ることを迷わないと決めた。これからも共にあるために。

強いはずだ、と鳳凰は改めて思い、三人を追う前に目の前にいる王を倒すことに集中することにした。そうしなければ勝てない。

「天空王、あなたを倒さなければ私も守りたいものを守ることは出来ません。ここからは本気でいく」

鳳凰の目が鷹のように赤く変われば、左頬から首筋に掛けて何やら黒い紋様が浮かび上がって来る。

それをどこかで龍は記憶を辿れば、一つの答えに辿り着いた！

「それは……！」

「呪術。私の二百代前の父親である武帝が施していたものだ。頭ではあの男を倒すべきだと理解していても身体はそれを許しはしない」

「つまり武帝が全ての元凶だと……」

「その通りだ」

刹那！ 龍の前に飛び込んできた鳳凰の拳を龍は首を横に傾けてギリギリ交わしたが、その重さと風圧に体は弾き飛ばされる！

「くっ……！」

壁への直撃を重力を操って避けるが、その次の瞬間には鳳凰の更なる衝撃波が龍に襲い掛かってきた！

「……！ はあっ……！」

衝撃波を龍も力で相殺し、龍は更なる力を解放して鳳凰に突っ込んでいく！

「鳳凰！！」

力の衝突により、閃光が部屋を走り抜けた……

第三十七話：龍VS鳳凰（後書き）

すみません！ 大変お待たせしましたっ！！
最近ゲームにはまっていまして、つつい更新が……
うん、でもお許しを（笑）

さて、ついに鳳凰が登場して龍と戦うことに！
あの龍が最初から飛ばさなくちゃいけないほど鳳凰は強いらしく、
それに思ったよりも手こずる可能性も！？

だけど、まだ大ボスの武帝が残っているんだから、こんなところで
力を使い果たすようなことはしないでよ、龍。

次回は捕まってる闇の女帝と桜姫の視点も書けるかなあ？
そして、一人で行動してる森。
彼はしぶとく生きてるんだろうか……

第三十八話：母になる覚悟

機密院宿泊棟最上階。闇の女帝はフカフカの高級羽毛ベッドの上で目を覚ました。

服は一度覚醒して弾け飛んでいたものの鳳凰の考慮なのか、締め付けのないブラックのロングワンピースが身につけられていた。おそらく、着せたのはこの侍女なのだろうが。

それにしても辺りは真っ赤尽くしだと思う。シルクのレースカーテンやベッドはいいとして、調度品の数々までもが赤だ。嫌いな色ではないが、しつこいと思ってしまう。

だが、例外が一つだけあり、彼女の今いる部屋にはドアが無くあるのは鉄格子だ。どうやらここは牢屋を改造したスイートルームとでも考えた方がいいのだろう。

「さて、力さえ回復すればこの程度は抜け出せるが……」

生憎、彼女の力は先程の戦いで回復していない。もう一度覚醒するにしても後の消耗は激しく、今の自分にはあまりよろしくないことも分かる。

それにダイヤのピアスはそのままだら、そのうち助けには来るだろうと思い、少々回復を待つことにした。

その時、部屋の右側壁紙が上がり始め、防弾ガラス張りの壁へと変わる。一体何が出てくるやらと闇の女帝は腕を組んでいたが、その光景に彼女は目を見開いた！

「桜姫！」

続き部屋になっている怪しげな薄桃色の部屋に、桜姫は天井から吊されている鎖の手錠で両腕を拘束されており、頭から血を流しながら膝を折っている体勢をとらされていた。当然、意識はない。

「お目覚めですか、闇の女神殿」

笑いを含んだ声に闇の女帝は眉を吊り上げる。桜姫の傍に立っている男こそ鷹族の創主であり、この機密院のトップに立つ男だった。

「馬鹿鷹か……！」

「ははっ、その侮辱的な言葉ですら許せるほど今は気分が良い……」
「お前の名など記憶にすらない」

即答された言葉に対して鷹族の創主は止まった。さすがにそこまでは寛大ではないらしい。

すると、彼は注射器を取り出してそれを躊躇無く桜姫の首筋に打ち込んだ。

「何を打っている……！」

「媚薬だ。いつも幻術でこちらを欺いてきた桜の姫君もここまでロボロにされた上、薬漬けにされては抵抗出来まい」

桜姫をここまでロボロに出来るのは鳳凰かと思ったが、どうも違う気がした。だとすれば、彼女をここまで誰が追い込めるというのだろうか……

ただ、闇の女帝の顔が歪んだのは自分に対して畏怖の気持ちを持ったと勘違いした彼は、そのままにやけ面を浮かべたままさらに続ける。

「ああ、心配しなくても貴女にもそれ相応の報復はするさ」

「ふざけるな！　そう簡単に」

「身籠っているとの報告が入ってきている。安定期にも入っていない今なら、殺すことは容易い」

「くっ……！」

さすがに子供のことを出されては闇の女帝も平然とはしていられなかった。今の状態では、目の前の馬鹿に蹴りの一撃をお見舞いしてやることも難しいと分かっているのだ。狙われては面倒だ。

「だが、愛してもいない男の子供ならば死んでもショックは」

「誰が愛してないと言った」

その答えに鷹族の創主は意外そうな表情を浮かべた。闇の女帝に本気で惚れられているはずがないと誰もが思う相手には違いないのだ。

まあ、それは事実といえば事実だと彼女は否定はしないだろうが……

しかし、彼女にも母となるプライドはあり、何よりも身籠ったら産むと覚悟していたのだ。だからこそ、真っすぐな目を鷹族の創主に向けた。

「妾は気に入りもしない者に触れさせはせぬ。それに母となる妾を侮辱するならそれ相応の覚悟はあるのだろうか」

子供を守るためなら何でもする顔だった。闇の女神といわれていた二百代前にはすることもなかっただろう、強い意志を宿した彼女らしからぬ顔だが、それはより彼女を美しく見せている気がして……

「女帝の威厳か、それとも母となるものの覚悟か……」

「俺への愛に決まってるだろうが!!」

「なっ、ぐああっ!!」

部屋のどこかにあった鉄の小さな人形の彫刻が鷹族の創主にクリンヒットし、よろめいたところに飛び蹴りを喰らわせて彼は壁へ激突した。

そう、命からがら、ようやく森が最上階までたどり着いたのである。ただし、闇の女帝は助けに来たヒーローに対して青筋を立てるヒロインだった。

「遅い!!」

「助けに来たんだから文句言うなよ。それより母になるって……」

「事実だ」

「ですよね……」

「それよりこの牢をさっさと開けろ。こんなところに閉じ込められるなど不愉快だ」

「へいへい」

心当たりが誰よりもある人物は苦笑いを浮かべるしかなかった。

つまり、彼女はただ今妊娠二ヶ月目というわけで……

しかし、そのことよりまずは桜姫を助けるように命じられ森は銃を抜いた。

手首の手錠は後から天宮兄弟が啓吾に砕いてもらおうとして、とりあえず天井から下りている鎖だけは銃で弾き飛ばして倒そうになった桜姫を受け止める。

そして、次に闇の女帝を助けることにしたが、通常なら闇の力で充分この局地を乗り越えられるはずの彼女に森は首を傾げた。

「おい、闇の力は使えねえのか？」

「疲れてるのだ、リモコンぐらいあるだろうからさっさとこのガラスの壁を上げろ」

やっぱり鳳凰との戦闘の影響かと思い、割と近くのテーブルにあったリモコンの数々を適当に弄れば、ガラスの壁はあっさりと開いた。

本当に馬鹿な奴だな、と森と闇の女帝は改めて思う。

「ほら、いく……！！ 彩帆……！！」

いきなり崩れた闇の女帝に森は急いで駆け寄りその体を受け止める！
彼女は力だけではなく、体力もギリギリの状態だったのだ！

「馬鹿野郎……！！ 立つのがやっとなら立つんじゃないよ……！！」

「誰が……！！！」

「もう一人の体じゃねえんだ……！！ それぐらい母親になるなら考えろ……！！」

こんな時だけ真剣な顔になるのが森だ。いつもはふざけてしかないというのに、本当に肝心なところだけは絶対はずしはしない。だから彼女は森の子供を産むことを覚悟したのだ。

「ああ、そうだな……」

「さて、女二人抱えて下りられるか……」

「……妾が重いと聞こえるのは気の性か？」

「そりゃ桜姫よりは……すみません」

やはり森のこういうところだけは惚れる要素を皆無にする。寧ろ、
こういうところさえなければ評価も多少は上がるというのに……

しかし、助っ人達がすぐにこの状況を解決してくれた。

「桜姫さん!!」

「桜姫!!」

沙南、柳、宮岡の三人が駆け付けてくれたのである。沙南の意識もすっかり現代に戻っているらしく、医学生であるため傍にあった布やらタオルやらを使ってひとまずの止血をした。

「良! 助かった!」

「闇の女帝、お体は?」

「ああ、少し疲労しているだけだ。それより桜姫の治療を急げ。さらにさっきも媚薬の類を打たれている。耐性がある薬物なら良いが……」

「逃がすとしても……?」

「伏せてください!!」

その時、森達の後ろで大きな鷹の化け物が姿を表し、それに気付いた柳は瞬時に火球を投げつける!

「柳泉!!」

攻撃を仕掛けた柳の方へ鷹の化け物はその鋭い爪を振り下ろすが、柳はそれをひらりと交わして再度火球を放った!

「あいつは……!!」

「ああ、鷹族の馬鹿が二百代前の姿に戻った！」

「私のハーレムを……！ 今度こそ天空軍に報復を……！」

彼の怨みは二百代前の話へと遡る……

第三十八話：母になる覚悟（後書き）

久しぶりの更新です！

さて、今回も何やらまた面倒は起こりそうな感じに。

まあ、いつものことではありますが（笑）

そして、闇の女帝。

はい、彼女が身籠ってるのは森の子供です。

どうしてそんなことになったのかは、ノクターンの天空記を読んでいただければ分かりますので。

産む理由までバッチリ書いてますからね（笑）

それでもって、次回は鷹族との因縁話が出てきます。

ついでに武帝と鷹族の馬鹿主との関係も。

一体、天空軍のドS達が何をしていたのかお楽しみに☆

第三十九話：王の逆鱗

それは今から二百代前の話である。

その日、太陽宮で武道の手合わせと宴が行われるために天空族の面々は総出で訪れていた。

その間に天空族の住む天宮が攻められたらという心配はあるかもしれないが、そうしたければやってみろという面々しかいないため、いたって彼等は心置きなく太陽宮を訪れているわけである。

そして、武道は男共に任せておいて、この太陽宮の姫君である沙南の元に、南天空太子の従者である柳泉は彼女に連行される形で彼女の部屋でお茶を楽しんでいた、はずである……

「もう！ 聞いてよ柳泉！」

「ええ、どうしたのですか？」

「敬語は無し！」

「うん、どうしたの？」

沙南姫は基本、柳泉を友人として見ているため敬語を使うことは禁止している。身分の違いはあれど、柳泉と対等でありたいと沙南姫は思っているわけだ。

ただし、本日の彼女は多少不機嫌である。寧ろ、柳泉がいなければ何かに八つ当たりしているぐらいに。

そして、彼女は不機嫌の理由である代物の数々を柳泉に見せた。

「これ、どう思う！？」

「うわあ……」

彼女がそうとしか答えられない理由は至極簡単。俗に言ういかにも嫁に來いとしか言いようのない代物と夜伽の時の衣装がたんまりと山のように送られて來ていたのだ。

「これって嫌がらせよね？　というより変態よね？　人として壊れてるわよね！？」

「天空王様にご相談された方がいいんじゃない？……」

「うーん、だけど殿下にこれを見せるのとはしたくない気がするのよね」

沙南姫の悩みはひどく納得出來た。確かに、嫁入り道具はともかく夜伽の代物は顔を真っ赤にするか天が落ちるかのどっちかだ。

それに沙南姫も基本は龍に相談するが、こういった内容はどうも相談しづらいようで……

その時、緑の優しい香のする女神が活気に満ちた顔をして部屋の中に入ってきた。

「やっほー！」

「紗枝様！」

「お久しぶりです、紗枝様」

自然界の女神こと、紗枝も太陽宮に招かれていたため時間を有意義に過ごそうと彼女達の元へやって來たのだ。

まあ、夜は酒宴となるため、龍や啓星と飲むのだろうけれど……

ただ、沙南姫の部屋に入った紗枝は目に飛び込んできた代物に驚いた。

「何！？ 沙南姫ってこんな趣味あったの！？ それとも龍太子の趣味！？」

「違いますっ！！」

そんな趣味が合ってたまるか！とでもいうかのように瞬時に沙南姫は切り返した。まあ、嫁入り道具にいたっては龍からプレゼントされたら喜ぶけれど。

「アハハハ……！ ゴメン、ゴメン、冗談よ。で、どこの馬鹿が送り付けてきたの？」

「鷹族の太子」

「ああ、あの変態ハーレム馬鹿ね」

そこまでさらりと言うんだ……、という表情を柳泉は浮かべるが、紗枝も結構迷惑しているところがあるのでそれくらいは言いたいのである。

なんせ、沙南姫に熱を上げている癖に、自分の住家に訪れてひどい時には寝込みを襲われかけたのだから……

ただし、当然彼は返り討ちにあっているわけだが……

「よし！ そういうことなら秀太子と啓星に頼めば大丈夫よ！ 天空王の知らないところで勝手に片付けてくれるから」

「寧ろ面白がるんじゃない……」

「でしょうね。まっ、天空王に今日の武道会で叩きのめされても面白いかも」

寧ろ殺っても構わないと思っていることは口には出さないでおく。一応、女神という立場もあるし、沙南姫はともかく柳泉には少々刺

激が強いだろう。

それに沙南姫に手を出すということは自然と柳泉も手ごめにした
いと企んで来るはずだ。そうなればあの二人が絶対消すだろうから
……

その頃、太陽宮の武道場では正式な手合わせが行われる前に各々
が軽い組み手を行っていたはずなのだが……

「せいっ！」

「やあっ！」

その軽い組み手でも一際注目されている民族がいる。一割は二人
の弟を同時に相手にしている龍の調子を伺うため、四割はその強さ
に呆氣に取られ、残りは女性達の好意的な目だ。その証拠に黄色い
声はかなり飛んでいる。

ただし、その中に冷静な声とピョンピョン飛びながら主を応援す
る可愛らしい声が混じっていた。

「翔様、踏み込みが甘いですよ！」

「純様！ 頑張っ……！」

翔と純の従者である紫月と夢華のものだ。龍に稽古を付けてもら
っている二人を唯一、好意的ではあるもののうっとりせずに見てい
る。

それにしても二人掛かりで実にあっさりと攻撃をあまり避けずに
受け、それから軽く返しているのはさすが天空王とすべきか。

そして、チラリと紫月は兄の啓星の方を向けば、相変わらず壁にもたれ掛かって昼寝中である。

少しは武道に精を出せばと思うが、稽古をしなくても秀と互角なのだから問題はないと言えはないが……

そんな手合いの最中、先にストレス発散と言わんばかりにあくまでもウォーミングアップという名目で暴れてきた秀は、実に爽やかな笑顔で龍達の元へやって来た。

「兄上」

「ああ、秀か。どうしたんだ？」

話しながら翔の蹴りを簡単に受け、さらに純の拳も掌で受けた後、一度中断と言わんばかりに二人を軽く弾く。

どこまで余裕なんだよ、と翔は少し不満そうな顔をしたがそれ以上の攻撃をしかけることはせず、純は礼に倣って両手を合わせてお辞儀した。

そして、秀は純には聞こえないように配慮して龍の傍で耳打ちした。

「それがですね、鷹族の馬鹿主が沙南姫様にたいそう卑猥なものを送り付けたようですよ。体が透けて見える白い薄衣とか」

「なっ……!!」

「まあ、兄上の前でいずれ着ることは」

「秀っ!!」

龍の大声に周りは注目し、それと同時に桜姫が啓星の横に立てば

彼はうんと伸びをして立ち上がった。

さすがにそろそろ起きろということと、何やら桜姫が面白い情報を持ってきたということがその顔で理解出来た。

そして、相変わらず初な反応を返してくれた龍にクスクス笑いながらも秀は続ける。

「でも、少しでも痛い目に合わせてやってください。沙南姫様、なかなか御立腹でしたから」

「それはそうだろうが……」

そういう嫌がらせを受けているのなら自分に話してくれればと思う。もちろん、内容が内容なだけに恥ずかしい部分もあるのかもしれないが。

「ああ、他にも嫁入り道具もあったみたいです。やっぱり沙南姫様をハーレムにでも入れて夜伽の相手にでもするつもりなんでしょうかね？」

嫁入り道具、ハーレム、夜伽……。その単語の羅列にはさすがの龍も何かがキレた。あくまでも沙南姫を守るためという名目だけではなく、彼女に心底惚れている一人の男として。

「秀……」

「はい」

「これで戦になったら俺の責任にして構わないから」

「おや、寧ろなったら皆喜びますけど？」

間違いないな、と弟はもちろん、啓星や桜姫までもがコクコクと頷いている。どうやら龍の逆鱗に触れてしまったようだった。

第三十九話：王の逆鱗（後書き）

久しぶりの二百代前の話です。

コントが結構満載になりそうなお話になってくれそうな予感がしますが。

ただ、これが直結して鷹族と戦争になる訳ではありません。

そんな個人の感情で戦争を本気でおっぱじめるような王ではないですからね、天空王殿は（笑）

しかし、どうしてあそこまで龍達を怨んでいくのかそのきっかけは次回に書きますので楽しみに☆

あつ、もちろん次回はドS達の酷さも分かると思いますので（笑）

第四十話：一撃

鷹族の主との試合前、伸脚していた龍のもとに赤い胴着を纏った鳳凰が近付いてきた。

「少し心が乱れておいですね、天空王殿」

「これは鳳凰殿」

龍が礼を取ると鳳凰も頭を下げる。本来なら自分になど下げる必要など全くないというのに、この礼儀を重んじる王は自分を一人の近衛兵としてではなく、一武道家として見てくれているようである。

まあ、彼の従者やら天空族の將軍達を見ていれば、彼を一人の王としてではなく、親しき友や知己といった感じで接してくれた方が心が休まっただけはいるようだけれど。

それよりも鳳凰は光帝から面白がって聞いてくるようにと言われた命を、出来るだけ龍に失礼にならないよう配慮して尋ねた。

「沙南姫様のことをお聞きになった性だと見受けられますが」

「ああ、その通り」

案外、龍にしてはあっさり肯定してくれたことに鳳凰は目を丸くする。いつもの彼なら少しは動揺するということのに。

「鷹族の主がハーレムを好んでいることは知っているが、沙南姫様にまで危害が及んだと聞いているのは冷静に戦えるかどうか」

あくまでも手合わせという名目だからと龍は苦笑する。あれほど

のドS達が集まる天空族の主とはとても思えないな、と鳳凰は改めて思った。

これは少しこちらから背中を押すべきかと考えた鳳凰は、光帝の名の下に自分の意見も添えておくことにした。

「天空王殿、光帝も貴方と同じ心境です。遠慮なく叩きのめして下さい」

「しかし……」

「願わくば、私との手合わせの時にはいつものように」

フツと口元に鳳凰は笑みを浮かべれば、そうだなと龍は思う。毎回、弟達と同じように鳳凰と手合わせ出来ることは彼の楽しみの一つだ。

一武道家として、鳳凰と戦うことに集中出来ないのも失礼だというもの。

「ああ、分かった」

迷いは完全に吹っ切れ、龍はいつものように相手を倒すことに決めたのだった。

それからまもなくして、遂に龍と鷹族の主との試合の刻限となった。啓星の提案により、沙南姫は武道場には来ないほうがいいだろうということで、彼女はまだ柳泉と紗枝とお茶を楽しんでおくことにした。

そして、龍と鷹族の主の試合に多くのものが注目する中、龍と対峙した途端に真っ赤な目をして鷹族の主は突っ掛かった。

「貴様が天空王か、何とも不細工な」

「引っ込みなさい！ 鷹族の馬鹿！」

「あんたの方が最悪よ！」

「鏡ぐらい見てみなさいよ！」

龍が反論する前に女達が鷹族の主に野次を飛ばす。

ただ、不細工と言われた龍は全く気にしていないのだが、主を馬鹿にされたことに対して桜姫は怒りを通り越して深い溜息を吐き出した。

「はぁ……」

「どうした桜姫」

「いえ、あの馬鹿は顔も人生も破滅の一途を辿ってるというのに……」

「お前、本当辛口だよな……」

「まだ付け足せますが」

「いや、やめとけ」

女達の百人掛かりで浴びせる罵声より桜姫の辛口の方が間違いく性質は悪いだろう。下手をすれば心の一つや二つは閉ざしてしまうほどの暴言まで出てくるに違いない。

そんな二人の従者の会話など当然聞こえてはおらず、鷹族の主は龍に勝敗によっての条件を突き付けた。

「天空王、この試合でお前が叩きのめされたら二度と太陽宮には来るな！ いや、沙南姫と会うな！ それに自然界の女神にもだ！」

「では、そちらが負けたら太陽宮にも参上せず沙南姫にも紗枝殿にも近付かないんだな？」

すぐに切り返した龍に天空族の一行はナイスだと思うが、それを本当に守るのかといえばきつと守らないのだろう。

しかし、彼はあくまでも龍に負けることなど全く考えてすらいないうようで、まず有り得ないことを口にするのだった。

「それは無理な話だ。沙南姫は私の妻となるのだからな。そして、紗枝殿はぐしっしっ……！」

それに啓星がピクリと反応する。一体、紗枝に何をさせる気だと思うが、聞きたくもないというのも事実だ。

そんな啓星は珍しいため、桜姫はクスリと小さな笑みを零した。

「桜姫、龍にやらせる前に俺達がしばきたくないか？」
「同感ですが、主がご自分で片付けたい御様子ですから堪えて下さい」

それは龍のオーラがなんだか歪んで来たことだけで分かる。下手をすれば本気で空でも落として目の前の馬鹿を抹消してしまうんじゃないかという勢いだ。

ただ、それはそれで大歓迎だと、高見の見物を決め込んでいる光帝を見上げれば非常に分かるのだが……

「それと南天空太子！！」
「何です」

突然自分の名を呼ばれた秀は、それはたいそう嫌そうな表情を浮かべた。傍にいた啓星と桜姫は何となく彼が言おうとしていること

を予測したが、今のところは黙っている。

そして、その予測どおりの言葉を高らかに鷹族の主は吐き出したのだ。

「お前にも柳泉という従者がいるようだな！」

「ええ、私の柳泉に何か？」

私の、という言葉にシスコンは青筋を立てるが、今は暴れないようにと桜姫に制されて無理矢理啓星は自分を押さえ付ける。

ただ、抑え切れてない感情が重力を放出させ、至るところの壁にヒビを入れてしまうのはどうにもならないようだが……

しかし、鷹族の馬鹿主は死んでも言うてはならないことをそれはおおっぴらに叫んだ。

「貴様も私に負けたら柳泉を差し出せ！ 愛妾としてたっぷり可愛がってやるわ！！」

それにブチ切れた音を聞いた者は多数。特に秀と啓星の周りからは一斉に人が引いてくれたぐらいだ。

弟妹や將軍達は、言っちゃったよ……、と恐怖や呆れといった表情を浮かべるので精一杯だ。

「……ほう、今日は鷹の丸焼きを私自ら調理しましょうかね」

「秀、骨は俺が全て粉碎してやるから残しとけ」

「秀太子、啓星様、私も頭部などの切り刻みたい部分がございますので、是非お手伝いさせてください」

三人の周りにいた腕の立つ武道家ですらその殺気に冷汗を流した。龍は太陽宮だけは破壊しないようにと願う気持ちでいっぱいになっているが……

「桜姫！ 貴様も天空王などではなく私の従者として」

「黙りなさい！ 私の主は天空王様のみ。あなたのような愚か者に仕えることは末代までの恥にしかありません」

キッと睨んだ上にそこまで言うかと思える切り返し。ただ、龍も沙南姫達だけでなく桜姫にまで手を出すというのなら主としてすべきことは定まった。

「鷹族の太子殿、そちらが負ければさっきの条件に天空族に関わる女性陣に近寄らないと誓ってもらう。人の従者にも手を出されては迷惑だ」

「ならばお前が負ければ全て差し出すんだな？」

「否！ 天空族の名にかけて負けなどしない！ 誰もお前の悪趣味なハーレムになどに渡すものか！」

そこで沙南姫を誰にも渡さないと言えはいいのに……、と天空族の一行は思うわけだが、鷹族の主が怒りでその姿を鷹の化け物へと変えるには充分過ぎる言葉だった。

そして、大きく翼を広げて彼は龍に鋭い爪を立てて突っ込んでいく！

「天空王~~~~!!」

「はああっ!!」

まさに一撃！ 道場に大穴を開けるほどの威力で鷹族の主は沈め

られ、それが天空記に記される内容になるのだった……

第四十話：一撃（後書き）

久しぶりに一週間開かなかったような……

はい、本日更新出来て良かったなあ。

二百代前はコントが多くて書きやすいのなんの（笑）

さて、今回は鷹族の馬鹿主が一撃でぶっ飛ばされたという、天空記の内容に沿ったお話でした。

まあ、当然の結果といえば結果ですが……

そして、次回はいよいよ武帝も絡んで来るかなあと。

鷹族の馬鹿主との接点も解明されますよ☆

楽しみにしていてくださいね。

コントも入れたいなあ……

第四十一話…気苦労の宴

天界でもここまで華やかで賑やかな宴は絶対ないだろうというのが天空族の揃う太陽宮の宴。

それは非常に結構なことではあるが、宴後の惨状に毎回頭を抱え、太陽宮に損害分を弁償しなければならないことに天空族の長は頭を抱えるわけだ。

さらに言うなら、その弁償に追いやる原因が弟達だけではなく、従者や将軍、おまけに何故か自然界の女神殿も加わっているわけである。

直接的に出さないのは柳泉のみという何とも痛い事実だが、いま現在は両手に花の状況を彼も楽しんでいた。

「さっすが天空王ね！ スカッとしちゃったわ！」

「本当！ 殿下大好きよ！」

紗枝に酒を注がれ、沙南姫に腕を絡められてピタリとくっつかれている状況はまさに男にとってはこの上ない幸せだろうが、龍には不純な気持ちなど全くない。まあ、沙南姫にくっつかれて嬉しい気持ちはあるのだけれど。

そして、その傍で柳泉に酌を受けながら秀は気になっていたことを尋ねた。

「柳泉、貴女は変なものは送られて来ていませんか？」

「はい、ございません」

「そうですか。まあ、あったらすぐに消し炭にしてやりますけどね」

「ありがとうございます」

消し炭になるのはものだけではないだろうな……、とここでそれを口に出せる猛者はいなかった。もちろん、火じゃなくても重力で消される可能性も考えなくてはならないが……

そんな会話を聞きながらも、龍は今日の事で気掛かりになっていることがあった。

「だが、鷹族の太子があ程度の引き下がるとは思えないんだが……」

「兄上、その時は私が手厚くもてなしてやりますから」

「龍、心配すんな。何なら今から戦でも仕掛けるか？」

「主、天空軍一同、すでに準備は進めておりますのでいつでも出陣」
「だから何でいつもお前達はそうなんだ！」

事あるごとに面白がって最終的には相手をトコトン叩きのめしている、そんな民族だという噂が天界全土に広がったらどうするのだろうか。

しかし、それはそれで構わないと彼の弟と従者達はあっさり言うてのけた。

「それは兄上が気苦労なさってますから」

「気苦労の半分以上はお前達の性だ」

「気に入らなければぶっ飛ばした方がすっきりするだろ」

「戦をストレス発散に使うんじゃない」

「やはり」

「桜姫、言わなくていい……」

龍はガクリと肩を落とした。大抵、こういう時に告げてくれる桜姫の言葉は沙南姫に関すること。おそらく沙南姫を自分のものにするためにとでも言うに違いない。

ただ、そんなことなど露知らず、沙南姫は酒を飲みながら相変わらぬ気苦労性の長に明るく告げた。

「まあまあ、今日はせっかくの宴なんですから楽しんで頂戴。ねっ！
殿下」

「ああ、うちの者達がそちらに無礼を働かなければの話だけどな……」

しかし、それほど叶わない願いはない。既にこんな話をしているうちに無礼講状態になっており、酒の瓶が至るところに散らばっている上に皿がいくつも割れている音が響き渡っていた。

「桜姫！ 舞ってくれ！」

「私も見たい！」

「はい、夢華様」

「お嬢ちゃん限定の返事かよ！」

「森將軍のためになど」

「皆まで言うな！」

そう言いながらも桜姫は美しく舞始めると喝采が上がり、酒が進んでいる將軍達や夢華も踊り、楽を奏しはじめる。

それを愉快に見ながらも紗枝は持ち込んだ酒をドンと啓星の前に置いた。

「啓星！ 勝負しましょ！」

「紗枝……、また俺におぶって帰らせるつもりかよ……」

「あら、いいじゃない。どうせ天宮に泊まるんだし。それにこのお酒上物なのよね」

「それを早く言え！」

「ちよっと！ 一人で飲まないでよ！」

そして、龍は翔達は大人しくしてるかとそちらを見やれば、どうやら帰って説教が決定したらしい。紫月が飲酒した主を叱っていた。

「翔様！ また純様まで巻き込んで飲酒しましたね！？」

「しゆき……、しゃけはのむものえ、のまへなひ」

「のまれてるじゃないですか！ 全く！」

その翔の隣で大人しく眠っている純はとても可愛らしい。だが、きちんと注意しておかなければなど保護者と思う。

しかし、酒に思いっきりのまれている翔はヘラヘラ笑いながら紫月をギュウツと抱きしめた。

「しゆき……」

「ちよっと！ 翔様！」

「あっらかひなあゝ」

それに紫月は真っ赤になってしまいが、何とか引きはがすために誰かに助けを求めようと思うが、さらに頭まで翔の胸に押し付けられてしまっではどうにもならない。

とりあえず、龍はシスコンが暴れ出す前に紫月を助けるべきかと思いいそちらに向かうが、チラリと横目で秀の方を見ればまた嫌な予感がした。

「ほら、飲みなさい柳泉」

「でも……」

「今日は宴なんですからハメぐらいはずしなさい。さっ、こちらはすつきりして甘いですよ」

「あっ、本当」

そして、盃が溢れるほど並々と注ぐ秀の口角が吊り上がっていることを龍は見逃さなかった。間違はなく柳泉をキス魔に変えて自分のしたいように楽しむつもりだ。

先にそちらを止めておくべきかとも思うが、恥ずかしさが風に変わってきた紫月を見て、とりあえず彼女から助けることにした。

だが、助けに行く前に彼の背後を酒瓶が剛速球で飛んでいった。やったのは啓星である。

「おい、秀！ お前どんだけ柳泉に飲ませてるんだ！」

「まだそんなに飲ませてませんよ」

「フフッ、そうよ兄様」

もう酔ったのか！？と龍はその目を疑ったが、どうやら秀が酒に即効性の薬か何かを一服盛ったらしい。柳泉が既に上機嫌で秀に抱き着いている。

しかし、その直後に爆風が起こり、ついにキレた紫月が殺気たっぷりに翔を見下ろしていた。

「いつまでくっついてるんですか！ 風に切り刻まれたいんですか！！」

「紫月！ それ以上力を使うな！ 太陽宮が壊れる！」

慌てて龍は彼女のもとに行くが、さらに背後で重力と熱がぶつかり、おまけにどこからか大木までが生えはじめた。大木はまさに自然界の女神殿である。

「啓星！ まだ勝負は終わってないんだからさっさと飲みなさい！」

「後にしろ！ その前にあの腹黒を潰してやる！」

「こっちだって燃やしてやりますよ！」

「おっ！ キャンプファイアーか？」

「悪くないな」

そしてまた荒れていく太陽宮……。ここまで来るともう止めようがないので、とりあえず眠っているものだけでも避難させておこうと龍は純を抱えて隅に避難したのだった……

その頃、鷹族の居城へと戻っていた鷹族の主は、ハーレムの中にいても龍への恨みを消すことが出来なかった。

「天空王……！！」

「太子、ご機嫌を治してくださいませ」

「そうですね、どうか御寵愛を」

「黙れ！！ 私は気が立っておるのだ！！」

うなだれ掛かって来る女達を乱暴に払いのけ、傍にあったきつい酒を一気に流し込む。

彼の欲望の中では、とっくにこの酒を沙南姫達に注がれているはずだったのだが、それをあっさり龍に打ち碎かれたのだ。無論、まだ手に入れることを諦めるつもりなどないが……

その時、彼のハーレムの中にフワリと風が入り込んだかと思うと、一人の男が姿を現した。

「相変わらず心のままに動く」

「武帝……」

そこまで面識のない男が何故ここに来たのかと思うが、武帝は鷹族の主の前に座り傍にあった酒を手にとって切り出した。

「太子よ、力を望むか？」

「当たり前だ！ 天空族さえ滅びてしまえば全て私の手に入る！」

即答した鷹族の主は武帝はやはりそうかと声を立てて笑った。

確かに神族や光帝など邪魔な戦力も多いが、天空族の存在を消すことは光帝の力を抑えるきっかけにもなるわけで、鷹族の主の言うことは当たらずも遠からずということだ。

そして、武帝は酒の栓を抜きゴクリと一口喉に流し込むと鷹族の主を持ち掛けた。

「いいだろう、ならば私の力を貸そう。ただし、鷹族の武力は私に譲れ」

「武力を？」

「そうだ。天空族を消すため、特に天空王の存在を消すには手数が足りぬからな」

「構わない！ 沙南姫達さえ手に入るなら自由に使い！」

この答えが後、光帝を殺す事件へつながるきっかけとなったのである……

第四十一話：気苦労の宴（後書き）

十日ぶりぐらいの更新です……

すみません、もう一個の方を書いちゃいまして……

ノクターンの調子はかなりよろしく……

さて、今回は太陽宮で宴という名の騒動でした（笑）

弁償に悩む王……、はい、普通はないですよ、自分の部下達の責任を全て背負う羽目になるなんて……

でも、きっちりしてるから仕方がないんですよ……

そして、鷹族の馬鹿と武帝が接触。

これが後の光帝が殺されるきっかけになるわけです。

まあ、どこまで書くかはまだ決めていませんが……

でも、次回もまだ二百代前のお話です。

楽しんで読んでくださいね☆

第四十二話：守ることを迷うな

宴の後ははっきり言って悲惨だった。辺りに皿や酒瓶が散らばっていることはまだ許すにしても、屋根や床に穴が開いていたり、会場の壁が崩れ落ちたり、輝や黒ずみになってる箇所や植物の類が召喚されているのはどうかと思う。

しかし、全員騒ぎ疲れたのか、それとも龍が連れ帰ってくれるから問題ないと決定事項になっている性か、実に健康的な寝息を立てていた。

そんな中、唯一まともに起きている桜姫は、紫月と末っ子組にのみ毛布をかけてやりながら龍の肩を借りて眠っている沙南姫にフワリと笑みを零した。

「主、お疲れ様でした」

「桜姫……、今回も天空軍で太陽宮は修繕か……」

「はい。ですが、光帝はいつもの事と気にしておられませんし」

「また改めてお詫び決定だな……」

毎回申し訳ないと思いますが、天空族の面々はその態度を悔い改めることをまずしない。ただ、光帝は面白いから問題ないと笑い飛ばしてくれているのだが……

とりあえず、沙南姫をこのままにしておくのもと思い、龍はスツと沙南を抱え上げた。

「主、皆様は私が連れ帰りますので主は沙南姫様と今宵は御一緒に」
「桜姫……」

「光帝は部屋は整えてあると申しとおりましたので」

「おいおい……」

ニツコリ笑う桜姫に通常なら言い返していたが、騒いで沙南姫を起こすわけにはいかずガツクリとうなだれた。どうしていつも自分の周りはいこうなんだと思うが、理由は楽しいからだと返されるのがオチである。

ただ、冗談はここまでにしておいた。桜姫は龍の気に掛かっていることにも気付いていたのだから……

「……気に掛かっておられるのですか？ 鷹族のこと、いえ、この未来のこと」

桜姫の問いに、やはり従者には分かっってしまうなと龍は眉尻を下げて自分がこの先危惧している事態を告げた。

「ああ、おそらく鷹族とはいずれ戦となると思う。ただ、鷹族は鳳凰殿の血筋であり、鳥の女神殿の配下と当たる民族。あの太子を叩くだけならまだしもそうはいかないだろう」

「はい、やがては神族も関わって来ることでしょうし……」

味方としてか敵としてか、それはまだ分からないが、と二人とも声にはださないが思っていた。

ただ、今に至るまでは主上の勅命ということで多くの民族と戦って勝利をおさめて来ているのだが……

「ですが主、こちらを守らなければならぬ方がここに」
「……ああ」

腕に抱えている姫君を守るため、おそらくそのためになら多少の無茶ぐらいやってのけられると思う。

しかし、彼女は天界全土を巻き込むような戦いを望むかと言えば、きつとその表情を曇らすだろう。それでも桜姫はきっぱりと言いつつた。

「主、例え天界全土を巻き込む戦になろうとも、沙南姫様を守ることを迷わないで下さい。私達はそのためになら例え命を落とそうとも後悔は致しません。それは光帝を守る鳳凰殿も同じこと」

「桜姫……」

従者は主が守りたいと願うものを、自分の命にかえても主とともに守るのが使命だ。寧ろ、それが従者としての誇りであると言い切れるまでに。

すると、桜姫は凜とした表情をして片膝立ちになって龍に深く頭を下げた。

「主、ご命令を」

凜とした声はいつも彼女が梔子でも動かないほどの覚悟を決めているときに発せられるもの。それに水を差すようなことをいくら主とはいえ、龍は言うことが出来なかった。彼女の行動が正しいものだと分かっているからだ。

龍は申し訳ないと一度顔をしかめたが、それでも王として従者に命じた。

「……分かった。桜姫、天空族の長として命じる。来る戦に備え鷹族の動向を探り報告せよ。ただし、防衛以外の一切の抗戦は認めぬ」

「はっ！」

短く答え、桜姫は花びらを身に纏って瞬時にその場から消えた。

それから少しの沈黙が訪れた後、もう一人の従者も彼女と同じことを告げる。

「守ることを迷うな」

「啓星……」

やっぱり起きていたのかという声で龍は彼の名を呼べば、啓星はうんと伸びをして微笑を浮かべた。ちゃっかり酔い潰れた紗枝を片手で抱いているあたりは彼らしいが……

「桜姫の言う通りだぜ？ お前が迷えば天空族全てに何らかの影響が出る」

「ああ……」

「だが、そんな主だから俺達はお前の下に集いたくなるんだ」
「啓星……」

寧ろ全てを何とかしたいと願わない王に啓星はまず惹かれなかった。天のように全てを包み込む強い存在の癖して不器用な王だからこそ力になりたくなるのだ。

「心配すんな。お前が沙南姫に現を抜かしても問題ないぐらいは働いてやるさ。少なくともあの馬鹿には指一本触れさせやしねえよ」

「……紗枝殿に危害を与えたことでもキレてるのか？」

「さあ？ ただ、こんないい女を他のクズに渡したくはないだろ？」

ニヤリと色っぽい笑みを浮かべる従者に太陽宮だけじゃなく、明

日の朝は天宮まで破壊されるのかと龍は肩を落とす。間違いなく啓星はまた自分の部屋に紗枝を連れ込んで寝るつもりだ。

ただし、彼がそうする理由は彼女を守るためであって、不純な気持ちからではないと龍は分かっていた。まあ、そんな気持ちがないと疑わないのは龍だけであるが……

その時、辛うじて危害のない入口から風が舞い込んだ。気配すら感じさせず、いつの間にかそこに鳳凰が立っていたのだ。

「天空王殿」

「鳳凰殿。すまない、太陽宮でまた……」

「いえ、光帝は許容範囲内と申しておりましたので」

あっさりと鳳凰に答えられて龍はさらに申し訳ない気分になせられた。しかし、その原因は苦しそうに笑いを堪えているわけだが。

しかし、鳳凰はそんなやり取りをしに来たのではなく光帝からの伝言を持ってここに来たのだ。

「天空王殿、光帝がしばらく沙南姫様をそちらであずかって欲しいと申しております」

「沙南姫様を？」

突然の申し出に啓星もピクリと反応した。それはついに動き出したかという顔をして。

「はい。主上の命により我等光軍はしばらくの間、遠征に赴くこととなりました。

光帝自ら赴く戦ですので敗戦はございませんが、沙南姫様を狙う

賊からは天空王殿が守って下さった方が安心できるからおっしゃっておりますので」

つまり、それだけの大軍が動くことと、太陽宮の守りの戦力は極力押さえておくということ。沙南姫を狙う者達からすれば、これほどチャンスとなる時はないのだろう。

そういうことならばと、龍は彼女を守るために快く承諾した。

「分かった。沙南姫様はこちらで預かる」

「よろしく願いいたします。では、私はこれにて」

「いや、待ってください」

龍はその場から去ろうとした鳳凰を呼び止めた。まだ尋ねておきたいことがあったからだ。

「鳳凰殿、光軍はどの民族と戦う？」

「……鷲族です。そして、いずれは鳥族全てを相手にする可能性はあるかと」

「鳥の女神殿からは何も便りはないのか？」

鳳凰の脳裏に女神の顔が過ぎる。あの凜とした女神が大戦にもなりかねないこの戦にどうでてくるのか、今後関わって来ることは事実で……

「……あの方も戦いは止めたいはず。しかし、何もないのならば私はただ光帝を守るために戦うのみ」

それが近衛兵としての使命だからと鳳凰の表情はそう物語っていた……

第四十二話：守ることを迷うな（後書き）

宴の後は余計に気苦労度が上がるという龍……

本当、この人から気苦労をとってやりたいところですが、無理なお話でして……

はい、今回は主従のお話となりました。

戦に関して、天界全土を巻き込んでいくのではないかという龍の予想はまさにその通り。

時間軸でいけば、天空記本編の二百代前の最後の戦の少し前というところでしょうか。

まあ、この光軍の遠征も光帝が殺されてしまう太陽宮襲撃成功の理由の一つになります……

その理由も鋭い方なら分かるかも。

次回もまた二百代前のお話。

鷹族の馬鹿が沙南姫様が天宮にいた頃にやったことも書いておかねば（笑）

では、次回もお楽しみに☆

第四十三話：勝ち気なもの

天宮に沙南姫が滞在するようになって数日。毎日彼女のお手製料理に天空族の面々は喜び、龍も桜姫がいない間、彼女がお茶を煎れてくれるので非常に心安らかに過ごしていた。

なんせ、啓星が煎れるとなれば間違いなく酒にすり替えられるに違いないのだから……

そして、沙南姫がいる間、龍以上に彼女の滞在を別の意味で一番楽しんでいるのが南天空太子こと秀である。

「あの、秀様……」

「はい、何ですか柳泉」

「その……、沙南姫様宛に送られてきたものを売り払うのはどうかと……」

沙南姫宛に送られてきたプレゼントの数々を物色し、商人に売り飛ばしている主の行動を柳泉は諫めるが、本人は許可はとってあるのでニッコリ笑って答えた。

「大丈夫ですよ。沙南姫様はいらないから好きにしてくださいとおっしゃっていましたからね、だったら有効活用しようかと思ひまして」

「でも、ちゃんとした贈り物もあるのでは……」

「それはきちんとお渡ししますよ。あつ、でもこの薄絹は柳泉に着てもらいたいかな」

「秀様っ！」

「はい、じゃあ売りましようね」

真っ赤になって抗議する柳泉に秀は声を立てて笑う。彼が売り払

っているのはそういった類の危ない代物がほとんどだ。

その類があまりにも多く送り付けられてきては沙南姫も面倒であるため、秀に何とかするように頼んだのである。

だが、彼も消し炭にするのは勿体なくなってきたのか、どうせなら財源を得ようと結論づけたわけだ。なんせ、修繕費を稼がなくては天空王が頭を抱えるだろうし……

しかし、沙南姫にこれだけ送られて来ているというのなら当然、柳泉にもそれ相応のものも送られて来ているので、秀はきちんと彼女に伝えておくことにした。

「それと柳泉も私以外の男からプレゼントされたものは身につけてはいけませんよ？ それを見た狼達は君が好意を持ってつけているとは思いませんから」

「はい、秀様」

あくまでも主が従者を思っているようにも聞こえるが、間違はなく聞くものから言えば秀の独占欲丸出しとしか取られないだろう。

そこへ啓星も紗枝から預かってきた品々を重力で浮かせてやって来た。

「秀、こいつも商人に売っぱらってもらってくれ」

「うわっ、何ですかこの嫌がらせは！！」

「鷹族の変態からだ。それでも俺でも腹が立ったものは塵に変えたぐらいだ」

相変わらず自然界の女神様も好意を寄せられているようである。

沙南姫とはまた違った、よりいっそう大人の香を漂わせるものが送り付けられて来たようだ。

しかし、その品々を見ながらも一つ柳泉に疑問が生じた。

「でも秀様、何故鷹族の太子は天宮に送って来るのでしょうか」

売られて利用されることは予想しなくても、こちらが処分して苛立つことぐらいは予想がつくはずである。それは啓星も思っていたことで視線を秀に向ければ、彼は有り得そうな答えを返した。

「そうですね、もしかしたら沙南姫様というより兄上に対する嫌がらせかもしれませんね」

「天空王様のですか？」

首を傾げる柳泉に秀は簡潔に説明した。啓星は大抵予測がついていたようだが。

「はい、沙南姫様と紗枝殿に対してこれだけ送り付けて来れば、そのうち天空族は動くと考えているのでしょう。兄上は自分に対する嫌がらせ程度では兵は動かしませんし、兄上に直接危害を加えることは私達がいる以上、まずさせませんからね」

その意見に柳泉は納得した。龍が戦を仕掛けるとなれば、だいたいの沙南姫や紗枝を守るという名目からでしかない。

それに基本、平穏を望む主であるため、秀達が大抵のことは龍の耳に入る前に消し去ってしまっているのも事実なのだから……

しかし、啓星は壁に寄り掛かりながらもっともなことを告げる。

「だが、あの変態がそこまで考えてるとは思えないがな」

「ええ、おそらく誰かの入れ知恵でしょう。ただ、有能なものが傍にいるのかは謎ですけどね」

まだそのあたりは桜姫から連絡が入ってきていない。しかし、仕事の早い彼女のことで、そろそろ自分達の前に現れる頃ではある。

その時、廊下をトタトタと急いでかけて来る音に三人は気付き、入口に視線を向けた。

「失礼します、兄上！」

「失礼します！ 南天空太子様！」

装飾の施された黒衣を身につけた末っ子組は慌てた様子で部屋に駆け込んできた。ただ、日頃の教育が行き届いてるのか、挨拶をきちんとするのはさすがというべきか。

「おや、どうしましたか？」

どんな時でもというわけではないが、比較的落ち着いた物腰の秀は二人に問えば、彼等は呼吸を整えて事態を伝えた。

「大変なんです！ 鷹族が天空族の領地に侵攻してきていると！」
「鷹族の雑兵程度でしたら翔にでも遊んでやれと伝えておきなさい」
「違います！ 鷹族だけではなく、その他の鳥族の群れも攻めてきているとのこと」

それに三人はそれぞれ表情を変える。そして、そろそろ情報を持つてくると話していた桜姫も偵察から戻って来たのだろう、ふわりと花びらを纏ってこの場に現れた。

「南天空太子様」

「桜姫、戦況は？」

「はい、こちらへは三十万の軍勢が攻め込んで来ております」

「へえ、天空軍相手にそれはなかなかチャレンジャーだな」

「光帝の軍を討伐するために各鳥族は人員を割かれてますから」

通常、それだけの軍勢が攻め込んで来るというのは一大事ではあるのだが、その程度かと鼻で笑う強さを持っているのが天空軍である。

だからこそ、秀はどうせなら徹底的にやっておくかと勝気な笑みを浮かべて桜姫に命じた。

「いいでしょう。桜姫、翔と紫月に戦の支度をするように伝えなさい。あと、今回は私も出ますから」

「はっ！」

礼をとって桜姫はその場から姿を消す。そして、秀が戦場に出るというならと柳泉は秀と共に戦場へと思いつと進み出たが、今回は理由が理由なので彼はそれをあくまでももつともな理由付けで却下することにした。

「柳泉、あなたはここに残りなさい。あの変態はあくまでも沙南姫を狙うはずですからね」

言葉ではそう告げていても内心はあの変態に柳泉を二度と晒したくないからである。そうしとけ、と啓星も軽く諫めたため、彼女は主の命に従うことにした。

「はい、沙南姫様は必ずお守りいたします」

「純、夢華、君達も沙南姫様と柳泉を守ってくださいね」

「はい！」

「かしこまりました！」

実に良い返事に戦前の秀でも目元が優しくなってしまう。それだけこの末っ子組は頼もしく愛らしい。

そして、いつもは面倒だからとほとんど戦関係は任せっきりの啓星だったが、上を向いて何やら少し考えたあと切り出した。

「……秀、俺と桜姫も出る。ちょっとばかしあの変態に灸でも据えてやりてえからな」

滅多に戦場に出ることのない啓星が珍しく口にした言葉に、柳泉と末っ子組は何か胸騒ぎを感じてならなかった。

第四十三話：勝ち気なもの（後書き）

はい、お待たせいたしました！

今回は秀のひどいところその一ということで（笑）

贈り物攻撃から相手の思惑を推測した一行。

でも、良いように利用するのが彼等なんですよね……

まあ、太陽宮壊してたんで財源は必要だったんでしょうけど……
だけど売り飛ばすか普通……

そして、次回は戦ということ。

啓星が出るなんて普通はないらしいですが、どうも彼は何やら感じ
てる模様。

何か起こるという直感は良かったみたいなんですよね。

一体どんなことになるやら……

では、次回もお楽しみに☆

第四十四話…大將は誰？

石の大地で天の旗を掲げた天空軍は本陣を構え、これから襲撃して来るであろう鳥族の連合軍に備えていた。

ただし、いつも士気盛んな天空軍ではあるが、今回彼等は少々困惑している事がある。それは天空軍のシスコンと腹黒のことだ。

そして、その元凶である人物達に意見出来る少年はいるにはいるのだが、彼も会議中の元凶達に意見出来るほど勇ましくはない。

いや、それは勇気という言葉では言い表してはいけない、まさに特攻、名誉の戦死とされる偉業なのかもしれないが……

「珍しいですね、啓星が出てくるなんて」

「ああ、戦自体は面倒で仕方ないんだが、わざわざこっちの犠牲をそう出す訳にもいかないだろう？」

「おや、今回は私が出る時点で負け戦になど致しませんか？」

「作戦はな。だが、一応鳥の化け物が出てくるなら俺が遊んでやった方がいいだろう？」

そう、啓星が出るといつてきたのは後にさらなる戦が起けると予測していたから。しかし、彼の悪巧みを考えている顔に秀が気付かないわけがなかった。

「結局、ただのストレス発散のために暴れただけじゃないですか」「お前だって人のこと言えないだろ」

「当たり前です。私の柳泉をどうかしようなんて変態がいる時点で消してやりたい気分ですから」

「誰がお前のだ！ 潰すぞ！」

柳泉のことになるといつも言い合いが始まるため、また出陣の間が遅れていく。それでもいつもきちんと訓練を積んでいるため、例えば戦が始まったとしても全く問題ないのが天空軍の強さである。

だが、作戦などほぼ関係なく戦場を暴れ回る少年にも一つだけ確認しておきたいことはある。

「……なあ、紫月」

「はい」

「今回の戦の大將って秀兄者と啓星、どっちになるんだ？」

翔の質問はもっともで紫月も多少考え込んだが、兄の性格をよく知っている性かとりあえずの解答を返した。

「南天空太子様でよろしいとは思いますが……」

「うーん、だけどさ、秀兄者は大將って言うより参謀にまわる気だな」

「でも、兄上はあくまでも従者ですから大將を名乗るのもどうかと」「かといって立てないわけにはいかないんじゃないか？ 天空軍がどっちだって迷ってるし」

「天空王様はいらっしゃいませんしね……」

その時、偵察から戻ってきた桜姫が青の装束の袖をフワリと揺らしてその場に姿を現した。

彼女の登場に兵士達は膝を折りつつも心の中で大歓声をあげながら万歳三唱し、彼女も未だ大將が決まってないのだろうという状況を予測していたのか、秀達のいるテントの中へと入った。

「南天空太子様、啓星様」

「桜姫」

桜姫の登場に一旦二人は言い争いを止める。一応、二人もここは戦場だということは頭にあったらしく、本日は火と重力がぶつかって周りに危害を及ぼすようなことまでには至っていない。

そして彼女は二人の中に入って兵達が聞きたがっていたことを提案した。

「兵達がどちらが大将なのか困惑してますので御決めになって下さいませ」

「啓星、あなたで良いでしょう？ 私は参謀にまわりたいですから」「面倒なこと押し付けるな。俺はあくまでも従者なんだから前線に出てやる」

「いえ、やってください！」

「太子なんだからお前がやれ！ 俺は暴れたいんだよ！」

どうやら今回は二人とも自由に動きたいらしい。気持ちは分からないこともないが、ここまで私情で戦に出る大将というのは味方もあるが敵も困惑するだろう。

翔が大将の時は慣れているのか、全く問題ないと思われるのだが……

その時、外が少し騒がしくなったかと思えばテントの簾が開かれて呆れた声が入って来た。

「何をやってる」

「兄上！」

「龍！」

「主！」

天空王の登場に三人は驚き、すぐにテントの外に出て彼の前に膝を折る。大将が出て来てくれれば自分達は好き勝手に出来るというものだ。

ただ、今回のような戦に何故龍が出て来たのかという疑問は残る。

「龍、天宮にいらなくて良かったのか？」

「純達や將軍達がいるなら問題ない。それよりお前達の方がよっぽど気掛かりだから来たんだ」

じゃなければ、ゆっくり読書でもしていられたものだと言いた気な顔に兵士達は心の底から気苦労を背負い込んでいる大将を憐れんだ。

そして、その大将の発する空気が変わると、兵士達の気も一気に引き締まった。

「全軍、今度の戦で怪我はもちろん無駄死には絶対するな。これからさらに激しい戦が予測される。敵を倒す前に各々が身を守れ、良いな？」

「はっ！」

勇ましい声に龍はコクリと頷き、気苦労要素その一の弟にもきちんと注意を促しておく。

「翔、あまり暴れすぎるなよ」

「分かってるって！」

ニッと笑い返してくれるが、どこまでが彼の暴れ過ぎの許容範囲

に入るのかは龍な頭を悩ませるところがある。

しかし、今回はその四までが非常に嫌な予感しかしなくてならなかったのだ。龍は眉を顰めながらもおそらく聞く気はない命令を下しておく。

「それと秀、啓星、桜姫、相手を壊滅させるような無茶苦茶な戦をすることはやめろよ」

それに対して三人は同じような意味合いを持つ笑みを含んだ表情で返してくれた。

「やだなあ、そこまでやるわけじゃないですか」

「さっきいつもの倍の火薬を持った工作部隊がいたけどな」

「龍、その程度気にするなって!」

「相手の国で奇怪な地震が起こったという情報が入ってきたぞ」

「主、ご心配には及びません」

「桜姫、いきなり方向転換した幾部隊が崖から落ちたと報告が入ってきたが?」

三人は全てお見通しである大将にそれ以上の反論はしなかった。なんせ、それは全て自分達がやったことに違いないのだから……

龍は深い溜息を吐き出したが、彼が天空軍の大將だということに変わりがない言葉を告げた。

「まあいい。お前達の気持ち分からないこともないからな。向こうの大將は鷹族の太子だ。沙南姫達に散々迷惑を掛けているのだから好きにやれ」

「有り難き幸せ!!!」

「鷹族の太子にのみだからな！」

三人の声がいづもの倍弾んでいる。大将からの許可が下りたとなれば何をして構わないということ。おそらく、鷹族の太子のみなんて言葉はスルーだ。

意気揚々としている三人に龍はさらに深い溜息を吐き出して、三人の被害に巻き込まれないようにと翔と紫月に忠告しておくことにした。

「翔、紫月」

「ん？」

「はい」

「お前達は前方だけ蹴散らしたらすぐに戻ってこい。寧ろ天宮に戻っても構わん」

その意見に翔は目を丸くした。彼は突撃隊長だ、敵の大将への活路を切り開く役目が仕事である。

「へっ？ 進まなくて良いのか？」

「ああ、むしろ天宮で待機していた方が良かったのかもしれないな……」

今日何度目になるのかという溜息を龍はまた吐き出すのだった。

第四十四話：大將は誰？（後書き）

遅くなりましてすみません！！

しかもあまり進んでないという……

今回は戦の大將の件で揉めたという……

これが天空軍ならではの問題です（笑）

戦に勝つことは問題ないみたいですが、どうも私情が絡んで来るみたいでして……

だけど、龍が出て来てくれてよかったなあと。

うん、出てこなかったら本当大変なことになるんだろうな。

戦前に例のS三人は既にいろいろねえ……

次回は一体どんな戦になるのかお楽しみに（笑）

第四十五話：地獄絵図

地鳴りがする。怒声が響いて鳥族の連合軍の士気は上がる。その姿はまだ人間のままでいるものと鳥へと容姿を変えているものと様々だが、天空軍の大將が天空王であることを聞き、さらに彼等は白熱していた。

そして、ついに彼等は天空軍の本陣を視界にとらえたのである。

「見えたぞ！ 天空軍の本陣だ！」

「天空王の首はすぐそこだ！ かかれえ～～！！」
「うおおおお～～っ！！！！！」

三十万の大群は我先にとスピードを上げるが、本陣を前にして自分達を遮ろうとする最初の真っ白な壁が立ち塞がる。特にその中でも少年と少女が先陣を切って立っているのだ。

「西天空太子！！」

「そこをどけえ！！」

「そっちこそ俺以上に最悪な目に遭わせようとしている兄者達の元へ行かない方が絶対幸せだから引けっ！！」

敵の身を案じる言葉が出るのは仕方ないか、と紫月はいつもの百倍納得するが、それで引いてくれるなら最初から戦など起きはしない。鳥族の連合軍は士気盛んに翔達に突っ込んできた！

「紫月、今日は少し大人しく暴れようか」

「翔様からそんな言葉が出るなんて……」

「俺だって同情ぐらいするやい！」

「……そうかもしれませんが、油断はなさいませんよう。相手は鳥なので」

「分かってらい！ 風の使い方ぐらい気をつけるさ」

相手は鳥族。風に乗られる可能性は高く、使い方を誤ればこちらに隙が出来てしまう。しかし、翔は勝ち気な笑みを浮かべて剣を抜くと三十万の大群に斬り掛かっていった。

「風の刃に斬り刻まれたくないものは今すぐ下がれ！」

「生意気な！！ 従者もろとも葬り去ってくれろ！」

「そんなの御免だい！」

「遠慮致します！」

鋭い風を身に纏った二人は一斉に襲い掛かって来る鳥の群れを吹き飛ばし、そして切り裂く！ うめき声上がるがそれを気にもせず二人は身軽な動きで次々と敵を薙ぎ倒していった。

「西天空太子……！！」

「おっと！」

「ぐあっ……！！」

後ろから飛び掛かってきた怪鳥の爪をかわし、翔はタンと怪鳥の肩に飛び乗って剣の柄尻で首筋を強く打って失神させる。

いつもなら爪を一閃で切り裂いて相手を斬りつけてるところだが、どうもそういった気になれないのは兄達のことを考えてしまうからだ。

それは翔だけではなく、紫月も同じ心持ちらしい。相変わらず風の踊り子といった感じで相手を次々と蹴り倒してはいるのだが、相手を地面に埋めるまでの強さでおらず、かまいたちの威力も若干や

さしい。

しかし、いつも戦っている訳ではない相手にとっては二人の強さが分かるはずもなく遠慮なしに襲い掛かって来る。

「小娘!!」

「従者風情が生意気な!!」

主がダメならせめて従者だけでもと紫月を狙ってくるものが増え始めてきたが、彼女はせめて自分に倒されるならまだ地獄は見ないでいいだろうとフワリと強い風を一瞬身に纏って蹴り掛かった!

「寄らないでください!!」

「がはっ!!」

「グホッ!!」

「ゲハッ!!」

疾風の如く、しかし、鮮やかな蹴り技が三体の怪鳥の急所に入り地に伏せさせる。我ながら今日は甘いものだと思ふ。紫月は心の中で深い溜息を吐き出しながらも、また襲い掛かって来る敵に向かっていく。

しかし、彼等の後方から援護射撃をしていた天空軍の兵達からどよめきが聞こえ始めると、二人は上空から降り注いで来る殺気に気付く。もう、あの三人が待てないということなのだろう。

「紫月、兄者達が来た! すぐに戻るぞ!」

「はい!」

二人は風を身に纏うと、それは猛スピードで後退した。そこにいれば間違いなく今からやってくるであろう地獄に巻き込まれるから

である。

そして、鳥族の面々は上空に浮かぶ最悪Sトリオを発見するのだ。

「南天空太子だ！」

「啓星と桜姫も出て来てるぞ！」

「柳泉はいないのか!？」

柳泉の名を聞いてピクリと反応するSが二人。もちろん、シスコンと腹黒である。

「お前らみたいな欲まみれに妹を曝せるかってんだ！」

「全くですね。やっぱり柳泉は私の中に閉じ込めてしまおうかな」

「お二人とも、今だけは堪えてくださいませ。八つ当たりには充分の軍勢ですので」

シスコンと腹黒の喧嘩は今は止めておこうと桜姫はピシャリと言いつ切った。ただし、敵に対して全く容赦ない言葉はさすが桜姫というところか。

そして、秀は黒い微笑を浮かべて既に彼のテリトリー内に入ってしまったている鳥族の群れに容赦なく告げた。

「さて、本日は鳥の丸焼きで決定ですね。では……！」

「うわあああゝゝゝ!!」

秀が指を鳴らしたと同時に、地中に仕掛けておいた火薬が炸裂して辺りは火の海へと変わる。

ただし、当然彼がそれだけで終わらせるはずがない。指をもう一度鳴らせばロケット花火が打ち上がってきてさらなる爆発を生む。

「まだそこまで熱くなさそうですね」

地上とは打って変わって涼しい顔をしたまま、秀は上空からも火の雨を降らせた。

「うわっちっ！！」

「水！！ 水をくれえっ！！」

「ひっ、火があっ！！」

四方八方、秀の攻撃に囲まれた鳥族達は喚き散らす、まだあと二人残っていることを忘れてはならない。

「んじゃ、おまけだ」

「こちらもついでに」

「うぎゃあああ！！」

「やめてくれえっ！！」

啓星が重力を叩き付けて拘束し、桜姫が空間を歪ませた上にそれは悍ましい怪物の幻術を見せ付けければ、鳥族の兵達はついに泣き叫び始めた。地獄から逃げることで出来なくなった挙げ句、更なる恐怖まで煽られたのである。

そんな地獄絵図を遠くから眺めていた翔はただポツリと感想を漏らした。

「……ひでえ」

「はい……、ですがまだ向こうの大將にはこんなもので済むのでしょうか……」

想像もしたくないとはまさにこの事である。すると、天空軍の大將殿は思い腰を上げて翔達の前に進み出た。

「龍兄者、どっか行くのか？」

「向こうの大將の元へ」

「待て待て！ 兄者は大將なんだからそれはまずいだろ！？」

「天空王様！ それは私も反対です！」

「ああ、だがな……」

翔達が止めるのはもったもな事なのだが、彼はそれ以上もったもな理由を返してくれた。

「このままいったらあの三人が何を仕出かすか分からないから俺が直接降伏するように出向く。伝令一人出せない状況だからな……」

「……俺達でも行く勇氣ないよな？」

「勇氣以前の問題ですよ……」

そう、目の前の地獄絵図に巻き込まれずに行く力の持ち主など龍しかないのだ。

何よりあの三人の性格から考えても相手が降参して懺悔して、さらに三人のストレス発散に付き合わされない限りどうにもなりそうにない。

そして、龍はこれ以上ここに全軍が揃っていても申し訳ないからと翔に命じた。

「翔、ここはあの三人で片付くから全軍天宮まで下がって休むように言っておいてくれ。それと遅くならないから宴の準備もしておいてくれ」

「分かった！ 全軍撤収するぞ！」

「うおおお～～!!」

勝利の歓声を上げて天空軍は涙を流しながら天宮へ撤退していく。当然、その涙の持つ意味は喜びではなく恐怖だということは言うまでもない。

「だけど兄者、気をつけてくれよな」

「ああ、俺が向こうに出向くとなればあいつらも一緒に来てくれるさ。だが、出来ればすぐに引いて欲しいけどな……」

これからのことも含めると、龍は深い溜息を吐き出すのだった……

第四十五話：地獄絵図（後書き）

大変お待たせしました☆

こっちは久しぶりの更新です！

ノクターンを連続で書いちゃいましたからね。

さて、今回は戦ということですが……

翔と紫月ちゃんがいつもより遠慮して戦ってしまうという事態に……
うん、兄達がね……、というかどこまでやるんだろうなあ of S 達……

だけど、見るに見兼ねた天空王は伝令を出せないからと自ら降伏を
勧めに行くことになりました。

つまり、一旦次回で二百代前のお話は打ち切りかなと。

ならなかったらすみません（笑）

では、次回もお楽しみに☆

第四十六話…威圧

地獄絵図と化していた戦場の中を総大将が駆け抜けたことにより、その元凶達は攻撃の手を止めて彼の後を追いつける。さすがに一人で敵本陣に行かせるわけにはいかないからだ。

そして、彼等は龍からこれから鷹族の主に降伏を勧めに行くことを聞けば、やはり微妙な表情を浮かべて答えてくれた。

「何も兄上自ら降伏を勧めに行かなくても……」

「お前達に任せたらろくでもないことにしかなりそうにない」

「そんなにひどいことやりましたかねえ？」

「さあ？」

「身に覚えがございません」

三人揃って同じような返答に龍は深い溜息を吐き出した。おそらく、自分が相手の大将の元へ進み出なかったら、さらに悲惨な光景が広がっていたことだろう。

「とにかく！ これ以上戦う理由なんてないんだ。沙南姫様を守るためとはいえども、相手を潰すまで戦うことを俺は望んでいない。だから兵を引かせる」

「そう簡単に引くと思うか？」

「引かせるさ。それにこの戦、鷹族の主だけの力で鳥族の連合軍が出来上がったとは考えられないし、鳥の女神殿が命じたとも思えない。誰かが裏で糸を引いているはずだ」

その誰か、に会えばいいかと思うが、きっと高見の見物を決め込んでくれているのだろう。それに対してまたS三人は見事に返し

てくれた。

「まあ、そうなんだろうが吐いてくれるかだな」

「啓星、吐かなければ吐かせるまでですよ」

「はい。主、拷問の許可を」

「……お前達は少しぐらい敵に優しくなれ」

さっきあれだけやっておいてまだ足りないのかと、龍はガツクリと項垂れるのだった……

それから四人はものの数十分もせずに残存兵達を一蹴したあと、ついに敵本陣に降り立った。

しかし、さすがは敵本陣。総大将を守るため鷹族の重鎮達が固めている。だが、龍の発した言葉はやはり甘いものだった。

「鷹族の主に降伏を勧めに来た。道を開けてくれないか」

それじゃあ開けてくれないだろう、と啓星は思うが、あくまでも流血を見ずに全てを終わらせたいと思うのが龍である。そんな主だからこそ、力を貸したくなるのだけれど。

「例え天空王殿でもそれは出来ぬ。主を守ることが我等鷹族の業」

「あんな暗愚な主に仕える価値などあるのですか？」

「秀、今は事を荒立てるな」

「すみません。ただ、私は鳳凰殿と同じ民族だというのに仕える主を間違つてるとしか思えないんですよ。それに聞いてみたいものですね。あなた達は女性ばかりに氣をとられて部下は疎か民までを苦しめている暗愚な主に誇りを持てるのかと」

「ぐっ……！」

秀の言うことは事実で鷹族の者達は誰一人として反論出来なかった。それを腕を組んで聞いていた啓星はこれが業に縛られた哀れな者かと思う。明らかに正さなくてはならないものを放置して、自分達を取り巻くものを崩せずにいるものだと……

しかし、それ以上責めてやるなど龍が秀に下がるように命じれば彼はそれに従う。あくまでも目的はこの戦において降伏をせまることなのだから。

「頼む、こちらはこれ以上犠牲を出したくはないんだ。そこをどいて」

「うおおおおっ！」

「主！」

敵の一人がいきなり叫んだかと思えば龍に襲い掛かって来たが、届く前に桜姫が龍の前に立ちあつまり敵を花びらで切り刻む。

しかし、それを皮ぎりに残りの鷹族も四方八方から襲い掛かってきた！

「まったく……！」

「仕方ないですね」

「主、少しお待ち下さいませ」

重力と火、そして花びらが舞い散れば敵は次々とその場に悶絶させられていく。命までを奪うなど龍の意思を感じ、尚且つ龍には力一つ使わせないようにして三人は戦う。

ここで龍が戦ってしまえば、先ほどの言葉の意味が軽くなってしまふと分かるからだ。

「ぐはっ……!!」

最後の一人も秀が軽く首筋を打って気絶させれば、ついに本陣には鷹族の主一人の気配しか感じられなくなった。逃亡する時間はあったのだが、それだけはさせないと啓星がきっちりここに来たときから重力の枷で捕らえていたのである。

そして、四人は気配のする大きなテントの簾を潜れば、そこには悔しそうな顔をした鷹族の主が椅子にがっちりと押さえ込まれていた。

「天空王……!!」

「そちらの負けは確定しているため降伏を要求しに来た。これ以上の犠牲を払いたくなければ今後一切、沙南姫様や自然界の女神殿、そして天空族に危害を加えぬと約束してもらう」

「認めん！ 私は沙南姫達が欲しいのだからな！」

「己が私欲のためにどれだけの犠牲が出てると思ってるんだ！」

「それが下の者の役目だ！ ぐうっ!!」

既に敗北は決まっているというのに往生際の悪い、と啓星はさらに重力を強め、その発言にキレた桜姫も手に花びらを纏って龍に申し出た。

「主、このような者に降伏を勧めたところで無駄です。私が斬り捨てます！」

「桜姫」

「それが鷹族のためというもの。このような愚か者に彼等の命と忠義を無駄にさせることも、何より主が手を下す必要はありません」

龍に降伏を勧めさせること自体が彼女にとっては龍に膝を折らせ

てるような気にすらさせていたのだ。これ以上は誰一人譲るつもりはないらしい。

だが、鷹族の主はニヤリと笑みを浮かべて桜姫に問う。

「桜姫、私を殺せば鳥の女神殿はどう思われるか」

「暗愚な主が消えて清々するとおっしゃってくれるかと」

ぱっさりと言い切ってくれる桜姫に啓星はさすがだなと感心する。もちろん、もっと痛烈な言葉を言っても構わないと秀は思っているが。

「だが、鷹族の習性は知っているだろう？ 主を守れなければ自害するとな。それに鳥の民族が一つ滅びれば神族が黙ってはいまい？」

「くっ……！」

それには桜姫も眉を顰める。この馬鹿主の跡を継ぐ主が決まっているのなら問題はないが、それがいないとなれば少なくともここにいる鷹族は自害するに違いないだろう。

どうやら突破口を開けたと鷹族の主はニヤニヤして龍に迫る。

「さあ、天空王。それでも……！」

次の瞬間、その場にいる全員が立っているのがやっとなほどの威圧感を龍が放ったかと思えば、龍は鷹族の主の喉元に剣先を突き付ける！

「兄上……！」

「龍……！」

「主！！」

声を出すのがやっとで、三人は龍の行動を止めることなど出来ない。体中から冷汗が流れて来て、ただ、龍がすることを見ているしかなかった。

「て、天く……おっ！！」

三人がやっと立っていられるだけの威圧感な上に、彼等より力のない鷹族の主が声などまともに出せるはずがない。

「命までは取りはしないがこれは警告だ。お前の後ろ盾に誰がいるかは知らないが、俺達に危害を加えるなら例え相手が何者であろうと容赦はしない。

それにこんな茶番の戦を起こして何を企もうとも……！」
「ひいっ……！」

更なる威圧感によって、ついに鷹族の主は泡を吹いて気絶した。

「俺達は全て打ち砕く」

そして、その後に鷹族と天空族との本格的な戦へと時は流れていたのである……

第四十六話：威圧（後書き）

はい、お待たせしてすみません！！

ゲームにまだはまったままの緒俐です（笑）

だって、乙ゲーってかなり面白いじゃないですか！

人間味あふれて胸キュンしちゃいたいですよ！

それを小説に使いたいなあと……（遠い目）

さて、とりあえず次回からは現代に話を戻します。

本当、久しぶりの現代話ですね。

ノクターンは今のところ現代ですが、こっちは一ヶ月以上は現代書
いてないんじゃないか！？

まあ、鷹族の変態ハーレム馬鹿との戦いからスタートですので、ま
たドタバタコメディーをお楽しみ下さい。

本当、どうなっていくことやら……

第四十七話…太陽と火

目の前に現れた全長三メートル以上ありそうな鷹の化け物は沙南達を見下ろした。その真つ赤な目には欲望はもちろん、二百代前からの怨みも込められている。それを受けながらも森達の前に沙南と柳は庇うように立った。

なんせ、二人の後ろには武帝にボロボロにされて意識のない桜姫と立つことさえ出来ない闇の女帝もいるのだから。

「森さん、宮岡さん、ここは私達が食い止めるから早く龍さん達に二人を診てもらって！」

「だが！」

「大丈夫です。私には火の力がありますから戦えます！」

確かに沙南と柳の力ならば目の前の化け物を食い止められるだろうが、天宮家の面々と違って攻撃を受ければ傷ついてしまうことは自分達と一緒だ。しかし、この窮地を乗り切れる手札が今は二人の力だけしかない。

「いいから行って！ 患者優先にしないとそれこそ龍さん達に嫌われちゃうんだから！！！」

折角のバレンタインデーにそっちの方が御免だと言わんばかりに、沙南は途中ここまで来るときに伸びていたSPから拝借した銃を鷹族の主に向けながら叫ぶ。

いつもなら銃をぶっ放してる方がよっぽど龍を青くするのだが、今はそれを突っ込んでる場合ではない。

「沙南姫、覚醒もせずに戦うつもりか？」

「当たり前！ 折角のバレンタインデーなのに私が覚醒して恋人達
の一夜を消し去りたくはないもの！ それにあなたの目的は沙南姫
を手中におさめることなら現代の私としても会わせたくないわ！」

沙南の力は太陽。彼女が覚醒すれば恋人達の甘い一夜は朝へと変
わってしまう。

それに龍達と違って彼女は意識を現代の折原沙南として留めてお
くことは出来ず、最悪、太陽の力を暴走させてしまいうリスクがある
のだ。それを唯一止められる龍がいないまま覚醒するわけにはいか
ない。

ただし、それでも彼女は引くつもりはなかった。その強い意志を
宿した目に鷹族の主はくつりと喉を鳴らす。やはりその意志の強さ
は変わらないと改めて思う。

「だが、お前が沙南姫の生まれ変わりだということに変わりはない。
私のものとなってもらう！！」

「お断りよ！」

そう告げて沙南は発砲するが、やはり鷹族ということだけあって
銃弾は全く効いていない。それに鷹族の主はニヤリと笑みを浮かて
沙南を気絶させようと腕を振り下ろすが、そうはさせまいと柳の放
つ火球が側面に直撃した！

「くっ……！！ 柳泉！！」

「まだよ！！」

「くうっ……！！」

柳はさらに火炎放射を放って鷹族の主を後ろに引かせる！

「誰にも指一本触れさせはしない！」

「このっ……！　ぐあっ……！」

今度は眩しい太陽光が鷹族の主に襲い掛かり、そのあとさらに柳がいくつもの火球を撃ち込んだ！

「覚醒していないからって太陽の力が扱えない訳じゃないのよ！
目潰しぐらいは出来るんだから！」

ただし、それ以上の攻撃技となればさすがにまだ使えはじめて半年というところではうまくコントロール出来ないのが現状だ。それだけ太陽の力というものがかなり巨大だということは沙南自身が理解していた。

「森さん、宮岡さん！　ここは乗り切るから早く行って！」

絶対持ちこたえてみせるからと、まるで姫君の風格を醸し出している沙南の視線に貫かれると、意を決したように二人はその場をあとにすることにした。

「すぐ戻るから待っていてくれ！」

そう言い残して森は闇の女帝を、宮岡は桜姫を抱えて部屋から出て階段を駆け降りる！　ただし、闇の女帝は二人だけを残していくことに不満をぶつけた。

「森！　覚醒していない二人だけを残して」

「だから一分だけ持ちこたえてもらうんだ！　立ちも出来ないくせにあそこに残ったところで何が出来る！」

「くっ……!」

森の言ってることは正しい。本来、闇の女帝が万全な状態ならあの程度ぐらい軽く始末出来たのだが、それすら出来ないほど力を消耗しているのだ。残ったところで足手まといになる。

「良、近くて安全な部屋はあるか!？」

「唯一無事なのは情報室のみだろうな。そこならこの宿泊棟のシステムぐらい掌握してやるからついて来い」

「分かった!」

二人はさらにスピードを上げて情報室を目指すのだった。

一方、龍と鳳凰の戦闘の気配を感じて宿泊棟の最上階へ向かうのに迂回ルートをとっていた高校生組と啓吾だったが、ふと、啓吾は脳裏に聞こえてきた声に足を止めた。

「啓吾さん?」

「兄さん、どうしたんです?」

突然止まった啓吾に翔と紫月は尋ねると、啓吾は何やら脳内で誰かと話すのに集中しており目を閉じてその言葉に頷いている。彼とそこまで意志が疎通出来るものといえば、ただ二人だけ……

そして話が終わったのか、少し青い光を帯びた目を開けて啓吾は二人に告げた。

「……三男坊、紫月、お前達は桜姫達と合流しろ」
「えっ?」

桜姫の位置はと、紫月は発信機的位置を確かめればそこには四人が固まっている状態だった。

「啓吾さん、森兄ちゃん達もいるみたいだからあんまり問題ないんじゃないか？」

「ああ、だけど柳と沙南お嬢さんだけ残して離れたりはしないだろ。俺は最上階に行くからお前達は桜姫達のところに行け」

つまりそうしなければならぬ状況となっているというなら、考えられることはただ一つだけ。

「ってことは桜姫姉ちゃんは怪我してんじゃねえのか！？ だったら啓吾さんが桜姫姉ちゃんの所に行った方が……！」

「その桜姫が柳達のところに行けて語りかけて来てんだ。だったらそうするのがベストだろ」

面倒だからこれ以上説明させんな、と啓吾はそれ以上の質問は却下することにした。

もちろん、医者としてはすぐに桜姫達の元へ行くべきなのだろうが、これ以上患者を増やさないことも、ましてや龍が一番守りたいものをむざむざと敵にやられるわけにもいかないのだ。

それに彼女から武帝の存在を聞かされたとなれば、沙南と柳が狙われないとも限らない。いや、寧ろ二百代前のことを考えれば沙南を狙って来る可能性は充分過ぎるほどある。なんせ、天空王に怨みがあったことは確かで……

「とにかく、まだ残党と大物が残ってんのは確かだから、桜姫達と

合流したあとは末っ子組達とも合流しろ。分かったな？」

「……分かった」

「はい、兄さんも無茶はしないように」

「極力な」

こうして高校生組と啓吾も二手に分かれるのだった。武帝の狙いを誰も知らないまま、孤島のホテルはしばらくの間、まるで彼の箱庭のまま時間が過ぎていく……

第四十七話：太陽と火（後書き）

えー、大変お待たせした今回です。

しかもちよつと短いかもねえ……というつつこみも……

はい、ゲームばっかしてるからこんなことになるんですね（笑）

さて、今回は沙南ちゃんと柳ちゃんが戦うという、天空記ではあんまりない話に。

なんせ通常なら戦ってるだろう桜姫と闇の女帝がリタイア状態ですからね。

でも、女子大生二人がどこまで頑張ってくれるのかは緒俐としても楽しみです☆

だけど、啓吾兄さんも急がないとこのあと大変なことになりますからね！

何だかんだ言いつつ、忙しくなるのが啓吾兄さんですから（笑）

では、次回もお楽しみに☆

第四十八話…女子大生達の攻防

沙南達を残して宿泊棟の最上階から情報室に辿り着いた森達は、ありとあらゆるシステムの光りに一瞬目をくらませたが、宮岡は桜姫を壁に寄り掛からせるとすぐにパソコンのキーを叩き始めた。

「良、お前こんなに分かんのかよ」

「ちよつといじってやればいいだけの話だから問題はない。森、今現在全員がどこにいるか教えてくれ」

これをちよつと言うあたりどうなのかと思うが、とりあえず森も闇の女帝を椅子に座らせて全員の反応を確認した。

「まず高校生組はこっちに向かって来ている。啓は……、ああ、お姫様達の所に向かってるな」

それを聞いて宮岡はホツとした。啓吾が向かってくれているのならあの二人は問題ないはずだ。寧ろ、自分達が行った方が邪魔になる。

「末っ子組と紗枝、それに淳は……何だ？ 何か妙な位置にいるが……」

「ああ、隠し通路を見つけたか。何階だ？」

「十三階だ。ってかこういったホテルに十三階なんて存在しないもんだけどな」

「だから怪しいんだ。まっ、そこに隠し通路を作るとすればこの辺りか」

宮岡はキーを叩いていきながら一本の通路を作り上げ、そこに四

人の反応を打ち込んでいく。

「あとは秀が麻薬会場、龍が踊場だ」
「分かった」

それを聞いて宮岡は全員の現在地を入れ込むと、システムの大画面に宿泊棟内の地図と全員の現在地が映し出された。それから宮岡は自分専用のパソコンをシステムとリンクさせるとニッと口元に笑みを象る。

「よし、これで宿泊棟内のシステムの掌握は完了した」
「はっ!？」 お前何やって……!!」

「こつちがこの状況なのに無駄な戦闘はしたくないだろう。だから全員が合流出来るルートと脱出口だけを確保してあとは全部締め出す。そのために口頭で全員の現在地を聞いたんだ」

そう、通常ならパソコンを繋いで全員の現在地を映し出すだけでも良かったのだが、宮岡はそれをしながらルートの一本化とシステムの掌握を進めていたのである。

全く、パソコンやらシステムのことになるとうちと本当に手際の良すぎる男だと森は改めて思った。その時、勢いよく扉が開かれる。

「森兄ちゃん達無事か!？」

「オウ! 腕白小僧と踊り子!」

高校生組の登場に一行はより安心したが、やはり桜姫のボロボロになってる姿には二人とも表情を歪めた。

「桜姫姉ちゃん大丈夫なのかよ……」

「女子大生達が止血してくれてるから大丈夫だとは思うが、こんなにボロボロにされている桜姫を見るのは初めてだ」

森の言うとおり、一行の中でもかなりの力を持つ桜姫がここまでやられることは珍しい。しかも未だに意識も戻っていない状況で、鷹族の主から打たれた薬がどのように作用してしまうのかも気になるところだ。

しかし、医療の術を持たない翔ではどうすることも出来ないため、彼は彼のやるべきことをやることにした。

「宮岡の兄ちゃん、紗枝ちゃんは今どこにいる？」

「この棟の十三階だ。ルートは一本化してあるから迷うことはないよ」

「分かった。じゃあ、俺はちょっと行って紗枝ちゃんを呼んでくるから紫月は皆を頼む」

「分かりました。ですが油断しないで下さいね、桜姫さんを追い込んだ奴がどこで出てくるか分からないんですから」

「オウ！」

威勢良く翔は答えると紗枝を呼びに行くため、情報室から飛び出したのだった。

その頃、宿泊棟の最上階では沙南と柳がコンビネーションよく鷹族の主に挑み、少しずつダメージを与えているところだった。

「それっ！」

「やっ！」

沙南が鷹族の主の目を太陽光でくらませている間に柳が火球をぶつける。その繰り返しに鷹族の主はその巨大な腕や翼を無造作に振り回すが、やはり世界最悪のテロリストでもある二人は世間一般的には身軽な方だった。

ただし、柳はともかくまだ覚醒してそこまで太陽の力をコントロール出来ない沙南にとって長期戦は不利だということは二人とも感じていたが、他のメンバーのように一撃必殺で悶絶させる方法を考えあぐねている状況だ。

もちろん、覚醒してしまえばすぐに終わるかもしれないが、覚醒して元に戻るまで自分達の力が暴走しないとは限らない。何より、暴走した時に止めてくれるものが今ここにいないのだから……

「沙南姫……！ 柳泉……！」

目が眩んでいる状況で無造作に腕を振り下ろしてはいてもそれなりの巨体のためか、風圧と破壊された物品の数々が飛び散って二人を襲って来る。

やはりこのままでは沙南に負担が掛かると思い、柳は意識を保てるギリギリの力を解放することにした。

「沙南ちゃん、少しだけ離れていて」

「……分かった」

沙南は柳が力を解放することを悟り、出来るだけ邪魔にならないようにと部屋の隅の方へ飛び自分の力も溜めておくことにした。いざとなったら小さな太陽でもぶつけてやろうと思っているのは彼女らしい。

そして柳もふわりと髪が熱風で揺れたかと思えば、一気にその目は赤い光を放つ！

「やっ！」

「くっ……！」

暗愚だと言われようとも、増幅した柳の力を感じとった鷹族の主は先程より一回り大きくなった火球を上空に羽ばたくことでよけたが、大きく開いた翼を焼き尽くさんばかりの火炎放射が柳から放たれる！

「ぐあああっ！！！」

「まだまだ！！！」

柳はさらに火球を翼にぶつけると火の羽がいくつも抜け落ちて地上へと舞っていく。その光景に残酷なことながらも綺麗だと沙南はそう思った。

しかし、翼を焼かれた鷹族の主も少しずつ視力が戻って来たのか、ぼんやりと柳の赤い光を帯びた目を視界にとらえると同時に鋭い爪を振り下ろした！

「くっ……！」

後ろに跳んでそれをかわして柳は再度攻撃を仕掛けようとしたが、ふいにあげられた咆哮で耳に痛みが走りその隙を突いて鷹族の主は柳の体を掴んだ！

「柳ちゃん！」

「動くな沙南姫！ それに柳泉！ 力を発動するならすぐに貴様の体をへし折るぞ！」
「うっ……！」

巨大な手に捕らえられた体は鷹族の主にとっては自分は今、人形と同じだと告げられているよう。おそらく、少しでも力を解放すれば殺されない程度に危害を加えられる事は分かる。

だが、それ以前に自分がやられてしまえば沙南に矛先が向けられてしまう事の方がもっと気掛かりだった。そして、柳は力をおさめていき赤い目の輝きは通常の瞳の色へと戻る。

「そうだ、それでいい。だが、貴様にはたつぷりと主に逆らった仕置きをしてやる」

「誰が……！」

「私がお前の主だ。薬漬けにして二度と逆らえないようにしてやる。そして、沙南姫！」

鷹族の主は柳を掴んだまま沙南に近寄ってきた。その巨体に捕らえられている柳を何とか助けられないかと思うが、自分の力の発動も柳を危険な目に遭わせてしまうのだろう。

「やっとお前も手に入れられる。天空王がもっとも愛し、守り続けたお前を手に入れることが出来れば二度とあの男にでかい面などさせん！ そしてあの男の歪んだ顔を……！！！」

突如、鷹族の主の呼吸が乱れ始める。柳を掴んでいた指が一本ずつ無理矢理引きはがされ、柳が地面に落とされる前にその体はふわりと浮く。

そして、鷹族の主に更なる重力の枷が叩き付けられれば、彼は膝

を折ってついには立ち上がることも出来なくなった。

「あっ……！」

「兄さん！」

女子大生達の顔がパアツと明るくなる。だが、当の本人は爛々と青い目を輝かせて怒りに満ちた声を発した。

「お前、人の妹に何やってくれてんだよ……！」

そう、シスコンが到着したのである……

第四十八話：女子大生達の攻防（後書き）

はい、お待たせしました☆

相変わらずゲーム三昧の緒俐です（笑）

新作のネタに使いたいののでつついやり込んでしまおうという。

さて、一行にいろんな動きが出てきましたよ。

宮岡さんがホテルのシステムを短時間で掌握してしまい全員がすぐに合流出来るルートが完成。

これなら翔も迷わず末っ子組の一行と合流出来るかな。

女子大生達は間一髪のところをシスコンに助けられて良かったなあ。

次回は怒り狂ってるシスコンがどこまでやるのか……

はい、お楽しみに☆

第四十九話：狙い

啓吾が来たことで沙南と柳はもう大丈夫だとホッとする反面、相変わらずなシスコンぶりを発揮している啓吾の怒りはかなりのものらしくあたりの物という物が重力の餌食になっている。

そして、その中でも一番のダメージを与えられている鷹族の主は呼吸が苦しくなりながらも赤い目を啓吾に向けた。

「啓星……！」

またこいつも人の二百代前の名を呼ぶかと啓吾はピクリと眉を吊り上げる。とりあえず、こいつは鷹族の馬鹿だなと彼はうつすらとした記憶を辿ると、まずは沙南と柳を安心させる言葉を告げた。

「柳、沙南お嬢さん、すぐに終わらせるから待ってろ」

「うん！」

「ありがとう、啓吾さん！」

どれだけキレていてもそう安心させてくれる言葉を掛けてくれることは忘れないんだな、と沙南は思うが、正確に言えばそれしか言う余裕しかない怒りだということを手早く知ることになる。

目が青い光を放ち勝ち気な笑みを見せたのは二人にのみで、彼はすぐさま怒りに満ちたシスコンへと変貌したのである。

「よくも柳に触れてくれたなあ？ 圧死か塵になるか選ばせてやるから答えやがれ」

「ぐあっ……！！！」

答える前にそれだけ重力を掛けては無理なのは……、と沙南は思うが、怒り狂っているシスコンに突っ込むだけ無駄だろう。

その間にも、鷹族の主は全身に掛かって来る重力の枷から筋肉がボロボロにされていく感覚と呼吸がさらに止められていく感覚をおぼえさせられる。

どうやら単なる雑魚だな、と全く抵抗を見せない鷹族の主を見限ったのか、啓吾はさっさとケリを付けることにした。

「そうか、んじゃ生き地獄を味わってくたばれ」
「ちよっと待って！」

突如口をついて出て来た声に、沙南はまた意識を乗っ取られたのが分かったが、素直にそれを受け入れることにした。

「どうした、沙南お嬢さん……、じゃなくて沙南姫様か」

目が虚ろになったことに啓吾は気付いて言い改める。本日二度目の沙南姫の意識に柳はどうも沙南の意識が不安定になりやすくなっているなと感じた。

もちろん、力が暴走している訳ではなく、意識だけが沙南姫へと戻ってるだけなので特に警戒する必要はないと思うのだけれど……

そして、沙南姫は啓吾の前に進み出ると、その凛とした風格で鷹族の主に問う。

「鷹族の主、あなたを操っているのは武帝ですね」
「違う！ これは同盟だ！ 武帝に鷹族の戦力を貸す変わりに私は

沙南姫達を手に入れ、そして憎き天空王を始末してもらおうと！」

「鷹族だけで出来る訳ねえだろ。龍の周りには俺達だっているのにどうやって始末する計算が出来たのか聞いてみたいものだな」

確かに啓吾の言うことは正しい。二百代前、鷹族は他の鳥族と組んだにも関わらず天空族に、というより啓星達にボロボロにされたのだ。それは現代でも充分力の差は理解出来るはずだ。

「ならば、何故光帝達を滅ぼすことが出来たと思う？」

「ありゃ、神族まで出てきたから……！」

つじつまはあった。武帝が同盟を組んでいたのは鷹族を始めとする鳥族の連合軍だけではない。かつて天空族と同等の戦力を誇っていた神族の存在があったから。

そして、鳥の女神を手中に収めているという点も含めて現代で自分達に勝つ方法があるとすれば……！

「お前、鷹族だけじゃなく鳥の女神まで武帝に売ってたのか……！」
「くくっ……！ 鳳凰に恋い焦がれていた女神なら、そして現代でも鳳凰と巡り合い二百代前の力を覚醒させた女神ならさぞお前達でも苦戦するはず。」

なんせあの女は神族でも最高峰の力を持っていたからな！」

「じゃあ、現代でお前達が本当に狙っていたのは……！」

「そうだ！ 鳥の女神を操りお前達を滅ぼすことだ！ 貴様達はまんまとあの女がこちらの人質に取られていることで救出に向かうと踏んでいた通り、それこそがこちらの狙いであり貴様達を分散させて仕留めるための罠……！」

それ以上は聞く必要はないと啓吾は一気に鷹族の主の呼吸を止めて悶絶させた。鳥の女神が現代でどこまでの力を持っているのかは

定かではないが、二百代前の記憶では鳳凰に戦いを挑めるほどの強さを誇っていた事は事実である。

何より、彼女を探しにむかっているメンバーは末っ子組と紗枝、そして土屋なのだから……

「兄さん」

「ああ、末っ子じゃ鳥の女神相手に戦うのは荷が重いな。もちろん紗枝が覚醒すれば互角の戦いは出来るが武帝が出て来たら厄介だ」

「武帝はおそらく出て来ます」

「沙南姫……」

「彼は天空族そのものを滅ぼそうとするでしょうから弱った太子達を狙わないはずありません。そのために鷹族の戦力を取り込んだのでしょから」

確かに的を得た意見だと思う。ならば、まずしなくてはならないことはと啓吾は目を閉じて強い念を夢華に送った。

『夢華！ 聞こえたら返事しろ！』

『お兄ちゃん？ どうしたの？』

どうやらまだ話せる状況らしく啓吾は安堵した。戦闘中となればとても会話などしていられないのだから。

『いいか、お前達はすぐに引き返して三男坊達と合流しろ。鳥の女神は武帝に操られているらしくてお前達の手にも負える相手じゃないかもしれない。それをすぐに紗枝達に伝えるんだ』

『うん！ 分かったよ！』

夢華がしっかり答えてくれたのを聞き終えて啓吾は目を開く。

「よし、とりあえずこの馬鹿の始末は終わったからお前達は森達のところにいる」

「えっ、兄さんは」

「面倒だが俺が鳥の女神のところに行く。武帝のことだ、天空王の従者だった桜姫は女だったから鷹族の主の元へ差し出して屈辱を味合わせてやりたかったんだろうが、俺は自らの手で殺してやりたいぐらいの怨みは持ってるだろうしな」

何より引っ張り出さなければこの戦いを終わらせることが出来ないのだ。そして、鳳凰と戦ってる龍の元に行かせる訳にもいかない。

「まっ、そういうことだから柳はちゃんと沙南姫様を守っておけよ」
「分かったわ」

「よし。んじゃ、これ頼む」

啓吾は服と靴を脱ぐとそれを柳に投げ渡した。つまり、それをすることの意味は一つだけ……

「覚醒なさるんですか？」

「ああ、というより俺ん中の啓星がそうしろってうるせえからな！」

次の瞬間、啓吾の目が青く強い力を放ったと同時に青い衣が彼の身を包み込む。そして、溢れ出した重力の力は防弾ガラスを塵に変えて冷たい夜風を最上階の部屋に招き入れた。

「兄さん……」

「啓星様……」

「残念、まだ意識は啓吾のままだ」

ただ、少し揺さぶられてしまえばすぐに啓星として戦うことにはなりそうだけれど。

「夢華達は……ああ、十三階だったか。んじゃ、行ってくる」

そして、啓吾は上空に飛び出して最上階から十三階へと舞い降りて行ったのだった……

第四十九話：狙い（後書き）

はい、お待たせしました☆

本当、どれだけ開けてるんだよと苦情がきそうですが、ただいま新作の構想を練ってましてそれで天空記が疎かになってきてるといふ……

うん、あとはゲームにはまりまくってる性でもあるんですけどね。

実は新作も乙ゲーの要素を含み、日常と魔法とバトルと恋愛というまたはちゃめちゃん設定を考えている訳です（笑）

勢いがあるなら今年にアップしたいところですが、さすがに厳しいか……

まあ、バレンタインのお話はもう少し続くぐらいかなあとthinkしますので、次回のバトルを楽しみにしててくださいね☆

第五十話：籠の中の鳥

啓吾から念の通信を受けていたため、夢華が一旦走るのを止めたことに純、紗枝、土屋の三人も足を止めることになったが、通信が終われば夢華は現実に帰ってきたかのような表情に戻った。

「どうしたの、夢華ちゃん？」

「うん、お兄ちゃんが行ったらダメだから戻って」

純の問いにそう返して、夢華は啓吾から受けた念の内容を簡潔に説明すると、また面倒なことが起こったなと紗枝と土屋はそれぞれの感想を述べる。

「鳥の女神が敵って……、それは確かに厄介だわ」

「うーん、救助に行って返り討ちは確かに辛いね。だけど、紗枝ちゃんなら元に戻せないのかい？」

鳥の女神よりも上級の自然界の女神様であった紗枝に土屋は尋ねると、紗枝は肩を竦めて答えた。

「さあ？ 覚醒してみないと何とも言えないけど、彼女がどうやって操られているかにもよるわね。何かの植物の一種で自然界の女神の許容範囲の治癒が出来るなら問題はないだろうけど、最悪、戦うということになったら気は抜けない相手ということは確かよ」

なんせ、鳥を味方につけているのだ。一応、自然界ということでは紗枝の味方をしてくれる鳥でもあるのだが、強制的に操る力は鳥の女神の方が強いだろう。もちろん、紗枝が覚醒して力を発揮すればまた違っては来るのだろうか。

「とりあえず、啓吾君の言うとおりにしようか。翔君達と合流した方が安心だし、そろそろ銃弾が切れそうだから補充しておきたいしね」

テロリストでも一般人だから、と言えば紗枝はくすくす笑う。確かに鳥の女神を探し回っている間、敵はほぼ純が簡単に倒してくれたが発砲しなくていい訳ではなかったのだ。もし、化け物級が襲い掛かって来たら少し銃弾が心許ない。

その時、こちらに元気のいい足音が聞こえてきてその足音の持ち主に四人の顔は明るくなる。

「純！」

「あっ！ 翔兄さん！」

若干ボロボロの服装でも大して身体には問題なさそうな翔の姿に紗枝は医者として安心するが、ここからが不敏な会話が繰り広げられた。

「オウ！ 怪我はしてないか？」

「うん、翔兄さんほどボロボロじゃないよ」

「ボロボロってお前なあ……」

「でも翔お兄ちゃん、ケンカ負けちゃったの？」

「うっ……！」

末っ子組にけっして悪気があるわけではないが、天下無敵のケンカ好きである翔にダメージを与えるには充分過ぎた。ただ、翔は彼なりの精一杯の言い訳をする。

「その、だ……、負けてたら今ここにいる訳がないし、まあ、相手が思ってたより強かったから秀兄貴が闘うことになったただけでだな……」

「あつ、だったら安心だね！」

「うん！ 秀お兄ちゃん、翔お兄ちゃんの倍は強いから大丈夫だよ！」

その笑顔に翔はさらにダメージを受けた。無邪気過ぎる声とグサリと突かれる核心は非常に痛いものだ。それを聞いていた紗枝と土屋も同情してしまうほどにである。

「結構きつそうね……」

「いや……、だけど秀君は確かに翔君の倍の強さだからね……」

フォローしてやりたいところだがどうやらそれは不可能としかない言葉しか紗枝も土屋も持ち合わせていない。ただ、落ち込んでいる暇ではなかった。

『淳行、聞こえるか？』

「ああ、どうした良二」

通信機から聞こえてきた宮岡の声に全員が耳を傾ける。

『まずは秀君の力だと思いがパーティー会場で火災が発生した。それとそちにまた新たな軍勢が向かってるから警戒してくれ。道は一本に統制してるからな』

「分かった。翔君、悪いけど銃の二、三丁奪ってくれるかい？ 出来ればショットガンだと助かる」

「お安い御用だ！」

ほぼやけくそで翔は開き直ると、宮岡の通信通り鷹族とSPの残党達が翔達に向かってやってきた。

「十人ぐらいなら俺一人でイケるな!」

「翔兄さん、無茶しないで。僕も手伝うから」

「純、あれぐらいはな……」

「紫月さんがいない分フォローするから大丈夫だよ!」

兄の威厳も何もかも木っ端みじんに砕く弟は、やはり秀の弟でもあるんだなと紗枝も土屋も思った。まあ、純は三人の兄の中でも一番秀に似ているところはあるが……

そんな短い会話をしている間に敵はこちらに向かって発砲してきて、その銃弾の中を翔と純は突っ込んで行った。ただ、敵には気の毒で仕方のない会話を繰り返しながらだ。

「純、兄をフォローしようなんてあと十年早いぞ!」

「うごっ!」

「そうかなあ? 翔兄さんがお小遣足りない時に貸してあげてると思っけど」

「グハッ!」

翔の蹴りと純の肘打ちが敵の急所に入り、膝を折ってる間に二人して次の敵に飛び掛かって回し蹴りを決める。それから翔はショットガンを蹴り飛ばし、それを土屋がキャッチした。

「それとこれとは話は別! 俺は天下無敵のケンカ好きなんだから弟にそれを奪われるわけにはいかないのっ!」

「ぐあっ!」

「うおっ!」

風の力で宙に舞い上がり、翔は流れるような動きで敵の首筋を打ったあともう一人の顔面に蹴りを入れた。そして、純は壊さないようにと銃を拾いながら襲い掛かって来る敵の後頭部を蹴って気絶させた。

「うん、だけどやっぱり翔兄さんにはフォローが必要だと思うな」

「だから何で」

「グオオッ……！」

危うく踏み潰そうとした銃を純が一足早く拾い上げ、翔の後ろにいた鷹の化け物の顔面を思いつき蹴り飛ばし、壁にその巨体を突っ込ませた。

「ねっ？ 危ないでしょ？」

「銃も壊れるところだったな」

「土屋の兄ちゃんまで……」

さすがに反論出来ない状況に翔はがっくりと肩を落とすのだった

……

そして、同時刻。火災の発生しているパーティー会場では秀と蜻蛉の壮絶なバトルが繰り広げられていた。

さすがに火事となればそれまで気絶していた客達も意識を取り戻して全員が島の外へと逃げ出して行ったが、このパーティーに参加していたものは所詮は犯罪者だからと秀も蜻蛉も全く力を抑えることなく戦っていたのである。

「さて、地の利は完全に僕に傾いてきたと思います。がまだ戦いますか？」

火の海の中で何ら影響を受けない秀はこの無意味と分かっている戦いを終わらせるためにあえて火災を起こしたが、それでも蜻蛉は熱さに堪えながらも一步も引こうとはしなかった。

「……引けないわけはその通信機で全て聞いているだろう？」

「ええ、武帝さえ消してしまえば終わるということぐらいは。けどやはり鷹族の性なんですかね、絶対的なものを手にするまでは戦うことをやめないという点は二百代前と変わらない」

「当然だ。お前達天空族もし、天空王が呪いをかけられて沙南姫が敵に取られたら自由には動けないだろう？」

その問い掛けに秀は口元に笑みをかたどった。そして、最も彼らしい言葉を吐いたのである。

「ええ、半分は正解ですけど半分はハズレです。なんせ、僕達は籠の中に入れられたところで大人しく飼われている鳥とは違いますから」

それは明らかに鷹族への皮肉であったが、秀が言おうとしていることの意味合いはそれだけではないことに蜻蛉は気づいていた。

「まあ、きっとあなたは逃げるタイミングを見極めようとしてはいるんでしょうけど、籠を壊すにはどうすればいいのかを考えあぐねている」

「……やはり天空族の軍師だな。こちらの突かれたくない部分を突いて来る」

「ええ、そういう性分ですからね。だからこのあたりで反旗を翻し

てみませんか？ 武帝を引きずり出しさえすれば、僕が奴を締め上げて鳳凰の呪いを解かせますから」

「……鳥の女神殿はどうするんだ？」

鳳凰だけ助かって、鳥の女神だけ助かっても意味はないのだ。だが、その答えを秀は持っていた。

「ええ、彼女がどんな状況かは分かりませんが、それを臨機応変さだけは持つてるちゃんぽらん男が何とかしてくれますよ」

寧ろやってのけて当然だと秀の脳裏に過ぎったちゃんぽらんも、すぐに鳥の女神と対峙することになる……

第五十話：籠の中の鳥（後書き）

大変お待たせしました☆
久しぶりの更新です。

最近少し弱ってましたのでなかなか書き上げられず申し訳ないっ!!

さてさて、翔と合流出来た末っ子組達。

こちらはあっさり敵を倒して賑やかな模様。

まあ、この場にグサグサいう人物達がなくて良かったんだよ、翔。
秀とかいたらねえ……？

そして、その腹黒い兄は火災を起こして完全に自分のテリトリーへと戦いをもっていつてる上に武帝を倒しちまうぞ宣言。

おまけに啓吾兄さんが鳥の女神のことは何とかすること確定と……
でも、そう簡単にはいかないんだぞ??

では、次回もお楽しみに☆

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0935s/>

天空記（番外編）～バレンタインデーの聖戦～

2011年12月21日21時48分発行